四 なるべし　四 其日にはエルサレムの前に當りて東にあるところの橄欖山の上に彼の足立たん而して橄欖山その
五 眞中より西東に裂て甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし　五 汝らは我山の谷に逃いらん其山
の谷はアザルにまで及ぶべし汝らはユダの王ウジヤの世に地震を避て逃しごとくに逃んエホバ來りたまはん
六 諸〻の聖者なんぢとともなるべし　六 その日には光明なかるべく輝く者消うすべし　七 茲に只一の日あるべしエ
八 ホバこれを知たまふ是は晝にもあらず夜にもあらず夕暮の頃に明くなるべし　八 その日に活る水エルサレムより
出でその半は東の海にその半は西の海に流れん夏も冬も然あるべし
九 九 エホバ全地の王となりたまはん其日には只エホバのみ只その御名のみにならん　一〇 全地はアラバのごとく
一〇 なりてゲバよりエルサレムの南のリンモンまでの間のごとくなるべし而してエルサレムは高くなりてその故の處
に立ちベニヤミンの門より第一の門の處に及び隅の門にいたり ハナニエルの戍樓より王の酒榨倉までに渉るべし
一一 その中には人住ん重て呪詛あらじエルサレムは安然に立べし
一二 一二 エルサレムを攻擊し諸〻の民にエホバ災禍を降してこれを擊なやましたまふこと是のごとくなるべし即ち
一三 彼らその足にて立をる中に肉腐れ目その孔の中にて腐れ舌その口の中にて腐れん　一三 その日にはエホバかれらを
一四 して大に狼狽しめたまはん彼らは各々人の手を執へん此手と彼手擊あふべし　一四 ユダもまたエルサレムに於て戰
一五 ふべしその四周の一切の國人の財寶金銀衣服など甚だ多く聚められん　一五 また馬騾駱駝驢馬およびその諸營の
一切の家畜の蒙る災禍もこの災禍のごとくなるべし

イ 結一・二三　ロ 耳三・一一、一四　ハ 歴一・一　ニ 太一六・二七、二四　ホ 耳三・一一　ヘ 默二二・五　ト 太二四・三六　チ 箴三〇・二六、六〇　リ 結四七・一　ヌ 耳二・二〇　ル 伯二・四四　默一一　ヲ 尼三・一、二一・三九　ワ 箴四〇・四　カ 歴一二・六　ヨ 尼三・一、二一・三九　タ 哥三・三八　レ 歴二三・六　ソ 撰前一四・一五、　ツ 士七・二二　代下二〇・二三　結三八　ナ 歴一四・一二　ネ 結三九・一〇、一七

一六 一六 エルサレムに攻きたりし諸〻の國人の遺れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍のエホバを拜み結茅
一七 の節を守るにいたるべし　一七 地上の諸族の中その王なる萬軍のエホバを拜みにエルサレムに上らざる者の上には
一八 凡て雨ふらざるべし　一八 例ばエジプトの族もし上り來らざる時はその上に雨ふらじエホバその結茅の節を守り
一九 に上らざる一切の國人を擊なやます災禍を之に降したまふべし　一九 エジプトの罪凡て結茅の節を守りに上り來
二〇 らざる國人の罪是のごとくなるべし　二〇 その日には馬の鈴にまでエホバに聖としるさん又エホバの室の鍋は壇の
二一 前の鉢と等しかるべし　二一 エルサレムおよびユダの鍋は都て萬軍のエホバの聖物となるべし凡そ犧牲を獻ぐる者
は來りてこれを取り其中にて祭肉を煮ん其日には萬軍のエホバの室に最早カナン人あらざるべし

ヲ 箴六〇・六、七、九、六六・二三　ム 利二三・三四、四三　尼八・一四　何一二　ウ 箴六〇・一二　ノ 箴二三・八　オ 弗二・一九、二〇、　キ 申一一・一〇　ク 箴三五・八　一七 默二一・二七、　耳三・二二、二三

ゼカリヤ書　をはり

マラキ書

第一章

一 これマラキに托てイスラエルに臨めるヱホバの言の重負なり
二 ヱホバ曰たまふ我汝らを愛したり然るに汝ら云ふ汝いかに我儕を愛せしやとヱホバいふエサ
三 ウはヤコブの兄に非ずやされど我はヤコブを愛し　三 エサウを惡めり且つわれ彼の山を荒し其嗣業を山犬にあた
四 へたり　四 エドムは我儕ほろぼされたれども再び荒たる所を建んといふによりて萬軍のヱホバかく曰たまふ彼等
五 は建んされど我これを倒さん人は彼等を惡境とよび又ヱホバの恒に怒りたまふ人民と稱へん　五 汝らこれを目に
見て云んヱホバはイスラエルの地に大なりと
六 六 子は其父を敬ひ僕はその主を敬ふされば我もし父たらば我を敬ふこと安にあるや我もし主たらば我をおそ
るゝこと安にあるやなんぢら我が名を藐視る祭司よと萬軍のヱホバいひたまふ然るに汝曹はいふ我儕何に汝の名
七 を藐視りしやと　七 汝ら汚れたるパンをわが壇の上に献げしかして言ふ我儕何に爾を汚せしやと汝曹ヱホバの臺
八 は卑しきなりと云しがゆゑなり　八 汝ら盲目なる者を犧牲に献ぐるは惡に非ずや又跛足なるものと病者を献ぐる
九 は惡に非ずや今これを汝の方伯に献げよされば彼なんぢを悅ぶや汝を受納るや萬軍のヱホバこれをいふ　九 請ふ
汝ら神に我らをあはれみ給はんことをもとめよこれらは凡て汝らの手になれり彼なんぢらを納んや萬軍のヱホバ
一〇 これを言ふ　一〇 汝らがわが壇の上にいたづらに火をたくこと無らんために汝らの中一人扉を閉づる者あらまほし
一一 われ汝らを悅ばず又なんぢらの手より献物を受じと萬軍のヱホバいひ給ふ　一一 日の出る處より沒る處までの列國

イ申七・八、一〇・一五　ロ羅九・二、三　ハ詩四九・一八　結　ニ詩三五・二七　ホ出二〇・一二　一四、一五　阿一〇　ヘ路六・四六　ト馬二・一四、一七　チ申一五・二一　リ結四一・二二　馬一　ヌ利二・二二　馬一・ヲ付一三・九　ワ否前九・一三　カ箴一・一一　邸六・一二　申　ル伯四二・八　ヨ詩一一三・三　箴　一四　タ創六・三、五　レ約四・二一、二三　堤前二・八　ソ歌八・三　ツ箴六・一九、二〇　ネ馬一・七　ナ利二二・二〇　ラ馬一・八　ム詩四七・二　提前六　ウ利二六・一四　申　二六　オ申三三・八、九　ヤ利一〇・一一　一七・九、一〇・二四　ケ加四・一四　一八・一八　ブ得前二・一七　邸　一八・一八　基二・ヨ尼一三・二九　ク申三三・一〇　ノ民二五・一二　結　ヤ耶二三・二二　箴五　三四・二五、三七　一八・一二

の中に我名は大ならん又何處にても香と潔き献物を我名に献げんそはわが名列國の中に大なるべければなりと
一二 萬軍のヱホバいひ給ふ　一二 しかるになんぢらこれを褻したりそは爾曹はヱホバの臺は汚れたりまた其果すなはち
一三 その食物は卑しと云ばなり　一三 なんぢらは又如何に煩勞しきことにあらずやといひ且これを藐視たり萬軍のヱホ
バこれをいふ又なんぢらは奪ひし物跛足たる者病る者を携へ來れり汝らかく献物を携へ來ればわれ之を汝らの手
一四 より受べけんやヱホバこれをいひ給へり　一四 群の中に牡あるに誓を立てゝ疵あるものをヱホバに献ぐる詐僞者は
詛はるべしそは我は大なる王また我名は列國に畏れらるべきなればなり萬軍のヱホバこれをいふ

第二章

一 祭司等よ今この命令なんぢらにあたへらる　二 萬軍のヱホバいひたまふ汝等もし聽きしたがはず
二 又これを心にとめず我名に榮光を歸せずばわれ汝らの上に詛を來らせん又なんぢらの祝福を詛はん
三 われすでに此等を詛へり汝らこれを心にとめざりしに因てなり　三 視よ我なんぢらのために種をいましめんまた
四 糞すなはち汝らの犧牲の糞を汝らの面の上に撒さん汝らこれとともに携へさられん　四 わが此命令をなんぢらに
五 下し與ふるは我契約をしてレビに保たしめんためなるを汝ら知るべし萬軍のヱホバこれをいふ　五 わが彼と結び
し契約は生命と平安とにあり我がこれを彼に與へしは彼にわれを畏れしめんが爲なり彼われを懼れわが名の前に
六 をのゝけり　六 眞理の法彼の口に在て不義その口唇にあらず彼平安と公義をとりて我とともにあゆみ又多の人を
七 不義より立歸らせたりき　七 夫れ祭司の口唇に知識を持べく又人彼の口より法を諮詢べしそは祭司は萬軍のヱホ
八 バの使者なればなり　八 しかるに汝らは道を離れ衆多の人を法に躓礙かせレビの契約を壞りたり萬軍のヱホバ

九 これをいふ　汝らは我道を守らず法をおこなふに當りて人に偏りし故にわれも汝らを一切の民の前に輕められ
また賤められしむ
一〇 我儕の父は皆同一なるにあらずやわれらを造りし神は同一なるにあらずや我儕先祖等の契約を破りて各々
おのれの兄弟にいつはりを行ふは何ぞ　一一 ユダは誓約にそむけりイスラエル及びエルサレムの中には憎むべき事
行はるすなはちユダはエホバの愛したまふ聖所を褻して他神の女をめとれり　一二 エホバこれをおこなふ人をば主
なるものをも事ふる者をもヤコブの幕屋よりのぞきたまはん萬軍のエホバに献物をさゝぐるものにてもまた然り
一三 つぎに又なんぢらはこれをなせり即ち涙と泣と歎とをもてエホバの壇をおほはしめたり故に彼もはや献物を
顧みずまたこれを汝らの手より悅び納たまはざるなり　一四 汝らはなほ何故ぞやと言ふそは是はエホバ汝となんぢ
の若き時の妻の間にいりて證をなしたまへばなり彼はなんぢの伴侶汝が契約をなせし妻なるに汝誓約に背きてこ
れを棄つ　一五 エホバは只一を造りたまひしにあらずやされども彼にはなほ靈の餘ありき何故にひとつのみなりし
や是は神を敬虔の裔を得んが爲なりき故になんぢら心に謹みその若き時の妻を誓約にそむきて棄るなかれ　一六 イ
スラエルの神エホバいひたまふわれは離緣を惡みまた虐遇をもて其衣を蔽ふ人を惡む故に汝ら誓約にそむきて
妻を待遇はざるやう心につゝしむべし萬軍のエホバこれをいふ
一七 なんぢらは言をもてエホバを煩勞はせりされど汝ら言ふ何にわづらはせしやと如何となればなんぢら凡て
惡をなすものはエホバの目に善と見えかつ彼に悅ばると言ひまた審判の神は安にあるやといへばなり

第三章

一 視よ我わが使者を遣さんかれ我面の前に道を備へんまた汝らが求むるところの主すなはち汝らの

イ 使徒二・三〇　ロ 哥前八・六　ハ 伝三一・一五　ニ 詩九・一、一〇・二　ホ 尼一・三・二三　ヘ 哥五・一八　ト 詩二・七、一七　チ 太一九・四、五　リ 詩九・一二　ヌ 申二四・一　ル 箴四三・二四　ヲ 太一一・一〇　可一・二七　ワ 箴四〇・三　カ 箴六三・九

ヨ 箴二・七　タ 馬四・一　レ 默六・一七　ソ 箴四・四　太三・一〇、一一、一二　ツ 箴一・二五　詩一三　ム 民二三・一九　羅一・一一、二九　雅一・一七　ネ 彼前二・五　ナ 馬一・一一　ラ 詩五・四　箴五・四、ウ 箴三・二二　キ 使七・五一　ソ 詩一・三　オ 馬一・六　ク 尼一三・一〇、一二　ヤ 箴三・九、一〇　マ 代上二六・二〇　代下三一・一一　尼一・一〇　フ 代下三一・一〇　ケ 創七・一一　王下七

悅樂ぶ契約の使者忽然その殿に來らん視よ彼來らんと萬軍のエホバ云たまふ　二 されど其來る日には誰か堪えん
やその顯著る時には誰か立えんや彼は金をふきわくるものの火の如く布晒の灰汁のごとくならん　三 かれは銀を
ふきわけてこれを潔むる者のごとく坐せん彼はレビの裔を潔め金銀の如くかれらをきよめん而して彼等は義をも
て献物をエホバにさゝげん　四 その時ユダとエルサレムの献物はむかしの日の如く又先の年のごとくエホバに
悅ばれん　五 われ汝らにちかづきて審判をなし巫術者にむかひ姦淫を行ふ者にむかひ僞の誓をなせる者にむか
ひ傭人の價金をかすめ寡婦と孤子をしへたげ異邦人を推枉げ我を畏れざるものどもにむかひて速に證をなさんと
萬軍のエホバ云たまふ　六 それわれエホバは易らざる者なり故にヤコブの子等よ汝らは亡されず
七 なんぢら其先祖等の日よりこのかたわが律例をはなれてこれを守らざりき我にかへれわれ亦なんぢらに歸
らん萬軍のエホバこれを言ふ然るに汝らはわれら何においてかへるべきやと言り　八 ひと神の物をぬすむことを
せんやされど汝らはわが物を盜めり汝らは又何において汝の物をぬすみしやといへり十分の一および献物に於て
なり　九 汝らは呪詛をもて詛はるまたなんぢら一切の國人はわが物をぬすめり　一〇 わが殿に食物あらしめんため
に汝ら什一をすべて我倉にたづさへきたれ而して是をもて我を試みわが天の窓をひらきて容べきところなきまで
に恩澤を汝らにそゝぐや否やを見るべし萬軍のエホバこれを言ふ　一一 我また嚙食ふ者をなんぢらの爲に抑へてな
んぢらの地の產物をやぶらざらしめん又なんぢらの葡萄の樹をして時のいたらざる前にその實を圃におとさじら
しめん萬軍のエホバこれをいふ　一二 又萬國の人なんぢらを幸福なる者ととなへんそは汝ら樂しき地となるべけれ

ばなり萬軍のヱホバこれをいふ

一三 ヱホバ云たまふ汝らは言詞をはげしくして我に逆らへりしかるも汝らは我儕なんぢにさからひて何を

一四 いひしやといへり　一四 汝らは言らく神に服事ることは徒然なりわれらその命令をまもりかつ萬軍のヱホバの前に

一五 悲みて歩みたりとて何の益あらんや　一五 今われらは驕傲ものを幸福なりと稱ふまた惡をおこなふものも盛になり

神を試むるものすらも救はると

一六 その時ヱホバをおそるゝ者互に相かたりヱホバ耳をかたむけてこれを聽たまへりまたヱホバを畏るゝ者

一七 およびその名を記憶る者のためにヱホバの前に記念の書をかきしるせり　一七 萬軍のヱホバいひたまふ我わが設く

一八 る日にかれらをもて我寶となすべしまた人の己につかふる子をあはれむがごとく我彼等をあはれまん　一八 その時

汝らは更にまた義者と惡きものと神に服事るものと事へざる者との區別をしらん

第四章

一 一 萬軍のヱホバいひたまふ視よ爐のごとくに燒る日來らんすべて驕傲者と惡をおこなふ者は藁の

二 おそるゝ汝らには義の日いでて昇らんその翼には醫す能をそなへん汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん　二 又な

三 んぢらは惡人を踐つけん即ちわが設くる日にかれらは汝らの脚の掌の下にありて灰のごとくならん萬軍のヱホバ

これを言ふ

四 四 なんぢらわが僕モーセの律法をおぼえよすなはち我がホレブにてイスラエル全體のために彼に命ぜし法度

イ 馬二・一七　ロ 伯二・一四、一五、二・一七　ハ 詩七三・一二　ニ 詩九五・九　ホ 詩六六・一六　ヘ 詩七三・一二　ト 詩五六・八　チ 出一九・五　リ 箴六二・三　ヌ 詩一〇三・一三　ル 詩五八・一一　ヲ 耳二・三一　ワ 馬三・一八　カ 阿一・八　ヨ 箴二・九　タ 馬三・一六　レ 路一・七八　ソ 傳後二二・四三　ツ 出二〇・三　ネ 申四・一〇　ナ 詩一四七・一九　ラ 耳二・三一　ム 太一一・一四、一七　ウ 羅五・三　路一・一七　ヰ 可九・一一　ノ 羅一四・一二　オ 詩七七・一一　ク 番一・一二　ヤ 箴七三　マ 詩六六・一六　ケ 馬四　コ 二・一　サ 出一九・五　シ 申七・六　ス 詩一三五・四　セ 多二　ソ 傳後二・一四　タ 伝前二・九　チ 馬二・一二　ツ 傳後三・七　テ 馬三・二　ト 馬三・一六　ナ 路一・七八　ニ 弗五・

五 と誡命をおぼゆべし　五 視よヱホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ預言者エリヤを汝らにつかはさんかれ

父の心にその子女を慈はせ子女の心にその父をおもはしめん是は我が來りて詛をもて地を擊ことなからんため

なり

マラキ書をはり

新約聖書　改譯　二十七巻

我らの主なる救主イエス、キリストの

新約聖書

改譯　二十七卷

新約聖書

主なる救主イエス・キリスト

第二十七巻

マタイ傳福音書

第一章

一 一アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系圖。

二 二アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダとその兄弟らとを生み、三ユ

三 ダ、タマルによりてパレスとザラとを生み、パレス、エスロンを生み、エスロン、アラムを生み、四アラム、ア

四 ミナダブを生み、アミナダブ、ナアソンを生み、ナアソン、サルモンを生み、五サルモン、ラハブによりてボア

五 ズを生み、ボアズ、ルツによりてオベデを生み、オベデ、エッサイを生み、六エッサイ、ダビデ王を生めり。

六 ダビデ、ウリヤの妻たりし女によりてソロモンを生み、七ソロモン、レハベアムを生み、レハベアム、アビ

七 ヤを生み、アビヤ、アサを生み、八アサ、ヨサパテを生み、ヨサパテ、ヨラムを生み、ヨラム、ウジヤを生み、

八 九ウジヤ、ヨタムを生み、ヨタム、アハズを生み、アハズ、ヒゼキヤを生み、一〇ヒゼキヤ、マナセを生み、マナセ、

九 アモンを生み、アモン、ヨシヤを生み、一一バビロンに移さるる頃、ヨシヤ、エコニヤとその兄弟らとを生めり。

一〇 一二バビロンに移されて後、エコニヤ、サラテルを生み、サラテル、ゾロバベルを生み、一三ゾロバベル、アビ

一一 ウデを生み、アビウデ、エリヤキムを生み、エリヤキム、アゾルを生み、一四アゾル、サドクを生み、サドク、ア

一二 キムを生み、アキム、エリウデを生み、一五エリウデ、エレアザルを生み、エレアザル、マタンを生み、マタン、

一三 ヤコブを生み、一六ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生めり。此のマリヤよりキリストと稱ふるイエス生れ給へり。

イ 一―六 路三・三四 ・四一 徒二三〇、一三・二二、二三 羅八・一六 羅九・五 ロ 箴七・一二―一六 詩八九・三四、一三 ハ 太一・一八を見よ ニ 創一一・三 默二二・一六 ホ 創二五・二六 ヘ 創二九・三五 路一・三三 ト 三―六 得四・一八 代上二・一 ―一二 ―一五 チ 箴六・二五 リ 箴一六・一、一七 ヌ 七―一〇 代上三・一〇 ル 箴後一二・二四 ヲ 箴後一一・二六、一二・一〇 ワ（王下一五・一 代上三・一、一二） カ 代上三・一五、一六 ヨ 結二・六 耶二四・一、二七・二〇 タ 王下二四・一四、一五 レ 代上三・一七―一九 ソ 路三・二七 ツ 箴三・二 ネ 路三・二三 ナ 耶二七・二〇 次 一・一七

一七されば總て世をふる事、アブラハムよりダビデまで十四代、ダビデよりバビロンに移さるるまで十四代、バビロンに移されてよりキリストまで十四代なり。

一八イエス・キリストの誕生は左のごとし。その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕にならざりしに、聖靈によりて孕り、その孕りたること顯れたり。一九夫ヨセフは正しき人にして之を公然にするを好まず、私に離絲せんと思ふ。二〇斯て、これらの事を思ひ回らしをるとき、視よ、主の使、夢に現れて言ふ『ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖靈によるなり。二一かれ子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり』二二すべて此の事の起りしは、預言者によりて主の云ひ給ひし言の成就せん爲なり。曰く二三『視よ、處女みごもりて子を生まん。その名はインマヌエルと稱へられん』之を釋けば、神われらと偕に在すといふ意なり。二四ヨセフ寐より起き、主の使の命ぜし如くして妻を納れたり。二五されど子の生るるまでは、相知る事なかりき。斯てその子をイエスと名づけたり。

第二章

一イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、視よ、東の博士たちエルサレムに來りて言ふ、二『ユダヤ人の王とて生れ給へる者は、何處に在すか。我ら東にてその星を見たれば、拜せんために來れり』三ヘロデ王これを聞きて惱みまどふ、エルサレムも皆然り。四王、民の祭司長・學者らを皆あつめて、キリストの何處に生るべきを問ひ質す。五かれら言ふ『ユダヤのベツレヘムなり。それは預言者に

イ太一・一二
ロ太二・四、一一・二、一六・一六、二二・四、二三・一〇・二七、二二・一七、二九・二二、二四・一、九・二〇、二〇・四・一、二二
ハ太一・一二、可八・一一、二九・一一、路二・一一、四四・一、九・二〇、二〇・四・一、二二
ニ路一・二七（太一・一）
ホ路一・三五
ヘ申一四・一
ト太二・一三、一九（太二・一三、二二）
チ太一・二五、路一・三一、二・二一
リ路二・一一、約一
ヌ太二・四、二六、五六、路二・二二、約一九・三六、路二・四—七、一五
ル太二・一五、一七、二、約七・四二
ヲ創七・一四、三八（使三・二六）
ワ創八・八・一〇
カ太二八・二〇を見よ
ヨ（太一・二一）
タ路一・五、路二・四—七、一五
レ路二・四、可一四、三・四・一四、約七・四二
ソ（創二五・六、五上四、三〇）
ツ太二・七、一六（給一・三）耶一〇・七、但二・一一）
ネ耶三一・五、三〇、九四九・九、太二七、一一・三七、可一五、一
ナ（民二四・一七、歌二・一六）
ラ太八・二を見よ
ム太一・一七を見よ
ウ約七・四二
ヰ路一・九・三八、二・三・三・三八、約一・四九、一八・三三・三七、一九・二一
ノ太一・二二を見よ
ミ耶三一・一五
シ創三七・三〇、四二、一三・三六

よりて、六「ユダの地ベツレヘムよ、汝はユダの長等の中にて最小き者にあらず、汝の中より一人の君いでて、わが民イスラエルを牧せん」と錄されたるなり』

七ここにヘロデ密に博士たちを招きて、星の現れし時を詳細にし、八彼らをベツレヘムに遣さんとして言ふ『往きて幼兒のことを細にたづね、之にあはば我に告げよ。我も往きて拜せん』九彼ら王の言をききて往きしに、視よ、前に東にて見し星、先だちゆきて、幼兒の在すところの上に止る。一〇かれら星を見て、歡喜に溢れつつ、一一家に入りて、幼兒のその母マリヤと偕に在すを見、平伏して拜し、かつ寶の匣をあけて、黃金・乳香・沒藥など禮物を獻げたり。一二斯て夢にてヘロデの許に返るなとの御告を蒙り、ほかの路より己が國に去りゆきぬ。

一三その去り往きしのち、視よ、主の使、夢にてヨセフに現れていふ『起きて、幼兒とその母とを携へ、エジプトに逃れ、わが告ぐるまで彼處に留れ。ヘロデ幼兒を索めて亡さんとするなり』一四ヨセフ起きて、夜の間に幼兒とその母とを携へて、エジプトに去りゆき、一五ヘロデの死ぬるまで彼處に留りぬ。これ主が預言者によりて『我エジプトより我が子を呼び出せり』と云ひ給ひし言の成就せん爲なり。

一六爰にヘロデ、博士たちに賺されたりと悟りて、甚だしく憤ほり、人を遣し、博士たちに由りて詳細にせし時を計り、ベツレヘム及び凡てその邊の地方なる二歲以下の男の兒をことごとく殺せり。一七ここに預言者エレミヤによりて云はれたる言は成就したり。曰く、一八『聲ラマにありて聞ゆ、慟哭なり、いとどしき悲哀なり。ラケル己が子らを歎き、子等のなき故に慰めらるるを厭ふ』

ヤ詩六〇・六
マ詩六〇・六、四一・八
ケ出三〇・一三、詩四五・八、機七・一七、約一九・三九
コ（創二〇・六、三一・一〇）
ア太二・一六、二〇
サ何一一・一
キ太一・二二を見よ
ユ太二・一、七
メ太一・二二を見よ
シ創三七・三〇、四二、一三・三六
ス太二・一三、二二、二四・一、七、獻七・一七
セ太二・一、六
ソ創三五・二、七・一四、ノ番使五・二、結三四・二三、約一〇・一一、一四・二二・一五—一七、獻七・一七
タ太二・一八、「二」、ク太一・一八、四六
テ太一・二〇、二一・一九
ト詩七一・二二
ナ詩一・二七（太二・一）
ニ路一・二七（太二・一）、リ路二・一一、約一
ヌ太二・一九、二三・二、二四六、四・二六、約一・四、ホ路一・三五
ヘ申一四・一
ト太二・一三、一九
チ太一・二五、路一・三一、二・二一
リ路二・一一、約一
ル太二・一五、一七、二、約七・四二
ヲ創七・一四
ワ創八・八・一〇
カ太二八・二〇を見よ
ヨ（太一・二一）
タ路一・五、路二・四—七、一五
レ路二・四、可一四、三・四・一四、約七・四二
ソ（創二五・六、五上四、三〇）
ツ太二・七、一六（給一・三）耶一〇・七、但二・一一）
ネ耶三一・五、三〇、九四九・九、太二七、一一・三七、可一五、一
ナ（民二四・一七、歌二・一六）
ラ太八・二を見よ
ム太一・一七を見よ
ウ約七・四二
ヰ路一・九・三八、二・三・三・三八、約一・四九、一八・三三・三七、一九・二一
ノ太一・二二を見よ
ミ耶三一・一五
シ創三七・三〇、四二、一三・三六

一九 ヘロデ死にてのち、視よ、主の使、夢にてエジプトなるヨセフに現れて言ふ、二〇『起きて、幼兒とその母
二〇 とを携へ、イスラエルの地にゆけ。幼兒の生命を索めし者どもは死にたり』二一ヨセフ起きて、幼兒とその母とを
二一 携へ、イスラエルの地に到りしに、二二アケラオその父ヘロデに代りて、ユダヤを治むと聞き、彼處に往くことを
二二 恐る。また夢にて御告を蒙り、ガリラヤの地方に退き、二三ナザレといふ町に到りて住みたり。これは預言者たち
二三 に由りて、彼はナザレ人と呼れん、と云はれたる言の成就せん爲なり。

第三章

一その頃バプテスマのヨハネ來り、ユダヤの荒野にて教を宣べて言ふ、二『なんぢら悔改めよ、天國
三 は近づきたり』三これ預言者イザヤによりて、斯く云はれし人なり。曰く『荒野に呼はる者の聲す
四 「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ』四このヨハネは駱駝の毛織衣をまとひ、腰に皮の帶をしめ、蝗と野蜜
五 とを食とせり、五爰にエルサレム及びユダヤ全國またヨルダンの邊なる全地方の人々、ヨハネの許に出できた
六 り、六罪を言ひ表し、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。七ヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバプ
七 テスマを受けんとて、多く來るを見て、彼らに言ふ『蝮の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避くべき事
八 を示したるぞ。八さらば悔改に相應しき果を結べ。九汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言
九 はんと思ふな。我なんぢらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給ふなり。一〇斧ははや樹の根
一〇 に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし。一一我は汝らの悔改のために、

イ 太三・一三
ロ (出四・一九)
ハ 太二・一二を見よ
ニ 太四・一三、二一・一一、可一・九、路一・二六、二・三九、五一・四・一六、約
ホ 水詩二二・六、六九・九、雅四九・七、五三・二三、可一・二四、一四・六七、一六・六、約一九・一九、使二
ヘ 太一・四五、使一〇・三八巻
ト 一八、路三・二一
チ 太四・一七、可一・三
リ 伽二・四四、太六・八
ヌ 雅四〇・三、約一・一八雅五・一六
ル 詩一三・四(主下一・ヨ太一六・一、二三・ソ撒前一・一〇
ツ 使二六・二〇
ネ 約八・三三・三九
ナ 太七・一九
タ 太一六・一、二二・二、三・三四、使四・一、五・一七、二二・八等
レ 太一二・三四、二三・
ヲ 太一六・一、二三・ソ撒前一・一〇
ツ 使二六・二〇
ネ 約八・三三・三九
ナ 太七・一九
タ 太一六・一、二二・二、三・三四、使四・一、五・一七、二二・八等
レ 太一二・三四、二三・

ラ 約一・二六を見よ
ム 約一・三三
ウ 路三・一七(詩三〇・二四)
ヰ 太一三・三〇
ノ 可九・四三・四八
オ 一三・一七 可一・マ 雅二・七 雅四二・一
ク 太二・二二
ヤ 雅一・三三 約一・
ケ 一・一七 可一・二、二・一三 路四・一一三
フ 哀二・二八、四一五 可一・一、九・五七 路四・二八 王上一・三五、四四一、二二・七〇 約一・三四九・五・二
コ 出三四・二八 一九・八
エ 蹟創三・五 テ 蹟あり例へは太一四・二三二、一六・一六、二六・六三、二
ル 詩一三・四(主下一・ヨ太一六・一、二三・ソ撒前一・一〇
ツ 使二六・二〇
ネ 約八・三三・三九
ナ 太七・一九
タ 太一六・一、二二・二、三・三四、使四・一、五・一七、二二・八等
レ 太一二・三四、二三・
ヲ 雅四〇・三、約一・
カ 可一・五 使一・九・
レ 太一二・三四、二三・
ヲ 太一六・一、二三・ソ撒前一・一〇
ツ 使二六・二〇
ネ 約八・三三・三九
ナ 太七・一九
タ 太一六・一、二二・二、三・三四、使四・一、五・一七、二二・八等
レ 太一二・三四、二三・
ヲ 雅四〇・三、約一・
カ 可一・五 使一・九・
レ 太一二・三四、二三・
ヲ 太一六・一、二三・ソ撒前一・一〇
ツ 使二六・二〇
ネ 約八・三三・三九
ナ 太七・一九
タ 太一六・一、二二・二、三・三四、使四・一、五・一七、二二・八等
レ 太一二・三四、二三・
ヲ 雅四〇・三、約一・
カ 可一・五 使一・九・
レ 太一二・三四、二三・
ヲ 太一六・一、二三・ソ撒前一・一〇
ツ 使二六・二〇
ネ 約八・三三・三九
ナ 太七・一九
タ 太一六・一、二二・二、三・三四、使四・一、五・一七、二二・八等
レ 太一二・三四、二三・
ヲ 雅四〇・三、約一・
カ 可一・五 使一・九・
レ 太一二・三四、二三・

水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその鞋をとるにも足らず、
一二 彼は聖靈と火とにて汝らにバプテスマを施さん。一二手には箕を持ちて禾場をきよめ、その麥は倉に納め、殼は
一三 消えぬ火にて燒きつくさん』

一三爰にイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。一四ヨハネ之を止めん
一四 として言ふ『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給ふか』一五イエス答へて言ひたまふ
一五 『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく爲遂ぐるは、當然なり』ヨハネ乃ち許せり。一六イエス、バプテス
一六 マを受けて直ちに水より上り給ひしとき、視よ、天ひらけ、神の御靈の、鴿のごとく降りて己が上にきたるを見
一七 給ふ。一七また天より聲あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悅ぶ者なり』

第四章

一爰にイエス御靈によりて荒野に導かれ給ふ、惡魔に試みられんと爲るなり。二四十日、四十夜、
二 斷食して、後に飢えたまふ。三試むる者きたりて言ふ『なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石
三 をパンと爲らしめよ』四答へて言ひ給ふ『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に
四 由る』と錄されたり』五ここに惡魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて言ふ、六『なんぢ若し神の
五 子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんぢの爲に御使たちに命じ給はん。彼ら手にて汝を支へ、その足を石
六 にうち當つること勿らしめん」と錄されたるなり』七イエス言ひたまふ『主なる汝の神を試むべからず』と、ま

八九 た錄されたり』八 惡魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの國と、その榮華とを示して言ふ、九
一〇 『なんぢ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんぢに與へん』一〇 爰にイエス言ひ給ふ『サタンよ、退け「主なる
一一 汝の神を拜し、ただ之にのみ事へ奉るべし」と錄されたるなり』一一 ここに惡魔は離れ去り、視よ、御使たち來り
事へぬ。
一二一三 一二 イエス、ヨハネの囚はれし事をききて、ガリラヤに退き、一三 後ナザレを去りて、ゼブルンとナフタリとの
一四 境なる海邊のカペナウムに到りて住み給ふ。一四 これは預言者イザヤによりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰
一五一六 く、一五『ゼブルンの地、ナフタリの地、海の邊、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、一六 暗に坐する民は、大な
る光を見、死の地と死の蔭とに坐する者に、光のぼれり』
一七 一七 この時よりイエス教を宣べはじめて言ひ給ふ『なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり』
一八 一八 斯て、ガリラヤの海邊をあゆみて、二人の兄弟ペテロといふシモンとその兄弟アンデレとが、海に網打ち
一九 をるを見給ふ、かれらは漁人なり。一九 これに言ひたまふ『我に從ひきたれ、然らば汝らを人を漁る者となさん』
二〇二一 二〇 かれら直ちに網をすてて從ふ。二一 更に進みゆきて、又ふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネと
二二 が、父ゼベダイとともに舟にありて網を繕ひをるを見て呼び給へば、二二 直ちに舟と父とを置きて從ふ。
二三 二三 イエス遍くガリラヤを巡り、會堂にて教をなし、御國の福音を宣べつたへ、民の中のもろもろの病、もろ

イ代上二一・一　伯一・　二二・三、三一　徒　・九、二〇・二、七　ホ可一・一四　路四・　ト賽九・一、二　ル太一五・二九を見よ　一五、四四　タ太九・三五　可一・
六―九、二二、二・一　五三、二六・一八　ロ申六・一三　一四　約一・四三、　チ可一・一四、一五　ヲ太一〇・二、一六・　ヨ太九・三五、一三・　一四　路四・四三、
一四　六、七　巫三・　賢一六・二〇　哥護　ハ太二六・五三　路二　リ太三・二　一八　約一・四〇、　五四　可一・二一、　八・一　徒二〇・二五、
一二　太一三・二六　二・一一、一一・一　二・四三　ヘ可一・二一、二・一　ヌ一八―二二　可一・　四二　六・二　路四・一五、　二八・三一
可一・一三　四・二五　四、一二・七　撰　ニ太一一・二、一四・三　路四・二三、三一、　一六―二〇（路五・　ワ太一〇・二、　二〇・　約六・六、　一三・一〇
路一〇・一八、一一・　二・一八　撒後二・　可一・一四　路三・　一〇・一五　約二・　一一―一一）約一・　二〇　約六・五九　一八・
一八、一三・六、　九　默二・九、一二　二〇　一二、四・四六　四〇―四二　カ可一・三九　路四・　二〇

二四 もろもろの疾患をいやし給ふ。二四 その噂あまねくシリヤに廣まり、人々すべての惱めるもの、即ちさまざまの病と
苦痛とに罹れるもの、惡鬼に憑かれたるもの、癲癇および中風の者などを連れ來りたれば、イエス之を醫したま
二五 ふ。二五 ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの彼方より大なる群衆きたり從へり。

第五章

一二 一 イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給へば、弟子たち御許にきたる。二 イエス口をひらき、教
三四 へて言ひたまふ、三『幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。四 幸福なるかな、悲
五六 しむ者。その人は慰められん。五 幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。六 幸福なるかな、義に飢ゑ
七八 渇く者。その人は飽くことを得ん。七 幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。八 幸福なるかな、心の
九一〇 淸き者。その人は神を見ん。九 幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。一〇 幸福なるか
一一 な、義のために責められたる者。天國はその人のものなり。一一 我がために、人なんぢらを罵り、また責め、詐り
一二 て各樣の惡しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。一二 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし
預言者等をも、斯く責めたりき。
一三 一三 汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何をもてか之に鹽すべき。後は用なし、外にすてられて人に蹈
一四一五 まるるのみ。一四 汝らは世の光なり。山の上にある町は隱るることなし。一五 また人は燈火をともして升の下におか
一六 ず、燈臺の上におく。斯て燈火は家にある凡ての物を照すなり。一六 斯のごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。

レ太八・一六、九・三五　二二、一五・二二　可　ナ可五・二〇、七・三一　ノ三―一二（路六・二　マ約五五・一、二　約四　四　二撒前二・一五　來　ミ可四・二一　路八・一
一五・三〇、二一・一　一・三二、五・一五、　ラ太四・一五　〇―二三）　・二　六・五一・七・　テ雅五・一一　彼前三・　一一・三三―三八　六、一一・三三
四可一・三四、三・　一六、一八　路八・　ム可三・七、八　路六・　オ太五・一〇、一九・一　三七、三八　一四　雅五・一〇（評一・
一〇、五・二九　路　三六　一七　四可一〇・一四　路　ケ（雅二・一三）　ア彼前四・一四　二九）
四・四〇、七・二一　ツ太一七・一五　ウ五―七・（路六・二　一七・二一　雅二・五　フ詩二四・四　サ雅一・二（來一〇・　ユ可九・五〇　路一四・
徒一〇・三八　ネ太八・六、九・六、七　〇―四九）　ク賽六一・二、三（默　コ來一二・一四　約壹　三四
ツ太八・一六、二八、三　可二・三―一二　路　井可三・一三　路九・二　七・一七）　三・二　默二二・四　キ代下三六・一六　太　メ彼四・一八　約八・一
四、九・三二、一二・　五・一八―二五　八　約六・三、一五　ヤ詩三七・一一　エ路六・三五　羅八・一　二三・三七　徒七・五　二　腓二・一六

これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を崇めん爲なり。

一七 一八 一七われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり。一八誠に汝
一九 らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一點、一畫も廢ることなく、悉とく全うせらるべし。一九この故にも
し此等のいと小き誡命の一つをやぶり、且その如く人に敎ふる者は、天國にて最小き者と稱へられ、之を行ひ、
二〇 かつ人に敎ふる者は、天國にて大なる者と稱へられん。二〇我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者・パリサイ人に勝
らずば、天國に入ること能はず。

二一 二二 二一古への人に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。二二然れど我は汝ら
に告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄弟に對ひて、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。ま
二三 た痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。二三この故に汝もし供物を祭壇にささぐる時、そこにて兄弟に怨ま
二四 るる事あるを思ひ出さば、二四供物を祭壇のまへに遺しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち來りて、
二五 供物をささげよ。二五なんぢを訴ふる者とともに途に在るうちに、早く和解せよ。恐くは、訴ふる者なんぢを審判
二六 人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん。二六誠に、なんぢに告ぐ、一厘も殘りなく償
はずば、其處をいづること能はじ。

二七 二八 二七「姦淫するなかれ」と云へることあるを汝等きけり。二八されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懷きて女を
二九 見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。二九もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡

イ 後節二・二二　ロ 太九・八參見よ　ハ 碑三・二一　ニ 太二四・三四、三五　ホ 太二二・二八　ヘ 太五・三三　ト 出二〇・一三　チ 民三五・三〇、三一　リ 雅一・二〇　ヌ 太一〇・一七、二六、五九、可一三、九、一四・五五、一五・一　ル 太五・二九、一〇・二八、一八・九、二三、可九、三〇、二四・二〇　ヲ 申二四・一　ワ 路二二・五八　カ 太二六・五八　約七・四七・四七　タ 太一八・九　可九・四七　レ 太五・二二　ソ 太一八・八　可九・四　ツ 申二四・一—三　ネ 太一・九・九　可一〇・一一　路一六・一八（碑七・一〇、一一）　ナ 太五・二一　ラ 利一九・一八　ム 雅五・二一　ウ 雅六・一　太二三　二二 徒七・四九　井 箴六・六・一　徒七・四　ノ 詩四八・一二　オ 雅五・一一　ク 太六・一三、一三・一　ヤ 出二・二四　二四・二〇　申一九・一　ケ 箴五〇・六　瓦三・三　マ 箴二〇・二二、二四・二九　路六・二九　羅　コ 利一九・一八　エ 申二三・六　詩四一・一〇　ア 路二三・三四　徒七・六〇　羅一二・一四　哥自四・一二、一三　後節一・二三、三・九　ヤ 出二・二四　五 歳節三・九　テ 路六・二七、三五　羅　サ 太五・九　ヨ 出二〇・一四　申五・一七　ヌ 太一〇・一七、二六、五九、可一三、九、一四・五五、一五・一　ル 太五・二九、一〇・二八、一八・九、二三、可九、三〇、二四・二〇　ヲ 申二四・一　ワ 路二二・五八　カ 太二六・五八　約七・四七　タ 太一八・九　可九・四七　ヨ 出二〇・一四　申五・一七　レ 太五・二二　ソ 太一八・八　可九・四　ツ 申二四・一—三　ネ 太一・九・九　可一〇・一一　路一六・一八（碑七・一〇、一一）　ナ 太五・二一　ラ 利一九・一八　ム 雅五・二一　ウ 雅六・一　太二三　二二 徒七・四九　井 箴六・六・一　徒七・四　ノ 詩四八・一二　オ 雅五・一一　ク 太六・一三、一三・一　ヤ 出二・二四　二四・二〇　申一九・一　ケ 箴五〇・六　瓦三・三　マ 箴二〇・二二、二四・二九　路六・二九　羅　コ 利一九・一八　エ 申二三・六　詩四一・一　ア 路二三・三四　徒七・六〇　羅一二・一四　哥自四・一二、一三　後節一・二三、三・九　ヤ 出二・二四　五 歳節三・九　テ 路六・二七、三五　羅　サ 太五・九　ヨ 出二〇・一四　申五・一七

ひて、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり。三〇もし右の手なんぢを躓かせば、切りて棄てよ、五體の一つ亡び
三一 三二 て、全身ゲヘナに往かぬは益なり。三一また「妻をいだす者は離緣狀を與ふべし」と云へることあり。三二されど我
は汝らに告ぐ、淫行の故ならで其の妻をいだす者は、これに姦淫を行はしむるなり。また出されたる女を娶るも
のは、姦淫を行ふなり。

三三 三四 三三また古への人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と云へる事あるを汝ら聞けり。三四さ
三五 れど我は汝らに告ぐ、一切ちかふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。三五地を指して誓ふな、神の足臺
三六 なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。三六己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髮一筋だに
三七 白くし、また黑くし能はねばなり。三七ただ然り然り、否否といへ、之に過ぐるは惡より出づるなり。
三八 三九 三八「目には目を、齒には齒を」と云へることあるを汝ら聞けり。三九されど我は汝らに告ぐ、惡しき者に抵抗
四〇 ふな。人もし汝の右の頰をうたば、左をも向けよ。四〇なんぢを訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取ら
四一 四二 せよ。四一人もし汝に一里ゆくことを強ひなば、共に二里ゆけ。四二なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒
むな。

四三 四四 四三「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。四四されど我は汝らに告
四五 ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。四五これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。天の父は

その日を惡しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり。四六 なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取稅人も然するにあらずや。四七 兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。四八 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

第六章

一 汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。

二 さらば施濟をなすとき、僞善者が人に崇められんとて會堂や街にて爲すごとく、己が前にラッパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。三 汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。四 是はその施濟の隱れん爲なり。然らば隱れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。

五 なんぢら祈るとき、僞善者の如くあらされ。彼らは人に顯さんとて、會堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。六 なんぢは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて、隱れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隱れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん。七 また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聽かれんと思ふなり。八 さらば彼らに效ふな、汝らの父は求めぬ前に、なんぢらの必要なる物を知りたまふ。九 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。一〇 御國の來らんことを。御意の天のごとく、地にも行はれん事を。一一 我らの

日用の糧を今日もあたへ給へ。一二 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。一三 我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出したまへ」一四 汝等もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給はん。一五 もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失を免し給はじ。

一六 なんぢら斷食するとき、僞善者のごとく、悲しき面容をすな。彼らは斷食することを人に顯さんとて、その顏色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。一七 なんぢは斷食するとき、頭に油をぬり、顏をあらへ。一八 これ斷食することの人に顯れずして、隱れたるに在す汝の父にあらはれん爲なり。さらば隱れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。

一九 なんぢら己がために財寶を地に積むな、ここは蟲と銹とが損ひ、盜人うがちて盜むなり。二〇 なんぢら己がために財寶を天に積め、かしこは蟲と銹とが損はず、盜人うがちて盜まぬなり。二一 なんぢの財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。二二 身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。二三 然れど、なんぢの目あしくば、全身くらからん。もし汝の內の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。二四 人は二人の主に兼事ふること能はず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼事ふること能はず。二五 この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。二六 空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優るる者ならずや。二七 汝らの

二八 中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。二八 又なにゆゑ衣のことを思ひ煩ふや。*野の百合は如何して育つか
二九 を思へ、勞せず、紡がざるなり。二九 然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の
三〇 一つにも及かざりき。三〇 今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく裝ひ給へば、まして汝らを
三一 三二 や、ああ信仰うすき者よ。三一 さらば何を食ひ、何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな。三二 是みな異邦人の切に求む
三三 る所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふなり。三三 まづ神の國と神の義とを求め
三四 よ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。三四 この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。

第七章

一 なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり。二 己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量
三 四 にて己も量らるべし。三 何ゆゑ兄弟の目にある*塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。四 視
五 よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや。五 僞善者
六 よ、まづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。
六 聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな。恐くは足にて蹈みつけ、向き反りて汝らを嚙みやぶ
七 八 らん。
七 求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。八 すべて求むる者は
九 得、たづぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。九 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與

一〇 へ、一〇 魚を求めんに蛇を與へんや。一一 然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まし
一二 て天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや。一二 然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも
亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。
一三 狹き門より入れ、滅にいたる門は大きく、その路は廣く、之より入る者おほし。一四 生命にいたる門は狹
一四 く、その路は細く、之を見出すもの少なし。
一五 僞預言者に心せよ、羊の扮裝して來れども、內は奪ひ掠むる豺狼なり。一六 その果によりて彼らを知るべ
一六 し。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。一七 斯く、すべて善き樹は善き果をむすび、惡しき樹は惡し
一七 き果をむすぶ。一八 善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹はよき果を結ぶこと能はず。一九 すべて善き果を
一八 結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらる。二〇 然らば、その果によりて彼らを知るべし。二一 我に對ひて主よ主よと
一九 二〇 いふ者、ことごとくは天國に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなふ者のみ、之に入るべし。二二 その日
二一 おほくの者、われに對ひて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひいだし、汝の
二二 名によりて多くの能力ある業を爲ししにあらずや」と言はん。二三 その時われ明白に告げん「われ斷えて汝らを知
二三 らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。
二四 二四 さらば凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。二五 雨ふり流漲り、
二五 風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。二六 すべて我がこれらの言をききて行はぬ者
二六

二七 を、沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。二七 雨ふり流漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顚倒はな
はだし』
二八 二八 イエスこれらの言を語りをへ給へるとき、群衆その教に驚きたり。二九 それは學者らの如くならず、權威あ
る者のごとく教へ給へる故なり。

二 **第八章**

一 一 イエス山を下り給ひしとき、大なる群衆これに從ふ。二 視よ、一人の癩病人みもとに來り、拜し
三 て言ふ『主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん』三 イエス手をのべ、彼につけて『わが意な
四 り、潔くなれ』と言ひ給へば、癩病ただちに潔れり。四 イエス言ひ給ふ『つつしみて誰にも語るな、ただ往きて
己を祭司に見せ、モーセが命じたる供物を獻げて、人々に證せよ』
五 五 イエス、カペナウムに入り給ひしとき、百卒長きたり、六 請ひていふ『主よ、わが僕、中風を病み、家に
六 臥しゐて甚く苦しめり』七 イエス言ひ給ふ『われ往きて醫さん』八 百卒長こたへて言ふ『主よ、我は汝をわが屋
七 八 根の下に入れ奉るに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜へ、さらば我が僕はいえん。九 我みづから權威の下にある
九 者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」と言へば往き、彼に「きたれ」と言へば來り、わが僕に「こ
一〇 れを爲せ」といへば爲すなり』一〇 イエス聞きて怪しみ、從へる人々に言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、斯る篤き
一一 信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし。一一 又なんぢらに告ぐ、多くの人、東より西より來り、アブラ
一二 ハム、イサク、ヤコブとともに天國の宴につき、一二 御國の子らは外の暗に逐ひ出され、そこにて哀哭・切齒する

イ 太一三・五四、二二。 ハ 二一四 可一・四〇 二六、二〇 二〇 約 五・四三、七・三六、 二一三二 可一・四〇 四 路五・一四、一 リ路一五・一九・二一 四九・一二、五九・
三三 可一・三二、六 一四四 路五・一二 九・三八 八・三〇、九・九・路 四・四一、八・五六、 七・二四 路七・一 一九 馬一・一一路 三〇 彼後二・一七
三二、一・八 路 ヌ 詩一〇七・二〇 四・三二 約七・四六 ト 太九・三〇、一一・ 四・四一、八・五六、 ト 五・一三 路七・一 カ 太一三・四二、五〇、
四・三二 約七・四六 ニ 太二・二、一・九・一八、 ル 創一二・三、箴二・二 九・二一 一四、一一・一〇、 ヲ 太一三・三八 ヲ 太二二・一三、二五 二・二一、一三、 路一三・二八
ロ 約七・四六 一五・二五、一八 ヘ 利一三・四九、一四。 一一・一〇、

ことあらん』一三 イエス百卒長に『ゆけ、汝の信ずるごとく汝になれ』と言ひ給へば、このとき僕いえたり。
一四 一四 イエス、ペテロの家に入り、その外姑の熱を病みて臥しをるを見、一五 その手に觸り給へば、熱去り、女お
一五 一六 きてイエスに事ふ。一六 夕になりて、人々、惡鬼に憑かれたる者をおほく御許につれ來りたれば、イエス言にて靈
一七 を逐ひいだし、病める者をことごとく醫し給へり。一七 これは預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患をう
け、我らの病を負ふ』と云はれし言の成就せん爲なり。
一八 一八 さてイエス群衆の己を環れるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給ふ。一九 一人の學者
二〇 きたりて言ふ『師よ何處にゆき給ふとも、我は從はん』二〇 イエス言ひたまふ『狐は穴あり、空の鳥は塒あり、然
二一 れど人の子は枕する所なし』二一 また弟子の一人いふ『主よ、先づ往きて我が父を葬ることを許したまへ』二二 イエ
二二 ス言ひたまふ『我に從へ、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』
二三 二三 かくて舟に乘り給へば、弟子たちも從ふ。二四 視よ、海に大なる暴風おこりて、舟、波に蔽はるるばかりな
二四 二五 るに、イエスは眠りゐ給ふ。二五 弟子たち御許にゆき、起して言ふ『主よ、救ひたまへ、我らは亡ぶ』二六 彼らに言
二六 ひ給ふ『なにゆゑ臆するか、信仰うすき者よ』乃ち起きて、風と海とを禁め給へば、大なる凪となりぬ。二七 人々
二七 あやしみて言ふ『こは如何なる人ぞ、風も海も從ふとは』
二八 二八 イエス彼方にわたり、ガダラ人の地にゆき給ひしとき、惡鬼に憑かれたる二人のもの、墓より出できたり
二九 て之に遇ふ。その猛きこと甚だしく、其處の途を人の過ぎ得ぬほどなり。二九 視よ、かれら叫びて言ふ『神の子

ヨ 太九・二一、二九 ソ 太四・二四を見よ ラ 一九—二二 路九 ク 清六五・七、八九、 ノ 一九、二二 可四、
タ 一四—一六 可一・ 太四・二三 五七—六〇 ム 歷あり例へは 但七 九一〇七・二九 三六—四一 路八、
二九—三四 路四 ネ 雅五三・四 ム 歷あり例へは 但七 ヤ 二八—三四 可五、 二二—一五
三八—四一 三八—四一 ナ 可四・三五 路八・二 一三、太九・六、一 一七 路八、二 オ 九六・三〇、一四・三
レ 芥餅九・五 二 二・八、三二、四〇、 路九 五八、一二。 マ 太四・二四を見よ 一二・六・八

三〇 よ、われら汝と何の關係あらん。未だ時いたらぬに、我らを責めんとて此處にきたり給ふか』三〇遙にへだたりて
三一 多くの豚の一群、食しゐたりしが、三一惡鬼ども請ひて言ふ『もし我らを逐ひ出さんとならば、豚の群に遣したま
三二 へ』三二彼らに言ひ給ふ『ゆけ』惡鬼いでて豚に入りたれば、視よ、その群みな崖より海に駈け下りて、水に死に
三三 三四 たり。三三飼ふ者ども逃げて町にゆき、凡ての事と惡鬼に憑かれたりし者の事とを告げたれば、三四視よ、町人こぞ
りてイエスに逢はんとて出できたり、彼を見て、この地方より去り給はんことを請へり。

第九章

一 二 一イエス舟にのり、渡りて已が町にきたり給ふ。二視よ、中風にて床に臥しをる者を、人々みもと
に連れ來れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるさ
三 四 れたり』三視よ、或る學者ら心の中にいふ『この人は神を瀆すなり』四イエスその思を知りて言ひ給ふ『何ゆゑ
五 六 心に惡しき事をおもふか。五汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふと、孰か易き。六人の子、地にて
罪を赦す權威あることを汝らに知らせん爲に』――ここに中風の者に言ひ給ふ――『起きよ、床をとりて汝の家
七 八 にかへれ』七彼おきて、その家にかへる。八群衆これを見ておそれ、斯る能力を人にあたへ給へる神を崇めた
り。
九 九イエス此處より進みて、マタイといふ人の收税所に坐しをるを見て『我に從へ』と言ひ給へば、立ちて從
へり。
一〇 一〇家にて食事の席につき居給ふとき、視よ、多くの取税人・罪人ら來りて、イエス及び弟子たちと共に列

イ士一一・一二　母後　四、五・七　路四・　八太四・一三　ト太九・二二、一四・二　西一一・一四　ル太一五・三一　可二・　一五・八　徒四・二　七―三八
一六・一〇、一九・二　三四、八・二八　約　二二―八　可二・三―　七可六・五〇―〇　リ詩一三九・二　太一　一二　路二・二〇・　一、二二・二〇　哥　ワ太一〇・三　可二・
二　王上一七・一八　二・四　二六　路五・二一　・四九　約一六・三三　二・二五　可一二・　五　路六・八、九・　五、二五、二六、七・　後九・三三　加一・二　五一四、三・一八
王下三・一三　代下　ロ路五　八　徒一六・三　ホ太四・二四、九・六　チ徒二・五、九　七・四三　四七、一一・一七　四七約　彼前二・二　一・二七　路五・二
三五・二一　可一・二　九　へ太八・二〇　二〇、三三、七・四八　ヌ太八・二〇を見よ　ヲ九一二　カ太八・二二を見よ

ヨ太一一・一九　可二・　レ何六・六　太一二・七　ネ路一八・一二　ム民一五・三八　申二　井太九・二　二九、一五・二八)　(徒二〇・九、一〇)
一六　路五・三〇、ソ太一一・七　ナ一八―二六　可五・　二・一二　太一四・三　ノ可五・三四、一〇・五　オ(代下三五・二五　耶
一五・二　ツ可二・一七　路五・三　二二―四三　路八・　六、二三・五　二　路七・五〇、八・　九・一七、一六・六
タ可二・一七　路五・三　二、一五・七　提前一　四一―五六　ウ太一四・三六(可三・　四八、一七・一九、　結二四・一七)
一　・一五　ラ太八・二　一〇　路六・一九)　一八・四二　(太九・　ク約一一・一一―一四

一一 一二 る。一一パリサイ人これを見て弟子たちに言ふ『なに故なんぢらの師は、取税人・罪人らと共に食するか』一二之を
一三 聞きて言ひたまふ『健かなる者は醫者を要せず、ただ病める者これを要す。一三なんぢら往きて學べ「われ憐憫を
好みて、犧牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり』
一四 一四爰にヨハネの弟子たち御許にきたりて言ふ『われらとパリサイ人とは*斷食するに、何故なんぢの弟子たち
一五 は斷食せぬか』一五イエス言ひたまふ『新郎の友だち、新郎と偕にをる間は、悲しむことを得んや。されど新郎を
一六 とらるる日きたらん、その時には斷食せん。一六誰も新しき布の裂を舊き衣につぐことは爲じ、補ひたる裂は、そ
一七 の衣をやぶりて、破綻さらに甚だしかるべし。一七また新しき葡萄酒をふるき革嚢に入るることは爲じ。もし然せ
ば嚢はりさけ、酒ほどばしり出でて、嚢もまた廢らん。新しき葡萄酒は新しき革嚢にいれ、斯て兩ながら保つな
り』
一八 一八イエス此等のことを語り給ふとき、視よ、一人の司きたり、拜して言ふ『わが娘いま死にたり。然れど
一九 二〇 來りて御手を之におき給はば活きん』一九イエス起ちて彼に伴ひ給ふに、弟子たちも從ふ。二〇視よ、十二年血漏を
二一 患ひゐたる女、イエスの後にきたりて、御衣の總にさはる。二一それは御衣にだに觸らば救はれんと心の中にいへ
二二 るなり。二二イエスふりかへり、女を見て言ひたまふ『娘よ、心安かれ、汝の信仰なんぢを救へり』女この時より
二三 二四 救はれたり。二三斯てイエス司の家にいたり、笛ふく者と騷ぐ群衆とを見て言ひたまふ、二四『退け、少女は死にたる
二五 にあらず、寐ねたるなり』人々イエスを嘲笑ふ。二五群衆の出されし後、いりてその手をとり給へば、少女おきた

二六 り。二六この聲聞あまねく其の地に弘まりぬ。
二七 二七イエス此處より進みたまふ時、ふたりの盲人さけびて『ダビデの子よ、我らを憫みたまへ』と言ひつつ從
二八 ふ。二八イエス家にいたり給ひしに、盲人ども御許に來りたれば、之に言ひたまふ『我この事をなし得と信ずる
二九 か』彼等いふ『主よ、然り』二九爰にイエスかれらの目に觸りて言ひたまふ『なんぢらの信仰のごとく汝らに成
三〇 れ』三〇乃ち彼らの目あきたり。イエス嚴しく戒めて言ひたまふ『愼みて誰にも知らすな』三一されど彼ら出でて、
三一 偏くその地にイエスの事をいひ弘めたり。
三二 三二盲人どもの出づるとき、視よ、人々、惡鬼に憑かれたる啞者を御許につれきたる。三三惡鬼おひ出されて啞
三四 者ものいひたれば、群衆あやしみて言ふ『かかる事は未だイスラエルの中に顯れざりき』三四然るにパリサイ人い
三五 ふ『かれは惡鬼の首によりて惡鬼を逐ひ出すなり』
三五 三五イエス偏く町と村とを巡り、その會堂にて教へ、御國の福音を宣べつたへ、諸般の病、もろもろの疾患を
三六 いやし給ふ。三六また群衆を見て、その牧ふ者なき羊のごとく惱み、且たふるを甚く惱み、三七遂に弟子たちに言
三八 ひたまふ『收穫はおほく勞動人はすくなし。三八この故に收穫の主に勞動人をその收穫場に遣し給はんことを求め
よ』

第一〇章

一 一斯てイエスその十二弟子を召し、穢れし靈を制する權威をあたへて、之を逐ひ出し、もろもろの
病、もろもろの疾患を醫すことを得しめ給ふ。

イ太四・二四、九・三　ロ太一・一、一一・二　ハ太八・四を見よ　ニ太八・四を見よ　ホ太四・二四を見よ　ヘ太一一・二二—二　ト可二・一二　チ太一二・二四　可三・二一・二二　リ太四・二三を見よ　ヌ太四・二三を見よ　ル太四・二三を見よ　ヲ太一四・一四、一五・三二、二　カ路一〇・二　ヨ路一〇・二　タ可三・二、三—一五　レ路九・一

ソ二—四　可三・一六　ツ太四・二八を見よ　ネ太四・二八を見よ　ナ太四・二一徒一一・二　ラ約一・四四　ム（約一・四五）　ウ約一・一・六、一四・五、一二・一〇・二四—二九、一一・二　ク路六・一五徒一・一　ヤ太二六・一四　路二二・三・二、二一・二六、一一・二六　ケ路九—一五　可六・八—一一　コ母前二五・六　エ徒一三・五一　テ太一一・二二—二四、一二・三六徒一七・ヌ太一一・二二、二四　ル創一八・二六—一九　ノ井太九・九　オ可三・一八（路六・一六徒一・一三）　マ王下一七・二四—四　ハ路九・五二、五　ヘ（太一一・二二—二）　ト可二・一二　チ太一二・二四　可三　リ太四・二三を見よ　ヌ太四・二三を見よ　ル太四・二三を見よ　ヲ太一四・一四、一五・三二、二　カ路一〇・二　ヨ路一〇・二　タ可三・二、三—一五　レ路九・一

二 二十二使徒の名は左のごとし。先づペテロといふシモン及びその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブ及びそ
三 の兄弟ヨハネ、三ピリポ及びバルトロマイ、トマス及び取稅人マタイ、アルパヨの子ヤコブ及びタダイ、四熱心
四 黨のシモン及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを賣りし者なり、五イエスこの十二人を遣さんとて、命
五 じて言ひたまふ、
六 『異邦人の途にゆくな、又サマリヤ人の町に入るな。六寧ろイスラエルの家の失せたる羊にゆけ。七往きて
七 宣べつたへ「天國は近づけり」と言へ。八病める者をいやし、死にたる者を甦へらせ、癩病人をきよめ、惡鬼を
八 逐ひだせ。價なしに受けたれば價なしに與へよ。九帶のなかに金・銀または錢をもつな。一〇旅の囊も、二枚の
九 下衣も、鞋も、杖ももつな。勞動人の、その食物を得るは相應しきなり。一一何れの町、いづれの村に入るとも、
一〇 その中にて相應しき者を尋ねいだして、立ち去るまでは其處に留れ。一二人の家に入らば平安を祈れ。一三その家も
一一 し之に相應しくば、汝らの祈る平安は、その上に臨まん。もし相應しからずば、その平安は、なんぢらに歸ら
一二 ん。一四人もし汝らを受けず、汝らの言を聽かずば、その家、その町を立ち去るとき、足の塵をはらへ。一五誠に汝
一三 らに告ぐ、審判の日には、その町よりもソドム、ゴモラの地のかた耐へ易からん。
一四 一六視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るが如し。この故に蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直
一五 なれ。一七人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、會堂にて鞭たん。一八また汝等わが故によりて、司たち王た

一九 ちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人とに證をなさん爲なり。一九かれら汝らを付さば、如何なにを言はんと思
二〇 ひ煩ふな、言ふべき事は、その時さづけらるべし。二〇これ言ふものは汝等にあらず、其の中にありて言ひたまふ
二一 汝らの父の靈なり。二一兄弟は兄弟を、父は子を死に付し、子どもは親に逆ひて之を死なしめん。二二又なんぢら我
二二 が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐へ忍ぶものは救はるべし。二三この町にて、責めらるる時は、
かの町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんぢらイスラエルの町々を巡り盡さぬうちに人の子は來るべし。
二四 二四弟子はその師にまさらず、僕はその主にまさらず、二五弟子はその師のごとく、僕はその主の如くならば足
二五 れり。もし家主をベルゼブルと呼びたらんには、況てその家の者をや。二六この故に、彼らを懼るな。蔽はれたる
二六 ものに露れぬはなく、隱れたるものに知られぬは無ければなり。二七暗黑にて我が告ぐることを光明にて言へ。耳
二七 をあてて聽くことを屋の上にて宣べよ。二八身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナに
二八 て滅し得る者をおそれよ。二九二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに汝らの父の許なくば、その一羽も地に
二九 落つること無からん。三〇汝らの頭の髮までも皆かぞへらる。三一この故におそるな、汝らは多くの雀よりも優るる
三〇 なり。三二然れば凡そ人の前にて我を言ひあらはす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん。三三され
三一 ど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否まん。
三二 三四われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな、平和にあらず、反つて劍を投ぜん爲に來れり。三五それ我が

イ 一九—二二 可一三　ニ 太一〇・三五・二六　リ 路六・四〇　ラ 二六—三三 路一二　ツ 路一二・七 太一二・五一—五三（默六・四）
・二二—一三 路一二　ホ 太二四・九（約一五・一八—二二）　ヌ 約一三・一六、一五・二〇　レ（路一二・六）　ソ 母前一四・四五　母 ネ 路一二・八 羅一〇・九・一二
ロ 路一二・一・一七　ヘ 太二四・一三 默二・ル 王下一・二 太一二・二六　ワ 可四・二二 路八・一　ソ 母前一四・四五　母 ネ 路一二・八 羅一〇・九・一二
ハ 路一二・一・一 徒四・八、一三・九 旅前　ト 太二三・三四　チ 太一六・二七・二八　カ 路一二・三　ヨ 太五・二二を見よ　タ 來一〇・三一 雅四　後一四・一一 王上一・五二 路一二・七、二一・一八 徒二七・三四　ナ 可八・三八 路九・二六 現後二・二　ラ 三四、三五 路一二・

三六 來れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嫜より分たん爲なり。三六人の仇はその家の者なるべ
三七 し。三七我よりも父または母を愛する者は、我に相應しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應し
三八 からず。三八又おのが十字架をとりて我に從はぬ者は、我に相應しからず。三九生命を得る者は、これを失ひ、我が
三九 ために生命を失ふ者は、これを得べし。
四〇 四〇汝らを受くる者は、我を受くるなり。我をうくる者は、我を遣し給ひし者を受くるなり。四一預言者たる名
四一 の故に預言者をうくる者は、預言者の報をうけ、義人たる名のゆゑに義人をうくる者は、義人の報を受くべし。
四二 四二凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に冷かなる水一杯にても與ふる者は、誠に汝らに告ぐ、必ず
その報を失はざるべし』

第一一章

一　一イエス十二弟子に命じ終へてのち、町々にて敎へ、かつ宣傳へんとて、此處を去り給へり。
二 二ヨハネ牢舍にてキリストの御業をきき、弟子たちを遣して、三イエスに言はしむ『來るべき
三 者は汝なるか、或は他に待つべきか』四答へて言ひたまふ『ゆきて、汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。五盲
四 人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。
五 六おほよそ我に躓かぬ者は幸福なり』七彼らの歸りたるを、ヨハネの事を群衆に言ひ出でたまふ『なんぢら何
六 を眺めんとて野に出でし、風にそよぐ葦なるか。八然らば何を見んとて出でし、柔かき衣を著たる人なるか。視
七 八

ム 來七・六 太一〇・二　ウ 詩四一・九、五五・一　約一・三・八　井 路一四・二六　ノ 太一六・二四 可八・一　ク 太一八・五 路一〇・一　ケ 二一・一九 路七・一　コ 詩四九・一〇 民二一・四・七 詩一一八・五・五、六、四二・七）　テ（賢六・一）路四・一八、六・二〇 雅二・五　ア 太一三・二一、五七、二四・一〇、二六・三　イ（賢二九・一八、三一・一〇）　エ（賢二九・一八、三五・五、六、四二・七）　オ 太一六・二五 可八・三五 路九・二四、一七・三三 約一二・二五　カ 路一二・三　ヨ 太五・二二を見よ　タ 來一〇・三一 雅四　ヤ 可九・三七 路九・四八（約一二・四四）　マ 可九・四一 來六・一〇（太二五・四〇）　ミ 詩一一八・六・二〇 雅二・五　ス 太三・二・二九　キ（弗四・一四）

九 よ、やはらかき衣を著たる者は王の家に在り。九さらば何のために出でし、預言者を見んとてか。然り、汝らに
一〇 告ぐ、預言者よりも勝る者なり。一〇「視よ、わが使をなんぢの顏の前につかはす。彼は、なんぢの前に、なんぢの
一一 道をそなへん」と錄されたるは此の人なり。一一誠に汝らに告ぐ、女の產みたる者のうち、バプテスマのヨハネよ
一二 り大なる者は起らざりき。然れど天國にて小き者も、彼よりは大なり。一二バプテスマのヨハネの時より、今に至
一三 るまで、天國は烈しく攻めらる、烈しく攻むる者は、これを奪ふ。一三凡ての預言者と律法との預言したるは、ヨ
一四 ハネの時までなり。一四もし汝等わが言をうけんことを願はば、來るべきエリヤは此の人なり、一五耳ある者は聽く
一六 べし。一六われ今の代を何に比へん、童子、市場に坐し、友を呼びて、一七われら汝等のために笛吹きたれど汝ら踊
一八 らず、歎きたれど汝ら胸うたざりき」と言ふに似たり。一八それはヨハネ來りて、飲食せざれば「惡鬼に憑かれた
一九 る者なり」といひ、一九人の子、來りて飲食すれば「視よ、食を貪り、酒を好む人、また取稅人・罪人の友なり」
二〇 と言ふなり。されど智慧は己が業によりて正しとせらる』二〇爰にイエス多くの能力ある業を行ひ給へる町々の悔
二一 改めぬによりて、之を責めはじめ給ふ。二一『禍害なる哉、コラジンよ、禍害なる哉、ベツサイダよ、汝らの中にて
二二 行ひたる能力ある業をツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布を著、灰の中にて悔改めしならん。
二三 二三されば汝らに告ぐ、審判の日にはツロとシドンとのかた汝等よりも耐へ易からん。二三カペナウムよ、なんぢは
二四 天にまで擧げらるべきか、黃泉にまで下らん。汝のうちにて行ひたる能力ある業をソドムにて行ひしならば、今
日までも、かの町は遺りしならん。二四然れば汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐へ易から

イ太一四・五、二一・二　六踏一・七、六・二〇　ロ詩四〇・三　馬三・一　可一・二　註一・一
七、七六、七・二七　八踏一六・一六　二馬四・五　太一七・一　〇一一二　可九・一　一一一三　踏一・一
ホ太一三・九、四三　可四・九、一二　踏八・八、一四・三五　獻二・七を見よ
七約一・二一　ヘ太三・四　踏一・一五　リ可六・四五、八・二二　踏九・一〇　約一・四　チ二一—二三　踏一〇
ヌ太一一・二二、一五・二一・可三・八、七・
二四、三一　踏六・一　ワ太四・一三を見よ　カ箴一四・一二—一五　太一六・一八　路一三　〇・一五、一六・一三　使二・二七、三一　詩
二〇・一八、六・八　一〇・一三、一四　タ太一〇・一五を見よ　レ太一〇・一五、一一

ツ 二五—二七　路一〇　ネ 蓉前一・二六—二九　ナ 太二八・一八　約三・三五、一三・三、一七　二・四、二三・三四　約一一・四、一二
ラ 約七・二九、八・五　五、一〇・一五、一　七・二五　ム 耶三一・二五（約七・三七）
ウ 發使一〇・一　井 約一三・一五　裕四・二〇　詩一・五　彼前　二・二一　約撒二・六　ノ 耶六・一六
オ 一—八　可二・二三　路六・一一　ク 申二三・二五　ヤ 太一二・一〇　路一　ケ 來九・二を見よ　マ 母前二一・三—六
フ 民二八・九、一〇　コ 太一二・四一、四二　エ 何六・六、太九・一三　デ 太八・二〇を見よ　ア 九—一四　可三・一
三・一四、一四・三　約五・一〇、七・二　三、九・一六　路六・六—一　サ 太一二・二を見よ

二五 ん』
二五その時イエス答へて言ひたまふ『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくし
二六 二七 て嬰兒に顯し給へり。二六父よ、然り、斯の如きは御意に適へるなり。二七凡ての物は我わが父より委ねられたり。
二八 子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままに顯すところの者の外になし。二八凡て勞する
二九 者・重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません。二九我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に學
三〇 べ、さらば靈魂に休息を得ん。三〇わが軛は易く、わが荷は輕ければなり』

第一二章

一 一その頃イエス安息日に麥畠をとほり給ひしに、弟子たち飢ゑて穗を摘み、食ひ始めたるを、二パ
二 リサイ人、見てイエスに言ふ『視よ、なんぢの弟子は安息日に爲まじき事をなす』三彼らに言ひ給
三 ふ『ダビデがその伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲しし事を讀まぬか。四即ち神の家に入りて、祭司のほか
四 は、己もその伴へる人々も食ふまじき供のパンを食へり。五また安息日に祭司らは宮の內にて安息日を犯せど
五 も、罪なきことを律法にて讀まぬか。六われ汝らに告ぐ、宮より大なる者ここに在り。七「われ憐憫を好みて、犧
六 牲を好まず」とは如何なる意かを、汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。八それ人の子は安息日
七 の主たるなり』
八 九イエス此處を去りて、彼らの會堂に入り給ひしに、一〇視よ、片手なえたる人あり。人々イエスを訴へんと
九 思ひ、問ひていふ『安息日に人を醫すことは善きか』一一彼らに言ひたまふ『汝等のうち一匹の羊をもてる者あら

二　んに、もし安息日に穴に陷らば、之を取りあげぬか。一二 人は羊より優るること如何許ぞ。さらば安息日に善をな
一三　すは可し』一三 爰にかの人に言ひ給ふ『なんぢの手を伸べよ』かれ伸べたれば、他の手のごとく癒ゆ。一四 パリサイ
一五　人いでて如何してかイエスを亡さんと議る。一五 イエス之を知りて此處を去りたまふ。多くの人、したがひ來りた
一六　れば、ことごとく之を醫し、一六 かつ我を人に知らすなと戒め給へり。一七 これ預言者イザヤによりて云はれたる言
一八　の成就せんためなり。曰く、一八『視よ、わが選びたる我が僕、わが心の悅ぶ我が愛しむ者、我わが靈を彼に與へ
一九　ん、彼は異邦人に正義を告げ示さん。一九 彼は爭はず、叫ばず、その聲を大路にて聞く者なからん。二〇 正義をして
二一　勝遂げしむるまでは、傷へる葦を折ることなく、煙れる亞麻を消すことなからん。二一 異邦人も彼の名に望をおか
ん』

二二　二二 ここに惡鬼に憑かれたる盲目の啞者を御許に連れ來りたれば、之を醫して啞者の物言ひ、見ゆるやうに爲
二三　したまひぬ。二三 群衆みな驚きて言ふ『これはダビデの子にあらぬか』二四 然るにパリサイ人ききて言ふ『この人、
二四　惡鬼の首ベルゼブルによらでは惡鬼を逐ひ出すことなし』二五 イエス彼らの思を知りて言ひ給ふ『すべて分れ爭ふ
二五　國はほろび、分れ爭ふ町また家はたたず。二六 サタンもしサタンを逐ひ出さば、自ら分れ爭ふなり。然らばその國
二六　いかで立つべき。二七 我もしベルゼブルによりて惡鬼を逐ひ出すか。この
二七　故に彼らは汝らの審判人となるべし。二八 然れど我もし神の靈によりて惡鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝らに到
二八　れるなり。二九 人まづ強き者を縛らずば、いかで強き者の家に入りて、その家財を奪ふことを得ん、縛りて後その

イ(出二二・四、五 申 二二・四)　ロ(太一〇・三一)　ハ太二六・四可一四・一 路二二・二 約七　ニ太四・二三を見よ　ホ太八・四を見よ　ヘ太四二・一一四　ト路二二・二七 詩二七・七　チ太三・一七、一七・五　リ路四・一八 約三・三　ヌ羅一五・一二　ル二二・二四路一一・一四、一五 (太九・三二・三四)　ヲ太九・二七を見よ　カ太一〇・二五を見よ　ヨ二五—二九 可三・二七 路一一　タ太九・四を見よ　レ太四・一〇を見よ　ソ(徒一九・一三)

ツ路一一・二三可九・一〇　ナ可一〇・三〇 路一四・四〇 路九・五〇)　ネ三一・三二 可三・二八—三〇 路一二・一〇　ラ太七・一六を見よ　ム太三・七、二三・三三　ウ三四・三五 母創二　ヰ太一〇・一五を見よ　ノ太一六・一可八・一　オ三九—四二 太一六　ク拿一・一七　ヤ太八・二〇を見よ　マ太一六・二一を見よ　ケ拿一・二　フ拿三・五　コ太一二・六、四二　エ王上一〇・一 代下九・一　サ伯一・七 彼前五・八 キ箴五七・二一　ア四三—四五 路一一・二四—二六　デ太一二・六、四一

家を奪ふべし。三〇 我と偕ならぬ者は我にそむき、我とともに集めぬ者は散すなり。三一 この故に汝らに告ぐ、人の
三一　凡ての罪と瀆とは赦されん、されど御靈を瀆すことは赦されじ。三二 誰にても言をもて人の子に逆ふ者は赦され
三二　ん、然れど言をもて聖靈に逆ふ者は、この世にても後の世にても赦されじ。三三 或は樹をも善しとし、果をも善し
三三　とせよ。或は樹をも惡しとし、果をも惡しとせよ。樹は果によりて知らるるなり。三四 蝮の裔よ、なんぢら惡しき
三四　者なるに、爭で善きことを言ひ得んや。それ心に滿つるより口に言はるるなり。三五 善き人は善き倉より善き物を
三五　いだし、惡しき人は惡しき倉より惡しき物をいだす。三六 われ汝らに告ぐ、人の語る凡ての虛しき言は、審判の日
三六　に糺さるべし。三七 それは汝の言によりて義とせられ、汝の言によりて罪せらるるなり』
三七　三八 爰に或る學者・パリサイ人ら答へて言ふ『師よ、われら汝の徵を見んことを願ふ』三九 答へて言ひたまふ
三八　『邪曲にして不義なる代は徵を求む、されど預言者ヨナの徵のほかに徵は與へられじ。四〇 即ち「ヨナが三日三
三九　夜、大魚の腹の中に在りし」ごとく、人の子も三日三夜、地の中に在るべきなり。四一 ニネベの人、審判のとき今
四〇　の代の人とともに立ちて之が罪を定めん、彼らはヨナの宣ぶる言によりて悔改めたり。視よ、ヨナよりも勝るも
四一　の此處に在り。四二 南の女王、審判のとき今の代の人とともに起きて之が罪を定めん、彼はソロモンの智慧を聽か
四二　んとて地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも勝る者ここに在り。四三 穢れし靈、人を出づるときは、水なき處
四三　を巡りて休を求む、而して得ず。四四 乃ち「わが出でし家に歸らん」といひ、歸りてその家の、空きて掃き淨め
四四　られ、飾られたるを見、四五 遂に往きて己より惡しき他の七つの靈を連れきたり、共に入りて此處に住む。されば
四五

其の人の後の狀は前よりも惡しくなるなり。邪曲なる此の代もまた斯の如くならん」

四六 四七 四六イエスなほ群衆にかたり居給ふとき、視よ、その母と兄弟たちと、彼に物言はんとて外に立つ。四七或人
四八 イエスに言ふ『視よ、なんぢの母と兄弟たちと、汝に物言はんとて外に立てり』四八イエス告げし者に答へて言ひ
四九 たまふ『わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ』四九斯て手をのべ、弟子たちを指して言ひたまふ『視よ、これは我
五〇 が母、わが兄弟なり。五〇誰にても天にいます我が父の御意をおこなふ者は、即ち我が兄弟、わが姉妹、わが母
なり』

第一三章

一 一その日イエス家を出でて、海邊に坐したまふ。二大なる群衆みもとに集りたれば、イエスは舟に
二 乗りて坐したまひ、群衆はみな岸に立てり。三譬にて數多のことを語りて言ひたまふ、『視よ、種播
三 四 五 く者まかんとて出づ。四播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。五土うすき磽地に落ちし種あり、
六 七 土深からぬによりて速かに萠え出でたれど、六日の昇りし時やけて根なき故に枯る。七茨の地に落ちし種あり、
八 九 茨そだちて之を塞ぐ。八良き地に落ちし種あり、或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の實を結べり。*耳ある者
は聽くべし』

一〇 一〇弟子たち御許に來りて言ふ『なにゆゑ譬にて彼らに語り給ふか』一一答へて言ひ給ふ『なんぢらは天國の奧
一二 義を知ることを許されたれど、彼らは許されず。一二それ誰にても、有てる人は與へられて愈々豐ならん。然れど
一三 有たぬ人は、その有てる物をも取らるべし。一三この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆ

イ 路一・二六を見よ　ハ 太一・八、二・一　ヨ 來五・一一　ソ 一八—二三　ツ（太四・二三）　ネ 太五・三七を見よ　ナ 寒五八・二　結三三・三、三一・三二　可六・二　ヲ 申二九・四　寒六・カ 寒六・九、一〇　可四　ワ 九、四二・九、二〇　・二二　路八・一〇　レ（約八・五六）來一一　邪五・二一　結一二・　約一二・四〇　徒二　二 約一二・四〇　徒　八・二六、二七　羅一　一九・二六　約一五　・二一　路一二・四八　雅四・六）　一一・八　一・八　タ 一六、一七　路一〇・　二三、二四　ツ 一八—二三　路一三・二〇　路八・　ラ 太一・六を見よ　ム 可四・一九　路二一・　ウ 太一九・二一—二四　提前六・九、一〇、一　七　前一・二〇、二・六、　八、三・一八、一九　哥後四・四　加一・四　非創二六・一二　太一　三・八　弗二・二　約壹二・一　ノ 太一三・三一、三三、　四四、四五、四七、五　二、一八・二三、二　〇・一、二二・二、　一二九　オ 詩一二六・六　加六・　七—九（可四・二六　五—一七　ク 太一・六を見よ　ヤ 可四・一　路八・四—　リ 創二六・一二　太一　ケ 太一三・一〇—五三　ヘ 一一—一五　可四・一　等　可四・二—三四　ル 太一九・一一、二〇　・二三　約六・六五　哥前二・一〇、一四、　弗一・九、三・三九　ヌ 太一一・一五を見よ　提前三・一六　約壹　二・二〇、一七　ヲ 太二五・二九　可日・　二五　路八・一八、

一四 一五 れども聽かず、また悟らぬ故なり。一四斯てイザヤの預言は、彼らの上に成就す。曰く『なんぢら聞きて聞けども
一六 悟らず、見て見れども認めず。一五此の民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉ぢたればなり。これ目にて見、耳
一七 にて聽き、心にて悟り、顧へりて、我に醫さるる事なからん爲なり』一六されど汝らの目、なんぢらの耳は、見る
一八 ゆゑに、聞くゆゑに、幸福なり。一七誠に汝らに告ぐ、多くの預言者・義人は、汝らが見る所を見んとせしが見
一九 ず、なんぢらが聞く所を聞かんとせしが聞かざりしなり。一八然れば汝ら種播く者の譬を聽け。一九誰にても天國の
二〇 言をききて悟らぬときは、惡しき者きたりて、其の心に播かれたるものを奪ふ。路の傍らに播かれしとは斯る人
二一 なり。二〇磽地に播かれしとは、御言をききて、直ちに喜び受くれども、二一己に根なければ暫し耐ふるのみにて、
二二 御言のために艱難、あるひは迫害の起るときは、直ちに躓くものなり。二二茨の中に播かれしとは、御言をきけど
二三 も、世の心勞と財貨の惑とに、御言を塞がれて實らぬものなり。二三良き地に播かれしとは、御言をききて悟り、
二四 實を結びて、或は百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍に至るものなり』

二四 二四また他の譬を示して言ひたまふ『天國は良き種を畑にまく人のごとし。二五人々の眠れる間に、仇きたりて
二五 二六 麥のなかに毒麥を播きて去りぬ。二六苗はえ出でて實りたるとき、毒麥もあらはる。二七僕ども來りて家主にいふ
二七 「主よ、畑に播きしは良き種ならずや、然るに如何して毒麥あるか」二八主人いふ「仇のなしたるなり」僕ども言
二八 二九 ふ「さらば我らが往きて之を拔き集むるを欲するか」二九主人いふ「いな恐らくは毒麥を拔き集めんとて麥をも共

三〇 に拔かん。三〇 兩ながら收穫まで育つに任せよ。收穫のとき我かる者に「まづ毒麥を拔きあつめて、焚くために之
を束ね、麥はあつめて我が倉に納れよ」と言はん』
三一 三一 また他の譬を示して言ひたまふ『天國は一粒の芥種のごとし、人これを取りてその畑に播くときは、三二 萬
の種よりも小けれど、育ちては、他の野菜よりも大く、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり』
三三 三三 また他の譬を語りたまふ『天國はパンだねのごとし、女これを取りて、三斗の粉の中に入るれば、悉とく
脹れいだすなり』
三四 三四 イエスすべて此等のことを、譬にて群衆に語りたまふ、譬ならでは何事も語り給はず。三五 これ預言者によ
三五 りて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、『われ譬を設けて口を開き、世の創より隱れたる事を言ひ出さん』
三六 三六 爰に群衆を去らしめて、家に入りたまふ。弟子たち御許に來りて言ふ『畑の毒麥の譬を我らに解きたま
三七 へ』三七 答へて言ひ給ふ『良き種を播く者は人の子なり、三八 畑は世界なり、良き種は天國の子どもなり、毒麥は惡
三九 四〇 しき者の子どもなり、三九 之を播きし仇は惡魔なり、收穫は世の終なり、刈る者は御使たちなり、四〇 されば毒麥の
四一 集められて火に焚かるる如く、世の終にも斯くあるべし。四一 人の子、その使たちを遣さん。彼ら御國の中より凡
四二 ての顚躓となる物と不法をなす者とを集めて、四二 火の爐に投げ入るべし。其處にて哀哭・切齒することあらん。
四三 四三 其のとき義人は、父の御國にて日のごとく輝かん。*耳ある者は聽くべし。
四四 四四 天國は畑に隱れたる寶のごとし。人、見出さば之を隱しおきて、喜びゆき、有てる物をことごとく賣りて

ム 太一三・二四を見よ　ク 太一三・二四を見よ　ヤ 歌七・二三　ア 詩一四一・二二　ハ 太一七・二〇　路一一・一九、八・三、九・一一、一二、一三・一七、一四・一、二、一二、一三、一七、一八、一九、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四を見よ
ウ 太一三・二九を見よ　ヤ 歌七・二三　ク 太一三・二四を見よ　サ 可六・三　ル 太八・二〇を見よ　シ 太一六・二四 可六・七・一四・八・二八 路九・七
井 太一三・三九を見よ　マ 五四—五八 可六・一—六　コ 太一二・四六を見よ　キ 太一一・六を見よ　ヲ 太八・一一　ス 太八・一二を見よ
ノ 太一三・四二　エ 太一二・四六を見よ　ユ 可六・四 路四・二四　ワ 太五・三七を見よ　ソ 太八・一二を見よ
オ 太八・一二を見よ　ケ 太四・二三を見よ　テ 可一五・四〇 加一・一九 使一二・一七　ミ 可六・一四—二九、八・一五 路三・一、七・一九、八・三、九・七—九、一三・三一、二三・七、八、一一、一二、一五 使四・二　カ 約八・四四 使一三・一〇　タ 來九・二六　レ 太一三・五〇
ヤ 太一三・二四を見よ　ア 詩一〇四・一二 結一九・一、一九 太一三・　ト 創一八・六（十六・一九 母前一・二四）　ヲ 約一〇・三　ツ 來四・一八 但一二・三　ネ 太一一・一五を見よ
イ 七三・一二　ロ 三一、三二 可四・三　路一三・　ニ（詩一〇四・一二 結一七・二三、三一・　ハ 太一七・二〇 路一一・一三・七・六　ヌ 太一三・四〇、四九、一二、二三・一七 創一八・六（十六・一九 母前一・二四）　ル 太八・二〇を見よ　ヲ 太五・三七を見よ　ナ 太一二・一七を見よ
ヲ 太八・一一を見よ　ラ 太一三・四六
二四を見よ　ホ 太一三・二四を見よ　ヘ（出一二・一二、五、一三　一一、一二 可八・一　チ 可四・三四（約一〇・一〇）　ム 太一三・二四を見よ　ル 太八・一二を見よ
一八、一九 太一三・　ト 創一八・六（十六・一九 母前一・二四）　ヲ 約一〇・三　ツ 來四・一八 但一二・三　ネ 太一一・一五を見よ
一七・二三、三一・　・七 利二・一、六　五 路一二・一 有前　リ 詩七八・二、六、一六・二五）　カ 約八・四四 使一三・一〇　タ 來九・二六　ナ 太一二・一七を見よ
二四を見よ　六（出四・一二）　一六、一七、一〇・　五・六—八 加五・九　ヌ 太一五・一五　太一五・一五　レ 太一三・五〇　ラ 太一三・四六

四五 其の畑を買ふなり。
四六 四五 また天國は良き眞珠を求むる商人のごとし。四六 價たかき眞珠、一つを見出さば、往きて有てる物をことご
とく賣りて、之を買ふなり。
四七 四七 また天國は海におろして、各樣のものを集むる網のごとし。四八 充つれば岸にひきあげ、坐して良きものを
四八 器に入れ、惡しきものを棄つるなり。四九 世の終にも斯くあるべし、御使等いでて、義人の中より、惡人を分ち
四九 て、五〇 之を火の爐に投げ入るべし。其處にて哀哭・切齒することあらん。
五〇 五一 汝等これらの事をみな悟りしか』彼等いふ『然り』五二 また言ひ給ふ『この故に、天國のことを敎へられた
五一 五二 る凡ての學者は、新しき物と舊き物とをその倉より出す家主のごとし』
五三 五三 イエスこれらの譬を終へて此處を去りたまふ。五四 己が鄕にいたり、會堂にて敎へ給へば、人々おどろきて
五四 言ふ『この人はこの智慧と此等の能力とを何處より得しぞ。五五 これ木匠の子にあらずや、其の母はマリヤ、其の
五五 兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや。五六 又その姉妹も皆われらと共にをるに非ずや。然るに此等の
五六 すべての事は何處より得しぞ』五七 遂に人々かれに躓けり。イエス彼らに言ひたまふ『預言者はおのが鄕、おのが
五七 家の外にて尊ばれざる事なし』五八 彼らの不信仰によりて、其處にては多くの能力ある業を爲し給はざりき。

第一四章

一 一 そのころ、國守ヘロデ、イエスの噂をききて、二 侍臣どもに言ふ『これバプテスマのヨハネな
二 り。かれ死人の中より甦へりたり、然ればこそ此等の能力その內に働くなれ』三 ヘロデ先に己が兄

四 弟ピリポの妻へロデヤの爲にヨハネを捕へ、縛りて獄に入れたり。(イ) 五 ヨハネ、ヘロデに『かの女を納るるは宜しからず』と言ひしに因る。六 斯てヘロデ、ヨハネを殺さんと思へど、群衆を懼れたり。(ロ) 群衆ヨハネを預言者とすればなり。七 然るにヘロデの誕生日に當り、ヘロデヤの娘その席上に舞をまひてヘロデを喜ばせたれば、八 ヘロデ之に何にても求むるままに與へんと誓へり。(ハ) 娘その母に唆かされて言ふ『バプテスマのヨハネの首を盆に載せてここに賜はれ』九 王、憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して、之を與ふることを命じ、一〇 人を遣し獄にてヨハネの首を斬り、一一 その首を盆にのせて持ち來らしめ、之を少女に與ふ。少女はこれを母に捧ぐ。一二 ヨハネの弟子たち來り、屍體を取りて葬り、往きてイエスに告ぐ。

一三 イエス之を聞きて人を避け、其處より舟にのりて寂しき處に往き給ひしを、群衆ききて町々より徒歩にて從ひゆく。(ハ) 一四 イエス出でて大なる群衆を見、これを憫みて、その病める者を醫し給へり。一五 夕になりたれば、弟子たち御許に來りて言ふ『ここは寂しき處、はや時も晩し、群衆を去らしめ、村々に往きて、己が爲に食物を買はせ給へ』一六 イエス言ひ給ふ『かれら往くに及ばず、汝ら之に食物を與へよ』一七 弟子たち言ふ『われらが此處にもてるは唯五つのパンと二つの魚とのみ』一八 イエス言ひ給ふ『それを我に持ちきたれ』一九 斯て群衆に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子たちに與へ給へば、弟子たち之を群衆に與ふ。二〇 凡ての人、食ひて飽く、裂きたる餘を集めしに十二の筐に滿ちたり。二一 食ひし者は、女と子供とを除きて凡そ五千人なりき。

イ 可六・一七、一九・二　ロ 太四・一二を見よ　ハ 利一八・一六、二〇　ニ 太一一・九を見よ　ホ 一三・二一　ヘ 太九・三六を見よ　ト 太四・二三を見よ　チ 太一六・九　リ 母創九・二三　ヌ 太一六・九　ル 二二・三三　ヲ 可六・四五・一五　ワ 伯九・八　カ 二四・三七　ヨ 太九・二を見よ　タ 創四三・一二　レ 太六・三〇、八・二　ソ 太四・三を見よ　ツ 三四・三五　ネ 可六・五三　ナ 太九・二〇　ム 八・二二　ウ 可三・二三　ノ 出二〇・一二　オ 出九・三　ク 出二一・七　ヤ 申二七・一六　マ 二四・三〇　ケ 三五（詩一四・六）　フ 可六・四一、八・二　コ 三・二〇、六・五六、一一・二三、三〇、二一・一　テ 可六・五三　ア 可七・一　イ 可三・二三　エ 二九・七・二　サ 井医二・八　シ 利一三・一六　ス 申五・一六　セ 太一一・二　ソ 太一六・九　タ 創一九・一　チ 太一六・九　ツ 三四・三五　テ 可六・五三　ト 太九・二〇　ナ 可六・五三　ニ 可六・五三　ヌ 太一六・九　ネ 可六・五三　ノ 出二〇・一二　ハ 利一八・一六　ヒ 二一・一七、一九、二一

第一五章

一 爰にパリサイ人・學者ら、エルサレムより來りてイエスに言ふ、二『なにゆゑ汝の弟子は、古への人の言傳を犯すか、食事のときに手を洗はぬなり』三 答へて言ひ給ふ『なにゆゑ汝らは、また汝らの言傳によりて神の誡命を犯すか。四 即ち神は「父母を敬へ」と言ひ「父また母を罵る者は必ず殺さるべし」と言ひたまへり。五 然るに汝らは「誰にても父また母に對ひて我が負ふ所のものは、供物となりたりと言はば、

三 イエス直ちに弟子たちを強ひて舟に乗らせ、自ら群衆をかへす間に、彼方の岸に先に往かしむ。(ル) 三 斯て群衆を去らしめてのち、祈らんとて窃に山に登り、夕になりて獨そこにゐ給ふ。(ヲ) 二四 舟ははや陸より數丁はなれ、風逆ふによりて波に難されゐたり。(ワ) 二五 夜明の四時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給ひしに、二六 弟子たち其の海の上を歩み給ふを見て心騷ぎ、變化の者なりと言ひて懼れ叫ぶ。二七 イエス直ちに彼らに語りて言ひたまふ『心安かれ、我なり、懼るな』二八 ペテロ答へて言ふ『主よ、もし汝ならば我に命じ、水を蹈みて、御許に到らしめ給へ』二九 『來れ』と言ひ給へば、ペテロ舟より下り、水の上を歩みてイエスの許に往く。三〇 然るに風を見て懼れ、沈みかかりければ叫びて言ふ『主よ、我を救ひたまへ』三一 イエス直ちに御手を伸べ、これを捉へて言ひ給ふ『ああ信仰うすき者よ、何ぞ疑ふか』三二 相共に舟に乗りしとき、風やみたり。三三 舟に居る者どもイエスを拜して言ふ『まことに汝は神の子なり』

三四 遂に渡りてゲネサレの地に著きしに、三五 その處の人々イエスを認めて、徧く四方に人をつかはし、又すべての病める者を連れきたり、三六 ただ御衣の總にだに觸らしめ給はんことを願ふ、觸りし者は、みな醫されたり。

六 父また母を敬ふに及ばず」と言ふ。斯くその言傳によりて神の言を空しうす。七 僞善者よ、宜なる哉イザヤは
七 汝らに就きて能く預言せり。曰く、八「この民は口唇にて我を敬ふ、然れど其の心は我に遠ざかる。九 ただ徒らに
八 我を拜む。人の訓誡を敎とし敎へて』一〇。斯くて群衆を呼び寄せて言ひたまふ『聽きて悟れ。一一 口に入るものは人を
九 汚さず、然れど口より出づるものは、これ人を汚すなり』一二 爰に弟子たち御許に來りていふ『御言をききてパリ
一〇 サイ人の躓きたるを知り給ふか』一三 答へて言ひ給ふ『わが天の父の植ゑ給はぬものは、みな拔かれん。一四 彼らを
一一 捨ておけ、盲人を手引する盲人なり、盲人もし盲人を手引せば、二人とも穴に落ちん』一五 ペテロ答へて言ふ『そ
一二 の譬を我らに解き給へ』一六 イエス言ひ給ふ『なんぢらも今なほ悟なきか。一七 凡て口に入るものは腹にゆき、遂に
一三 厠に棄てらるる事を悟らぬか。一八 然れど口より出づるものは心より出づ、これ人を汚すものなり。一九 それ心より
一四 惡しき念いづ、即ち殺人・姦淫・淫行・竊盜・僞證・誹謗、二〇 これらは人を汚すものなり、然れど洗はぬ手にて
一五 食する事は人を汚さず』

一六 二一 イエスここを去りてツロとシドンとの地方に往き給ふ。二二 視よ、カナンの女、その邊より出できたり、叫
一七 びて『主よ、ダビデの子よ、我を憫み給へ、わが娘、惡鬼につかれて甚く苦しむ』と言ふ。二三 されどイエス一言
一八 も答へ給はず。弟子たち來り請ひて言ふ『女を歸したまへ、我らの後より叫ぶなり』二四 答へて言ひたまふ『我は
一九 イスラエルの家の失せたる羊のほかに遣されず』二五 女きたり拜して言ふ『主よ、我を助けたまへ』二六 答へて言ひ
二〇 たまふ『子供のパンをとりて、小狗に投げ與ふるは善からず』二七 女いふ『然り、主よ、小狗も主人の食卓よりお

イ 蹟二九・一三　結三　徒一〇・一四、一五　ホ 蹟六〇・二一、六一　チ 太一三・三六　ル 可七・二〇（太一二・
三・二一　ロ 西二・二〇—二三　四・三、四　多一・一　ヘ 太二三・一六・二四　リ 太一六・九 可七・一　三四 雅三・六）　ワ 可七・二四—三〇
多一・一四　五　路六・三九　ト 路六・三九　ヌ 太一五・一一　哥前　カ 太一一・二一を見よ　ヨ 太九・二七を見よ
ハ 太一五・一七、一八　ニ 太一五・一八、一九　ヲ 創六・五、八・二一　ル 可七・二一、二二　タ 太四・二四を見よ
ホ 蹟六・一四　鄧一七・
九 可七・二一、二二

二八 つる食屑を食ふなり』二八 爰にイエス答へて言ひたまふ『をんなよ、汝の信仰は大なるかな、願のごとく汝になれ』娘この時より癒えたり。

二九 二九 イエス此處を去り、ガリラヤの海邊にいたり、而して山に登り、そこに坐し給ふ。三〇 大なる群衆、跛者・
三一 不具・盲人・啞者および他の多くの者を連れ來りて、イエスの足下に置きたれば、醫し給へり。三一 群衆は、啞者
三二 の物いひ、不具の癒え、跛者の歩み、盲人の見えたるを見て之を怪しみ、イスラエルの神を崇めたり。
三三 三二 イエス弟子たちを召して言ひ給ふ『われ此の群衆をあはれむ、既に三日われと偕にをりて食ふべき物な
三四 し。飢えたるままにて歸らしむるを好まず、恐くは途にて疲れ果てん』三三 弟子たち言ふ『この寂しき地にて、斯
三五 く大なる群衆を飽かしむべき多くのパンを、何處より得べき』三四 イエス言ひ給ふ『パン幾つあるか』彼らいふ
三六 『七つ、また小き魚すこしあり』三五 イエス群衆に命じて地に坐せしめ、三六 七つのパンと魚とを取り、謝して之を
三七 さき弟子たちに與へ給へば、弟子たち之を群衆に與ふ。三七 凡ての人くらひて飽き、裂きたる餘を拾ひしに、七つ
三八 の籃に滿ちたり。三八 食ひし者は、女と子供とを除きて四千人なりき。三九 イエス群衆をかへし、舟に乘りてマガダ
三九 ンの地方に往き給へり。

第一六章

一 一 パリサイ人とサドカイ人と來りてイエスを試み、天よりの徴を示さんことを請ふ。二 答へて言ひ
二 三 今日は風雨ならん」と言ひ、三 また朝には「そら赤くして曇る故に、晴ならん」と言ひ、四 邪

ツ（太九・二二）　ラ 太四・二三を見よ　井 太九・三六を見よ　一二—二二　ヤ（可三・九）　五　テ 太一二・三九
ネ 二九—三一（可七・三一—三七）　ム 太九・八を見よ　ノ（王下四・四三）　オ 太一四・一九を見よ　一三—二二　フ 太一六・六、一一、一二　ル 可七・二〇（太一二・
ナ 太四・一八 可七・三一　ウ 三二—三九 可八・一　ク 太一六・一〇 可八・一　マ（可八・一〇）　ケ 一—一六 可八・一　ヨ 太一二・三八を見よ　二—二　二六・七を見よ　五
一 約六・一 路五・　一—一〇（太一四・　エ（路一二・五四、五　テ 太一二・三九

曲にして不義なる代は徵を求む、然れどヨナの徵の外に徵は與へられじ』斯て彼らを離れて去り給ひぬ。
五 弟子たち彼方の岸に到りしに、パンを携ふることを忘れたり。六 イエス言ひたまふ『慎みてパリサイ人と
七八 サドカイ人とのパン種に心せよ』七 弟子たち互に『*我らはパンを携へざりき』と語り合ふ。八 イエス之を知りて
九 言ひ給ふ『ああ信仰うすき者よ、何ぞ*パン無きことを語り合ふか。九 未だ悟らぬか、五つのパンを五千人に分ち
一〇 て、その餘を幾筐ひろひ、一〇 また七つのパンを四千人に分ちて、その餘を幾籃ひろひしかを覺えぬか。一一 我が言
一二 ひしはパンの事にあらぬを何ぞ悟らざる。唯パリサイ人とサドカイ人とのパンだねに心せよ』一二 爰に弟子たちイ
エスの心せよと言ひ給ひしは、パンの種にはあらで、パリサイ人とサドカイ人との教なることを悟れり。
一三 一三 イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問ひて言ひたまふ『人々は人の子を誰と言ふ
一四一五 か』一四 彼等いふ『或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』一五 彼らに言
一六 ひたまふ『なんぢらは我を誰と言ふか』一六 シモン・ペテロ答へて言ふ『なんぢはキリスト、活ける神の子なり』
一七 一七 イエス答へて言ひ給ふ『バルヨナ・シモン、汝は幸福なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我
一八 が父なり。一八 我はまた汝に告ぐ、汝は*ペテロなり、我この磐の上に我が教會を建てん、黄泉の門はこれに勝たざ
一九 るべし。一九 われ天國の鍵を汝に與へん、凡そ汝が地にて縛ぐ所は、天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解く
二〇 なり』二〇 爰にイエス己がキリストなる事を誰にも告ぐなと弟子たちを戒め給へり。

イ太一三・三三を見よ　ロ太一六・一一可八・一五路一二・一　ハ太六・三〇、八・二　ニ太一四・一七—二一　ホ太一四・二〇を見よ　ヘ太一五・三四—三八　ト太一五・三七を見よ　チ太一三・三三を見よ　リ太一六・六を見よ　ヌ太一六・六・一一　ル一三—一六可八・二七—二九路九・　ヲ可八・二七　ワ太一六・二七・二八　カ太一四・二を見よ　ヨ可六・一五、八・二八路九・八（六一）　タ太一・一六、一六・二〇路二・二一・一四・一一・二　レ詩四二・二太二六・七・一〇—一二約一・二一）　ソ太四・三を見よ　ツ約一・四二、二一・一・九提前三・一　ネ路前一五・五〇加　ウ太一八・一八（約二五、四・一〇来三・一一・一六啓六・一二　ノ太八・四を見よ　ナ太四・一八を見よ　ラ太一・二三を見よ　ム（詩二二・二二）默一三、六・一六、撒前一・四二、二一・一・九提前三・一　ネ路前一五・五〇加　ウ太一八・一八（約二五、四・一〇来三・一一・一六啓六・一二　ノ太八・四を見よ　ナ太四・一八を見よ　ラ太一・二三を見よ　ム（詩二二・二二）默一三、六・一六、撒前一・四二、二一・一・九提前三・一　ネ路前一五・五〇加　ウ太一八・一八（約二一二、九・一四、一〇・三一、一二・一一・一四　來二・一四　ク太一二・四〇、一七・九・一二、二二、二二　ヤ太四・一〇を見よ　マ（西三・二）　ケ太一〇・三八を見よ　フ太一〇・三九を見よ　コ太八・二〇を見よ　エ太二四・三〇、二五・三一、二六・六四　可八・三八、一三・二六路二一・二七約二一・二二徒一・　テ詩六二・一二撒二四・一二・一一・一四・一一・二　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八路九・二八—三　ユ默一・一六　メ申三四・五—七、一　ミ王下二・一一　シ可九・五路九・三三　エ太三・一七、一七・一八　ヒ太三・一七を見よ　ヤ太二六・三七可五・三二—九・一路九・七・二五、一八・三二・三三、二四・七　ク太一二・四〇、一七・九・一二、二二、二二　ヤ太四・一〇を見よ　マ（西三・二）　ケ太一〇・三八を見よ　フ太一〇・三九を見よ　コ太八・二〇を見よ　エ太二四・三〇、二五・三一、二六・六四　可八・三八、一三・二六路二一・二七約二一・二二徒一・　テ詩六二・一二撒二四・一二・一一・一四・一一・二　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八路九・二八—三　ユ默一・一六　メ申三四・五—七、一　ミ王下二・一一　シ可九・五路九・三三　エ太三・一七、一七・一八　ヒ太三・一七を見よ　撒後一・七約壽二・二八默一・七　詩六二・一二撒二・六　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八路九・二八—三徒四・一四徒　撒前四・二六　撒後一・七約壽二・二八默一・七　詩六二・一二撒二・六　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八路九・二八—三徒四・一四徒

第一七章

一 一六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登
二 りたまふ。二 斯て彼らの前にて其の狀かはり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白く
三 なりぬ。三 視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。四 ペテロ差出でてイエスに言ふ『主よ、我ら
四 の此處に居るは善し。御意ならば我ここに三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリ
五 ヤの爲にせん』五 彼なほ語りをるとき、視よ、光れる雲、かれらを覆ふ。また雲より聲あり、曰く『これは我が

二一 二 この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己のエルサレムに往きて、長老・祭司長・學者らより多くの
二二 苦難を受け、かつ殺され、三日めに甦へるべき事を示し始めたまふ。二三 ペテロ、イエスを傍にひき戒め出でて言
二三 ふ『主よ、*然あらざれ、此の事なんぢに起らざるべし』二三 イエス振反りてペテロに言ひ給ふ『サタンよ、我が後
二四 に退け、汝はわが躓物なり、汝は神のことを思はず、反つて人のことを思ふ』二四 爰にイエス弟子たちに言ひたま
二五 ふ『人もし我に從ひ來らんと思はば、己をすて、己が十字架を負ひて、我に從へ。二五 己が生命を救はんと思ふ者
二六 は、これを失ひ、我がために、己が生命をうしなふ者は、之を得べし。二六 人、全世界を贏くとも、己が生命を損
二七 せば、何の益あらん、又その生命の代に何を與へんや。二七 人の子は父の榮光をもて、御使たちと共に來らん。そ
二八 の時おのおのの行爲に隨ひて報ゆべし。二八 誠に汝らに告ぐ、ここに立つ者のうちに、人の子のその國をもて來る
を見るまでは、死を味はぬ者どもあり』

オ二一—二八可八・三一—九・一路九・二二、二七ク太一二・四〇、一七・九・一二、二二、二二ヤ太四・一〇を見よ　マ（西三・二）　ケ太一〇・三八を見よ　フ太一〇・三九を見よ　コ太八・二〇を見よ　エ太二四・三〇、二五・三一、二六・六四　可八・三八、一三・二六路二一・二七約二一・二二徒一・　テ詩六二・一二撒二四・一二・一一・一四・一一・二　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八路九・二八—三　ユ默一・一六　メ申三四・五—七、一　ミ王下二・一一　シ可九・五路九・三三　エ太三・一七、一七・一八　ヒ太三・一七を見よ　撒後一・七約壽二・二八默一・七　詩六二・一二撒二・六　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八路九・二八—三徒四・一四徒　撒前四・二六　撒後一・七約壽二・二八默一・七　詩六二・一二撒二・六　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八路九・二八—三徒四・一四徒　撒前一・一七默二・二　三、一一・一二、一二（西三・二四、二五）　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八　ユ默一・一六　メ申三四・五—七、一　ミ王下二・一一　シ可九・五路九・三三　エ太三・一七、一七・一八　ヒ太三・一七を見よ　撒後一・七約壽二・二八默一・七　詩六二・一二撒二・六　ア（來二・九）　サ一—八可九・二一—八路九・二八—三徒四・一四徒

第一七章

一 一六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登
二 りたまふ。二 斯て彼らの前にて其の狀かはり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白く
三 なりぬ。三 視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。四 ペテロ差出でてイエスに言ふ『主よ、我ら
四 の此處に居るは善し。御意ならば我ここに三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリ
五 ヤの爲にせん』五 彼なほ語りをるとき、視よ、光れる雲、かれらを覆ふ。また雲より聲あり、曰く『これは我が

七六 愛しむ子、わが悅ぶ者なり、汝ら之に聽け』六 弟子たち之を聞きて倒れ伏し、懼るること甚だし。七 イエスその
八 許にきたり之に觸りて『起きよ、懼るな』と言ひ給へば、八 彼ら目を擧げしに、イエス一人の他は誰も見えざり
き。

九 九 山を下るとき、イエス彼らに命じて言ひたまふ『人の子の、死人の中より甦へるまでは、見たることを誰
一〇 にも語るな』一〇 弟子たち問ひて言ふ『さらば、エリヤ先づ來るべしと學者らの言ふは何ぞ』一一 答へて言ひたまふ
一一 『實にエリヤ來りて萬の事をあらためん。一二 我なんぢらに告ぐ、エリヤは既に來れり。然れど人々これを知ら
一三 ず、反つて心のままに待へり。斯のごとく人の子もまた人々より苦しめらるべし』一三 爰に弟子たちバプテスマの
ヨハネを指して言ひ給ひしなるを悟れり。

一四 一四 かれら群衆の許に到りしとき、或人、御許にきたり跪づきて言ふ、一五『主よ、わが子を憫みたまへ。癲癇に
一五 て難み、しばしば火の中に、しばしば水の中に倒るるなり。一六 之を御弟子たちに連れ來りしに、醫すこと能はざ
一六 りき』一七 イエス答へて言ひ給ふ『ああ信なき曲れる代なるかな、我いつまで汝らと偕にをらん、何時まで汝らを
一七 忍ばん。その子を我に連れきたれ』一八 遂にイエスこれを禁め給へば、惡鬼いでてその子この時より癒えたり。一九
一八 爰に弟子たち窃にイエスに來りて言ふ『われらは何故に逐ひ出し得ざりしか』二〇 彼らに言ひ給ふ『なんぢら信仰
一九 うすき故なり。誠に汝らに告ぐ、もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に「此處より彼處に移れ」と言ふとも
二〇 移らん、斯て汝ら能はぬこと無かるべし』*〔二一〕
二一

イ 出一八・一五、一九 一八、一〇・一〇、ヘ 太一七・一二、二二 (太一六・一四) 三七—四二 ヨ 太二一・二二、二三 レ 可九・二三 約一一・四〇
往三・二二、二三 來 一八・一八 ト 太一六・二一を見よ 又 太一七・九、二二 太 チ 太四・二四 可一一・二三、二四 路一七・六
ロ 彼後一・一八 ニ 太一四・二七を見よ 八・二〇を見よ ワ (岩後一・一) 路一七・九
ハ 默一・二七 (但八・一三) ホ 九・一三 可九・九 チ 太八・四を見よ リ 太一一・二四を見よ ル 一四—一九 可九・ カ 太一三・三 路一 タ 太一七・九 (岩前一 七・九 三・二)

ソ 二二、二三 可九・三 ネ 太一六・二一を見よ 難一三・六、七 井 哥前八・一三 一・一九 路前四・一 四七
〇—三二 路九・四 ナ 出三〇・一三—一五 ウ 太五・二九、三〇、 一—三七 可九・三三 一五 路一八・一七 ケ 可一〇・ 一・一九 路前四・一 エ 太五・二二を見よ
四、四五 五、三八・二六 一八・六—九 可九・ 路九・四六 (哥前一四・二〇 彼 二三・二一、二二 三
ツ 太一七・九、一二 太 ラ 雜一三・七 四二—四七 路一七 一—四八 前一・二) 夕 可九・四二 路一七・ ケ 太一七・二七を見よ
八・二〇を見よ ム 太二二・一七—二二 ・一・二 約六・六一 ノ 詩一三一・二 太一 オ 太二〇・二六、二七、 ヤ 太一七・二七を見よ 哥前一
マ 路一七・一 哥前一 フ 太一七・二七を見よ
コ 太五・二九 可九・

二三 二三 彼らガリラヤに集ひをる時、イエス言ひたまふ『人の子は人の手に付され、二三 人々は之を殺さん、斯て
三日めに甦へるべし』弟子たち甚だ悲しめり。

二四 二四 彼らカペナウムに到りしとき、納金を集むる者ども、ペテロに來りて言ふ『なんぢらの師は納金を納めぬ
二五 か』二五 ペテロ『納む』と言ひ、頓て家に入りしに、逸速くイエス言ひ給ふ『シモンいかに思ふか、世の王たちは
二六 稅または貢を誰より取るか、己が子よりか、他の者よりか』二六 ペテロ言ふ『ほかの者より』イエス言ひ給ふ『さ
二七 れば子は自由なり。二七 されど彼らを躓かせぬ爲に、海に往きて釣をたれ、初に上る魚をとれ、其の口をひらか
ば銀貨一つを得ん、それを取りて我と汝との爲に納めよ』*

二一 **第一八章** 一 そのとき弟子たち、イエスに來りて言ふ『しからば天國にて大なるは誰か』二 イエス幼兒を呼
三 び、彼らの中に置きて言ひ給ふ、三『まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻へりて幼兒の如くならずば、
四 五 天國に入るを得じ。四 されば誰にても此の幼兒のごとく己を卑うする者は、これ天國にて大なる者なり。五 また
六 我が名のために、斯のごとき一人の幼兒を受くる者は、我を受くるなり。六 然れど我を信ずる此の小き者の一人
七 を躓かする者は、寧ろ大なる碾臼を頸に懸けられ、海の深處に沈められんかた益なり。七 この世は躓物あるにより
八 て禍害なるかな。躓物は必ず來らん、されど躓物を來らする人は禍害なるかな。八 もし汝の手、または足、なん
ぢを躓かせば、切りて棄てよ。不具または蹇跛にて生命に入るは、兩手・兩足ありて永遠の火に投げ入れらるる
九 よりも勝るなり。九 もし汝の眼、なんぢを躓かせば拔きて棄てよ。片眼にて生命に入るは、兩眼ありて火のゲヘ

一〇 ナに投げ入れらるるよりも勝るなり。一〇汝ら愼みて此の小き者の一人をも侮るな。我なんぢらに告ぐ、彼らの御
一一 使たちは天にありて、天にいます我が父の御顏を常に見るなり。〔*一一〕一二汝等いかに思ふか、百匹の羊を有てる人
一二 あらんに、若しその一匹まよはば、九十九匹を山に遺しおき、往きて迷へるものを尋ねぬか。一三もし之を見出さ
一四 ば、誠に汝らに告ぐ、迷はぬ九十九匹に勝りて此の一匹を喜ばん。一四斯のごとく此の小き者の一人の亡ぶるは、
天にいます汝らの父の御意にあらず。

一五 一五もし汝の兄弟、罪を犯さば、往きてただ彼とのみ、相對して諫めよ。もし聽かば其の兄弟を得たるなり。
一六 一六もし聽かずば一人・二人を伴ひ往け、これ二三の證人の口に由りて、凡ての事の慥められん爲なり。一七もし彼
一八 等にも聽かずば、教會に告げよ。もし教會にも聽かずば、之を異邦人または取稅人のごとき者とすべし。一八誠に
一九 汝らに告ぐ、すべて汝らが地にて*縛ぐ所は天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解くなり。一九また誠に汝らに
二〇 告ぐ、もし汝等のうち二人、何にても求むる事につき地にて心を一つにせば、天にいます我が父は之を成し給ふ
二一 べし。二〇二三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり」
二二 二一爰にペテロ御許に來りて言ふ『主よ、わが兄弟われに對して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか』
二三 二二イエス言ひたまふ『否われ「七度まで」とは言はず「七度を七十倍するまで」と言ふなり。二三この故に天國は
二四 その家來どもと計算をなさんとする王のごとし。二四計算を始めしとき一萬タラントの負債ある家來つれ來られし
二五 が、二五償ひ方なかりしかば、其の主人、この者と、その妻子と凡ての所有とを賣りて償ふことを命じたるに、

イ 例四八・一六、詩三一・四—七　ロ 王上一〇・八、路一・一九　ハ 申一九・一五、約八・一七　ニ 提前二・四　ホ 利一九・一七、路一・一二、但六・二二、徳一二・一五、來一・一四、默八・二　ヘ 申一九・一五、約八・一七、提前五・一九、來一・八　ト（哥前六・一—八）　チ（嚴速三・六、一四）　リ 太一六・一九、約二〇・二三　ヌ 太七・七を見よ　ル 太一八・一五　ヲ 路一七・四　ワ（例四・二四）　カ 太一三・二四を見よ　ヨ 太二五・一九　タ 一タラントは約二千円、王下五・五、二、三九、王下四・一三、二三・三三、帖前五・五　レ 路七・四二　ソ（出二一・二—二五）

二六 二六その家來ひれ伏し、拜して言ふ「寬くし給へ、さらば悉とく償はん」二七その家來の主人、あはれみて之を解
二八 き、その負債を免したり。二八然るに其の家來いでて、己より百デナリを負ひたる一人の同僚にあひ、之をとら
二九 へ、喉を締めて言ふ「負債を償へ」二九その同僚ひれ伏し、頭ひて「寬くし給へ、さらば償はん」と言へど、三〇
三一 肯はずして往き、その負債を償ふまで之を獄に入れたり。三一同僚ども有りし事を見て甚く悲しみ、往きて有りし
三二 凡ての事をその主人に告ぐ。三二ここに主人かれを呼び出して言ふ「惡しき家來よ、なんぢ願ひしによりて、かの
三三 負債をことごとく免せり。三三わが汝を憫みしごとく汝もまた同僚を憫むべきにあらずや」三四斯くその主人、怒
三四 りて、負債をことごとく償ふまで彼を獄卒に付せり。三五もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父も
三五 亦なんぢらに斯のごとく爲し給ふべし』

第一九章

一 一イエスこれらの言を語り終へてガリラヤを去り、ヨルダンの彼方なるユダヤの地方に來り給ひし
二 に、二大なる群衆、從ひたれば、此處にて彼らを醫し給へり。
三 三パリサイ人ら來り、イエスを試みて言ふ『何の故にかかはらず、人その妻を出すは可きか』四答へて言ひ
四 たまふ『人を造り給ひしもの、元始より之を男と女とに造り、而して、五「斯る故に人は父母を離れ、その妻に合
五 ひて、二人のもの一體となるべし」と言ひ給ひしを未だ讀まぬか。六然れば、はや二人にはあらず、一體なり。
六 この故に神の合せ給ひし者は人これを離すべからず』七彼らイエスに言ふ『さらば何故モーセは離緣狀を與へて
七 出すことを命じたるか』八彼らに言ひ給ふ『モーセは汝らの心、無情によりて妻を出すことを許したり。然れど

一五 路七・四一、一二、一四可一・一一　ウ 約一〇・四〇　ク 例一・二七、五・二　ケ 申二四・一　太五・三一　ネ デナリは約三十五錢　太二〇・二、二四、約六・七、一二、二二・一九　可六・三七、一二・ナ 徒二一・一三　太六・ム 一一—九　可一〇・二　ヤ 例二・二四　弗五・一　ラ 太六・一五　雅二・一三　ヰ 哥前六・一六、七・二　ツ 大八・二を見よ　ヤ 井 太四・二五を見よ　ノ 太四・二三を見よ　オ 太五・三一　マ 哥前六・一六、七・二

三 パリサイ人ら來り、イエスを試みて言ふ『何の故にかかはらず、人その妻を出すは可きか』四答へて言ひ
五 たまふ『人を造り給ひしもの、元始より之を男と女とに造り、而して、五「斯る故に人は父母を離れ、その妻に合
六 ひて、二人のもの一體となるべし」と言ひ給ひしを未だ讀まぬか。六然れば、はや二人にはあらず、一體なり。
七 この故に神の合せ給ひし者は人これを離すべからず』七彼らイエスに言ふ『さらば何故モーセは離緣狀を與へて
八 出すことを命じたるか』八彼らに言ひ給ふ『モーセは汝らの心、無情によりて妻を出すことを許したり。然れど

九 元始より然にはあらぬなり。九われ汝らに告ぐ、*おほよそ淫行の故ならで其の妻をいだし、他に娶る者は姦淫を
一〇 行ふなり』一〇弟子たちイエスに言ふ『人もし妻のことに於て斯のごとくば、娶らざるに如かず』一一彼らに言ひた
一二 まふ『凡ての人この言を受け容るるにはあらず、ただ授けられたる者のみなり。一二それ生れながらの閹人あり、
人に爲られたる閹人あり、また天國のために自らなりたる閹人あり、之を受け容れうる者は受け容るべし』
一三 一三爰に人々イエスの手をおきて祈り給はんことを望みて、幼兒らを連れ來りしに、弟子たち禁めたれば、
一四 一四イエス言ひたまふ『幼兒らを許せ、我に來るを止むな、天國は斯のごとき者の國なり』一五斯て手を彼らの上に
一五 おきて此處を去り給へり。
一六 一六視よ、或人みもとに來りて言ふ『師よ、われ永遠の生命をうる爲には如何なる善き事を爲すべきか』一七イ
一七 エス言ひたまふ『善き事につきて何ぞ我に問ふか、善き者は唯ひとりのみ。汝もし生命に入らんと思はば誡命を
一八 守れ』一八彼いふ『孰れを』イエス言ひたまふ『殺すなかれ』「姦淫するなかれ」「盜むなかれ」「僞證を立つる勿
一九 れ」一九「父と母とを敬へ」また「己のごとく汝の隣を愛すべし』二〇その若者いふ『我みな之を守れり、なほ何を缺
二〇 くか』二一イエス言ひたまふ『なんぢ若し全からんと思はば、往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ、さらば財
二一 寶を天に得ん。かつ來りて我に從へ』二二この言をききて若者、悲しみつつ去りぬ。大なる資産を有てる故なり。
二二 二三イエス弟子たちに言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、富める者の天國に入るは難し。二四復なんぢらに告ぐ、
二三 富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し』二五弟子たち之をきき、甚だしく驚きて言
二四

イ 太五・三二 路一六・一八 ニ 哥創七・三二、三四、九・五 ヘ 太一八・三可一〇・一四 路一八・一六 チ 一六—二九 可一〇・一七—三〇 路一八・二八—三〇 ヌ 利一八・五 尼九・ヲ 太一五・四 カ 路一二・三三、一八 タ 太一三・二二 可一〇・二四 提創六 レ 可一〇・二五 路一八・二四 ロ 哥創七・七、一七 ホ 一三—一五 可一〇・一三—一六 路一八・二五—一七 ト 太五・三を見よ 前一四・二〇 彼 ル 出二〇・一二—一六 加五・一四 雅二・八 ヨ 太六・二〇 (太七・二一) 使二二・四五、四・三七 提創六・一八・一九 リ 太二五・四六を見よ 前二・二 ヲ 利一九・一八 ワ 利一九・一八 太二二・三九 羅一三・九 ル 出二〇・二—一六 申五・二六—二〇

ソ 創一八・二四 伯四二・二一 耶三二・一七 亞八・六、二七 可一〇・三五・二一 路一四・三六 ツ 太四・二〇、二二 路四・四、一一・六、二〇・四、二二・五 ネ 太二五・三一 ナ 路二二・三〇 哥創 ム 太二〇・六、二一 ラ 可一〇・二九、三〇 路一八・二九、三〇 ウ 太一三・二四を見よ ヤ 太一八・二八を見よ ク 路八・三 ケ 太二二・二二、二六 ・五〇 ノ 太一八・二八を見よ オ 利一九・一三 ヤ 太一八・二八を見よ 井 太二一・二八、三三 マ (雅一・二一)

二六 ふ『さらば誰か救はることを得ん』二六イエス彼らに目を注めて言ひ給ふ『これは人に能はねど神は凡ての事を
二七 なし得るなり』二七爰にペテロ答へて言ふ『視よ、われら一切をすてて汝に從へり、然れば何を得べきか』二八イエ
二八 ス彼らに言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、世あらたまりて人の子その榮光の座位に坐するとき、我に從へる汝等
二九 もまた十二の座位に坐してイスラエルの十二の族を審かん。二九また凡そ我が名のために或は家、或は兄弟、ある
三〇 ひは姉妹、あるひは父、或は母、或は子、或は田畑を棄つる者は數倍を受け、また永遠の生命を嗣がん。三〇然れ
ど多くの先なる者後に、後なる者先になるべし。

第二〇章

一 一天國は勞動人を葡萄園に雇ふために、朝早く出でたる主人のごとし。二一日、一デナリの約束を
二 なして、勞動人どもを葡萄園に遣す。三また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て 四「な
三 んぢらも葡萄園に往け、相當のものを與へん」といへば、彼らも往く。五十二時頃と三時頃とに復いでて前のご
四 とくす。六五時頃また出でしに、なほ立つ者等のあるを見ていふ「何ゆゑ終日ここに空しく立つか」七かれら言
五 ふ「たれも我らを雇はぬ故なり」主人いふ「なんぢらも葡萄園に往け」八夕になりて葡萄園の主人その家司に言
六 ふ「勞動人を呼びて、後の者より始め先の者にまで賃銀をはらへ」九斯て五時ごろに雇はれしもの來りて、おの
七 おの一デナリを受く。一〇先の者きたりて、多く受くるならんと思ひしに、之も亦おのおの一デナリを受く。一一受
八 けしとき、家主にむかひ呟きて言ふ、一二「この後の者どもは僅に一時間はたらきたるに、汝は一日の勞と暑さとを
九 忍びたる我らと均しく、之を遇へり」一三主人こたへて其の一人に言ふ「友よ、我なんぢに不正をなさず、汝は我
一〇 一三

一四 と一デナリの約束をせしにあらずや。一四己が物を取りて往け、この後の者に汝とひとしく與ふるは、我が意な
一五 り。一五わが物を我が意のままに爲るは可からずや、我よきが故に汝の目あしきか」一六斯のごとく後なる者は
一六 先に、先なる者は後になるべし」

一七 一七イエス、エルサレムに上らんと爲給ふとき、窃に十二弟子を近づけて、途すがら言ひ給ふ、一八「視よ、我ら
一八 エルサレムに上る、人の子は祭司長・學者らに付されん。彼ら之を死に定め、一九また嘲弄し、鞭ち、十字架につ
一九 けん爲に異邦人に付さん、斯て彼は三日めに甦へるべし」

二〇 二〇爰にゼベダイの子らの母、その子らと共に御許にきたり、拜して何事か求めんとしたるに、二一イエス彼に
二一 言ひたまふ「何を望むか」かれ言ふ「この我が二人の子が汝の御國にて一人は汝の右に、一人は左に坐せんこと
二二 を命じ給へ」二二イエス答へて言ひ給ふ「なんぢらは求むる所を知らず、我が飲まんとする酒杯を飲み得るか」か
二三 れら言ふ「得るなり」二三イエス言ひたまふ「實に汝らは我が酒杯を飲むべし、然れど我が右左に坐することは、
二四 これ我の與ふべきものならず、我が父より備へられたる人こそ與へらるるなれ」二四十人の弟子これを聞き、二人
二五 の兄弟の事によりて憤ほる。二五イエス彼らを呼びて言ひたまふ「異邦人の君のその民を宰どり、大なる者の民の
二六 上に權を執ることは汝らの知る所なり。二六汝らの中にては然らず、汝らの中に大ならんと思ふ者は、汝らの役者
二七 となり、二七首たらんと思ふ者は汝らの僕となるべし。二八斯のごとく人の子の來れるも事へらるる爲にあらず、反
二八 つて事ふることをなし、又おほくの人の拯贖として己が生命を與へん爲なり」

イ 羅九・二一
ロ（太六・二三 可二二）
ハ 太一九・三〇を見よ
二一七—一九 可一〇
二一・三三—三四 路一八・三一—三三
ト 二〇—二八 可一〇・三五—四五
チ 太四・二一、一〇・二、二七、五六
ヌ 太一九・八・二を見よ
ル 太二六・三九、四二 可一四・三六 路二二・四一（參五一）約一八・一七、一
ヲ 路二・二一 郎四九・一二 羅八・一七 路一・七 詩
ワ 太二五・三四
カ 太二五・三四
タ 可一〇・四一 路二二・二四
レ 二五—二八 路二二
ソ 約五・三七
ツ 太二三・一一 可九・三五、一〇・四三
ネ 太一八・四 可一〇・四四
ム 太二六・二八 羅五・一五、一九 提前二・六 來九・二八 彼前一・一八
ヰ 詩三〇・一三、一五
ユ 利一・一四、五・七、一二・八
ヤ 約一・一二、一三
ケ（王下九・一三）
フ 太九・二七を見よ
コ 詩一八・二六 可
ア 可六・三五 路七・一三・三
サ 一二・六 可一二・一五
ス 路一・一八
ラ 約一二・一四
ナ 太八・二〇を見よ
ム 參六・二四 來九・二八 彼前一・一八
ウ 二九—三四 可一〇・四六—五二（太九・二七）路一一・一〇 路一九・二
八・三五—四三
井 太九・七二を見よ
ノ 太二〇・二一
オ 一—九 可一一・一
九—三八
ク 亞一四・四 太二四・
三、二六・三〇 可一一・一、一三・三、一四・二六 路一九・二九・三七、二一・三九
ヤ 四—九 約一・二・一一五
マ 賢六・二・一 亞九・九
ヘ 太二七・二 徒二・二
三、三・一三、四・
徒三・二一—二六、七・三七（太二・二一）
約八・一 徒一・一二
ヨ 太一・三・一一 路二
タ 可一〇・四一
レ 二五—二八 路二二
ソ 約五・三七
ツ 太二三・一一 可九・三五、一〇・四三
ネ 太一八・四 可一〇・四四
ム 太二六・二八 羅五・一五、一九 提前二・六 來九・二八 彼前一・一八
ヰ 詩三〇・一三、一五
ユ 利一・一四、五・七、一二・八
ヤ 約一・一二、一三
ケ（王下九・一三）
フ 太九・二七を見よ
コ 詩一八・二六 可
ア 可六・三五 路七・一三・三
サ 一二・六 可一二・一五
ス 路一・一八
ラ 約一二・一四
ナ 太八・二〇を見よ
ム 參六・二四 來九・二八 彼前一・一八

二九 二九彼らエリコを出づるとき、大なる群衆イエスに從へり。三〇視よ、二人の盲人、路の傍らに坐しをりしが、
三〇 三一イエスの過ぎ給ふことを聞き、叫びて言ふ「主よ、ダビデの子よ、我らを憫みたまへ」三一群衆かれらを禁めて默
三一 さしめんと爲たれど、愈々叫びて言ふ「主よ、ダビデの子よ、我らを憫み給へ」三二イエス立ち止り、彼らを呼び
三二 て言ひ給ふ「わが汝らに何を爲さんことを望むか」三三彼ら言ふ「主よ、目の開かれんことなり」三四イエスいたく
三三 憫みて彼らの目に觸り給へば、直ちに物見ることを得て、イエスに從へり。
三四

第二一章

一 一彼らエルサレムに近づき、オリブ山の邊なるベテパゲに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんと
二 して言ひ給ふ、二「向の村にゆけ、頓て繫ぎたる驢馬のその子とともに在るを見ん、解きて我に牽き
三 きたれ。三誰かもし汝らに何とか言はば「主の用なり」と言へ、さらば直ちに之を遣さん」四此の事の起りしは
四 預言者によりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、五「シオンの娘に告げよ、「視よ、汝の王、なんぢに來り
五 給ふ。柔和にして驢馬に乘り、軛を負ふ驢馬の子に乘りて」六弟子たち往きて、イエスの命じ給へる如くして、
六 七驢馬とその子とを牽ききたり、己が衣をその上におきたれば、イエス之に乘りたまふ。八群衆の多くはその衣
七 八を途にしき、或者は樹の枝を伐りて途に敷く。九かつ前にゆき後にしたがふ群衆よばはりて言ふ、「ダビデの子に
八 九ホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者。いと高き處にてホサナ」一〇遂にエルサレムに入り給へば、都
九 一〇 一一擧りて騒立ちて言ふ「これは誰なるぞ」一一群衆いふ「これガリラヤのナザレより出でたる預言者イエスなり」
一〇 一二イエス宮に入り、その內なる凡ての賣買する者を逐ひいだし、兩替する者の臺・鴿を賣る者の腰掛を倒し
一一

一四 て言ひ給ふこゝ|わが家は祈の家と稱へらるべし」と錄されたるに汝らは之を强盜の巢となす」一四宮にて盲人・跛
一五 者ども御許に來りたれば、之を醫したまへり・一五祭司長・學者らイエスの爲し給へる不思議なる業と宮にて呼は
一六 り「ダビデの子にホサナ」と言ひをる子等とを見、憤ほりて、一六イエスに言ふ「なんぢ彼らの言ふところを聞く
一七 か」イエス言ひ給ふ「然り「嬰兒・乳兒の口に讃美を備へ給へり」とあるを未だ讀まぬか」一七遂に彼らを離れ、
都を出でてベタニヤにゆき、其處に宿り給ふ。
一八 一八朝早く、都にかへる時イエス飢ゑたまふ。一九路の傍なる一もとの無花果の樹を見て、その下に到り給ひし
に、葉のほかに何をも見出さず、之に對ひて「今より後いつまでも果を結ばざれ」と言ひ給へば、無花果の樹た
二〇 ちどころに枯れたり・二〇弟子たち之を見、怪しみて言ふ「無花果の樹の斯く立刻に枯れたるは何ぞや」二一イエス
答へて言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、もし汝ら信仰ありて疑はずば、啻に此の無花果の樹にありし如きことを
二二 爲し得るのみならず、此の山に「移りて海に入れ」と言ふとも亦成るべし・二二かつ祈のとき何にても信じて求め
ば、ことごとく得べし」
二三 二三宮に到りて教へ給ふとき、祭司長・民の長老ら御許に來りて言ふ「何の權威をもて此等の事をなすか、誰
二四 がこの權威を授けしか」二四イエス答へて言ひたまふ「我も一言なんぢらに問はん、若し夫を告げなば、我もまた
二五 何の權威をもて此等のことを爲すかを告げん・二五ヨハネのバプテスマは何處よりぞ、天よりか、人よりか」かれ
二六 ら互に論じて言ふ「もし天よりと言はば「何故かれを信ぜざりし」と言はん・二六もし人よりと言はんか、人みな

イ 哥五六・七　ロ 耶七・一一　ハ 大四・二三を見よ　ニ 大九・二七を見よ　ホ 詩八・二
〈 太二六・六、可一二・一、一二、一三、一四・三、路一九・一四、二九、二四・五〇、約一一・一、一八、
ト 一八・二二、可一一・二一、一四、二、一九・二〇・一一八、ヌ 太七・七、雅五・一、約叡三・二二、
チ 太一七・二〇、可一
一二・一、路一七・一六、リ 哥前一三・一、雅五・一、ル 二三—二七、五・一四、可一一・二七—三三、路一七・一四、ヲ 出二・一四、路一二
一・二三、路一七・一六、雅一・六、ワ 太一一・九、一四・七・二七、往四・七、カ 太二〇・一、二一、
ヨ 路七・二九、三四、タ 路七・五〇、レ 太三・一—一二、ソ 路三・一二

ツ 三三—四六、可一二、ナ 詩八〇・八—一六、雅五・一—七、ネ 太二〇・一、二一、ム 雅五・二、ウ 太二五・一四
井 歌八・一二、一三、ノ 太二二・三、オ 代下二四・二一、三、六・一六、伊九・二、六、太五・一二、一三、ク 太二二・四
三・三四、三七、徒七・五二、撒剌二・一五、來一・三六、マ 詩二・二、三、太二六・四、二七・一、約一一・五三、徒四・二八、ケ 太二六・五〇、可一四・四六、路二二・五四、約一八・一二、徒一二・二三、フ 太二一・四三、可一一
二・九、路二〇・一六、コ 詩一一八・二二、二三、太八・一一、一二、徒一三・四六、一五、三 箴二八・一六、徒四・一一、二〇、彼前二・四—八、二四、路九・三三、七、一八・六、二八、二八、
二七 ヨハネを預言者と認むれば、我らは群衆を恐る」二七遂に答へて「知らず」と言へり。イエスもまた言ひたまふ
二八 「我も何の權威をもて此等のことを爲すか汝らに告げじ。二八なんぢら如何に思ふか、或人ふたりの子ありしが、
二九 その兄にゆきて言ふ「子よ、今日、葡萄園に往きて働け」二九答へて「主よ、我ゆかん」と言ひて終に往かず・
三〇 三〇また弟にゆきて同じやうに言ひしに、答へて「往かじ」と言ひたれど、後くいて往きたり。三一この二人のうち
三一 孰か父の意を爲しし」彼らいふ「後の者なり」イエス言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、取稅人と遊女とは汝らに
先だちて神の國に入るなり・三二それヨハネ義の道をもて來りしに、汝らは彼を信ぜず、取稅人と遊女とは信じた
三三 り・然るに汝らは之を見し後もなほ悔改めずして信ぜざりき・
三三また一つの譬を聽け、ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を堀り、櫓を建て、農夫ども
三四 に貸して遠く旅立せり・三四果期ちかづきたれば、その果を受け取らんとて僕らを農夫どもの許に遣ししに、三五農
三五 夫どもその僕らを執へて一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石にて擊てり・三六復ほかの僕らを前よりも多
三六 く遣ししに、之をも同じやうに遇へり。三七わが子は敬ふならん」と言ひて、遂にその子を遣ししに、三八農夫ども
三七 此の子を見て互に言ふ「これは世嗣なり、いざ殺して、その嗣業を取らん」三九斯て之をとらへ葡萄園の外に逐ひ
三八 出して殺せり。四〇さらば葡萄園の主人きたる時、この農夫どもに何を爲さんか」四一かれら言ふ「その惡人どもを
三九 飽くまで滅し、果期におよびて果を納むる他の農夫どもに葡萄園を貸し與ふべし」四二イエス言ひたまふ「聖書
四〇 に「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる、これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきな
四一
四二

四三 り」とあるを汝ら未だ讀まぬか。四三この故に汝らに告ぐ、汝らは神の國をとられ、其の果を結ぶ國人は、之を與
四四 へらるべし。四四この石の上に倒るる者はくだけ、又この石、人のうへに倒るれば、其の人を微塵とせん』四五祭司
四五 長・パリサイ人ら、イエスの譬をきき、己らを指して語り給へるを悟り、四六イエスを執へんと思へど群衆を恐れ
四六 たり、群衆かれを預言者とするに因る。

第二二章

一 イエスまた譬をもて答へて言ひ給ふ、二『天國は己が子のために婚筵を設くる王のごとし。三婚筵
二 に招きおきたる人々を迎へんとて僕どもを遣ししに、來るを肯はず。四復ほかの僕どもを遣すとて
三 言ふ「招きたる人々に告げよ、視よ、晝餐は既に備りたり。我が牛も肥えたる畜も屠られて、凡ての物備りたれば
四 婚筵に來れと」五然るに人々顧みずして、或者は己が畑に、或者は己が商賣に往けり。六また他の者は僕どもを
五 執へて、辱しめ、かつ殺したれば、七王、怒りて軍勢を遣し、かの兇行者を滅して、其の町を燒きたり。八斯て
六 僕どもに言ふ「婚筵は既に備りたれど、招きたる者どもは相應しからず。九然れば汝ら街に往きて遇ふほどの者
七 を婚筵に招け」一〇僕ども途に出でて善きも惡しきも遇ふほどの者をみな集めたれば、婚禮の席は客にて滿てり。
八 一一王、客を見んとて入り來り、一人の禮服を著けぬ者あるを見て、一二之に言ふ「友よ、如何なれば禮服を著けず
九 して此處に入りたるか」かれ默しゐたり。一三ここに王、侍者らに言ふ「その手足を縛りて外の暗黑に投げいだ
一〇 せ、其處にて哀哭・切齒することあらん」一四それ招かるる者は多かれど、選ばるる者は少し』

一五 爰にパリサイ人ら出でて如何してかイエスを言の羈に係けんと相議り、一六その弟子らをヘロデ黨の者ども

イ 太八・一二
ロ 黙八・一四、一五 羅
九・三三 後前二・八
ハ 但一・四四、四五
ニ 路二〇・一九
ホ 太二一・二六
ヘ 太二一・一を見よ
ト 一・一四（路一・四・一六—二四）
チ 太一三・二四を見よ
リ 默一九・七—九
ヌ 太二二・三四
ル 太二二・三六
ヲ 舟後一〇・四、五
カ 徒一三・四六（太一一・一〇・三五 默三・四）
ヨ（王下一〇、二二）詩一三二・九、一六 饗
タ 太二〇・一三、二六
レ 太八・一二を見よ
ソ 太二四・二二 彼後
一・一〇 默一七・一五、一九・八
ツ 一四・一五—二二 可一二・二一—一七 路二〇・二〇—二六
ネ 可三・六、一二・一三（可八・一五）

と共に遣して言はしむ『師よ、我らは知る、なんぢは眞にして眞をもて神の道を敎へ、かつ誰をも憚りたまふ事
一七 なし、人の外貌を見給はぬ故なり。一七されば我らに告げたまへ、貢をカイザルに納むるは可きか、惡しきか、如
一八 何に思ひたまふ』一八イエスその邪曲なるを知りて言ひたまふ『僞善者よ、なんぞ我を試むるか。一九貢の金を我に
二〇 見せよ』彼らデナリ一つを持ち來る。二〇イエス言ひ給ふ『これは誰の像、たれの號なるか』二一彼ら言ふ『カイザ
二一 ルのなり』ここに彼らに言ひ給ふ『さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』二二彼ら之を聞きて
二二 怪しみ、イエスを離れて去り往けり。

二三 復活なしといふサドカイ人ら、その日、みもとに來り問ひて言ふ、二四『師よ、モーセは「人もし子なくして
二四 死なば、其の兄弟かれの妻を娶りて兄弟のために世嗣を擧ぐべし」と云へり。二五我らの中に七人の兄弟ありし
二五 が、兄めとりて死に、世嗣なくして其の妻を弟に遺したり。二六その二、その三より、その七まで皆かくの如く爲
二六 し、二七最後にその女も死にたり。二八されば復活の時その女は七人のうち誰の妻たるべきか、彼ら皆これを妻とし
二七 たればなり』二九イエス答へて言ひ給ふ『なんぢら聖書をも神の能力をも知らぬ故に誤れり。三〇それ人よみがへり
二八 の時は娶らず、嫁がず、天に在る御使たちの如し。三一死人の復活に就きては神なんぢらに告げて、三二「我はアブラ
二九 ハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と言ひ給へることを未だ讀まぬか。神は死にたる者の神にあらず、生
三〇 ける者の神なり』三三群衆これを聞きて其の敎に驚けり。
三一 三四パリサイ人ら、イエスのサドカイ人らを默さしめ給ひしことを聞きて相集り、三五その中なる一人の敎法

ナ 太一七・二五
ラ 路二・一、三・一 約一・一九、二、一五
ム 太九・四
ウ 太一七・二五
ノ 可一二・一七 路二〇・二五 羅一三・七
ヤ 太三・七を見よ
マ 申二五・五、六
ケ（約二〇・九）
ク 二三—三三 可一二
ヒ 二八—二七 路二〇・二七—四〇
ス 太三・七を見よ
エ 約豊三・二
テ 出三・六、一六 徒七・三二
ア 太七・二八を見よ
サ 三四—四〇 可一二 二八—三二（路一〇・二五—二八）
ユ 路七・三〇、一〇・二五、一一・四五、四六、五二、一四・三 多三・一三
キ 太三・七を見よ
ヲ 多前八・二四
コ（太二四・三八 路一七・二七）
エ 約豊三・二
デ 出三・六、一六 徒七・三二
ア 太七・二八を見よ
サ 三四—四〇 可一二 二八—三二（路一〇・二五—二八）
ユ 路七・三〇、一〇・二五、一一・四五、四六、五二、一四・三 多三・一三

三七 師、イエスを試むる爲に問ふ、三六『師よ、律法のうち孰の誡命か大なる』三七イエス言ひ給ふ『なんぢ心を盡し、精
三八 神を盡し、思を盡して主なる汝の神を愛すべし』三八これは大にして第一の誡命なり。三九第二もまた之にひとし
四〇 「おのれの如く、なんぢの隣を愛すべし」四〇律法全體と預言者とは此の二つの誡命に據るなり』
四一 四一パリサイ人らの集りたる時、イエス彼らに問ひて言ひ給ふ、四二『なんぢらはキリストに就きて如何に思ふ
四二 か、誰の子なるか』かれら言ふ『ダビデの子なり』四三イエス言ひ給ふ『さらばダビデ御靈に感じて何故かれを主
四三 と稱ふるか。曰く四四「主、わが主に言ひ給ふ、われ汝の敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」四五斯く
四四 ダビデ彼を主と稱ふれば、爭でその子ならんや』四六誰も一言だに答ふること能はず、その日より敢て復イエスに
四五 問ふ者なかりき。
四六

第二三章

二 一爰にイエス群衆と弟子たちとに語りて言ひ給ふ、二『學者とパリサイ人とはモーセの座を占む。
三 三されば凡てその言ふ所は、守りて行へ、されど、その所作には效ふな、彼らは言ふのみにて行は
四 ぬなり。四また重き荷を括りて人の肩にのせ、己は指にて之を動かさんともせず。五凡てその所作は人に見られ
五 ん爲にするなり。即ちその經札を幅ひろくし、衣の總を大くし、六饗宴の上席、會堂の上座、七市場にての敬
六 禮、また人にラビと呼ばるることを好む。八されど汝らはラビの稱を受くな、汝らの師は一人にして、汝等はみ
七 な兄弟なり。九地にある者を父と呼ぶな、汝らの父は一人、すなはち天に在す者なり。一〇また導師の稱を受く
八 な、汝らの導師はひとり、即ちキリストなり。一一汝等のうち大なる者は、汝らの役者とならん。一二凡そおのれを
九 高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり。
一〇
一三 一三禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、なんぢらは人の前に天國を閉して、自ら入らず、入らんと
一四 する人の入るをも許さぬなり。*〔一四 なし〕一五禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得
一五 んために海陸を經めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子となすなり。
一六 一六禍害なるかな、盲目なる手引よ、なんぢらは言ふ「人もし宮を指して誓はば事なし、宮の黃金を指して誓
一七 はば果さざるべからず」と。一七愚にして盲目なる者よ、黃金と黃金を聖ならしむる宮とは孰か貴き。一八なんぢら
一八 又いふ「人もし祭壇を指して誓はば事なし、其の上の供物を指して誓はば果さざるべからず」と。一九盲目なる者
一九 よ、供物と供物を聖ならしむる祭壇とは孰か貴き。二〇されば祭壇を指して誓ふ者は、祭壇とその上の凡ての物と
二〇 を指して誓ふなり。二一宮を指して誓ふ者は、宮とその内に住みたまふ者とを指して誓ふなり。二二また天を指して
二一 誓ふ者は、神の御座とその上に坐したまふ者とを指して誓ふなり。
二二 二三禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは薄荷・蒔蘿・クミンの十分の一を納めて、律法の中
二三 にて尤も重き公平と憐憫と忠信とを等閑にす。然れど之は行ふべきものなり、而して彼もまた等閑にすべきもの
二四 ならず。二四盲目なる手引よ、汝らは蚋を漉し出して駱駝を呑むなり。
二五 二五禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは酒杯と皿との外を潔くす、然れど內は貪慾と放縱と

二六 にて滿つるなり。二六盲目なるパリサイ人よ、汝まづ酒杯の内を潔めよ、然らば外も潔くなるべし。
二七 二七禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども内
二八 は死人の骨とさまざまの穢とにて滿つ。二八斯のごとく汝らも外は人に正しく見ゆれども、内は僞善と不法とにて
滿つるなり。
二九 二九禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ、三〇「我ら
三一 もし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに與せざりしものを」と。三一かく汝らは預言者を殺しし者
三二 の子たるを自ら證す。三二なんぢら己が先祖の桝目を充せ。三三蛇よ、蝮の裔よ、なんぢら爭でゲヘナの刑罰を避け
三四 得んや。三四この故に視よ、我なんぢらに預言者・智者・學者らを遣さんに、其の中の或者を殺し、十字架につ
三五 け、或者を汝らの會堂にて鞭ち、町より町に逐ひ苦しめん。三五之によりて義人アベルの血より、聖所と祭壇との
三六 間にて汝らが殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上にて流したる正しき血は、皆なんぢらに報い來
三七 らん。三六誠に汝らに告ぐ、これらの事はみな今の代に報い來るべし。
三七 ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて擊つ者よ、牝雞のその雛を翼
三八 の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんと爲しこと幾度ぞや、然れど汝らは好まざりき。三八視よ、汝ら
三九 の家は廢てられて汝らに遺らん。三九われ汝らに告ぐ「讃むべきかな、主の名によりて來る者」と、汝等のいふ時
の至るまでは、今より我を見ざるべし』

第二四章

一 一イエス宮を出でてゆき給ふとき、弟子たち宮の建造物を示さんとて御許に來りしに、二答へて言
ひ給ふ『なんぢら此の一切の物を見ぬか。誠に汝らに告ぐ、此處に一つの石も崩されずしては石の
上に遺らじ』

三 三オリブ山に坐し給ひしとき、弟子たち窃に御許に來りて言ふ『われらに告げ給へ、これらの事は何時ある
四 か、又なんぢの來り給ふと世の終とには、何の兆あるか』四イエス答へて言ひ給ふ『なんぢら人に惑されぬやう
五 に心せよ。五多くの者わが名を冒し來り「我はキリストなり」と言ひて多くの人を惑さん。六又なんぢら戰爭と
六 戰爭の噂とを聞かん、慎みて懼るな。斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。七即ち「民は民に、國
七 は國に逆ひて起たん」また處々に饑饉と地震とあらん、八此等はみな産の苦難の始なり。九そのとき人々なんぢ
八 らを患難に付し、また殺さん。汝等わが名の爲に、もろもろの國人に憎まれん。一〇その時おほくの人つまづき、
九 且たがひに付し、互に憎まん。一一多くの僞預言者おこりて多くの人を惑さん。一二また不法の增すによりて多くの
一〇 人の愛、冷かにならん。一三然れど終まで耐へしのぶ者は救はるべし。一四御國のこの福音は、もろもろの國人に證
一一 をなさんため全世界に宣傳へられん、而して後、終は至るべし。
一二 一五なんぢら預言者ダニエルによりて言はれたる「荒す惡むべき者」の聖なる處に立つを見ば（讀む者さとれ）
一三 一六その時ユダヤに居る者どもは山に遁れよ。一七屋の上に居る者はその家の物を取り出さんとて下るな。一八畑に
一四 をる者は上衣を取らんとて歸るな。一九その日には孕りたる者と乳を哺する者とは禍害なるかな。二〇汝らの遁ぐる

二一 ことの冬または安息日に起らぬやうに祈れ。二一そのとき大なる患難あらん、世の創より今に至るまで斯る患難は
二二 なく、また後にも無からん。二二その日もし少くせられずば、一人だに救はるる者なからん、されど選民の爲にそ
二三 の日少くせらるべし。二三その時あるひは「視よ、キリスト此處にあり」と言ふ者ありとも信
二四 ずな。二四僞キリスト・僞預言者おこりて大なる徴と不思議とを現はし、爲し得べくば選民をも惑はさんと爲るな
二五 二六 り。二五視よ、預じめ之を汝らに告げおくなり。二六されば人もし汝らに「視よ、彼は荒野にあり」といふとも出で
二七 往くな「視よ、彼は部屋にあり」と言ふとも信ずな。二七電光の東より出でて西にまで閃きわたる如く、人の子の
二八 來るも亦然らん。二八それ死骸のある處には鷲あつまらん。
二九 二九これらの日の患難ののち直ちに日は暗く、月は光を發たず、星は空より隕ち、天の萬象、ふるひ動かん。
三〇 三〇そのとき人の子の兆、天に現はれん。そのとき地上の諸族みな嘆き、かつ人の子の能力と大なる榮光とをもて
三一 天の雲に乘り來るを見ん。三一また彼は使たちを大なるラッパの聲とともに遣さん。使たちは天の此の極より彼の
極まで四方より選民を集めん。

三二 三三 無花果の樹よりの譬をまなべ、その枝すでに柔かくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。三三斯のごとく汝ら
三四 も此等のすべての事を見ば人の子すでに近づきて門邊に到るを知れ。三四誠に汝らに告ぐ、これらの事ことごとく
三五 三六 成るまで、今の代は過ぎ往くまじ。三五天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ往くことなし。三六その日その時を

イ 但一二一一 耳二一・ ニ 太七・一五を見よ ヌ 伯三九・三〇 結三三 三・一五 麼五・二 五 (出一九・一六 二三、二三・三六)
二 太二四・二九 ホ 約四・四八を見よ 九・一七 路一七・ 〇、八・九 番一・一 ヨ 太二四・三を見よ 來一二・一九) ラ 可一三・二一 路二一
ヘ 默七・一四 默一三・一二) 三七 五 徒二・二〇 獸 タ 太一三・四一 默七・一 ソ 申四・三二 默七・一 彼後三・
ロ 太二四・二四、三一 ト 太二四・二二を見よ ル 太二四・二一 ヲ 賢一三・一〇、二四 六・一二、八・一二 レ 賢二七・一三 强九 ツ 太二四・二二を見よ 一〇(太五・一八)
(太二二・一四) 路一七・二四 チ 十八・二〇を見よ 一八・七を見よ 一三・一〇、二四 ワ 賢三四・四 默六・ 一三 結三二・七 ネ 可一三・二九 雅五 ム 可一三・二二 (徒一
八 路一七・二三 リ 太二四・三を見よ 耳二・一〇、三一、 二 撒前四・一六 默八・二、一一・一 默三・二〇 ナ 太一六・二八(一〇・ ・七)

ウ 創六・五、七・六— 三六 哥創一六・一 フ 太二四・三を見よ 默一九・七—一〇、 二二、二三・三六)
二三 路一七・二六 ク 路一七・三五 三 彼前五・八 コ 四五—五一 路一 ア 太七・二四、一〇・ 二一・二一 ヨ 太七・二四、 一〇・
ヤ 太二四・四三、四四、 マ 路一二・三九 可一 二一・四一四六 一六、二四・四五、 メ 約一八・三 徒二〇 一八、默四・五、八・
井 太二四・三を見よ 二五・一〇、一三 可 三・三五 默三・三 エ 太二五・一一、二三 サ (袋伏三・四) 一〇 シ 太七・二六、二七、 二五・三—九
ノ (太二二・一〇) 一三・三五 路一一 默三・二 テ 太二五・二一、二三 キ 太八・一二を見よ ミ 弗五・二三—三〇 二二・一一 路一二 ヒ 撒前五・六
オ 太二四・三を見よ 三七、四〇、二一・ ケ 太二四・四二を見よ

知る者なし、天の使たちも知らず子も知らず、ただ父のみ知り給ふ。三七ノアの時のごとく人の子の來るも然ある
三八 三九 べし。三八蓋て洪水の前ノア方舟に入る日までは、人々飲み食ひ、娶り嫁がせなどし、三九洪水の來りて悉く滅す
四〇 までは知らざりき、人の子の來るも然あるべし。四〇その時ふたりの男、畑にをらんに、一人は取られ、一人は遺
四一 四二 されん。四一二人の女、磨碾きをらんに、一人は取られ、一人は遺されん。四二されば目を覺しをれ、汝らの主のき
四三 たるは、何れの日なるかを知らざればなり。四三汝等これを知れ、家主もし盜人いづれの時きたるかを知らば、目
四四 四五 をさまし居て、その家を穿たすまじ。四四この故に汝らも備へをれ、人の子は思はぬ時に來ればなり。四五主人が時
四六 に及びて食物を與へさする爲に、家の者のうへに立てたる忠實にして慧き僕は誰なるか。四六主人のきたる時かく
四七 四八 爲し居るを見らるる僕は幸福なり。四七誠に汝らに告ぐ、主人すべての所有を彼に掌どらすべし。四八若しその僕、
四九 五〇 惡しくして心のうちに主人は遲しと思ひて、四九その同輩を扑きはじめ、酒徒らと飲食を共にせば、五〇その僕の
五一 主人おもはぬ日しらぬ時に來りて、五一之を烈しく笞ち、その報を僞善者と同じうせん。其處にて哀哭・切齒する
ことあらん。

第二五章

一 一このとき天國は燈火を執りて、新郎を迎へに出づる十人の處女に比ふべし。二その中の五人は愚
二 三 にして五人は慧し。三愚なる者は燈火をとりて油を携へず、四慧きものは油を器に入れて燈火とと
五 六 もに携へたり。五新郎、遲かりしかば、皆まどろみて寢ぬ。六夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎へよ」と呼は
七 八 る聲す。七ここに處女みな起きてその燈火を整へたるに、八愚なる者は慧きものに言ふ「なんぢらの油を分けあ

九 たへよ、我らの燈火きゆるなり」九 慧きもの答へて言ふ「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ賣るものに往
一〇 きて己がために買へ」一〇 彼ら買はんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備へをりし者どもは彼とともに婚筵に
一一 いり、而して門は閉されたり。一一 その後かの他の處女ども來りて「主よ、主よ、われらの爲にひらき給へ」と言
一二 ひしに、一二 答へて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言へり。一三 されば目を覺しをれ、汝らは其の日
その時を知らざるなり。

一四 一四 また或人とほく旅立せんとして其の僕どもを呼び、之に己が所有を預くるが如し。一五 各人の能力に應じて
一六 或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントを與へ置きて旅立せり。一六 五タラントを受けし
一七 者は、直ちに往き、之をはたらかせて他に五タラントを贏け、一七 二タラントを受けし者も同じく他に二タラント
一八 を贏く。一八 然るに一タラントを受けし者は、往きて地を堀り、その主人の銀をかくし置けり。一九 久しうして後こ
二〇 の僕どもの主人きたりて、彼らと計算したるに、二〇 五タラントを受けし者は他に五タラントを持ちきたりて言
二一 ふ、「主よ、なんぢ我に五タラントを預けたりしが、視よ、他に五タラントを贏けたり」二一 主人いふ「宜いかな、
善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌どらせん、汝の主人の歡喜に入れ」
二二 二タラントを受けし者も來りて言ふ「主よ、なんぢ我に二タラントを預けたりしが、視よ、他に二タラントを
二三 贏けたり」二三 主人いふ「宜いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌ど

イ 箴五五・一　ロ（ルカ二四・四二—四四）　ハ（路一二・三五—四〇）　ニ 路一三・二五（太七二二）　ホ 詩五・五 哈一・一三　ヘ 太二四・四二—四四　ト（路一九・二一—二二）　チ 太二一・三三　リ 羅一二・六 箴四・一　ヌ 太一・一六・二九　ル 太二一・三三　ヲ 太二五・一五を見よ　ワ 箴五・一六 箴四・一〇—一二　カ 傳二六・一五（彼前一・一九）　ヨ 太一八・二三 羅一四・一〇—一二 哥傳五・一〇　レ 路一六・一〇—一二 哥前四・二　ソ 太二四・四七、二五 彼前一・八 傳五・一〇 箴三四・四六 路一二 傳二・一〇 哥前四・二　ツ 詩一六・一一 番三・一七 約一五・一〇・一一 來一二・二　ネ 太二四・四五—四七、二五・二一　ナ 馬一・二三 太二〇 ニ・一一、一二（約豐五・二三）　ラ 太二二・一二、一三、二四・四八、四九　ム 太一三・一二を見よ　ウ 太八・一二を見よ　井 太八・一二を見よ　ノ 太一六・二七を見よ　オ 太一九・二八　ク（箴三四・一七）　ヤ 太二五・四〇 路九・三八 默一七・一　マ 太一三・三五 路四・一九・一六　ケ 太五・三 路一二・三　哥前六・九、一　ヒ 太八・一二を見よ　コ 創一九・一—三 伯三・三二 羅一二　ア 提後一・一六、一七　來一三・三　ヤ 詩一九・七 太一〇・四二 來六・一〇　ム 太一三・一二を見よ　ウ 太八・一二を見よ　井 太八・一二を見よ　ノ 太一六・二七を見よ　オ 太一九・二八　ク（箴三四・一七）　ヤ 太二五・四〇 路九・三八 默一七・一　マ 太一三・三五 路四・一九・一六　ケ 太五・三 路一二・三　哥前六・九、一　ヒ 太八・一二を見よ　コ 創一九・一—三 伯三・三二 羅一二　ア 提後一・一六、一七　來一三・三　ヤ 詩一九・七 太一〇・四二 來六・一〇

二四 らせん、汝の主人の歡喜にいれ」二四 また一タラントを受けし者もきたりて言ふ「主よ、我はなんぢの嚴しき人に
二五 て、播かぬ處より刈り、散らさぬ處より斂むることを知るゆゑに、二五 懼れてゆき、汝のタラントを地に藏しおけ
二六 り。視よ、汝はなんぢの物を得たり」二六 主人こたへて言ふ「惡しく、かつ惰れる僕、わが播かぬ處より刈り、散
二七 らさぬ處より斂むることを知るか。二七 さらば我が銀を銀行にあづけ置くべかりしなり、我きたりて利子とともに
二八 我が物をうけ取りしものを。二八 然れば彼のタラントを取りて十タラントを有てる人に與へよ。二九 すべて有てる人
二九 は、與へられて愈々豐ならん。然れど有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし。三〇 而して此の無益なる僕を外
三〇 の暗黑に逐ひいだせ、其處にて哀哭・切齒することあらん」

三一 三一 人の子その榮光をもて、もろもろの御使を率ゐきたる時、その榮光の座位に坐せん。三二 斯て、その前にも
三二 ろもろの國人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、三三 羊をその右に、山羊をその左
三三 におかん。三四 爰に王その右にをる者どもに言はん「わが父に祝せられたる者よ、來りて世の創より汝等のために
三四 備へられたる國を嗣げ。三五 なんぢら我が飢ゑしときに食はせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、
三五 裸なりしときに衣せ、病みしときに訪ひ、獄に在りしときに來りたればなり」三六 爰に正しき者ら答へて言はん
三六 「主よ、何時なんぢの飢ゑしを見て食はせ、渴きしを見て飲ませし。三七 何時なんぢの旅人なりしを見て宿らせ、
三七 裸なりしを見て衣せし。三八 何時なんぢの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」三九 王こたへて言はん「ま
三八 ことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小き者の一人になしたるは、即ち我に爲したるなり」四〇 斯てまた左

にをる者どもに言はん『詛はれたる者よ、我を離れて惡魔とその使らとのために備へられたる永久の火に入れ。
四二 四三 四二なんぢら我が飢ゑしときに食はせず、渇きしときに飲ませず、四三旅人なりしときに宿らせず、裸なりしときに
四四 衣せず、病みまた獄に在りしときに訪はざればなり』四四爰に彼らも答へて言はん『主よ、いつ汝の飢ゑ、或は渇
四五 き、或は旅人、あるひは裸、あるひは病み、或は獄に在りしを見て事へざりし』四五ここに王こたへて言はん『誠
四六 になんぢらに告ぐ、此等のいと小きものの一人に爲さざりしは、即ち我になさざりしなり』と。四六斯て、これら
の者は去りて永遠の刑罰にいり、正しき者は永遠の生命に入らん』

第二十六章

一 二 一イエスこれらの言をみな語りをへて、弟子たちに言ひ給ふ、二『なんぢらの知るごとく、二日の後
三 は、過越の祭なり、人の子は十字架につけられん爲に賣らるべし』三そのとき祭司長・民の長老
四 五 ら、カヤパといふ大祭司の中庭に集り、四詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さんと相議りたれど、五又いふ『ま
つりの間は爲すべからず、恐らくは民の中に亂起らん』
六 七 六イエス、ベタニヤにて癩病人シモンの家に居給ふ時、七ある女、石膏の壺に入りたる貴き香油を持ちて、
八 近づき來り食事の席に就き居給ふイエスの首に注げり。八弟子たち之を見て憤ほり言ふ『何故かく濫なる費を爲
九 一〇 すか。九之を多くの金に賣りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』一〇イエス之を知りて言ひたまふ『何ぞ
一一 一二 この女を惱すか、我に善き事をなせるなり。一一貧しき者は常に汝らと偕にをれど、我は常に偕に居らず。一二この

イ太七・二三　二九 徒二四・一五）　四八 羅二・七、五　約一一・五五、一二　四、二八 徒四・六　ワ太一二・一四を見よ　レ申一五・一一 可一
ロ太四・一〇 默一二　ヘ太一九・二九 約三　・二一、六・二三 加　・一、一三・一　チ太二六・五八、六九　カ太二七・二四　四・七 約一二・八
・九　・一五、一六、三六、　六・八 約壹五・一　リ太一〇・四を見よ　可一四・五四、六六、　ヨ六―一三 可一四・
ハ可九・四三、四八 路　四・一四、五・二四、　一等　ヌ約一一・四七　一五・一六 路一一　三―九（約一二・一
一六・二四 猶七　六・二七、四〇、四　ト二―五 可一四・一、　ル太二六・五七 路三・　・二一、二二・五五　―八 路七・三七―
ニ默一二・七　七、五四、一七・二、　二 路二二・一、二　二 約一一・四九、　約一八・一五（太二　三九）
ホ（但一二・二 約五・　三 徒一三・四六、　チ田一二・一一四　一八・一三、一四、二　七・二七）　タ太二一・一七を見よ

ソ約一九・四〇を見よ　三 約六・七一、一　二・七一一三　ク約一三・二六（約一　二二、二三 哥前一　コ二六―二九 可一　ア太二〇・二八を見よ
ツ可一四・九　二・四、一三・二六　ウ出一二・一八―二〇　三・一八）　五・三 彼前一・一　四・二二―二五 路
ネ一四―一六 可一四　徒一・一六　井（約七・六、八）　ヤ太二六・三一、五四、　〇、一一　二二・一七―二〇
・一〇、一一 路二二　ラ（亞二一・一二 出　ノ二〇―二四 可一　五六 可九・一二　マ可一四・二一　五 哥前一一・二三―二
・三―六　二一・三二）　四・一七―二一　路二四・二五―二　ケ太二三・七を見よ
ナ太一〇・四、　二六・　ム一七―一九 可一　オ路二二・二一―二三　七、四六、四七 徒　フ太二六・六四、二七　エ太一四・一九を見よ
二五、四七、　二七・　四・一二―一六 路　約一三・二一―三〇　一七・二、三、　二六・　・二一 路二二・七〇　テ（來九・二〇）

一三 女の我が體に香油を注ぎしは、わが葬りの備をなせるなり。一三誠に汝らに告ぐ、全世界、何處にてもこの福音の
宣傳へらるる處には、この女のなし事も、記念として語らるべし』
一四 一五 一四ここに十二弟子の一人イスカリオテのユダといふ者、祭司長らの許にゆきて言ふ、一五『なんぢらに彼を付さ
一六 ば、何ほど我に與へんとするか』彼ら※銀三十を量り出せり。一六ユダこの時よりイエスを付さんと好き機を窺ふ。
一七 一七除酵祭の初の日、弟子たちイエスに來りて言ふ『過越の食をなし給ふために何處に我らが備ふる事を望み
一八 給ふか』一八イエス言ひたまふ『都にゆき、某のもとに到りて「師いふ、わが時近づけり。われ弟子たちと共に過
一九 二〇 越を汝の家にて守らん」と言へ』一九弟子たちイエスの命じ給ひし如くして、過越の備をなせり。二〇日暮れて十二
二一 二二 弟子とともに席に就きて、二一食するとき言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、汝らの中の一人、われを賣らん』二二弟
二三 子たち甚く憂ひて、おのおの『主よ、我なるか』と言ひいでしに、二三答へて言ひたまふ『我とともに手を鉢に入
二四 るる者われを賣らん。二四人の子は己に就きて錄されたる如く逝くなり。されど人の子を賣る者は禍害なるかな、
二五 その人は生れざりし方よかりしものを』二五イエスを賣るユダ答へて言ふ『ラビ、我なるか』イエス言ひ給ふ『な
二六 んぢの言へる如し』二六彼ら食しをる時イエス、パンをとり、祝してさき、弟子たちに與へて言ひ給ふ『取りて食
二七 二八 へ、これは我が體なり』二七また酒杯をとりて謝し、彼らに與へて言ひ給ふ『なんぢら皆この酒杯より飲め。二八こ
二九 れは契約のわが血なり、多くの人のために罪の赦を得させんとて、流す所のものなり。二九われ汝らに告ぐ、わが

父の國にて新しきものを汝らと共に飲む日までは、われ今より後この葡萄の果より成るものを飲まじ』

三〇 彼ら讃美を歌ひて後オリブ山に出でゆく。

三一 ここにイエス弟子たちに言ひ給ふ『今宵なんぢら皆われに就きて躓かん「われ牧羊者を打たん、さらば群

三二 の羊散るべし」と錄されたるなり。三三 されど我よみがへりて後、なんぢらに先立ちてガリラヤに往かん』三四 ペテ

三三 ロ答へて言ふ『假令みな汝に就きて躓くとも我はいつまでも躓かじ』三五 イエス言ひ給ふ『まことに汝に告ぐ、

三四 今宵、鷄鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし』三六 ペテロ言ふ『我なんぢと共に死ぬべき事ありとも汝を否ま

三五 ず』弟子たち皆かく言へり。

三六 爰にイエス彼らと共にゲツセマネといふ處にいたりて、弟子たちに言ひ給ふ『わが彼處にゆきて祈る間、

三七 なんぢら此處に坐せよ』三八 斯てペテロとゼベダイの子二人とを伴ひゆき、憂ひ悲しみ出でて言ひ給ふ、三九『わが

三八 心いたく憂ひて死ぬばかりなり。汝ら此處に止まりて我と共に目を覺しをれ』三九 少し進みゆきて、平伏し祈りて

三九 言ひ給ふ『わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意の儘にとにはあらず、御意

四〇 のままに爲し給へ』四〇 弟子たちの許にきたり、その眠れるを見てペテロに言ひ給ふ『なんぢら斯く一時も我と共

四一 に目を覺し居ること能はぬか。四一 誘惑に陷らぬやう目を覺し、かつ祈れ。實に心は熱すれども肉體よわきなり』

四二 四二 また二度ゆき祈りて言ひ給ふ『わが父よ、この酒杯もし我飲までは過ぎ去りがたくば、御意のままに成し給

四三 へ』四三 復きたりて彼らの眠れるを見たまふ、是その目疲れたるなり。四四 また離れゆきて三たび同じ言にて祈り給

四四 ふ。四五 而して弟子たちの許に來りて言ひ給ふ『今は眠りて休め。視よ、時近づけり、人の子は罪人らの手に付さ

四五 るるなり。四六 起きよ、我ら往くべし。視よ、我を賣るもの近づけり』

四六 四七 なほ語り給ふほどに、視よ、十二弟子の一人なるユダ來る、祭司長・民の長老らより遣されたる大なる群

四七 衆、劍と棒とをもちて之に伴ふ。四八 イエスを賣るもの預じめ合圖を示して言ふ『わが接吻する者はそれなり、之

四八 を捕へよ』四九 かくて直ちにイエスに近づき『ラビ、安かれ』といひて接吻したれば、五〇 イエス言ひたまふ『友よ*

四九 何とて來る』このとき人々すすみてイエスに手をかけて捕ふ。五一 視よ、イエスと偕にありし者のひとり手をの

五〇 べ、劍を拔きて、大祭司の僕をうちて、その耳を切り落せり。五二 ここにイエス彼に言ひ給ふ『なんぢの劍をもと

五一 に收めよ、すべて劍をとる者は劍にて亡ぶるなり。五三 我わが父に請ひて十二軍に餘る御使を今あたへらるること

五二 能はずと思ふか。五四 もし然せば斯くあるべく錄したる聖書はいかで成就すべき』五五 この時イエス群衆に言ひ給ふ

五三 『なんぢら强盜に向ふごとく劍と棒とをもち、我を捕へんとて出で來るか。我は日々宮に坐して教へたりしに、

五四 汝ら我を捕へざりき。五六 されど斯の如くなるは、みな預言者たちの書の成就せん爲なり』爰に弟子たち皆イエス

五五 を棄てて逃げさりぬ。

五六 五七 イエスを捕へたる者ども、學者・長老らの集り居る大祭司カヤパの許に曳きゆく。五八 ペテロ遠く離れイエ

五七 スに從ひて大祭司の中庭まで到り、その成行を見んとて、そこに入り下役どもと共に坐せり。五九 祭司長らと全議

五八 會と、イエスを死に定めんとて、僞りの證據を求めたるに、六〇 多くの僞證者いでたれども得ず。後に二人の者い

六一 で言ふ、六二『この人は「われ神の宮を毀ち三日にて建て得べし」と云へり』六三大祭司たちてイエスに言ふ『この
六二 人々が汝に對して立つる證據に何をも答へぬか』六三されどイエス默し居給ひたれば、大祭司いふ『われ汝に命
六四 ず、活ける神に誓ひて我らに告げよ、汝はキリスト、神の子なるか』六四イエス言ひ給ふ『なんぢの言へる如し。
六五 かつ我なんぢらに告ぐ、今より後、なんぢら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲に乗りて來るを見ん』六五ここ
に大祭司おのが衣を裂きて言ふ『かれ瀆言をいへり、何ぞ他に證人を求めん。視よ、なんぢら今この瀆言をきけ
六六 り。六六いかに思ふか』答へて言ふ『かれは死に當れり』六七ここに彼等その御顏に唾し拳にて搏ち、或る者どもは
六八 手掌にて批きて言ふ、六八『キリストよ、我らに預言せよ、汝をうちし者は誰なるか』
六九 六九ペテロ外にて中庭に坐しゐたるに、一人の婢女きたりて言ふ『なんぢも、ガリラヤ人イエスと偕にゐた
七〇 り』七〇かれ凡ての人の前に肯はずして言ふ『われは汝の言ふことを知らず』七一かくて門まで出で往きたるとき他
七一 の婢女かれを見て、其處にをる者どもに向ひて『この人はナザレ人イエスと偕にゐたり』と言へるに、七二重ねて
七三 肯はず契ひて『我はその人を知らず』といふ。七三暫くして其處に立つ者ども近づきてペテロに言ふ『なんぢも慥
七四 にかの黨與なり、汝の國訛なんぢを表せり』七四爰にペテロ盟ひ、かつ契ひて『我その人を知らず』と言ひ出づる
七五 をりしも、鷄鳴きぬ。七五ペテロ『にはとり鳴く前に、なんぢ三度われを否まん』とイエスの言ひ給ひし御言を思
ひ出し、外に出でて甚く泣けり。

第二七章

一 夜明になりて凡ての祭司長・民の長老ら、一イエスを殺さんと相議り、二遂に之を縛り、曳きゆき
て總督ピラトに付せり。
三 三爰にイエスを賣りしユダ、その死に定められ給ひしを見て悔い、祭司長・長老らに、かの三十の銀をかへ
四五 して言ふ、四『われ罪なきの血を賣りて罪を犯したり』彼らいふ『われら何ぞ干らん、汝みづから當るべし』五彼
六 その銀を聖所に投げすてて去り、ゆきて自ら縊れたり。六祭司長ら、その銀をとりて言ふ『これは血の價なれば
七八 宮の庫に納むるは可からず』七斯て相議り、その銀をもて陶工の畑を買ひ、旅人らの墓地とせり。八之によりて
九 其の畑は、今に至るまで血の畑と稱へらる。九ここに預言者エレミヤによりて云はれたる言は成就したり。曰く
一〇 『かくて彼ら値積られしもの、即ちイスラエルの子らが値積りし者の價の銀三十をとりて、一〇陶工の畑の代に之
を與へたり。主の我に命じ給ひし如し』
一一 一一さてイエス、總督の前に立ち給ひしに、總督、問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』イエス言ひ給
一二 ふ『なんぢの言ふが如し』一二祭司長・長老ら訴ふれども、何をも答へ給はず。一三爰にピラト彼にいふ『聞かぬ
一四 か、彼らが汝に對して如何におほくの證據を立つるを』一四されど總督の甚く怪しむまで、一言をも答へ給はず。
一五 一五祭の時には總督、群衆の望にまかせて、囚人一人を之に赦す例あり。一六爰にバラバといふ隱れなき囚人あり。
一七 一七されば人々の集れる時、ピラト言ふ『なんぢら我が誰を赦さんことを願ふか。バラバなるか、キリストと稱ふ
一八 るイエスなるか』一八これピラト彼らのイエスを付しし妬に因ると知る故なり。一九彼なほ審判の座にをる時、そ
二〇 の妻、人を遣して言はしむ『かの義人に係ることを爲な、我けふ夢の中にて彼の故にさまざま苦しめり』二〇祭司

ツ 路三・一、一三・一、二三・二 使三・一 ナ 太二六・一四を見よ　井（使一・一八）
ラ 太二六・一五　ノ（使一・一九）
ム 太二七・二四　オ 創一・一、二、一三
ウ 路一・九、二一、二二　ク 一一—一四　可一五・二—一五　路二三
ネ 太二〇・一九を見よ　ヤ 太二・二を見よ　マ 太二六・二五を見よ　ケ 摩五三・七、太二六
フ 太二七・二を見よ　コ 一五—二六　可一　エ 太一・一六を見よ　テ 約一・一四七、四八
ア 約一・九・三（使一三・九）　イ 太二・一六を見よ　ロ 太二七・二二を見よ　ハ 六三—六六（路二二）
チ 太二六・二五を見よ　リ 民一四・六　可一四・六三（使一四・一四）　ヌ 利二日・二六　約一
ル 六七、六八（路二二）　ワ 可一二・六四　カ 六九—七五　可一　ヨ 太二六・三を見よ　タ 可一四・七〇　路二二
ソ 可一五・一　路二二　ス（創二〇・六、三二・一一）　民二・六　レ 太二六・三四　約一　ツ 路二三・一、一三・一、二三・二　使三・一
ナ 太二六・一四を見よ　ラ 太二六・一五　ム 太二七・二四　ウ 路一・九、二一、二二　ネ 太二〇・一九を見よ

二一 長・長老ら、群衆にバラバの赦されん事を請はしめ、イエスを亡さんことを勸む。二一 總督こたへて彼らに言ふ
二二 『二人の中いづれを我が赦さん事を願ふか』彼らいふ『バラバなり』二三 ピラト言ふ『さらばキリストと稱ふるイ
二三 エスを我いかに爲べきか』皆いふ『十字架につくべし』二四 ピラト言ふ『かれ何の惡事をなしたるか』彼ら烈しく
二四 叫びていふ『十字架につくべし』二四 ピラトは何の効なく反つて亂にならんとするを見て、水をとり群衆のまへに
二五 手を洗ひて言ふ『この人の血につきて我は罪なし、汝等みづから當れ』二五 民みな答へて言ふ『その血は、我らと
二六 我らの子孫とに歸すべし』二六 爰にピラト、バラバを彼らに赦し、イエスを鞭ちて十字架につくる爲に付せり。
二七 二七 ここに總督の兵卒ども、イエスを官邸につれゆき、全隊を御許に集め、二八 その衣をはぎて、緋色の上衣を
二九 きせ、二九 茨の冠冕を編みて、その首に冠らせ、葦を右の手にもたせ且その前に跪づき、嘲弄して言ふ『ユダヤ人
三〇 の王、安かれ』三〇 また之に唾し、かの葦をとりて其の首を叩く。三一 かく嘲弄してのち、上衣を剝ぎて、故の衣を
三一 きせ、十字架につけんとて曳きゆく。
三二 三二 その出づる時、シモンといふクレネ人にあひしかば、強ひて之にイエスの十字架をおはしむ。三三 斯てゴル
三四 ゴタといふ處、即ち髑髏の地にいたり、三四 苦味を混ぜたる葡萄酒を飲ませんとしたるに、嘗めて、飲まんとし給
三五 はず。三五 彼らイエスを十字架につけてのち、籤をひきて其の衣をわかち、三六 且そこに坐して、イエスを守る。
三六 三七 その首の上に『これはユダヤ人の王イエスなり』と記したる罪標を置きたり。三八 爰にイエスとともに二人の强

イ使三・一四　ト可一五・一五　約一　三）　五　レ三三—四四　可一　五・二二）
ロ太一・一六を見よ　九・一　彼前二・二四　ヌ使一〇・一を見よ　ヨ三二　可一五・二一　路　ネ太二七・五四
ハ太二六・五　（路二三・一六）　ル約一九・二二　路二三・二六（約一　二三・三三—四三
ニ申二一・六—八　チ二七—三一　可一五　チ約一九・二二　路二三・二六（約一　ナ（可一五・二六　路二
ホ太二七・四　・二六—二〇　ワ約一九・三　九・一七）　タ使二・一〇、六・九、　約一九・一七—二四　三・三八　約一九・一
ヘ（書二・一九　使五・　リ約一八・二八、三三、　カ太二六・六七　可一　一・二〇、一三・　ラテン語にて　カル　九）
二八）　一九・九（太二六・　〇・二四、一四・六　ツ詩六九・二一（可一　バリーさいふ

ラ傳一六・四　詩二二　ウ太二七・四二　路二三・三七）　ア使七・六〇を見よ　エ太二七・六一、二八
七、一〇九・二五　井可一五・三一　路二　オ詩二二・八　サ太四・五を見よ　ミ可一五・四〇、四一　
寡二・一五可一五・　三・三五　ク（路二三・三九—四　三）　キ可一五・三九　路二　路二三・四九（約一
二九　ノ約一・四九、一二・　ヤ四五—五六　可一五　ケ詩二二・一　マ來五・七を見よ　ユ太二七・三六　シ可一五・四一　路八
ム太二六・六一　一三（太二七・三七　フ約一九・二九（路二　テ太二七・五四　メ太四・三を見よ（太　ヒ太二〇・二〇

二九 盜、十字架につけられ、一人はその右に、一人はその左におかる。三九 往來の者どもイエスを譏り、首を振りてい
四〇 ふ、四〇 『宮を毀ちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならば己を救へ、十字架より下りよ』四一 祭司長らも、ま
四二 た同じく學者・長老らとともに、嘲弄して言ふ、四二 『人を救ひて己を救ふこと能はず。彼はイスラエルの王なり、
四三 いま十字架より下りよかし、然らば我ら彼を信ぜん。四三 彼は神に依り賴めり、神かれを愛しまば今すくひ給ふべ
四四 し「我は神の子なり」と云へり』四四 ともに十字架につけられたる强盜どもも、同じ事をもてイエスを罵れり。
四五 四五 晝の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。四六 三時ごろイエス大聲に叫びて『エリ、エリ、
四六 四七 レマ、サバクタニ』と言ひ給ふ。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひしとの意なり。四七 そこに立つ者のうち
四八 或る人々これを聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』と言ふ。四八 直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き
四九 葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。四九 その他の者ども言ふ『まて、エリヤ來りて彼を救ふや否や、
五〇 五〇 我ら之を見ん』五〇 イエス再び大聲に呼はりて息絶えたまふ。五一 視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとな
五一 五二 り、また地震ひ、磐さけ、五三 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體おほく活きかへり、五三 イエスの復活ののち墓を
五四 いで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。五四 百卒長および之と共にイエスを守りゐたる者ども、地震とそ
五五 の有りし事とを見て、甚く懼れ『實に彼は神の子なりき』と言へり。五五 その處にて遙に望みゐたる多くの女あ
五六 り、イエスに事へてガリラヤより從ひ來りし者どもなり。五六 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフと
の母マリヤ及びゼベダイの子らの母などもゐたり。

五七 五八 五七日暮れて、ヨセフと云ふアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子なるが、五八ピラトに往きてイエ
五九 六〇 スの屍體を請ふ。ここにピラト之を付すことを命ず。五九ヨセフ屍體をとりて淨き亞麻布につつみ、六〇岩にほりた
六一 る己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を轉ばしおきて去りぬ。六一其處にはマグダラのマリヤと他のマリヤ
と墓に向ひて坐しゐたり。
六二 六三 六二あくる日、即ち準備日の翌日、祭司長らとパリサイ人らとピラトの許に集りて言ふ、六三『主よ、かの惑すも
六四 の生き居りし時「われ三日の後に甦へらん」と言ひしを、我ら思ひいだせり。六四されば命じて三日に至るまで墓
を固めしめ給へ、恐らくはその弟子ら來りて之を盜み「彼は死人の中より甦へれり」と民に言はん。然らば後の
六五 六六 惑は前のよりも甚だしからん』六五ピラト言ふ『なんぢらに番兵あり、往きて力限り固めよ』六六乃ち彼らゆきて
石に封印し、番兵を置きて墓を固めたり。

第二八章

一 一さて安息日をはりて一週の初の日のほの明き頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて
二 來りしに、二視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り來りて、かの石を轉ばし退け、その
三 四 上に坐したるなり。三その狀は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。四守の者ども彼を懼れたれば、戰
五 きて死人の如くなりぬ。五御使、こたへて女たちに言ふ『なんぢら懼るな、我なんぢらが十字架につけられ給ひ
六 しイエスを尋ぬるを知る。六此處には在さず、その言へる如く甦へり給へり。來りてその置かれ給ひし處を見
七 よ。七かつ速かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦へり給へり。視よ、汝らに先だちてガリラヤに

イ 五七―六一 可一五・四二―四七 路二三・五〇―五六 約一九・三八―四二　ロ 衆五三・九　ハ 太二七・六六、二八・一一 可一六・四　ニ 太二七・五六を見よ　ホ 太二七・五六、二八・一　ヘ 可一五・四二 路二三・五四 約一九・一四、三一、四二　ト 太一六・二一を見よ　チ 太二七・六六、二八・一一　リ 一―八 可一六・一―八 路二四・一―一〇 (約二〇・一―八)　ヌ 太二七・五六を見よ　ル 太二七・五六、六一　ヲ (可一六・五 路二四・四 約二〇・一二)　ワ 太二七・六〇を見よ　カ 但一〇・六　ヨ 但七・九、可九・三 約二〇・一二 徒一・一〇 (路二四・五)　タ 來一・一四　レ 太一四・二七を見よ　ソ 太一六・二一、二七・六三 (太一二・四〇)　ツ 詩一六・一〇 徒二・三一、一三・三七　ネ 太二六・三二を見よ

ナ 太一四・二七を見よ　ラ 約二〇・一七 (羅八・二九 來二・一一、一二、一七)　ム 太二六・三二を見よ　ウ 太二七・六五を見よ　ヰ 太二七・二　ノ 太二六・三二を見よ　オ 可一六・一一を見よ　ク 太二六・六四 (但七・一三、一四 錫一四・九 弗一・二〇―二二 鄙二・九―一一 西二・一〇 彼前三・二二) 太一一・二七を見よ　ヤ 可一六・一五、一六　マ 路二四・四七 (太二五・三二)　ケ 徒一四・二一　フ 徒一・五、二・三八、八・一六 羅六・三、四 哥前一・一三、一五―一七 加三・二七 彼前三・二一　コ 太一三・三九を見よ　エ 太一・二三、一八・二〇 約一二・二六、一四・三、一七・二四 徒一八・一〇

八 往き給ふ、彼處にて謁ゆるを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり』八女たち懼と大なる歡喜とをもて、
九 速かに墓を去り、弟子たちに知らせんとて走りゆく。九視よ、イエス彼らに遇ひて『安かれ』と言ひ給ひたれ
一〇 ば、進みゆき、御足を抱きて拜す。一〇爰にイエス言ひたまふ『懼るな、往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆ
き、彼處にて我を見るべきことを知らせよ』
一一 一一女たちの往きたるとき、視よ、番兵のうちの數人、都にいたり、凡て有りし事どもを祭司長らに告ぐ。
一二 一三 一二祭司長ら、長老らと共に集りて相議り、兵卒どもに多くの銀を與へて言ふ、一三『なんぢら言へ「その弟子ら夜き
一四 たりて、我らの眠れる間に彼を盜めり」と。一四この事もし總督に聞えなば、我ら彼を宥めて汝らに憂なからしめ
一五 ん』一五彼ら銀をとりて言ひ含められたる如く爲たれば、此の話ユダヤ人の中にひろまりて、今日に至れり。
一六 一七 一六十一弟子たちガリラヤに往きて、イエスの命じ給ひし山にのぼり、一七遂に謁えて拜せり。然れど疑ふ者も
一八 一九 ありき。一八イエス進みきたり、彼らに語りて言ひたまふ『我は天にても地にても一切の權を與へられたり。一九然
二〇 れば汝ら往きて、もろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、二〇わが汝らに
命ぜし凡ての事を守るべきを敎へよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり』

マタイ傳・福音書 をはり

二・二　或は「その星の上れるを見たれば」と譯す。
二・六　或は「町」と譯す。
二・九　或は「その上れるを見たる星」と譯す。
六・九　或は「聖とせられん事を」と譯す。
六・一三　或は「惡しき者」と譯す。異本一三の末に「國と威力と榮光とは、とこしへに汝のものなればなり、アァメン」と云ふ句あり。
六・二七　或は「その生命を寸陰も延べ得んや」と譯す。
六・二八　或は「野の花」と譯す。
七・三　或は「木屑」と譯す。四、五節なるも同じ。
九・一四　異本「しばしば斷食するに」とあり。
九・三六　或は「散る」と譯す。
一一・一九　異本「子」とあり。
一二・二〇　或は「燈心」と譯す。
一三・九　異本「聽く耳」とあり。
一三・四三　異本「聽く耳」とあり。
一四・二四　異本「海の眞中に在り」と譯す。
一六・七　或は「これはパンを携へざりし故ならん」と譯す。
一六・八　或は「パンなき故ならんと語り合ふか」と譯す。
一六・一八　ペテロとは「磐」の義なり。
一六・一九　或は「禁ずる所は天にても禁じ、地にて許す所は天にても許さん」と譯す。
一六・二二　原語「汝に憐みあれ」との義なり。
一七・二一　異本「この類は祈と斷食とに由らざれば出でぬなり」とあり。
一七・二七　原語「スタテール」
一八・一一　異本「それ人の子の來れるは失せたる者を救はん爲なり」との句あり。
一八・一八　或は「禁ずる所は天にても禁じ、地にて許す所は天にても許すなり」と譯す。
一九・九　異本に五章三二と同一の句あり。
二一・九　「救あれ」との義なり。
二三・一四　異本にマルコ傳十二章一四ルカ傳二十章四七とほぼ同じ句あり。
二三・一五　譯して「地獄の子」とす。
二四・二八　或は「元鷲」と譯す。
二四・三三　或は「時」と譯す。
二四・三六　異本「子も知らず」の句なし。
二四・五一　或は「挽き斬り」と譯す。
二六・一五　或は「銀三十と定めたり」と譯す。
二六・五〇　或は「なんぢの成さんとて來れることを成せ」と譯す。
二六・六一　或は「聖所」と譯す。
二七・九　或は「われ」と譯す。
二七・一三　或は「重大なる」と譯す。
二七・四〇　或は「聖所」と譯す。
二七・六五　或は「汝ら番兵を用ひよ」と譯す。

マルコ傳福音書

第一章

一 *神の子イエス・キリストの福音の始。
二 二 預言者イザヤの書に、『視よ、我なんぢの顏の前に、わが使を遣す、彼なんぢの道を設くべし。三 荒野に呼はる者の聲す「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ』と錄されたる如く、四 バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣傳ふ。五 ユダヤ全國またエルサレムの人々、みな其の許に出で來りて罪を言ひあらはし、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。六 ヨハネは駱駝の毛織を著、腰に皮の帶して、蝗と野蜜とを食へり。七 かれ宣傳へて言ふ『我よりも力ある者、わが後に來る。我は屈みて、その鞋の紐をとくにも足らず、八 我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖靈にてバプテスマを施さん』
九 その頃イエス、ガリラヤのナザレより來り、ヨルダンにてヨハネよりバプテスマを受け給ふ。一〇 斯て水より上るをりしも、天さけゆき、御靈、鴿のごとく己に降るを見給ふ。一一 かつ天より聲出づ『なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悅ぶ』
一二 斯て御靈ただちにイエスを荒野に逐ひやる。一三 荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獸とともに居給ふ、御使たち之に事へぬ。
一四 ヨハネの囚れし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣傳へて言ひ給ふ、一五『時は滿てり、神の國は近

イ 大四・三を見よ　ロ 約一七・三、二〇・三一　ハ 路二・一〇、一一・二一　ニ 路一六・一六　ホ 二一・八　ヘ 路三・一　ト 路七・二七　チ 路一・七七　リ 使一三・二四　ヌ 歴二八・一三　ル 詩四四・三、耳二・二　ヲ 大二・二三　ワ 大二・一一　カ 大三・一七を見よ　ヨ 一二・一三　タ 大四・一〇を見よ　レ 大四・一二　ソ 大四・二三を見よ　ツ 使九・二五　ネ 一〇　ナ 路一・四　ラ 路一・七七　ム 路一・一一　ウ 路三・二二　ヰ 路四・一一　ノ 路二・一一　オ 路三・一六　ク 路三・二一　ヤ 路四・一一　マ 路五・一二　ケ 路五・一六　フ 路五・一七　コ 路五・二一　エ 路六・一二　テ 路六・一三　ア 路六・一九　サ 路七・二七　キ 路七・三二　ユ 路八・一一　メ 路八・一二　ミ 路八・一三　シ 路八・一四　ヱ 路八・一五　ヒ 路八・一六　モ 路八・一七　セ 路八・一八　ス 路八・二一　ン 路八・二二　ヽ 路八・二三　ゝ 路八・二四　ヾ 路八・二五　ゞ 路八・二六　ヿ 路八・二七　ヸ 路八・二八　ヹ 路八・二九　ヺ 路八・三〇　・ 路八・三一　ー 路八・三二　ヽ 路八・三三　ゝ 路八・三四　ヾ 路八・三五　ゞ 路八・三六　ヿ 路八・三七　ヸ 路八・三八　ヹ 路八・三九　ヺ 路八・四〇　・ 路八・四一　ー 路八・四二　ヽ 路八・四三　ゝ 路八・四四　ヾ 路八・四五　ゞ 路八・四六　ヿ 路八・四七　ヸ 路八・四八　ヹ 路八・四九　ヺ 路八・五〇　・ 路八・五一　ー 路八・五二　ヽ 路八・五三　ゝ 路八・五四　ヾ 路八・五五　ゞ 路八・五六　ヿ 路八・五七　ヸ 路八・五八　ヹ 路八・五九　ヺ 路八・六〇　・ 路八・六一　ー 路八・六二　ヽ 路八・六三　ゝ 路八・六四　ヾ 路八・六五　ゞ 路八・六六　ヿ 路八・六七　ヸ 路八・六八　ヹ 路八・六九　ヺ 路八・七〇　・ 路八・七一　ー 路八・七二　ヽ 路八・七三　ゝ 路八・七四　ヾ 路八・七五　ゞ 路八・七六　ヿ 路八・七七　ヸ 路八・七八　ヹ 路八・七九　ヺ 路八・八〇　・ 路八・八一　ー 路八・八二　ヽ 路八・八三　ゝ 路八・八四　ヾ 路八・八五　ゞ 路八・八六　ヿ 路八・八七　ヸ 路八・八八　ヹ 路八・八九　ヺ 路八・九〇　・ 路八・九一　ー 路八・九二　ヽ 路八・九三　ゝ 路八・九四　ヾ 路八・九五　ゞ 路八・九六　ヿ 路八・九七　ヸ 路八・九八　ヹ 路八・九九　ヺ 路八・一〇〇　・ 路八・一〇一　ー 路八・一〇二　ヽ 路八・一〇三　ゝ 路八・一〇四　ヾ 路八・一〇五　ゞ 路八・一〇六　ヿ 路八・一〇七　ヸ 路八・一〇八　ヹ 路八・一〇九　ヺ 路八・一一〇　・ 路八・一一一　ー 路八・一一二　ヽ 路八・一一三　ゝ 路八・一一四　ヾ 路八・一一五　ゞ 路八・一一六　ヿ 路八・一一七　ヸ 路八・一一八　ヹ 路八・一一九　ヺ 路八・一二〇　・ 路八・一二一　ー 路八・一二二

づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

一六 一六イエス、ガリラヤの海にそひて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網投ちをるを見給ふ。か
一七 れらは漁人なり。一七イエス言ひ給ふ『われに從ひきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん』一八彼ら直ちに網
一九 をすてて從へり。一九少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給ふ、彼らも舟にありて網を
二〇 繕ひゐたり。二〇直ちに呼び給へば、父ゼベダイを雇人とともに舟に遺して從ひゆけり。

二一 二一斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に會堂にいりて敎へ給ふ。二二人々その敎に驚きあへり。
二二 それは學者の如くならず、權威ある者のごとく敎へ給ふゆゑなり。二三時にその會堂に、穢れし靈に憑かれたる人
二四 あり、叫びて言ふ、二四『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の關係あらんや、汝は我らを亡さんとて來給ふ。われは
二五 汝の誰なるを知る、神の聖者なり』二五イエス禁めて言ひ給ふ『默せ、その人を出でよ』二六穢れし靈、その人を
二六 痙攣けさせ、大聲をあげて出づ。二七人々みな驚き相問ひて言ふ『これ何事ぞ、權威ある新しき敎なるかな、穢れ
二七 し靈すら命ずれば從ふ』二八爰にイエスの噂あまねくガリラヤの四方に弘りたり。

二九 二九會堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴ひて、シモン及びアンデレの家に入り給ふ。三〇シモンの外姑、
三〇 熱をやみて臥しゐたれば、人々ただちに之をイエスに告ぐ。三一イエス往きて、その手をとり、起し給へば、熱さ
三一 りて女かれらに事ふ。

三二 三二夕となり、日いりてのち人々すべての病ある者・惡鬼に憑かれたる者をイエスに連れ來り、三三全町こぞり
三三

イ徒二〇・二一　ハ二一—二八　路四・一八—二二　ト太八・二九を見よ　ヌ可一〇・二四、三二、一四・三三、一六・一七、三八、三九
ロ一六—二〇　太四・三一—三七　チ路一・三五、四・三　ヲ可一・二一、二三
一八—二二（路五・一一）　ニ太四・二三を見よ　リ四〇—四四　大八・四を見よ　ワ三二—三四　太八・一六・六
二一—一二　約一・四　ホ太七・二八を見よ　ヌ路四・三　ヤ三—一二　太九・二　路四・
二〇—四二　ヘ太二・二三　可一〇　ル二九—三一　太八・一四・二五　路四・
ヘ四七、一四・六七、一六・六　路四・三　ヲ可一・二一　カ太四・二四を見よ
四、二四・一九　徒　ヨ可一・二一
二四・五

タ太四・二三を見よ　四二、四三　ム可一〇・一七（太八・一）路五・一七）　ス可一・四五を見よ　ヌ可一〇・二四、三二、一四・三三、一六・一七、三八、三九
レ可三・一二　路四・四　ツ太一四・二三を見よ　ナ太四・二三を見よ　オ可一・四五を見よ　ル二九—三一　太八・一六・六
一（徒一六・一七、一八）　路五・六、二二・三二・來五・七　ラ四〇—四四　大八・四を見よ　ク太四・二三　西一・五　ヤ三—一二　太九・二　路四・
ソ三五—三八　路四・ネ來六・一　約一七　二—一四　路五・一二　井太八・四を見よ　ケ路五・一九　ヲ可一・二一、二三、三・
ノ可二・二、一三、三・　マ太四・二四を見よ　ワ三二—三四　太八・一六・一七　路四・
リ可九・二〇　二六　路五・一八—二六

三四 て門に集る。三四イエスさまざまの病を患ふ多くの人をいやし、多くの惡鬼を逐ひいだし之に物言ふことを免し給
はず、惡鬼イエスを知るに因りてなり。

三五 三五朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき處にゆき、其處にて祈りゐたまふ。三六シモン及び之と偕に
三六 三七 をる者ども、その跡を慕ひゆき、三七イエスに遇ひて言ふ『人みな汝を尋ぬ』三八イエス言ひ給ふ『いざ最寄の村々
三七 三八 に往かん、われ彼處にも敎を宣ぶべし、我はこの爲に出で來りしなり』三九遂にゆきて、徧くガリラヤの會堂にて
三八 三九 敎を宣べ、かつ惡鬼を逐ひ出し給へり。

四〇 四〇一人の癩病人、みもとに來り、跪づき請ひて言ふ『御意ならば我を潔くなし給ふを得ん』四一イエス憫み
四一 て、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、四二直ちに癩病さりて、その人きよまれり。
四二 四三 四三頓て彼を去らしめんとて、嚴しく戒めて言ひ給ふ、四四『つつしみて誰にも語るな、唯ゆきて己を祭司に見せ、モ
四三 四四 四五 ーセが命じたる物を汝の潔のために獻げて、人々に證せよ』四五されど彼いでて此の事を大に述べつたへ、徧く弘
四五 め始めたれば、この後イエスあらはに町に入りがたく、外の寂しき處に留りたまふ。人々、四方より御許に來れ
り。

第二章

二 一數日の後、またカペナウムに入り給ひしに、その家に在すことを聞きて、二多くの人あつまり來
三 り、門口すら隙間なき程なり。イエス彼らに御言を語り給ふ。三ここに四人に擔はれたる中風の者
四 を人々つれ來る。四群衆によりて御許にゆくこと能はざれば、在す所の屋根を穿ちあけて、中風の者を床の

六五 縋り下せり。五イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、汝の罪ゆるされたり』六ある學者たち
七 其處に坐しゐたるが、心の中に、七『この人なんぞ斯く言ふか、これは神を瀆すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦
八 すことを得べき』と論ぜしかば、八イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言ひ給ふ『なにゆゑ斯ることを
九 心に論ずるか、九中風の者に「なんぢの罪ゆるされたり」と言ふと「起きよ、床をとりて歩め」と言ふと、孰か
一〇 易き。一〇人の子の地にて罪を赦す權威ある事を、汝らに知らせん爲に』——中風の者に言ひ給ふ——一一『なんぢ
一一 に告ぐ、起きよ、床をとりて家に歸れ』一二彼おきて直ちに床をとりあげ、人々の眼前いで往けば、皆おどろき、
かつ神を崇めて言ふ『われら斯の如きことは斷えて見ざりき』

一三 一三イエスまた海邊に出でゆき給ひしに、群衆みもとに集ひ來りたれば、之を教へ給へり。一四斯て過ぎ往くと
一四 き、アルパヨの子レビの、收稅所に坐しをるを見て『われに從へ』と言ひ給へば、立ちて從へり。一五而して其の
一五 家にて食事の席につき居給ふとき、多くの取稅人・罪人ら、イエス及び弟子たちと共に席に列る、これらの者お
一六 ほく居て、イエスに從へるなり。一六パリサイ人の學者ら、イエスの罪人・取稅人とともに食し給ふを見て、その
一七 弟子たちに言ふ『なにゆゑ取稅人・罪人とともに食するか』一七イエス聞きて言ひ給ふ『健かなる者は、醫者を要
一八 せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり』
一八 一八ヨハネの弟子とパリサイ人とは、斷食しゐたり。人々イエスに來りて言ふ『なにゆゑヨハネの弟子とパリ
一九 サイ人の弟子とは斷食して、汝の弟子は斷食せぬか』一九イエス言ひ給ふ『新郎の友だち、新郎と偕にをるうちは

イ 大九・二を見よ　ロ（羽七・六・二五　民八・四）　ハ 箴四三・二五　但九・九　ニ 徒五・三一　ホ 大九・八を見よ　ヘ 大九・三三　ト 可一・四五を見よ　チ 一四—一七　大九・九　リ 大九・九　可三・一八　ヌ 大八・二二を見よ　ル 太一〇・三　路三・一　ヲ 路五・三〇　徒二三　ワ 大九・一一を見よ　カ 大九・一二、一三　路五・二一、三二　ヨ 箴五五・七　可一・一五　路一三・三　タ 一八—二二　太九・一四—一七　路五・三三—三八　徒三・一九　錄前一　レ 箴五八・三—七　詩

二〇 斷食し得べきか、新郎と偕にをる間は、斷食するを得ず。二〇然れど新郎をとらるる日きたらん、その日には斷食
二一 せん。二一誰も新しき布の裂を舊き衣に縫ひつくることは爲じ。もし然せば、その補ひたる新しきものは、舊き物
二二 をやぶり、破綻さらに甚だしからん。二二誰も新しき葡萄酒を、ふるき革囊に入るることは爲じ。もし然せば、葡
葡萄酒は囊をはりさきて、葡萄酒も囊も廢らん。新しき葡萄酒は、新しき革囊に入るるなり』

二三 二三イエス安息日に麥畠をとほり給ひしに、弟子たち歩みつつ穗を摘み始めたれば、二四パリサイ人、イエスに
二四 二五 言ふ『視よ、彼らは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか』二五答へ給ふ『ダビデその伴へる人々と共に乏しくして
二六 飢ゑしとき爲しし事を未だ讀まぬか。二六即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ神の家に入りて、祭司のほかは食ふ
二七 まじき供のパンを取りて食ひ、おのれと偕なる者にも與へたり』二七また言ひたまふ『安息日は人のために設けら
二八 れて、人は安息日のために設けられず。二八然れば人の子は安息日にも主たるなり』

第三章

一 一また會堂に入り給ひしに、片手なえたる人あり。二人々イエスを訴へんと思ひて、安息日にかの
二 人を醫すや否やと窺ふ。三イエス手なえたる人に『中に立て』といひ、四また人々に言ひたまふ
三 四 『安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと殺すと、孰かよき』彼ら默然たり。五イエスその心の頑固なる
五 を憂ひて、怒り見回して、手なえたる人に『手を伸べよ』と言ひ給ふ。かれ手を伸べたれば癒ゆ。六パリサイ人
六 いでて、直ちにヘロデ黨の人とともに、如何にしてかイエスを亡さんと議る。
七 七イエスその弟子とともに、海邊に退き給ひしに、ガリラヤより來れる夥多しき民衆も從ふ。又ユダヤ、

ソ 太九・一五　路五・三五　ネ 申二三・二五　ナ 太一二・二を見よ　ラ 母創二・三—六　ム 代上二四・六（母詩一一・一五）　ウ 利二四・九　井 出二三・一二　申五・一四　撒五八・一三　ノ 四二・一六　オ 太八・二〇を見よ　ク 一・一六　太一二・九　路六・六—一一・一四　ヤ 可一・二一三九　マ 太一二・一〇　路六・七・一一・五四）　ケ 路六・七、一四・一、二〇・二〇　フ 路六・二〇　コ 太二二・一六を見よ　エ 七—一二　太一二・一五、一六　路六・一七—一九　テ 太四・二五　路六・一七　約八・六（路

八 八エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの向の地およびツロ、シドンの邊より夥多しき民衆その爲し給へる事を聞き
九 て、御許に來る。九イエス群衆のおしなやますを逃れんとて、小舟を備へ置くことを弟子に命じ給ふ。一〇これ多
一〇 くの人を醫し給ひたれば、凡て病に苦しむもの、御體に觸らんとて押迫る故なり。一一また穢れし靈イエスを見る
一一 毎に、御前に平伏し、叫びて『なんぢは神の子なり』と言ひたれば、一二我を顯すなとて、嚴しく戒め給ふ。
一三 一三イエス山に登り、御意に適ふ者を召し給ひしに、彼ら御許に來る。一四爰に十二人を擧げたまふ。是かれら
一五 を御側におき、また教を宣べさせ、一五惡鬼を逐ひ出す權威を用ひさする爲に、遣さんとてなり。一六*此の十二人を
一七 擧げて、シモンにペテロといふ名をつけ、一七ゼベダイの子ヤコブ、その兄弟ヨハネ、此の二人にボアネルゲ、即ち
一八 雷霆の子といふ名をつけ給ふ。一八又アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、
一九 タダイ、熱心黨のシモン、一九及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを賣りしなり。
二〇 斯てイエス家に入り給ひしに、二〇群衆また集り來りたれば、食事する暇もなかりき。二一その親族の者これを
二一 聞き、イエスを取り押へんとて出で來る、イエスを狂へりと謂ひてなり。二二又エルサレムより下れる學者たちも
二二 『彼はベルゼブルに憑かれたり』と言ひ、かつ『惡鬼の首によりて惡鬼を逐ひ出すなり』と言ふ。二三イエス彼ら
二三 を呼びよせ、譬にて言ひ給ふ『サタンは、いかでサタンを逐ひ出し得んや。二四もし國分れ爭はば、其の國立つ
二四 こと能はず。二五もし家分れ爭はば、其の家立つこと能はざるべし。二六若しサタン己に逆ひて分れ爭はば、立つこ
二五 と能はず、反つて亡び果てん。二七誰にても先づ强き者を縛らずば、强き者の家に入りて其の家財を奪ふこと能は
二六 ず。二八誠に汝らに告ぐ、人の子らの凡ての罪と、けがす瀆とは赦されん。二九然れど
二七 聖靈をけがす者は、永遠に赦されず、永遠の罪に定められるべし』三〇これは彼らイエスを『穢れし靈』に憑かれた
二八 り』と云へるが故なり。
二九
三〇
三一 三一爰にイエスの母と兄弟と來りて外に立ち、人を遣してイエスを呼ばしむ。三二群衆イエスを環りて坐したり
三二 しが、或者いふ『視よ、なんぢの母と兄弟・姉妹と外にありて汝を尋ぬ』三三イエス答へて言ひ給ふ『わが母、わ
三三 が兄弟とは誰ぞ』三四斯て周圍に坐する人々を見回して言ひたまふ『視よ、これは我が母、わが兄弟なり。三五誰に
三四 ても神の御意を行ふものは、是わが兄弟、わが姉妹、わが母なり』
三五

第四章

一 一イエスまた海邊にて教へ始めたまふ。夥多しき群衆、みもとに集りたれば、舟に乘り海に泛びて
二 坐したまひ、群衆はみな海に沿ひて陸にあり。二譬にて數多の事ををしへ、教の中に言ひたまふ、
三 三『聽け、種播くもの、播かんとて出づ。四播くとき、路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。五土うすき
四 礫地に落ちし種あり、土深からぬによりて、速かに萠え出でたれど、六日出でてやけ、根なき故に枯る。七茨の
五 中に落ちし種あり、茨そだち塞ぎたれば、實を結ばず。八良き地に落ちし種あり、生え出でて茂り、實を結ぶこ
六 と、三十倍、六十倍、百倍せり』九また言ひ給ふ『きく耳ある者は聽くべし』
七 一〇イエス人々を離れ居給ふとき、御許にをる者ども、十二弟子とともに、此等の譬を問ふ。一一イエス言ひ給
八 ふ『なんぢらには神の國の奧義を與ふれど、外の者には、凡て譬にて教ふ。一二これ「見るとき見ゆとも認めず、

一三 聽くとき聞ゆとも悟らず、飜へりて赦さるる事なからん」爲なり』一三また言ひ給ふ『なんぢら此の譬を知らぬか、
一四 然らば爭でもろもろの譬を知り得んや。一四播く者は御言を播くなり。一五御言の播かれて路の傍らにありとは、斯
一六 る人をいふ、即ち聞くとき、直ちにサタン來りて、その播かれたる御言を奪ふなり。一六同じく播かれて磽地にあ
一七 りとは、斯る人をいふ、即ち御言をききて、直ちに喜び受くれども、一七その中に根なければ、ただ暫し保つの
一八 み、御言のために、患難また迫害にあふ時は、直ちに躓くなり。一八また播かれて茨の中にありとは、斯る人をい
一九 ふ、一九即ち御言をきけど、世の心勞、財貨の惑、さまざまの慾いりきたり、御言を塞ぐによりて、遂に實らざる
二〇 なり。二〇播かれて良き地にありとは、斯る人をいふ、即ち御言を聽きて受け、三十倍、六十倍、百倍の實を結ぶ
なり』

二一 二一また言ひたまふ『升のした、寢臺の下におかんとて、燈火をもち來るか、燈臺の上におく爲ならずや。
二二 二二それ顯はるる爲ならで、隱るるものなく、明かにせらるる爲ならで、秘めらるるものなし。二三聽く耳ある者は
二三 聽くべし』二四また言ひ給ふ『なんぢら聽くことに心せよ、汝らが量る量にて量られ、更に增し加へらるべし。二五
二四 それ有てる人は、なほ與へられ、有たぬ人は、有てる物をも取らるべし』
二六 二六また言ひたまふ『神の國は、或人、たねを地に播くが如し、二七日夜起臥するほどに、種はえ出でて育てど
二七 も、その故を知らず。二八地はおのづから實を結ぶものにして、初には苗、つぎに穗、つひに穗の中に充ち足れる
二八 穀なる。二九實、熟れば直ちに鎌を入る、收穫時の到れるなり』

イ一三—二〇 太一三・一八—二三 路八・一一—一五
ロ 太四・一〇を見よ
ハ 太一三・二二を見よ
ニ 太一九・二一—二三 提前六・九、一〇、一一
ホ 約彼三・一六、一七
ヘ 太五・一五 路八・一七
ト 太一〇・二六 路八・一七
チ 太一一・一五を見よ
リ 太七・二 路六・三八
一六、一一・三三
ヌ 太一三・二を見よ
ル 二六—二九（太一三・二四—三〇）
ヲ 默一四・一五を見よ

三〇 三〇また言ひ給ふ『われら神の國を何になぞらへ、如何なる譬をもて示さん。三一一粒の芥種のごとし、地に播
三一 く時は、世にある萬の種よりも小けれど、三二既に播きて生え出づれは、萬の野菜よりは大く、かつ大なる枝を出
三二 して、空の鳥その蔭に棲み得るほどになるなり』
三三 三三斯のごとき數多の譬をもて、人々の聽きうる力に隨ひて、御言を語り、三四譬ならでは語り給はず、弟子た
三四 ちには、人なき時に凡ての事を釋き給へり。
三五 三五その日、夕になりて言ひ給ふ『いざ彼方に往かん』三六弟子たち群衆を離れ、イエスの舟にゐ給ふまま共に
三六 三七 乘り出づ、他の舟も從ひゆく。三七時に烈しき颶風おこり、浪うち込みて、舟に滿つるばかりなり。三八イエスは艫
三八 三九 の方に茵を枕として寢ねたまふ。弟子たち呼び起して言ふ『師よ、我らの亡ぶるを顧み給はぬか』三九イエス起き
四〇 て風をいましめ、海に言ひたまふ『默せ、鎭れ』乃ち風やみて、大なる凪となりぬ。四〇斯て弟子たちに言ひ給ふ
四一 『なに故かく臆するか、信仰なきは何ぞ』四一かれら甚く懼れて互に言ふ『こは誰ぞ、風も海も順ふとは』

第五章

一 一斯て海の彼方なるゲラセネ人の地に到る。二イエスの舟より上り給ふとき、穢れし靈に憑かれた
二 三 る人、墓より出でて、直ちに遇ふ。三この人、墓を住處とす、鏈にてすら今は誰も繫ぎ得ず。四彼
四 五 はしばしば足械と鏈とにて繫がれたれど、鏈をちぎり、足械をくだきたり、誰も之を制する力なかりしなり。
六 五 夜も晝も、絶えず墓あるひは山にて叫び、己が身を石にて傷けゐたり。六かれ遙にイエスを見て、走りきた
七 り、御前に平伏し、七大聲に叫びて言ふ『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、神によりて願

ワ 三〇—三二 太一三・三一、三二 路一三・一八、一九
カ 太一三・二四を見よ
ヨ 徒一九・二〇
タ 太一三・三四（約一〇・六、一六・二五）
レ 三五—四一 太八・一八、二三—二七 路八・二二—二五
ソ 可四・一、五・二、一、六・三二、四五（可三・九）
ツ 伯三八・一一 詩八九・九 箴四〇・一二
ネ 一—一七 太八・二八—三四 路八・二六—三七 ナ 可四・一、五・二一（可三・九）
ラ 箴六五・四 井 太八・二九を見よ
ム 路八・二八 徒一六・二七 來七・二 羅二・一九
ウ 太四・三を見よ

九八 ふ、我を苦しめ給ふな』八これはイエス『穢れし靈よ、この人より出で往け』と言ひ給ひしに因るなり。九イエ
一〇 スまた『なんぢの名は何か』と問ひ給へば『わが名はレギオン、我ら多きが故なり』と答へ、一〇また己らを此の
一一 地の外に逐ひやり給はざらんことを切に求む。一一彼處の山邊に豚の大なる群、食しゐたり。一二惡鬼どもイエスに
一三 求めて言ふ『われらを遣して豚に入らしめ給へ』一三イエス許したまふ。穢れし靈いでて、豚に入りたれば、二千
一四 匹ばかりの群、海に向ひて、崖を駈けくだり、海に溺れたり。一四飼ふ者ども逃げ往きて、町にも里にも告げたれ
一五 ば、人々何事の起りしかを見んとて出つ。一五斯てイエスに來り、惡鬼に憑かれたりし者、即ちレギオンをもちた
一六 りし者の、衣服をつけ、慥なる心にて坐しをるを見て、懼れあへり。一六かの惡鬼に憑かれたる者の上にありし事
一七 と、豚の事とを見し者ども、之を具に告げたれば、一七人々イエスにその境を去り給はん事を求む。一八イエス舟に
一八 乘らんとし給ふとき、惡鬼に憑かれたりしもの偕に在らん事を願ひたれど、一九許さずして言ひ給ふ『なんぢの家
一九 に、親しき者に歸りて、主がいかに大なる事を汝に爲し、いかに汝を憫み給ひしかを告げよ』二〇彼ゆきてイエス
二〇 の如何に大なる事を己になし給ひしかをデカポリスに言ひ弘めたれば、人々みな怪しめり。

二一 二一イエス舟にて、復かなたに渡り給ひしに、大なる群衆みもとに集る、イエス海邊に在せり。二二會堂司の
二二 一人、ヤイロといふ者きたり、イエスを見て、その足下に伏し、二三切に願ひて言ふ『わが稚なき娘、いまはの際
二三 なり、來りて手をおき給へ、さらば救はれて活くべし』二四イエス彼と共にゆき給へば、大なる群衆したがひつつ
二四 御許に押迫る。

イ 猶六
ロ 路一・二〇
ハ 可五・一五 路八・三
〇（大二六・五三）
孤馬の群隊にて六
千人を レギオンと
ニ 利一一・七・八
ホ 大四・二四を見よ
第二・一—三
ヘ 可五・九を見よ
ト（路八・二七）
チ 路八・三五 西一・一三
リ 伯二・一四
ヌ 一八—二〇 路八・三八・三九
ル 可五・一五を見よ
ヲ 可六・五三—五六は其結果ならん
ワ 大四・二五を見よ
カ 二一 太九・一 路八・四〇
ヨ（可四・三六）
タ（可四・一）
レ 二二—四三 大九・一八—二六 路八・四一—五六
ソ 太九・一八 可五・三五・三八 路八・四一・四九・一三・一四 使一三・一五、一八・八、一七
ツ 可六・五、七・三二、八・二三・二五、一六・一八 路四・四〇、一三・一二 使九・一七、二八・八 來六・二（イ六・六）

ノ 可三・一〇を見よ
ム 路五・一七を見よ
ウ 七九・二二を見よ
井 路七・五〇、八・四
八（使一六・三六
雅二・一六）
ク 路八・五〇
ヤ 太九・二八、二九 可
す 可五・二九
マ 太一七・一、二六・
ケ 可五・二二を見よ
フ 黎伯四・一三—一八
コ 約一・一一—一三
エ 路七・一四 約一一・四三 使九・四〇（王上一七・二二 王下四・三五）
テ 大八・四を見よ
未 亭一五・一八、三〇
ナ 可三・一〇を見よ
ラ 可三・一〇を見よ
可五・三四
九・二三、二四 路八・五〇 使一四・九、一〇 羅四・一八—二二
三七 可九・二、一 四・三三
下 可五・二二を見よ

二五 二五爰に十二年、血漏を患ひたる女あり。二六多くの醫者に多く苦しめられ、有てる物をことごとく費したれ
二七 ど、何の効なく、反つて增々惡しくなりたり。二七イエスの事をききて、群衆にまじり、後に來りて、御衣にさは
二八 る、二八『その衣にだに觸らば救はれん』と自ら謂へり。二九斯て血の泉、ただちに乾き、病のいえたるを身に覺えた
二九 り。三〇イエス直ちに能力の己より出でたるを自ら知り、群衆の中にて、振反り言ひたまふ『誰が我の衣に觸りし
三〇 ぞ』三一弟子たち言ふ『群衆の押迫るを見て、誰が我に觸りしぞと言ひ給ふか』三二イエスこの事を爲しし者を見ん
三一 とて見回し給ふ。三三女おそれ戰き、己が身になりし事を知り、來りて御前に平伏し、ありしままを告ぐ。三四イエ
三二 ス言ひ給ふ『娘よ、なんぢの信仰なんぢを救へり、安らかに往け、病いえて健かになれ』
三三 三五かく語り給ふほどに、會堂司の家より人々きたりて言ふ『なんぢの娘は早や死にたり、爭でなほ師を煩は
三四 すべき』三六イエス其の告ぐる言を傍より聞きて、會堂司に言ひたまふ『懼るな、ただ信ぜよ』三七斯てペテロ、ヤ
三五 コブその兄弟ヨハネの他は、ともに往く事を誰にも許し給はず。三八彼ら會堂司の家に來る。イエス多くの人の、
三六 甚く泣きつ叫びつする騷を見、三九入りて言ひ給ふ『なんぞ騷ぎ、かつ泣くか、幼兒は死にたるにあらず、寐ねた
三七 るなり』四〇人々イエスを嘲笑ふ。イエス彼等をみな外に出し、幼兒の父と母と己に伴へる者とを率きつれて、
三八 幼兒のをる處に入り、四一幼兒の手を執りて『タリタ、クミ』と言ひたまふ。少女よ、我なんぢに言ふ、起きよ、
三九 との意なり。四二直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりければなり。彼ら直ちに甚く驚きおどろけり。四三イエス
四〇 此の事を誰にも知れぬやうにせよと、堅く彼らを戒め、また食物を娘に與ふることを命じ給ふ。
四一
四二
四三

第六章

一斯て其處をいで、己が鄕に到り給ひしに、弟子たちも從へり。二安息日になりて、會堂にて敎へ始め給ひしに、聞きたる多くのもの驚きて言ふ『この人は此等のことを何處より得しぞ、此の人の授けられたる知慧は何ぞ、その手にて爲す斯のごとき能力あるわざは何ぞ。三此の人は木匠にして、マリヤの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ならずや、其の姉妹も此處に我らと共にをるに非ずや』遂に彼に躓けり。四イエス彼らに言ひたまふ『預言者は、おのが鄕、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』五彼處にては、何の能力ある業をも行ひ給ふこと能はず、ただ少數の病める者に、手をおきて醫し給ひしのみ。六彼らの信仰なきを怪しみ給へり。

七斯て村々を歷巡りて敎へ給ふ。七また十二弟子を召し、二人づつ遣しはじめ、穢れし靈を制する權威を與へ、八かつ旅のために、杖一つの他は、何をも持たず、糧も嚢も帶の中に錢をも持たず、九ただ草鞋ばかりをはきて、一つの下衣をも著ざることを命じ給へり。一〇斯て言ひたまふ『何處にても人の家に入らば、その地を去るまで其處に留れ。一一何地にても汝らを受けず、汝らに聽かずば、其處を出づるとき、證のために足の裏の塵を拂へ』一二爰に弟子たち出で往きて、悔改むべきことを宣傳へ、一三多くの惡鬼を逐ひいだし、多くの病める者に油をぬりて醫せり。

一四斯てイエスの名顯れたれに、ヘロデ王ききて言ふ『バプテスマのヨハネ、死人の中より甦へりたり。この故に此等の能力その中に働くなり』一五或人は『エリヤなり』といひ、或人は『預言者、いにしへの預言者のごと

イ一—六　太一三・五　ハ大四・二三を見よ　ト雅一・一　加一・二九　チ可六・一を見よ　ヨ七—一二　太一〇・一九—一四　路九・一、三—五（路一〇・四—一二）　三・一四、一六　路九・五　ネ路九・六（太一一・一）　一、一一路九・七—九　ウ來二・四・二を見よ　井ま可八・一・六—一四を見よ　ノ太二一・一一を見よ

ロ太一三・五四、五七　可六・四　路四・一　ニ太七・二八を見よ　ホ（太一三・五五）　ヘ太一二・四六を見よ　リ太一三・五六　ヌ太一一・六を見よ　ル太一三・五七を見よ　カ太九・三五　路一三・一〇・一一（可一・三九、一〇・一）　ヨ一四路六・一三、九・一〇、一七・五、二四・一四、二四・一〇　徒一・二、二六等　ワ可五・一三を見よ　タ太一〇・一五　可　ツ太一〇・一四　路九　ヤ太一四・三を見よ　ヤ太一四・四を見よ　マ（太二一・二六）　ケ（創四〇・二〇）　フ路三・一　コ（帖一・三、二・一八）　エ帖五・三六、七・二　テ太一〇・二　可三・三・二—三八　可八・三二—九　ア可三・二〇　サ三二—四四　太一四・三・二—二一　路九・一〇—一七　約六・五—一三（太一五　路六・一三、一四　路九　キ可四・三六を見よ

オ一—七・二九　太一四・三—二　ク太一四・三を見よ　ヤ太一四・四を見よ　マ（太二一・二六）　ケ（創四〇・二〇）　フ路三・一　コ（帖一・三、二・一八）　エ帖五・三六、七・二　テ太一〇・二　可三・三・二—三八　可八・三二—九　ア可三・二〇　サ三二—四四　太一四・三・二—二一　路九・一〇—一七　約六・五—一三（太一五

き者なり』といふ。一六ヘロデ聞きて言ふ『わが首斬りしヨハネ、かれ甦へりたるなり』一七ヘロデ先にその娶りたる己が兄弟ピリポの妻ヘロデヤの爲に、みづから人を遣し、ヨハネを捕へて獄に繫げり。一八ヨハネ、ヘロデに『その兄弟の妻を納るるは、宜しからず』と言へるに因る。一九ヘロデヤ、ヨハネを怨みて殺さんと思へど能はず。二〇それはヘロデ、ヨハネの義にして聖なる人たるを知りて、之を畏れ、之を護り、且その敎をききて、大に惱みつつも、なほ喜びて聽きたる故なり。二一然るに機よき日來れり。ヘロデ己が誕生日に大臣・將校・ガリラヤの貴人たちを招きて饗宴せしに、二二かのヘロデヤの娘いり來りて、舞をまひ、ヘロデと其の席に列れる者とを喜ばしむ。王、少女に言ふ『何にても欲しく思ふものを求めよ、我あたへん』二三また誓ひて言ふ『なんぢ求めば、我が國の半までも與へん』二四娘いでて母にいふ『何を求むべきか』母いふ『バプテスマのヨハネの首を』二五娘ただちに急ぎて王の許に入りきたり、求めて言ふ『ねがはくは、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて速かに賜はれ』二六王いたく憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して拒むことを好まず、二七直ちに衛兵を遣し、之にヨハネの首を持ち來ることを命ず。衛兵ゆきて獄にて、ヨハネを首斬り、二八その首を盆にのせ、持ち來りて少女に與ふ、少女これを母に與ふ。二九ヨハネの弟子たち聞きて來り、その屍體を取りて墓に納めたり。

三〇使徒たちイエスの許に集りて、その爲ししこと、敎へし事をことごとく告ぐ。三一イエス言ひ給ふ『なんぢら人を避け、寂しき處に、いざ來りて暫し息へ』これは往來の人おほくして、食する暇だになかりし故なり。三二斯て人を避け、舟にて寂しき處にゆく。三三其の往くを見て、多くの人それと知り、その處を指して、町々より

三四 徒歩にてともに走り、彼等よりも先に往けり。三四イエス出でて、大なる群衆を見、その牧ふ者なき羊の如くなる
三五 を甚く憫みて、多くの事を教へはじめ給ふ。三五時すでに晩くなりたれば、弟子たち御許に來りていふ『ここは寂
三六 しき處、はや時も晩し。三六人々を去らしめ、周圍の里また村に往きて、己がために食物を買はせ給へ』三七答へて
三七 言ひ給ふ『なんぢら食物を與へよ』弟子たち言ふ『われら往きて二百デナリのパンを買ひ、これに與へて食はす
三八 べきか』三八イエス言ひ給ふ『パン幾つあるか、往きて見よ』彼ら見ていふ『五つ、また魚二つあり』三九イエス凡
三九 ての人の組々となりて、青草の上に坐することを命じ給へば、四〇或は百人、あるひは五十人、畝のごとく列びて
四〇 坐す。四一斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子たちに付して人々の前に
四一 置かしめ、二つの魚をも人毎に分け給ふ。四二凡ての人、食ひて飽きたれば、四三パンの餘、魚の殘を集めしに、十
四二 二の筐に滿ちたり。四四パンを食ひたる男は五千人なりき。

四五 イエス直ちに、弟子たちを强ひて舟に乘らせ、自ら群衆を返す間に、彼方なるベツサイダに先に往かし
四五 む。四六群衆に別れてのち、祈らんとて山にゆき給ふ。四七夕になりて、舟は海の眞中にあり、イエスはひとり陸に
四六 在す。四八風逆ふに因りて、弟子たちの漕ぎ煩ふを見て、夜明の四時ごろ、海の上を歩み、その許に到りて、往き
四七 過ぎんとし給ふ。四九弟子たち其の海の上を歩み給ふを見、變化の者ならんと思ひて叫ぶ。五〇皆これを見て心騷ぎ
四八 たるに因る。イエス直ちに彼らに語りて言ひ給ふ『心安かれ、我なり、懼るな』五一斯て弟子たちの許にゆき、舟
四九 に登り給へば、風やみたり。弟子たち心の中にて甚く驚く、五二彼らは先のパンの事をさとらず、反つて其の心鈍
五〇 五一 五二

イ 大九・三六を見よ　ロ 大九・三六を見よ　ハ 約六・七（民一一・一三、二一）　ニ 太一八・二八を見よ　ホ 太一四・一九を見よ　ヘ 王一・四・四三　ト 王下・四・四四　チ 太一四・二〇を見よ　リ 太一四・二一　ヌ 四五—五一　太一四・二一・三三　約六・二五—二一　ル 可六・三二　ヲ 太一四・二一を見よ　ワ 徒八・一八、二一　哥後一一・三三　カ 太一四・二三を見よ　ヨ 太一四・二五（可一三・三五）　タ 伯九・八　レ 太九・二を見よ　ソ 太一四・二七を見よ　ツ 可六・三二　ネ 詩一〇七・二九　ナ 可八・一七　ラ（錄一一・七）

ム 五三—五六　太一四ノ一—二三　太一五・二四—三六（約六一—一〇　オ 太一五・一を見よ　ク 可七・五、徒一〇・一四、二八、一一・八　ヤ 可七・五八、九、一　フ 可七・三を見よ　コ 可七・二を見よ　エ 詩二九・一三　ア 出二一・一七　利二・一—三　ス 創二八・二二　利一・二—四　太二三・一八、二七・六　羅一四・一四　來一・一四を見よ　三 又加一・一四を見よ　テ 出二〇・二一　利一九・三　申五・一六　ウ 太九・二〇を見よ　井 可三・一〇を見よ　ケ（來九・一〇）　マ 太二三・二五を見よ　ヒ 出二〇・九　申二七・一六　詩二〇・二〇、三〇　ク 可七・二七　ヒ 出二〇・一二　利一一・三八　ヤ 可七・五八、九、一　フ 可七・三を見よ　太一九・一九　弗六・二七

くなりしなり。

五三 遂に渡りてゲネサレの地に著き、舟がかりす。五四舟より上りしに、人々ただちにイエスを認めて、五五徧く
五四 あたりを馳せまはり、その在すと聞く處々に、患ふ者を床のままつれ來る。五六その到りたまふ處には、村にて
五五 も、町にても、里にても、病める者を市場におきて、御衣の總にだに觸らしめ給はんことを願ふ。觸りし者は、
五六 みな醫されたり。

第七章

一 一パリサイ人と或る學者らとエルサレムより來りてイエスの許に集る。二而して、その弟子たちの
二 中に、潔からぬ手、即ち洗はぬ手にて食事する者のあるを見たり。三パリサイ人および凡てのユダ
三 ヤ人は、古への人の言傳を固く執りて、懇ろに手を洗はねば食はず。四また市場より歸りては、まづ禊がざれば
四 食はず。このほか酒杯・鉢・銅の器を濯ぐなど多くの傳を承けて固く執りたり。五パリサイ人および學者らイエ
五 スに問ふ『なにゆゑ汝の弟子たちは、古への人の言傳に遵ひて歩まず、潔からぬ手にて食事するか』六イエス言
六 ひ給ふ『イザヤは汝ら僞善者につきて能く預言せり。「この民は口唇にて我を敬ふ、然れど、その心は我に遠ざか
七 る。七ただ徒らに我を拜む、人の訓誡を教とし教へて」と錄したり。八汝らは神の誡命を離れて人の言傳を固く
八 執る』九また言ひたまふ『汝等はおのれの言傳を守らんとて、能くも神の誡命を棄つ。一〇即ちモーセは「なんぢ
九 の父、なんぢの母を敬へ」といひ「父また母を詈る者は、必ず殺さるべし」といへり。一一然るに汝らは「人もし
一〇 父また母にむかひ我が汝に對して負ふ所のものは、コルバン即ち供物なりと言はば可し」と言ひて、一二そののち
一一

一三 人をして、父また母に事ふること勿らしむ。一四 かく汝らの傳へたる言傳によりて、神の言を空しうし、又おほく
一五 此の類の事をなしをるなり』一四 更に群衆を呼び寄せて言ひ給ふ『なんぢら皆われに聽きて悟れ。一五 外より人に入
一六 りて、人を汚し得るものなし、然れど人より出づるものは、これ人を汚すなり』一七 イエス群衆を離れて家に
一八 入り給ひしに、弟子たち其の譬を問ふ。一八 彼らに言ひ給ふ『なんぢらも然か悟なきか、外より人に入る物の、人
一九 を汚しえぬを悟らぬか、一九 これ心には入らず、腹に入りて厠におつるなり』かく凡ての食物を潔しとし給へり。
二〇 二〇 また言ひたまふ『人より出づるものは、これ人を汚すなり。二一 それ内より、人の心より、惡しき念いづ、即ち
二二 淫行・竊盜・殺人、二三 姦淫・慳貪・邪曲・詭計・好色・嫉妬・誹謗・傲慢・愚痴。二三 すべて此等の惡しき事は内
二四 より出でて人を汚すなり』

二四 イエス起ちて此處を去り、ツロの地方に往き、家に入りて人に知られじと爲給ひたれど、隱るること能は
二五 ざりき。二五 爰に穢れし靈に憑かれたる稚なき娘をもてる女、直ちにイエスの事をきき、來りて御足の許に平伏す。
二六 二六 この女はギリシヤ人にて、スロ・フェニキヤの生なり。その娘より惡鬼を逐ひ出し給はんことを請ふ。二七 イ
二七 エス言ひ給ふ『まづ子供に飽かしむべし、子供のパンをとりて小狗に投げ與ふるは善からず』二八 女こたへて言ふ
二九 『然り主よ、食卓の下の小狗も小供の食屑を食ふなり』二九 イエス言ひ給ふ『なんぢ此の言によりて〔安んじ〕
三〇 往け、惡鬼は既に娘より出でたり』三〇 女、家に歸りて見るに、子は寢臺の上に臥し、惡鬼は既に出でたり。
三一 三一 イエス又ツロの地方を去りて、シドンを過ぎ、デカポリスの地方を經て、ガリラヤの海に來り給ふ。三二

イ 提前五・八　ロ 太一三・一九　四・四五　西一・九　ハ 可九・二八　一・三・二〇　ニ（太一五・一五）　ホ 可六・五二、八・一　ヘ 羅一四・一一—二三を見よ　西二・一六　ト（路一一・四一 使一〇・一五、一一・一九）　チ 太一五・一八を見よ　リ 創六・五、八・二一　太一五・一九を見よ　ヌ 西三・五を見よ　ル 二四—三〇 太一五　・二一—二八　ヲ 弗二・一二　カ 羅九・四　ヨ 三一—三七 太一五　・二九—三一　タ 可七・二四　レ 太四・二五　可五・二〇　ソ 太一五・二九を見よ　ツ 太一四・一九を見よ　ア 太一五・三九　ネ 可五・二三を見よ　ナ（可八・二三）　ラ 可八・二三 約九・六　ウ 可八・二　井 撒三五・五　太一一　ヤ 一—九 太一五・三　ク 可一・四五　ケ（可六・三六、三七）　フ 太一四・一九　ヲ 太一五・三七を見よ　エ 王下四・四三　ユ 約八・六　ヨ 太一四・一九を見よ　ワ 弗二・一二　タ 太一五・二八　レ 太一五・一九を見よ　ソ 太一五・二九を見よ　ツ 太一四・一九を見よ　ア 太一五・三九　ネ 可五・二三を見よ　ナ（可八・二三）　ラ 可八・二三 約九・六

ウ 可八・二　井 撒三五・五　太一一　ヤ 一—九 太一五・三　ク 可一・四五　ケ（可六・三六、三七）　フ 太一四・一九　ヲ 太一五・三七を見よ　エ 王下四・四三　ユ 約八・六　ヨ 太一四・一九を見よ　ワ 弗二・一二　タ 太一五・二八　レ 太一五・一九を見よ　ソ 太一五・二九を見よ　ツ 太一四・一九を見よ　ア 太一五・三九　ネ 可五・二三を見よ　ナ（可八・二三）　ラ 可八・二三 約九・六

人々、耳聾にして物言ふこと難き者を連れ來りて、之に手をおき給はんことを願ふ。三三 イエス群衆の中より、
三四 彼をひとり連れ出し、その兩耳に指をさし入れ、また唾して其の舌に觸り、三四 天を仰ぎて嘆じ、その人に對ひて
三五 三五 『エパタ』と言ひ給ふ、ひらけよとの意なり。三六 斯てその耳ひらけ、舌の縛ただちに解け、正しく物いへり。三六
三七 三七 イエス誰にも告ぐなと人々を戒めたまふ。然れど戒むるほど反つて愈々言ひ弘めたり。三七 また甚だしく打驚きて
二一 言ふ『かれの爲しし事は皆よし、聾者をも聞えしめ、啞者をも物いはしむ』

第八章

一 その頃また大なる群衆にて食ふべきものなかりしかば、イエス弟子たちを召して言ひ給ふ、二『わ
三 れ此の群衆を憫む、既に三日われと偕にをりて食ふべき物なし。三 飢えしままにて、其の家に歸ら
四 しめば、途にて疲れ果てん。其の中には遠くより來れる者あり』四 弟子たち答へて言ふ『この寂しき地にては、
五 何處よりパンを得て、この人々を飽かしむべき』五 イエス問ひ給ふ『パン幾個あるか』答へて『七つ』といふ。
六 六 イエス群衆に命じて地に坐せしめ、七つのパンを取り、謝して之を裂き、弟子たちに與へて群衆の前におかし
七 む。弟子たち乃ちその前におく。七 また小き魚すこしばかりあり、祝して之をも、その前におけと言ひ給ふ。
八 八 人々、食ひて飽き、擘きたる餘を拾ひしに、七つの籃に滿ちたり。九 その人おほよそ四千人なりき。イエス彼
一〇 らを歸し、一〇 直ちに弟子たちと共に舟に乘りて、ダルマヌタの地方に往き給へり。
一一 一一 パリサイ人いで來りて、イエスと論じはじめ、之を試みて天よりの徴をもとむ。一二 イエス心に深く歎じて
一二 言ひ給ふ『なにゆゑ今の代は徴を求むるか、誠に汝らに告ぐ、徴は今の代に斷えて與へられじ』一三 斯て彼らを離

れ、また舟に乗りて彼方に往き給ふ。

一四 弟子たちパンを携ふることを忘れ、舟には唯一つの他パンなかりき。一五 イエス彼らを戒めて言ひたまふ
一六 『慎みてパリサイ人のパンだねと、ヘロデのパンだねとに心せよ』一六 弟子たち互に、これはパン無き故ならんと
一七 語り合ふ。一七 イエス知りて言ひたまふ『何ぞパン無き故ならんと語り合ふか、未だ知らぬか、悟らぬか、汝らの
一八 心なほ鈍きか。一八 目ありて見ぬか、耳ありて聽かぬか。又なんぢら思ひ出でぬか、一九 五つのパンを擘きて、五千
二〇 人に與へし時、その餘を幾筐ひろひしか』弟子たち言ふ『十二』二〇『七つのパンを擘きて四千人に與へし時、その
二一 餘を幾籃ひろひしか』弟子たち言ふ『七つ』二一 イエス言ひたまふ『未だ悟らぬか』
二二 二二 彼ら遂にベツサイダに到る。人々、盲人をイエスに連れ來りて、觸り給はんことを願ふ。二三 イエス盲人の
二四 手をとりて、村の外に連れ往き、その目に唾し、御手をあてて『なにか見ゆるか』と問ひ給へば、二四 見上げて言
二五 ふ『人を見る、それは樹の如き物の歩くが見ゆ』二五 また御手をその目にあて給へば、視凝めたるに、癒えて凡て
二六 のもの明かに見えたり。二六 斯て『村にも入るな』と言ひて、その家に歸し給へり。

二七 二七 イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出でゆき、途にて弟子たちに問ひて言ひたまふ『人々
二八 二九 は我を誰と言ふか』二八 答へて言ふ『バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者の一人』二九 また問ひ給ふ
三〇 『なんぢらは我を誰と言ふか』ペテロ答へて言ふ『なんぢはキリストなり』三〇 イエス己がことを誰にも告ぐなと
三一 彼らを戒め給ふ。三一 斯て人の子の必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・學者らに棄てられ、かつ殺され、三日

イ太一六・五　ロ太一三・三三を見よ　太一五・一—九　後一二・一六、一七　ハ太一四・一（太二一二　ニ太一六・六　ホ太一六・七　ヘ可六・五二、八・二一　ト可一六・一四　チ太一四・一七—二一　可六・四一—四四　路九・一三—一七　約六・九—一三　リ太一四・二〇を見よ　ヌ太一五・三四—三八　可八・五—九　ル太一五・三七を見よ　ヲ可六・五二、八・一七　ワ太一一・二一を見よ　カ可三・一〇を見よ　ヨ（可七・三三）　タ可七・三三　レ可五・三三を見よ　ソ可八・二三　ツ（太八・四）　ネ二七—二九　太一六　・一三—一六　路九　・一八—二〇　ナ太一六・一三　ラ太一四・二を見よ　ム馬四・五　太一六・一四を見よ　ウ太一六・一六を見よ　ノ三一—九・一　太一六・二—二八　太一九・二二—二七　オ太一六・一を見よ

三二 の後に甦へるべき事を教へはじめ、三二 此の事をあらはに語り給ふ。爰にペテロ、イエスを傍にひきて戒め出でた
三三 れば、三三 イエス振反りて弟子たちを見、ペテロを戒めて言ひ給ふ『サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思
三四 はず、反つて人のことを思ふ』三四 斯て群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言ひたまふ『人もし我に從ひ來らんと思
三五 はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に從へ。三五 己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我が爲また福音
三六 の爲に己が生命をうしなふ者は、之を救はん。三六 人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、何の益あらん、
三七 三八 人その生命の代に何を與へんや。三八 不義なる、罪深き今の代にて、我または我が言を恥づる者をば、人の子も
また、父の榮光をもて、聖なる御使たちと共に來らん時に恥づべし』

第九章

一 また言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、此處に立つ者のうちに、神の國の、權能をもて來るを見る
までは、死を味はは ぬ者どもあり』

二 二 六日の後、イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、人を避けて高き山に登りたまふ。斯て彼
三 らの前にて其の狀かはり、三 其の衣かがやきて甚だ白くなりぬ、世の晒布者も爲し得ぬほど白し。四 エリヤ、モ
四 ーセともに彼らに現れて、イエスと語りゐたり。五 ペテロ差出でてイエスに言ふ『ラビ、我らの此處に居るは善
五 し。われら三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤのためにせん』六 彼等いたく
六 懼れたれば、ペテロ何と言ふべきかを知らざりしなり。七 斯て雲おごり、彼らを覆ふ。雲より聲出づ『これは我
七 が愛しむ子なり、汝ら之に聽け』八 弟子たち急ぎ見回すに、イエスと己らとの他には、はや誰も見えざりき。

ク約一八・二〇（約一〇・二四、一一・一四、一六・二五、二九）　ケ寮五五・八、九　約五・三〇　ヤ（歌三・一九）　マ太四・一〇を見よ　ケ寮五五・八、九　約五・三〇　フ太一〇・三八を見よ　コ太一〇・三九を見よ　エ歸九・二六（太二一〇　・三三　路一二・九　種一・一六　提後一・八、一一・一二　來一一・一六）　テ太八・二〇を見よ　ア太一六・二七を見よ　サ歌一四・一〇　キ（約壮二・二八）　ユ路九・二七　メ太二四・三〇、二五　・三一　路二一・一八　ミ二一・八　太一七・一　ヒ太二三・七を見よ　モ詩八四・一〇　セ太一七・四　路九・三六　シ可五・三七を見よ　エ太二八・三を見よ　ヒ太二三・七を見よ　ロ太三・二七を見よ　ハ太一七・五を見よ　ス（歌一・一七）　イ使徒一・一七、一八　ヤ路九・二八—三六

九 山をくだる時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦へるまでは、見しことを誰にも語るなと戒め給ふ。
一〇 彼ら此の言を心にとめ『死人の中より甦へる』とは、如何なる事ぞと互に論じ合ふ。一一 斯てイエスに問ひて言
一二 ふ『學者たちは、何故エリヤまづ來るべしと言ふか』一三 イエス言ひ給ふ『實にエリヤ先づ來りて、萬の事をあら
たむ。然らば人の子につき、多くの苦難を受け、かつ蔑せらるる事の錄されたるは何ぞや。一三 されど我なんぢら
に告ぐ、エリヤは既に來れり。然るに彼に就きて錄されたる如く、人々心のままに之を待へり』

一四 相共に弟子たちの許に來りて、大なる群衆の之を環り、學者たちの之と論じゐたるを見給ふ。一五 群衆みな
一六 イエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて禮をなせり。一六 イエス問ひ給ふ『なんぢら何を彼らと論ず
一七 るか』一七 群衆のうちの一人こたふ『師よ、啞の靈に憑かれたる我が子を御許に連れ來れり。一八 靈いづこにても彼
に憑けば、痙攣け泡をふき、齒をくひしばり、而して痩せ衰ふ。御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど能た
一九 はざりき』一九 爰に彼らに言ひ給ふ『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕にをらん、何時まで汝らを忍ば
二〇 ん。その子を我が許に連れきたれ』二〇 乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、靈ただちに之を痙攣けたれば、地
二一 に倒れ、泡をふきて轉び廻る。二一 イエスその父に問ひ給ふ『いつの頃より斯くなりしか』父いふ『をさなき時よ
二二 りなり。二二 靈しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡さんとせり。然れど汝なにか爲し得ば、我らを憫みて
二三 助け給へ』二三 イエス言ひたまふ『爲し得ばと言ふか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』二四 その子の父
二四 ただちに叫びて言ふ『われ信ず、信仰なき我を助け給へ』二五 イエス群衆の走り集るを見て、穢れし靈を禁めて言

イ九—一三　太一七。　路一・一六、一七　チ詩二二・一—一八　ヌ可一四・三三、一六　ル太一二・二二　ヲ眞は引裂くの意。
ロ太八・四を見よ　ホ可九・三一　リ一四—二八　太一七　ワ太一三・五八　可一
ハ太一一・一四を見よ　ヘ太一六・二二　太二六・二四を見よ　ト路二三・一一　詩二　ル太一一・九—一四　ヲ路九　カ可一・二六　路九。　ヨ太九・二八・二九、一〇　可五・一七・二〇　タ來一二・二三　路一七・六　約一・三六、一一・二三　路一七・六　約一・四・九、四〇　使一四・九、四二

二六 ひたまふ『啞にて耳聾なる靈よ、我なんぢに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』二六 靈さけびて甚だしく
二七 痙攣けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言ふ。二七 イエスその手を執
二八 りて起し給へば立てり。二八 イエス家に入り給ひしとき、弟子たち窃に問ふ『我等いかなれば逐ひ出し得ざりし
二九 か』二九 答へ給ふ『この類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり』
三〇 三〇 此處を去りて、ガリラヤを過ぐ。イエス人の此の事を知るを欲し給はず。三一 これは弟子たちに教をなし、
三一 かつ『人の子は人々の手にわたされ、人々これを殺し、殺されて、三日ののち甦へるべし』と言ひ給ふが故な
三二 り。三二 弟子たちは、その言を悟らず、また問ふ事を恐れたり。
三三 三三 斯てカペナウムに到る。イエス家に入りて、弟子たちに問ひ給ふ『なんぢら途すがら何を論ぜしか』三四
三四 弟子たち默然たり、これは途すがら、誰か大ならんと、互に爭ひたるに因る。三五 イエス坐して、十二弟子を呼び、
三五 之に言ひたまふ『人もし頭たらんと思はば、凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし』三六 斯てイエス
三六 幼兒をとりて、彼らの中におき、之を抱きて言ひ給ふ、三七『おほよそ我が名のために斯る幼兒の一人を受くる者は、
三七 我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣しし者を受くるなり』
三八 三八 ヨハネ言ふ『師よ、我らに從はぬ者の、御名によりて惡鬼を逐ひ出すを見しが、我らに從はぬ故に、之を
三九 止めたり』三九 イエス言ひたまふ『止むな、我が名のために能力ある業をおこなひ、俄に我を譏り得る者なし。
四〇 四〇 我らに逆はぬ者は、我らに附く者なり。四一 キリストの者たるによりて、汝らに一杯の水を飲ませる者は、我ま
四一

レ可七・一七　（可二・一）　ソ太一七・一九　ツ弟六・一八　ネ三〇—三二　太一七　路九。　ラ可三・一九　ム（路二・五〇、九・四五、一八・三四　約一二・一六）　ウ三三—三七　太一八・二一を見よ　ヰ太一六・二一　路九・二二・二三　路九。　ノ路二二・二四（可九・三七—四四）　オ太二〇・二六を見よ　ク太一〇・四〇を見よ　ヤ三八—四〇　路九、四九、五〇　ケ哥四一二・三　フ太一二・三〇を見よ　コ太一〇・四二　マ（路一一・二七—二九）　サ可一・一四　路一七・六　約一・一三　カ可一・二六　路九。　ヨ（太九・二八・二九、一〇）　タ（來一二・二三）　路一七・六　約一・四・九、四〇　使一四・九、四二

四二 ことに汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし。四二また我を信ずる此の小き者の一人を躓かする者は、寧ろ大な
四三 る碾臼を頸に懸けられて、海に投げ入れられんかた勝れり。四三もし汝の手なんぢを躓かせば、之を切り去れ、
四四 四五 不具にて生命に入るは、兩手ありて、ゲヘナの消えぬ火に往くよりも勝るなり。〔四四なし〕四五もし汝の足なんぢを躓か
四六 四七 せば、之を切り去れ、蹇跛にて生命に入るは、兩足ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。〔四六なし〕四七もし
汝の眼なんぢを躓かせば、之を拔き出だせ、片眼にて神の國に入るは、兩眼ありてゲヘナに投げ入れらるるより
四八 四九 五〇 も勝るなり。四八『彼處にては、その蛆つきず、火も消えぬなり』四九それ人は、みな火をもて鹽つけらるべし。五〇鹽
は善きものなり、然れど鹽もし其の鹽氣を失はば、何をもて之に味つけん。汝ら心の中に鹽を保ち、かつ互に和
くべし』

第一〇章

一 一イエス此處をたちて、ユダヤの地方およびヨルダンの彼方に來り給ひしに、群衆また御許に集
二 ひたれば、常のごとく教へ給ふ。二時にパリサイ人ら來り試みて問ふ『人その妻を出すはよきか』
三 四 三答へて言ひ給ふ『モーセは汝らに何と命ぜしか』四彼ら言ふ『モーセは離縁狀を書きて出すことを許せり』
五 六 五イエス言ひ給ふ『なんぢらの心、無情によりて、此の誡命を錄ししなり。六然れど開闢の初より「人を男と女
七 八 とに造り給へり」七「斯る故に人はその父母を離れて、八二人のもの一體となるべし」然ればはや二人にはあら
九 一〇 ず、一體なり。九この故に神の合せ給ふものは、人これを離すべからず』一〇家に入りて弟子たち復この事を問
一一 一二 ふ。一一イエス言ひ給ふ『おほよそ其の妻を出して、他に娶る者は、その妻に對して姦淫を行ふなり。一二また妻も

イ太一八・六　路一七　ニ太五・二二を見よ　ト太五・二二を見よ　ル太五・一三　路一四・一一　猶前五・一三　六、三四、一二・　レ太一九・八　・五　猶五・三〇
・二（哥前八・一二）　ホ太三・一二、二五・　チ猶六六・二四　・三四　カ一—一二　太一九・　三五、一四・四九　ソ可一三・一九　彼後　ナ太五・二二を見よ
ロ太一七・二七を見よ　四一を見よ　リ太三・一二、二五・　ヲ西四・六　一—九　大四・二三を見よ　三・四　ラ（哥前七・一一
ハ太五・三〇、一八・　ヘ太五・二九、一八・　四一を見よ　ワ（可九・三四）　羅一　ヨ可一・二一、二・一　二六・五五　ツ創一・二七、五・二　一三）
八　九　ヌ（利二・一三）　二・一八　哥後一三　三、四・二、六・二、　タ申二四・一—三　ネ創二・二四　但一九

し其の夫を棄てて他に嫁がば、姦淫を行ふなり』
一三 一三イエスの觸り給はんことを望みて、人々幼兒らを連れ來りしに、弟子たち禁めたれば、一四イエス之を見、
一五 いきどほりて言ひたまふ『幼兒らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯のごとき者の國なり。一五誠に汝らに告
一六 ぐ、凡そ幼兒の如くに神の國をうくる者ならずば、之に入ること能はず』一六斯て幼兒を抱き、手をその上におき
て祝し給へり。
一七 一七イエス途に出で給ひしに、一人はしり來り跪づきて問ふ『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なに
一八 を爲すべきか』一八イエス言ひ給ふ『なにゆゑ我を善しと言ふか、神ひとりの他に善き者なし。一九誡命は汝が知る
一九 ところなり「殺すなかれ」「姦淫するなかれ」「盜むなかれ」「僞證を立つるなかれ」「欺き取るなかれ」「汝の父と
二〇 母とを敬へ」』二〇彼いふ『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』二一イエス彼に目をとめ、愛しみて言ひ給ふ『な
二一 んぢ尚ほ一つを缺く、往きて汝の有てる物をことごとく賣りて、貧しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん。且
二二 きたりて我に從へ』二二この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。
二三 二四 二三イエス見回して弟子たちに言ひたまふ『富ある者の神の國に入るは如何に難いかな』二四弟子たち此の御言
二五 に驚く。イエスまた答へて言ひ給ふ『子たちよ、神の國に入るは、如何に難いかな、二五富める者の神の國に入る
二六 よりは、駱駝の針の孔を通るかた、反つて易し』二六弟子たち甚く驚きて互に言ふ『さらば誰か救はるる事を得
二七 ん』二七イエス彼らに目を注めて言ひたまふ『人には能はねど、神には然らず、夫れ神は凡ての事をなし得るな

ム一三—一六　太一九　一四　路一八・一七　・一六—三〇　路一　・一八（徒二〇・三二）　申五・一六—二〇　三・五）　キ可一〇・二一を見よ
・一三—一五　路一　（哥前一四・二〇　彼　八・一八—三〇　弗一・一八　彼前一　フ太一九・二〇　エ太六・二〇　ユ創一八・一四　耶三
八・一五—一七　前二・二）　ク可一・四〇を見よ　・四）　コ可一〇・二七　路二　テ太一九・二三を見よ　二・一七、二七　路
ウ太五・三を見よ　ノ可九・三六　ヤ太二五・三四を見よ　マ羅一三・九　〇・一七、二二・六　ア可一・二七を見よ　一・三七
丼太一八・三、一九・　オ一七—二一　太一九　路一〇・二五、一八　ケ出二〇・一二—一六　一　約一・四二（可　サ太一九・二四

二八 り』二八ペテロ、イエスに對ひて『我らは一切をすてて汝に從ひたり』と言ひ出でたれば、二九イエス言ひ給ふ、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或は兄弟、あるひは姉妹、或は父、或は母、或は子、或
三〇 は田畑をすつる者は、三〇誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。即ち家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害
三一 と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし・三一然れど多くの先なる者は後に、後なる者は先に
なるべし』

三二 三二エルサレムに上る途にて、イエス先だち往き給ひしかば、弟子たち驚き、隨ひ往く者ども懼れたり・イエ
三三 ス再び十二弟子を近づけて、己が身に起らんとする事どもを語り出で給ふ、三三『視よ、我らエルサレムに上る・
三四 人の子は祭司長・學者らに付されん・彼ら死に定めて、異邦人に付さん・三四異邦人は嘲弄し、唾し、鞭ち、遂に
殺さん、斯て彼は三日の後に甦へるべし』

三五 三五爰にゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に來りて言ふ『師よ、願くは我らが何にても求むる所を爲したま
三六 へ』三六イエス言ひ給ふ『わが汝らに何を爲さんことを望むか』三七彼ら言ふ『なんぢの榮光の中にて、一人をその
三八 右に、一人をその左に坐せしめ給へ』三八イエス言ひ給ふ『なんぢらは求むる所を知らず、汝等わが飲む酒杯を飲
三九 み、我が受くるバプテスマを受け得るか』三九彼等いふ『得るなり』イエス言ひ給ふ『なんぢら我が飲む酒杯を飲
四〇 み、また我が受くるバプテスマを受くべし・四〇然れど我が右左に坐することは、我の與ふべきものならず、ただ
四一 備へられたる人こそ與へらるるなれ』四一十人の弟子これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤ほり出でたれ

イ 太四・二〇—二二　ハ（種前四・八）　ト 三二—三四 太二〇　ヌ 可八・三一、九・一　（太一六・二一 可九　カ 路一八・四一）　ツ 太二六・三五
（詩三・八）　ニ（代下二五・九 詩四・七）　ル 太二六・六七、二七　ヨ（太一九・二八）　ネ 太二〇・二三を見よ
ロ 太一九・二九 路一　チ 可一・二七を見よ　タ（詩一八・三六）　ナ（太一三・一一）
ハ・二九、三〇（太六・三三）　ホ 太一二・三二を見よ　ヘ 太一九・三〇を見よ　リ 路一八・三一

ヤ（路一八・三五、一九・一）　レ 太二〇・二二を見よ　ソ 路一二・五〇
ユ 太二一・二を見よ　メ 太二一・七を見よ

ラ 四二—四五（路二二・二五—二七）　ウ 太二〇・二七を見よ　ヲ 詩九・一九—二三　ク 四六—五二 太二〇　ケ 太九・二七を見よ　コ 可一〇・四七　サ 太九・二二を見よ
ム 太二〇・二六を見よ　ノ 太二〇・二八を見よ　井 太二〇・二八を見よ　マ 可一・二四を見よ　フ 路二九・一三　エ 太九・二を見よ　キ 一—一〇 太二一・
（可九・三五 路九・四八）　オ 太二〇・二八を見よ　ヤ 路一八・三五、一九・一　ハ 約二〇・一六（太九・二八）　ア 約二〇・一六（太九・三八）

四二 ば、四二イエス彼らを呼びて言ひたまふ『異邦人の君と認めらるる者の、その民を宰どり、大なる者の、民の上に
四三 權を執ることは、汝らの知る所なり・四三然れど汝らの中にては然らず、反つて大ならんと思ふ者は、汝らの役者
四四 となり、四四頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし・四五人の子の來れるも、事へらるる爲にあらず、反つ
四五 て事ふることをなし、又おほくの人の贖償として己が生命を與へん爲なり』

四六 四六斯て彼らエリコに到る・イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリコを出でたまふ時、テマイの子
四七 バルテマイといふ盲目の乞食、路の傍に坐しをりしが、四七ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言ふ『ダビデ
四八 の子イエスよ、我を憫みたまへ』四八多くの人かれを禁めて默さしめんとしたれど、增々叫びて『ダビデの子よ、
四九 我を憫みたまへ』と言ふ・四九イエス立ち止りて『かれを呼べ』と言ひ給へば、人々盲人を呼びて言ふ『心安か
五〇 れ、起て、なんぢを呼びたまふ』五〇盲人うはぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、五一イエス答へ
五一 て言ひ給ふ『わが汝に何を爲さんことを望むか』盲人いふ『わが師よ、見えんこととなり』五二イエス彼に『ゆけ、
汝の信仰なんぢを救へり』と言ひ給へば、直ちに見ることを得、イエスに從ひて途を往けり・

第一一章

一 一彼らエルサレムに近づき、オリブ山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに到りし時、イエス二人の弟
二 子を遣さんとして言ひ給ふ、二『むかひの村にゆけ、其處に入らば、頓て人の未だ乘りたることなき
三 驢馬の子の繫ぎあるを見ん、それを解きて牽き來れ。三誰かもし汝らに「なにゆゑ然するか」と言はば「主の用
四 なり、彼ただちに返さん」といへ』四弟子たち往きて、門の外の路に驢馬の子の繫ぎあるを見て解きたれば、

五 其處に立つ人々のうちの或者『なんぢら驢馬の子を解きて何とするか』と言ふ。六 弟子たちイエスの告げ給ひ
六 し如く言ひしに、彼ら許せり。七 斯て弟子たち驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上に置きたれ
七 ば、イエス之に乗り給ふ。八 多くの人は己が衣を、或人は野より伐り取りたる樹の枝を途に敷く。九 かつ前に往
八九 き後に従ふ者ども呼はりて言ふ、『ホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者』一〇 讃むべきかな、今し來る
一〇 我らの父ダビデの國。『いと高き處にてホサナ』一一 遂にエルサレムに到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや
一一 暮に及びたれば、十二弟子と共にベタニヤに出で往きたまふ。

一二 一二 あくる日かれらベタニヤより出で來りし時、イエス飢ゑ給ふ。一三 遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得
一三 んと其のもとに到り給ひしに、葉のほかに何をも見出し給はず、是は無花果の時ならぬに因る。一四 イエスその樹
一四 に對ひて言ひたまふ『今より後いつまでも、人なんぢの果を食はざれ』弟子たち之を聞けり。

一五 一五 彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて賣買する者どもを逐ひ出し、兩替する者の臺、鴿を
一六 賣るものの腰掛を倒し、一六 また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給はず。一七 かつ敎へて言ひ給ふ『わが家
一七 は、もろもろの國人の祈の家と稱へらるべし』と錄されたるにあらずや、然るに汝らは之を「强盜の巢」となせ
一八 り』一八 祭司長・學者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の敎に驚きたれば、彼
一九 を懼れしなり。

一九 一九 夕になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給ふ。

イ七—一〇 詩一一二・二一・九　ロ 詩九・九　ハ 太二一・九　ニ 詩一一八・二六 太 ホ 繁九・七 ヘ 詩一四八・一 ト 太二一・一二 チ 太二一・一七　リ 一二—一四 二一〇—二四・一二 太二一・一八 ヌ 來四・一五 ル 一五—一八 太二一　ヲ 出三〇・一三—一五 中一四・二六　ワ 繁五六・七 カ 耶七・一一 ヨ 可一二・一四 太二一・一九 詩七・一　タ 太七・二八を見よ レ 路二一・三七 太二一・一七 可一一

二〇 二〇 彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。二一 ペテロ思ひ出して、イエスに言ふ『ラ
二一 ビ見給へ、詛ひ給ひし無花果の樹は枯れたり』二二 イエス答へて言ひ給ふ『神を信ぜよ。二三 誠に汝らに告ぐ、人も
二二 し此の山に「移りて海に入れ」と言ふとも、其の言ふところ必ず成るべしと信じて、心に疑はずば、その如く成
二三 るべし。二四 この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。二五 また立ちて祈
二四 るとき、人を怨むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給はん爲なり』〔二六〕*
二五 二六 かれら又エルサレムに到る。イエス宮の内を歩み給ふとき、祭司長・學者・長老たち御許に來りて、二八
二六 二七 『何の權威をもて此等の事をなすか、誰が此等の事を爲すべき權威を授けしか』と言ふ。二九 イエス言ひ給ふ『わ
二七 二八 れ一言、なんぢらに問はん、答へよ、然らば我も何の權威をもて、此等の事を爲すかを告げん。三〇 ヨハネのバプ
二九 テスマは、天よりか、人よりか、我に答へよ』三一 彼ら互に論じて言ふ『もし天よりと言はば「何故かれを信ぜざ
三〇 三一 りし」と言はん。三二 然れど人よりと言はんか……』彼ら群衆を恐れたり、人みなヨハネを實に預言者と認めたれ
三一 三二 ばなり。三三 遂にイエスに答へて『知らず』と言ふ。イエス言ひ給ふ『われも何の權威をもて此等の事を爲すか、
三二 汝らに告げじ』

第一二章

一 一 イエス譬をもて彼らに語り出で給ふ『ある人、葡萄園を造り、籬を環らし、酒槽の穴を掘り、櫓
二 をたて、農夫どもに貸して、遠く旅立せり。二 時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんとて、
三 僕をその許に遣しに、三 彼ら之を執へて打ちたたき、空手にて歸らしめたり。四 又ほかの僕を遣しに、その

五 首に傷つけ、かつ辱しめたり。五また他の者を遣ししに、之を殺したり。又ほかの多くの僕をも、或は打ち或は
六 殺したり。六なほ一人あり、即ち其の愛しむ子なり「わが子は敬ふならん」と言ひて、最後に之を遣ししに、
七八 七かの農夫ども互に言ふ「これは世嗣なり、いざ之を殺さん、然らばその嗣業は、我らのものとなるべし」八乃
九 ち執へて之を殺し、葡萄園の外に投げ棄てたり。九然らば葡萄園の主、なにを爲さんか、來りて農夫どもを亡ぼ
一〇 し、葡萄園を他の者どもに與ふべし。一〇汝ら聖書に「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる。一一こ
一一 れ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とある句をすら讀まぬか』一二ここに彼等イエスを執へんと
思ひたれど、群衆を恐れたり、この譬の己らを指して言ひ給へるを悟りしに因る。遂にイエスを離れて去り往け
り。

一三 一三かくて彼らイエスの言尾をとらへて陷入れん爲に、パリサイ人とヘロデ黨との中より、數人を御許に遣
一四 す。一四その者ども來りて言ふ『師よ、我らは知る、汝は眞にして、誰をも憚りたまふ事なし、人の外貌を見ず、
眞をもて神の道を教へ給へばなり。我ら貢をカイザルに納むるは、宜きか、惡しきか、納めんか、納めざらん
一五 か』一五イエス其の詐僞なるを知りて『なんぞ我を試むるか、デナリを持ち來りて我に見せよ』と言ひ給へば、
一六 彼ら持ち來る。イエス言ひ給ふ『これは誰の像、たれの號なるか』『カイザルのなり』と答ふ。一七イエス言ひ
給ふ『カイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』彼らイエスに就きて甚だ怪しめり。
一八 一八また復活なしと云ふサドカイ人ら、イエスに來り問ひて言ふ、一九『師よ、モーセは、人の兄弟もし子なく妻

イ 來一一・三二—三九　ロ 來一一・一二　ハ 使一一・二四—三一　來五・五—七　ニ 詩一一八・二二、二
ホ（太二二・四六可一一・一八 路二〇・一九 詩七・一、三〇、四四）　ヘ 太二二・二二　ト 一三—一七 太二二 路二〇・一五—二二
チ 路一一・五四　リ 太二二・一六を見よ　ヌ（路二二・二八を見よ）　ル 太一八・二八を見よ　ヲ 太二二・二一を見よ　カ 太一〇・二六 路一一・六
ワ 傳五・四、五 馬三・七　ヨ 一八—二七 太二二 ・二三—三三 路二〇・二七—三八　タ 徳二二・八 レ 申二五・五
ソ 創三八・八 馬一一・一四 詩三一・二一　ツ 創一八・一四 詩三・二八、八・二二〇、一八・二〇（可一〇・一一）　ネ 約五・二八 哥創六・一四

ナ 哥前一五・四二—四四、四九、五二　ラ 路二〇・三七　ム 出三・六 使七・三二　來一一・二六　ウ 太二二・三二 路二〇・三八　ヰ 二八—三四 太二二 ・三四—四〇（路一〇・二五—二八、二〇・三九、四〇）　ノ 路二〇・三九（太二二・三四）　オ 申六・四（路一一・一九）　ク（雅二・一九）　ヤ 申六・五、一〇・一　マ 利一九・一八 羅一三・九 加五・一四　ケ（太七・一二）　フ 可一二・二九　コ 申四・三五、三九 箴四五・五、六・一四、二一、四六・九　エ 哥創一五・二二 何六・六 來六・六—八 太九・一三、一二・七　ア 三五—三七 太二二 ・四一—四六 路二〇・四一—四四　サ 太二六・五五 可一四・四九 路一九・四　デ 太二二・四六を見よ　ヘ 太二二・一六を見よ　ト 一三—一七 太二二 路二〇・一五—二二　チ 路一一・五四　リ 太二二・一六を見よ　ヌ（路二二・二八を見よ）　ル 太一八・二八を見よ　ヲ 太二二・二一を見よ　カ 太一〇・二六 羅一・六　ヨ 一八—二七 太二二 ・二三—三三 路二〇・二七—三八　タ 徳二二・八 レ 申二五・五　ツ 創三八・八 馬一一・一四 詩三一・二一　ネ 約五・二八 哥創六・一四

二〇 を遺して死なば、その兄弟、かれの妻を娶りて、兄弟のために嗣子を擧ぐべしと、我らに書き遺したり。二〇爰に
二一 七人の兄弟ありて、兄、妻を娶り、嗣子なくして死に、二一第二の者その女を娶り、また嗣子なくして死に、第三の
二二 者もまた然なし、二二七人とも嗣子なくして死に、終には其の女も死にたり。二三復活のとき彼らみな甦へらんに、
二三 この女は誰の妻たるべきか、七人これを妻としたればなり』二四イエス言ひ給ふ『なんぢらの誤れるは、聖書を
二四 も、神の能力をも、知らぬ故ならずや。二五人、死人の中より甦へる時は、娶らず、嫁がず、天に在る御使たちの
二五 如くなるなり。二六死にたる者の甦へる事に就きては、モーセの書の中なる柴の條に、神モーセに「われはアブラ
二六 ハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と告げ給ひし事あるを、未だ讀まぬか。二七神は死にたる者の神にあら
二七 ず、生ける者の神なり。なんぢら大に誤れり』

二八 二八學者の一人、かれらの論じをるを聞き、イエスの善く答へ給へるを知り、進み出でて問ふ『すべての誡命
二九 のうち、何か第一なる』二九イエス答へたまふ『第一は是なり「イスラエルよ聽け、主なる我らの神は唯一の主な
三〇 り。三〇なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡し、力を盡して、主なる汝の神を愛すべし」三一第二は是なり「おの
三一 れの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大なる誡命はなし』三二學者いふ『善きかな師よ「神は唯一にして他に
三二 神なし」と言ひ給へるは眞なり。三三「こころを盡し、智慧を盡し、力を盡して神を愛し、また己のごとく隣を愛す
三三 る」は、もろもろの燔祭および犧牲に勝るなり』三四イエスその聰く答へしを見て言ひ給ふ、『なんぢ神の國に遠か
三四 らず』此の後たれも敢てイエスに問ふ者なかりき。三五イエス宮にて敎ふるとき、答へて言ひ給ふ『なにゆゑ學者

三六 らはキリストをダビデの子と言ふか。三六ダビデ聖靈に感じて自らいへり「主わが主に言ひ給ふ、我なんぢの敵を
三七 汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」と。三七ダビデ自ら彼を主と言ふ、されば爭でその子ならんや』
三八 大なる群衆は喜びてイエスに聽きたり。三八イエスその教のうちに言ひたまふ『學者らに心せよ、彼らは長き
三九 衣を著て歩むこと、市場にての敬禮、三九會堂の上座、饗宴の上席を好み、四〇また寡婦らの家を呑み、外見をつく
四〇 りて長き祈をなす。その受くる審判は更に嚴しからん』

四一 四一イエス賽錢函に對ひて坐し、群衆の錢を賽錢函に投げ入れ
四二 しが、四二一人の貧しき寡婦きたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘ほどなり。四三イエス弟子たちを呼び
四三 寄せて言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽錢函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れた
四四 り。四四凡ての者は、その豐なる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料
をことごとく投げ入れたればなり』

第一三章

一 一イエス宮を出で給ふとき、弟子の一人いふ『師よ、見給へ、これらの石、これらの建造物、いか
二 に盛ならずや』二イエス言ひ給ふ『なんぢ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずして
は石の上に殘らじ』

三 三オリブ山にて宮の方に對ひて坐し給へるに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ窃に問ふ、四『われらに告
四 げ給へ、これらの事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何なる兆あるか』五イエ

イ 大九・二七を見よ　ニ 創一・三、四　ト 太二三・六　路一一　ヌ 約八・二〇　一〇・三〇、二一・　ヨ 路一九・四四
ロ 毋後二三・二　提後ホ 約一二・九　チ 路二〇・四七　ル 黃鈴貨 太一〇・二　カ 一一三七　四　タ 太二一・一を見よ
三・一六　機後一・　ヘ 三八—四〇　太二三　リ 四一—四四　路二一　九　一—五一　レ（太一七・二）
二一　一七　路二〇・　四五—四七　ヌ 一一—四　路二一・　ワ 路八・一三、一五・　五一—三六

一七 寒二六・三、四　ウ 太一〇・一七を見よ　一九—二二　路二　一二・二二　太二四　一九　ア 可一〇・六　一六・一七、一八　西
約一四・一　井 太二四・一四、二八　一・一三　羅二・七　來　一・二一　路二一　一〇・三二—三八　二八　多一・一〇
ラ 太一〇・一七　約貳　一九　西一・六、二　コ 太二四・一六　路二　一〇・三二—三八　默二・一〇　エ 路二三・二九を見よ　サ 路一七・二三　約貳七）
八　オ 路一二・一一　默二・一〇　ス 路一七・一五を見よ　ユ 太二四・二四
ム 太五・二二を見よ　ク 徒四・八、三一　三　太二四　テ 俱九・二六、一二・　キ 太七・一五を見よ　四・四八を見よ　約
ノ 一一—一三　太一〇　ヤ 來七・六　太二四・　ケ 詩二三・四—六　俱　フ 俱九・二七　太二四　（徒二〇・三〇　羅

一八・一七、一八　ツ 徒五・二六—三九
約參四・一
ネ 約八・二四を見よ
ナ 詩二七・一—三、四
六・一—三、一一、一二
ソ 耶二九・八　弗五・六

六 ス語り出で給ふ『なんぢら人に惑されぬやうに心せよ。六多くの者わが名を冒し來り「われは夫なり」と言ひて
七 多くの人を惑さん。七戰爭と戰爭の噂とを聞くとき懼るなな、斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。
八 八即ち「民は民に、國は國に逆ひて起たん」また處々に地震あり、饑饉あらん、これらは產の苦難の始なり。
九 九汝等みづから心せよ、人々なんぢらを衆議所に付さん。なんぢら會堂に曳かれて打たれ、且わが故により
一〇 て、司たち及び王たちの前に立てられん、これは證をなさん爲なり。一〇斯て禍音は先もろもろの國人に宣傳へら
一一 るべし。一一人々なんぢらを曳きて付さんとき、何を言はんと預じめ思ひ煩ふな、唯そのとき授けらるることを言
一二 へ、これ言ふ者は汝等にあらず聖靈なり。一二兄弟は兄弟を、父は子を死にわたし、子らは親たちに逆ひ立ちて死
一三 なしめん。一三又なんぢら我が名の故に凡ての人に憎まれん、然れど終まで耐へ忍ぶ者は救はるべし。
一四 一四「荒す惡むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば（讀むもの悟れ）その時ユダヤにをる者どもは、山
一五 に遁れよ。一五屋の上にをる者は、内に下るな。また家の物を取り出さんとて内に入るな。一六畑にをる者は上衣を
一六 取らんとて歸るな。一七其の日には孕りたる女と、乳を哺する女とは禍害なるかな。一八この事の、冬おこらぬやう
一七 に祈れ、一九その日は患難の日なればなり。神の萬物を造り給ひし開闢より今に至るまで、斯る患難はなく、また
一八 後にもなからん。二〇主その日を少くし給はずば、救はるる者、一人だになからん。然れど其の選び給ひし選民の
一九 爲に、その日を少くし給へり。二一其の時なんぢらに「視よ、キリスト此處にあり」「視よ、彼處にあり」と言ふ
二〇 者ありとも信ずな。二二僞キリスト・僞預言者ら起りて、徵と不思議とを行ひ、爲し得べくば、選民をも惑さんと

二三 するなり。二三汝らは心せよ、預じめ之を皆なんぢらに告げおくなり。
二四 二四其の時、その患難ののち、日は暗く、月は光を發たず。二五星は空より隕ち、*天にある萬象、震ひ動かん。
二六 二六其のとき人々、人の子の大なる能力と榮光とをもて、雲に乘り來るを見ん。二七その時かれは使者たちを遣し
二七 て、地の極より天の極まで、四方より、其の選民をあつめん。
二八 二八無花果の樹よりの譬を學べ、その枝すでに柔かくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。二九斯のごとく此等の
三〇 ことの起るを見ば、人の子すでに近づきて門邊にいたるを知れ。三〇誠に汝らに告ぐ、これらの事ことごとく成る
三一 まで、今の代は過ぎ逝くことなし。三一天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし。三二その日その時を
三二 知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給ふ。三三心して目を覺しをれ、汝等その
三三 時の何時なるかを知らぬ故なり。三四例へば家を出づる時その僕どもに權を委ねて、各自の務を定め、更に門守
三四 に、目を覺しをれと、命じ置きて遠く旅立したる人のごとし。三五この故に目を覺しをれ、家の主人の歸るは、夕
三五 か、夜半か、鷄鳴くころか、夜明か、いづれの時なるかを知らねばなり。三六恐らくは俄に歸りて、汝らの眠れる
三六 を見ん。三七わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覺しをれ』
三七

第一四章

一 一さて過越と除酵との祭の二日前となりぬ。祭司長・學者ら詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さん
二 と企てて言ふ、二『祭の間は爲すべからず、恐らくは民の亂あるべし』
三 三イエス、ベタニヤに在して、癩病人シモンの家にて食事の席につき居給ふとき、或女、價高き混なきナル

イ 彼後三・一七
ロ 番一・二五
ハ 彼後三・一〇
二 太一六・二七を見よ
但七・三一・一四可
ホ 提後二・一を見よ
ヘ 彼前四・七
ト 太二四・三三 雅五
チ 寒四〇・八
リ 太二四・三六（徒一・七）
ル 太二五・一三 路一
ヌ 太二五・一三 路一二・四〇、二一・三
ヲ 太二四・四二を見よ
可一三・三七
ワ（可一四・三〇）
カ 可六・四八（太一四・二五）
ヨ 雅一三・一一を見よ
タ 可一三・三五 彼前五・八
レ 一・二 太二六・二
ソ 出一二・一一 約一
ツ 太一二・一四を見よ
ネ 三—九 太二六・六
ラ 約一二・三（太二六・七）
ナ 太二一・一七を見よ
ム 太一八・二八を見よ
ウ 申一五・一一 太二六
井 約一九・四〇を見よ
ノ 太二六・一三
オ 一〇、一一 太二六
ク 約六・七・一
ヤ 一二・一六 太二六
ケ 申一六・五・六 路
マ 出一二・八 太二六
コ 默三・一〇
エ 路二二・一一 路二
フ 約一三・二三
テ 約一六・四
ア 一七—二一 太二六
サ 一二—二四 路二
キ 一二・一四、二一—二
ユ 箴前五・七（箴命）
メ 一・七—一九 路二
ミ 二・七—一三
シ 一四・六二
ス 一四・一
セ 一四・一八 西
タ（可一三・三五）
ヲ 太二四・四二を見よ
可一三・三七
ヨ 雅一三・一一を見よ
ソ 出一二・一一 約一
ツ 太一二・一四を見よ
ネ 三—九 太二六・六
ラ 約一二・三（太二六・七）
ナ 太二一・一七を見よ
ム 太一八・二八を見よ
ウ 申一五・一一 太二六
井 約一九・四〇を見よ
ノ 太二六・一三
オ 一〇、一一 太二六
ク 約六・七・一
ヤ 一二・一六 太二六
ケ 申一六・五・六 路
マ 出一二・八 太二六
コ 默三・一〇
エ 路二二・一一 路二
フ 約一三・二三
テ 約一六・四
ア 一七—二一 太二六
サ 一二—二四 路二
キ 一二・一四、二一—二
ユ 箴前五・七（箴命）
メ 一・七—一九 路二
ミ 二・七—一三
シ 一四・六二
ス 一四・一
セ 一四・一八 西
タ（可一三・三五）
ヲ 太二四・四二を見よ
可一三・三七
ヨ 雅一三・一一を見よ
ソ 出一二・一一 約一
ツ 太一二・一四を見よ
ネ 三—九 太二六・六
ラ 約一二・三（太二六・七）
ナ 太二一・一七を見よ

四 ドの香油の入りたる石膏の壺を持ち來り、その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり。四ある人々、憤ほりて互に言
五 ふ『なに故かく濫に油を費すか、五この油を三百デナリ餘に賣りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』
六 而して甚く女を咎む。六イエス言ひ給ふ『その爲すに任せよ、何ぞこの女を惱ますか、我に善き事をなせり。七
七 貧しき者は、常に汝らと偕にをれば、何時にても心のまゝに助け得べし、然れど我は常に汝らと偕にをらず。
八 八此の女は、なし得る限をなして、我が體に香油をそそぎ、預じめ葬りの備をなせり。九誠に汝らに告ぐ、
九 全世界、何處にても、福音の宣傳へらるる處には、この女の爲し事も記念として語らるべし』
一〇 一〇爰に十二弟子の一人なるイスカリオテのユダ、イエスを賣らんとて祭司長らの許にゆく。一一彼等これを聞
一一 きて喜び、銀を與へんと約したれば、ユダ如何してか機好くイエスを付さんと謀る。
一二 一二除酵祭の初の日、即ち過越の羔羊を屠るべき日、弟子たちイエスに言ふ『過越の食をなし給ふために、我
一三 らが何處に往きて備ふることを望み給ふか』一三イエス二人の弟子を遣さんとして言ひたまふ『都に往け、然らば
一四 水をいれたる瓶を持つ人、なんぢらに遇ふべし。之に從ひ往き、一四その入る所の家主に「師いふ、われ弟子らと
一五 共に過越の食を爲すべき座敷は何處なるか」と言へ。一五然らば調へ備へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に
一六 我らのために備へよ』一六弟子たち出で往きて都に入り、イエスの言ひ給ひし如くなるを見て過越の設備をなせ
り。
一七 一七日暮れてイエス十二弟子とともに往き、一八みな席に就きて食するとき言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、

一九 我と共に食する汝らの中の一人、われを賣らん』一九 弟子たち憂ひて一人一人『われなるか』と言ひ出でしに、
二〇 二〇イエス言ひたまふ『十二のうちの一人にて我と共にパンを鉢に浸す者は夫なり。二一 實に人の子は己に就きて錄
二一 されたる如く逝くなり。然れど人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを』
二二 二二彼ら食しをる時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子たちに與へて言ひたまふ『取れ、これは我が體
二三 なり』二三 また酒杯を取り、謝して彼らに與へ給へば、皆この酒杯より飲めり。二四 また言ひ給ふ『これは契約の我
二四 が血、おほくの人の爲に流す所のものなり。二五 誠に汝らに告ぐ、神の國にて新しきものを飲む日までは、われ
二五 葡萄の果より成るものを飲まじ』

二六 二六かれら讃美をうたひて後、オリブ山に出でゆく。

二七 二七イエス弟子たちに言ひ給ふ『なんぢら皆躓かん、それは「われ牧羊者を打たん、然らば羊、散るべし」と
二八 錄されたるなり。二八 然れど我よみがへりて後、なんぢらに先だちてガリラヤに往かん』二九 時にペテロ、イエスに
二九 言ふ『假令みな躓くとも我は然らじ』三〇 イエス言ひ給ふ『まことに汝に告ぐ、今日この夜、鷄ふたたび鳴く前
三〇 に、なんぢ三たび我を否むべし』三一 ペテロ力をこめて言ふ『われ汝とともに死ぬべき事ありとも汝を否まず』
三一 弟子たち皆かく言へり。

三二 三二彼らゲツセマネと名づくる處に到りし時、イエス弟子たちに言ひ給ふ『わが祈る間、ここに坐せよ』三三 斯
三三 てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出でて言ひ給ふ、三四『わが心いたく憂ひて死ぬばか
三四

イ詩四一・九 ロ太二六・二四 約一 七・二 ハ二二—二五 大二六 ニ二六—二九 路二 ホ太一四・一九を見よ 約六・三三—三五 ヘ來八・六—一三 ト利一七・一一 來九 チ來二五・六 リ尼八・一〇 詩四七 ヌ太二一・一を見よ ル二七—三一 太二六 ヲ詩八八・八 可一四 ワ可一六・七 カ詩二八・二六 路一 ヨ太二六・三四 タ可一四・六八、七二 約一三・三八 レ可一四・五〇 ソ三二—四二 太二六 路二 ツ約一八・一 ネ太一七・一 可五・三七 ナ可九・一五、一六・五八 ラ詩五三・四—六 太二七・四六

三五 りなり、汝ら此處に留りて目を覺しをれ』三五 少し進みゆきて、地に平伏し、若しも得べくば此の時の己より過
三六 ぎ往かんことを祈りて言ひ給ふ、三六『*アバ父よ、父には能はぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給へ。されど
三七 我が意のままを成さんとにあらず、御意のままを成し給へ』三七 來りて、その眠れるを見、ペテロに言ひ給ふ『シ
三八 モンよ、なんぢ眠るか、一時も目を覺しをること能はぬか。三八 なんぢら誘惑に陷らぬやう目を覺し、かつ祈れ。
三九 實に心は熱すれども肉體よわきなり』三九 再びゆき、同じ言にて祈り給ふ。四〇 また來りて彼らの眠れるを見たま
四〇 ふ、是その目、いたく疲れたるなり、彼ら何と答ふべきかを知らざりき。四一 三度來りて言ひたまふ『今は眠りて
四一 休め、足れり、時きたれり。視よ、人の子は罪人らの手に付さるるなり。四二 起て、われら往くべし。視よ、我を
四二 賣る者ちかづけり』

四三 四三なほ語りゐ給ふほどに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき來る、祭司長・學者・長老らより遣され
四四 たる群衆、劍と棒とを持ちて之に伴ふ。四四 イエスを賣るもの、預じめ合圖を示して言ふ『わが接吻する者はそれ
四五 なり、之を捕へて確と引きゆけ』四五 斯て來りて直ちに御許に往き『*ラビ』と言ひて接吻したれば、四六 人々イエス
四六 に手をかけて捕ふ。四七 傍らに立つ者のひとり、劍を拔き、大祭司の僕を擊ちて、耳を切り落せり。四八 イエス人々
四七 に對ひて言ひ給ふ『なんぢら强盜にむかふ如く劍と棒とを持ち、我を捕へんとて出で來るか。四九 我は日々なんぢ
四八 らと偕に宮にありて敎へたりしに、我を執へざりき、然れど是は聖書の言の成就せん爲なり』五〇 其のとき弟子
四九 みなイエスを棄てて逃げ去る。

ム太二六・四五を見よ ウ羅八・二五 加四・六 井來五・七 ノ太二六・三九を見よ オ約四・三四 ク太二六・四一 路前一六・一三 ヤ羅七・一八—二五 加五・一七 マ來五・七 ケ可一四・三五 フ四三—五〇 大二六 ・四七—五六 路二 二・四七—五三 約一八・三—一一 コ太二三・七を見よ エ可一二・三五 テ詩二二・六—一八 寒五三・三—一二 路二二・三七、二四 ・白四四 ア詩八八・八 可一四 ・二七

五一 ある若者、素肌に亞麻布を纏ひて、イエスに從ひたりしに、人々これを捕へければ、五二 亞麻布を棄て裸にて逃げ去れり。

五三 人々イエスを大祭司の許に曳き往きたれば、祭司長・長老・學者ら皆あつまる。五四 ペテロ遠く離れてイエスに從ひ、大祭司の中庭まで入り、下役どもと共に坐して火に煖まりゐたり。五五 さて祭司長ら及び全議會、イエスを死に定めんとて、證據を求むれども得ず。五六 夫はイエスに對して僞證する者、多くあれども其の證據あはざりしなり。五七 遂に或者ども起ちて僞證して言ふ、五八『われら此の人の「われは手にて造りたる此の宮を毀ち、手にて造らぬ他の宮を三日にて建つべし」と云へるを聞けり』。五九 然れど尙この證據もあはざりき。六〇 爰に大祭司、中に立ちイエスに問ひて言ふ『なんぢ何をも答へぬか、此の人々の立つる證據は如何に』。六一 然れどイエス默して何をも答へ給はず。大祭司ふたたび問ひて言ふ『なんぢは頌むべきものの子キリストなるか』。六二 イエス言ひ給ふ『われは夫なり、汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲の中にありて來るを見ん』。六三 此のとき大祭司おのが衣を裂きて言ふ『なんぞ他に證人を求めん。六四 なんぢら此の瀆言を聞けり、如何に思ふか』かれら擧りてイエスを死に當るべきものと定む。六五 而して或者どもはイエスに唾し、又その顏を蔽ひ、拳にて搏ちなど爲始めて言ふ『預言せよ』。下役どもイエスを受け、手掌にてうてり。

六六 ペテロ下にて中庭にをりしに、大祭司の婢女の一人きたりて、六七 ペテロの火に煖まりをるを見、これに目を注めて『なんぢも、かのナザレ人イエスと偕に居たり』と言ふ。六八 ペテロ肯はずして『われは汝の言ふことを

イ五三—六五 太二六 ・五七—六八 約一 八・一二、一三、一九 —二四 ロ 太二六・三を見よ
ハ可一四・六七 約一 八・一八 ニ 太五・二二を見よ ホ 太二六・六一を見よ
ヘ 哀九・一一を見よ ト 太二六・六三を見よ 彼前二・二三 チ 六・一—六三 太二六 ・六三—六五 路二
リ 太二四・三〇 徒一 ル 民一四・六 太二六 ・六五 徒一四・一四 ヲ 利二四・六 約一 九・七
ワ 可一〇・三四を見よ カ 結七・八 ヨ 太二六・六八 路二
タ 六六—七二 太二六 ・六九—七五 路二 二・五五—六二 約 一八・六—一八、
レ 可一四・五四 ソ 可一四・五四を見よ ツ 可一四・四を見よ ネ 徒二・九・二五 哀徒
二・六七—七一 ル 民一四・六 太二六 ・五五 徒一四・一四 ヲ 利二四・六 約一 九・七
ワ 可一〇・三四を見よ カ 結七・八 ヨ 太二六・六八 路二
タ 六六—七二 太二六 ・六九—七五 路二 二・五五—六二 約 一八・六—一八、
レ 可一四・五四 ソ 可一四・五四を見よ ツ 可一四・四を見よ ネ 徒二・九・二五 哀徒
二・六四 二五—二七

六九 知らず、又その意をも悟らず』と言ひて庭口に出でたり。六九 婢女かれを見て、また傍らに立つ者どもに『この人は、かの黨與なり』と言ひ出でしに、七〇 ペテロ重ねて肯はず。暫くしてまた傍らに立つ者どもペテロに言ふ『なんぢは慥に、かの黨與なり、汝もガリラヤ人なり』。七一 此の時ペテロ盟ひ、かつ誓ひて『われは汝らの言ふ其の人を知らず』と言ひ出づ。七二 その折しも、また鷄鳴きぬ。ペテロ『にはとり二度なく前に、なんぢ三度われを否まん』とイエスの言ひ給ひし御言を思ひいだし、思ひ反して泣きたり。

第一五章

一 夜明るや直ちに、祭司長・長老・學者ら、即ち全議會ともに相議りて、イエスを縛り曳きゆきて、ピラトに付す。二 ピラト、イエスに問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』。答へて言ひ給ふ『なんぢの言ふが如し』。三 祭司長ら、さまざまに訴ふれば、四 ピラトまた問ひて言ふ『なにも答へぬか、視よ、如何に多くの事をもて訴ふるか』。五 されどピラトの怪しむばかりイエス更に何をも答へ給はず。

六 さて祭の時には、ピラト民の願に任せて、囚人ひとりを赦す例なるが、七 爰に一揆を起し、人を殺して繫がれをる者の中に、バラバといふ者あり。八 群衆すすみ來りて、例の如くせんことを願ひ出でたれば、九 ピラト答へて言ふ『ユダヤ人の王を赦さんことを願ふか』。一〇 これピラト、祭司長らのイエスを付ししは、嫉に因ると知る故なり。一一 然れど祭司長ら群衆を唆かし、反つてバラバを赦さんことを願はしむ。一二 ピラトまた答へて言ふ『さらば汝らがユダヤ人の王と稱ふる者を我いかに爲べきか』。一三 人々また叫びて言ふ『十字架につけよ』。一四 ピラト言ふ『そも彼は何の惡事を爲したるか』かれら烈しく叫びて『十字架につけよ』と言ふ。一五 ピラト群衆の望を

ナ（可一四・五四） 井 五・徒七・一〇 ニ 三 約一八・二九 ケ 約一・四七、四八
ラ 可一四・六八 ノ 太二七・一を見よ ム 太二六・七三 路二 オ 太五・二二を見よ ヤ 太二七・一二を見よ ク 二一五 太二七・一 詩二・六 耶二三・五 ウ 可一四・三〇、七二 一一四 路二三・ 徒五・三一 コ 箴五三・九
ア 可一四・六七 ヘ 哀九・一一を見よ ト 太二六・六三を見よ 彼前二・二三 チ 六・一—六三 太二六 ・六三—六五 路二 ロ 太二六・三を見よ ホ 太二六・六一を見よ
リ 太二四・三〇 徒一 ル 民一四・六 太二六 ・六五 徒一四・一四 ヲ 利二四・六 約一 九・七 ワ 可一〇・三四を見よ 箴五〇・六 來一二 カ 結七・八 ヨ 太二六・六八 路二
タ 六六—七二 太二六 ・六九—七五 路二 二・五五—六二 約 一八・六—一八、 レ 可一四・五四 ソ 可一四・五四を見よ ツ 可一四・四を見よ ネ 徒二・九・二五 哀徒
ム 太二六・七三 路二 ウ 可一四・三〇、七二 ヤ 太二七・一二を見よ マ 詩二・六 耶二三・五 徒五・三一 ヒ 箴一八・二九 ケ 約一・四七、四八 コ 箴五三・九
ア 可一四・六七 ヘ 哀九・一一を見よ ト 太二六・六三を見よ 彼前二・二三 チ 六・一—六三 太二六 ・六三—六五 路二 ロ 太二六・三を見よ ホ 太二六・六一を見よ
リ 太二四・三〇 徒一 ル 民一四・六 太二六 ・六五 徒一四・一四 ヲ 利二四・六 約一 九・七 ワ 可一〇・三四を見よ カ 結七・八 ヨ 太二六・六八 路二
タ 六六—七二 太二六 ・六九—七五 路二 二・五五—六二 約 一八・六—一八、 レ 可一四・五四 ソ 可一四・五四を見よ ツ 可一四・四を見よ ネ 徒二・九・二五 哀徒
二・六七—七一 二・六四 二五—二七

滿さんとて、バラバを釋し、イエスを鞭ちたるのち、十字架につくる爲にわたせり。
一六 一六兵卒どもイエスを官邸の中庭に連れゆき、全隊を呼び集めて、一七彼に紫色の衣を著せ、茨の冠冕を編みて
一八 冠らせ、一八『ユダヤ人の王、安かれ』と禮をなし始め、一九また葦にて、其の首をたたき、唾し、跪づきて拜せり。
二〇 二〇かく嘲弄してのち、紫色の衣を剝ぎ、故の衣を著せ十字架につけんとて曳き出せり。二一時にアレキサンデルと
二一 ルポスとの父シモンといふクレネ人、田舍より來りて通りかかりしに、強ひてイエスの十字架を負はせ、二二イエス
二二 をゴルゴタ、釋けば髑髏といふ處に連れ往けり。二三斯て沒藥を混ぜたる葡萄酒を與へたれど、受け給はず。二四彼
二五 らイエスを十字架につけ、而して誰が何を取るべきと、鬮を引きて其の衣を分つ、二五イエスを十字架につけし
二六 は、朝の九時頃なりき。二六その罪標には『ユダヤ人の王』と書せり。二七イエスと共に、二人の强盜を十字架につ
二七 二八 け、一人をその右に、一人をその左に置く。*〔二八〕二九往來の者どもイエスを譏り、首を振りて言ふ『ああ宮を毀ち
二九 二〇 て三日のうちに建つる者よ、三〇十字架より下りて己を救へ』三一祭司長らも亦同じく學者らと共に嘲弄して互に言
三一 ふ『人を救ひて、己を救ふこと能はず、三二イスラエルの王キリスト、いま十字架より下りよかし、然らば我ら見
三二 て信ぜん』共に十字架につけられたる者どもも、イエスを罵りたり。
三三 三三晝の十二時に、地のうへ徧く暗くなりて、三時に及ぶ。三四三時にイエス大聲に『エロイ、エロイ、ラマ、
三四 三五 サバクタニ』と呼り給ふ。之を釋けば、わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし、との意なり。三五傍らに立つ
三六 者のうち或る人々これを聞きて言ふ『視よ、エリヤを呼ぶなり』三六一人はしり往きて、海綿に酸き葡萄酒を含ま

イ 太二七・二六を見よ　ロ 一六—二〇　太二七・二七を見よ　ハ 太二七・二七を見よ（太二六・三）　ニ 徒一〇・一を見よ　ホ 可一〇・三四　ヘ 來一三・一一、一二　ト 二一　太二七・三二　路二三・二六　チ 路一六・一三　リ 二一—三二　太二七　・三三—四四　路二三・三三—四三　一九・一七—二四　ヌ 太二七・三三　九・一七　（路二三・三三）　ル（太二七・三三）　チ 約一九・二四を見よ　ワ（可一五・三三）　一九・一四　カ 太二七・三七を見よ　ヨ 太二七・三九を見よ　タ 可一四・五八　レ 太二七・四二　路二三・三五　ソ 太二七・四二を見よ　（可一五・二六）　ソ 可一五・二七　（太二七・四五）　ツ 太二七・四五　路二三・四四　（可一五・二七）　ネ 三二—四一　太二七・四五—五六　路二三・四四—四九　ナ 太二七・四五　路二三・四四　（可一五・二五）　ラ 詩二二・一　太二七・四六

ム 太二七・五〇　路二三・四六　（約一九・四五、五六、路二三・五五、五六　路二三・四九　約一九・二五　ノ 四〇、四一　太二七　ウ 太二七・五一を見よ　オ（路一九・三三）　井 太二七・五四　可一五・四五、四五　路二三・四七　ク 可一六・一　ヤ 太二七・五五、五六を見よ　マ 四二—四七　太二七　・五七—六一　路二三　三・五〇—五六　約一九・三八—四二　ケ 太二七・六二を見よ　フ（太二七・五七）　コ 路二三・五一、二一　エ 太二七・五七　路二三　三・五〇、五一　約一九・三八　テ（約一九・三八）　ア 可一五・三九、四四、四五　ユ 可一五・四〇、四七　二五・三八（二七・四五　サ 太二七・五六を見よ　キ 一八　路二四・一—八　太二八・一　ミ 三、四　太二七・六〇を見よ　約二〇・二—一〇　（約二〇・二—八）　可一五・四六　シ（約二〇・一一、一二）　メ 路二三・五六、二四　・一　約一九・三九、四〇　エ 可九・一五を見よ

せて葦につけ、イエスに飲しめて言ふ『待て、エリヤ來りて、彼を下すや否や、我ら之を見ん』三七イエス大聲を
三八 出して息絶え給ふ。三八聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。三九イエスに向ひて立てる百卒長、かかる
四〇 樣にて息絶え給ひしを見て言ふ『實にこの人は神の子なりき』四〇また遙に望み居たる女等あり、その中にはマグ
四一 ダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ及びサロメなども居たり。四一彼らはイエスのガリラヤに居給ひしと
四二 き、從ひ事へし者どもなり。此の他イエスと共にエルサレムに上りし多くの女もありき。
四三 四三日既に暮れて、準備日、即ち安息日の前の日となりたれば、四三貴き議員にして、神の國を待ち望める、ア
四四 リマタヤのヨセフ來りて、憚らずピラトの許に往き、イエスの屍體を乞ふ。四四ピラト、イエスは早や死にしかと
四五 訝り、百卒長を呼びて、その死にしより時經しや否やを問ひ、四五既に死にたる事を百卒長より聞き知りて、屍體
四六 をヨセフに與ふ。四六ヨセフ亞麻布を買ひ、イエスを取下して之に包み、岩に鑿りたる墓に納め、墓の入口に石を
四七 轉ばし置く。四七マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとイエスを納めし處を見ゐたり。

第一六章

一 一安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて
二 香料を買ひ、二一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。三誰か我らの爲に墓の入口より
四 五 石を轉ばすべきと語り合ひしに、四目を擧ぐれば、石の既に轉ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。五墓に
六 入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。六若者いふ『おどろくな、汝らは十字架につけら

七 れ給ひしナザレのイエスを尋ぬれど、既に甦へりて、此處に在さず。視よ、納めし處は此處なり。七 然れど往き
て、弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに先だちてガリラヤに往き給ふ、彼處にて謁ゆるを得ん、曾て汝らに言
八 ひ給ひしが如し」八 女等いたく驚きをののき、墓より逃出でしが、懼れたれば一言をも人に語らざりき。

九 〔九一週の首の日の拂曉、イエス甦へりて先づマグダラのマリヤに現れたまふ、前にイエスが七つの惡鬼を
一〇 逐ひいだし給ひし女なり。一〇 マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。一一 彼
一一 らイエスの活き給へる事と、マリヤに見え給ひし事とを聞けども信ぜざりき。
一二 一二 此の後その中の二人、田舍に往く途を歩むほどに、イエス異りたる姿にて現れ給ふ。一三 此の二人ゆきて、
一三 他の弟子たちに之を告げたれど、なほ信ぜざりき。
一四 一四 其ののち十一弟子の食しをる時に、イエス現れて、己が甦へりたるを見し者どもの言を信ぜざりしによ
一五 り、其の信仰なきと、其の心の頑固なるとを責め給ふ。一五 斯て彼らに言ひたまふ『全世界を巡りて凡ての造られ
一六 しものに福音を宣傳へよ。一六 信じてバプテスマを受くる者は救はるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。
一七 一七 信ずる者には此等の徴、ともなはん。即ち我が名によりて惡鬼を逐ひいだし、新しき言をかたり、一八 蛇を握る
一八 とも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん』

イ可一・二四を見よ　約二・一一、一四　ヘ約二〇・二八　ト太二八・一七　可一・六・三二を見よ　ロ太二八・六　路二四・六・一八　チ路二四・一三—三五　ヌ可一六・一一を見よ　ル（路二四・三六　約二〇・一九、二六　哥前　ヨ約三・一八、三六　タ（可九・三八　路一〇・一七　徒五・一六、八・七、一六・一八、一九・一二）　ツ可五・二三を見よ　レ（徒二・四、一〇・四　六、一九・六　哥前　一二・一〇、二八、三　一三・一、一四　ソ（路一〇・一九　二八・三—五）　徒

一九 一九 語り終へてのち、主イエスは天に擧げられ、神の右に坐し給ふ。二〇 弟子たち出でて、徧く福音を宣傳へ、
二〇 主も亦ともに働き、伴ふところの徴をもて、御言を確うし給へり」

ホ（徒一・三）　ラ路二二・六九　徒七・五五、五六　羅八・三四　弗一・二〇　ヘ・一、一〇・一二、提前三・一六　ナ路九・五一、二四・五一（約六・六二、二〇・一七　徒一・二）　一二・二　徒前三・二二　ム徒五・一二、一四・三　來二・三、四

マルコ傳・福音書　をはり

一・一　異本「神の子」なし。
三・一六　異本「此の十二人を擧げて」の句なし。
七・一六　諸異本「聽く耳あるものは聽くべし」との句あり。
九・二九　異本「祈と斷食とに由らざれば」とあり。
九・四四　異本　四四及び四六の二節に、この書の四八とおなじ句あり。
一一・一　舊譯「橄欖山」とあり。
一一・九　「ホサナ」は「救あれ」との意なり。
一一・二六　異本「もし汝ら免さずば天に在す汝らの父も亦汝らの罪を免し給はじ」とあり。
一二・二三　諸異本「彼らみな甦へらんに」の句なし。
一三・二五　或は「天にある諸の勢力」と譯す。
一三・二九　「人の子」或は「時」と譯す。
一三・三三　異本「目を覺し、かつ祈れ」とあり。
一四・三六　「父」の義なり。
一四・四五　「師」の義なり。
一四・六八　異本六八節の末に「時に鷄なきぬ」といふ句あり。
一五・四　或は「重大なる事」と譯す。
一五・二八　異本「彼は罪人と共に數へられたりといへる聖書は成就したり」とあり。
一六・九　異本九節以下を缺く。

ルカ傳福音書

第一章

一 我らの中に成りし事の物語につき、始よりの目擊者にして、二 御言の役者となりたる人々の、我
三 らに傳へし、其のままを、書き列ねんと、手を著けし者あまたある故に、三 我も凡ての事を最初よ
四 り詳細に推し尋ねたれば、四 テオピロ閣下よ、汝の教へられたる事の慥なるを悟らせん爲に、これが序を正し
て、書贈るは善き事と思はるるなり。

五 ユダヤの王ヘロデの時、アビヤの組の祭司に、ザカリヤといふ人あり。その妻はアロンの裔にて名をエリ
六 サベツといふ。六 二人ながら神の前に正しくして、主の誡命と定規とを、みな缺なく行へり。七 エリサベツ石女
七 なれば、彼らに子なし、また二人とも年邁みぬ。

八 〈さてザカリヤその組の順番に當りて、神の前に祭司の務を行ふとき、九 祭司の慣例にしたがひて、籤をひ
九 き主の聖所に入りて、香を燒くこととなりぬ。一〇 香を燒くとき民の群みな外にありて祈りゐたり。一一 時に主の使
一〇 あらはれて、香壇の右に立ちたれば、一二 ザカリヤ之を見て、心騷ぎ懼を生ず。一三 御使いふ『ザカリヤよ懼るな、
一一 汝の願は聽かれたり。汝の妻エリサベツ男子を生まん、汝その名をヨハネと名づくべし。一四 なんぢに喜悅と歡樂
一二 とあらん、又おほくの人もその生るるを喜ぶべし。一五 この子、主の前に大ならん、また葡萄酒と濃き酒とを飲ま
一三

イ 蹟四・二一　ロ 約一・五・二七（徒一・一）　ハ 使徒一・一六　約壁　ニ 可四・一四、一六・四・一　ホ 徒二六・一六　哥前　ヘ 徒一・二　四・二五、一六・六、一七・一一　ト 徒一八・二五　羅二・二八　チ 徒三・一〇　ヌ 代上二四・一〇　リ 哥前一四・一九　加六・六　提　ル 創七・一　ヲ 詩一・一五、三・六、三・一四　ワ 代上二四・一九　代下八・一四、三・一　カ 出三〇・六—八　ヨ 利一六・一七　タ 路二・九　徒五・一九　ソ 民六・三　七・一三・四　太一・一・一八　路七　レ 路一・三〇（太一四・三三）　ツ 民六・三　七・一三・四　太一・一・一八　路七

一六 ず、母の胎を出づるや聖靈にて滿されん。一六 また多くのイスラエルの子らを、主なる彼らの神に歸らしめ、一七 且
一七 エリヤの靈と能力とをもて、主の前に往かん。とれ父の心を子に、戻れる者を義人の聰明に歸らせて、整へたる
一八 民を主のために備へんとてなり』一八 ザカリヤ御使にいふ『何に據りてか此の事あるを知らん、我は老人にて、妻
一九 もまた年邁みたり』一九 御使こたへて言ふ『われは神の御前に立つガブリエルなり、汝に語りてこの嘉き音信を告
二〇 げん爲に遣さる。二〇 視よ、時いたらば、必ず成就すべき我が言を信ぜぬに因り、なんぢ物言へずなりて、此らの
二一 事の成る日までは語ること能はじ』二一 民はザカリヤを俟ちぬて、其の聖所の内に久しく留まるを怪しむ。二二 遂に
二二 出で來りたれど語ること能はねば、彼らその聖所の内にて異象を見たることを悟る。ザカリヤは、ただ首にて示
二三 すのみ、なほ啞なりき。二三 斯て務の日滿ちたれば、家に歸りぬ。
二四 二四 此の後その妻エリサベツ孕りて五月ほど隱れをりて言ふ、二五『主、わが恥を人の中に雪がせんとて、我を顧
二五 み給ふときは、斯く爲し給ふなり』

二六 二六 その六月めに、御使ガブリエル、ナザレといふガリラヤの町にをる處女のもとに、神より遣さる。二七 この
二七 處女はダビデの家のヨセフといふ人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云ふ。二八 御使、處女の許にきたりて言
二八 ふ『めでたし、惠まるる者よ、主なんぢと偕に在せり』二九 マリヤこの言によりて、心いたく騷ぎ、斯る挨拶は如
二九 何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、三〇 御使いふ『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に惠を得たり。三一 視よ、なんぢ
三〇 孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。三二 彼は大ならん、至高者の子と稱へられん。また主たる
三一

ネ 太三・五、六　ナ 次一・一・一四を見よ　ラ 路一・七・六　ム 使徒一・九　ウ 路一・七・六　井 詩一・七・一七　ノ 太一・八・一〇を見よ　オ 伯八・六、九・二　マ 王下一・五　代上九・二五　ク 結三・二六、二四・　ケ 創三〇・二三　箴四　ヤ 路一・六・二　フ 路一・一九を見よ　コ 太二・三三　エ 太一・一八　テ 太一・一六、二〇　路一・二七　ア 路一・四二を見よ　サ 路一・一二　キ 路一・一三（太一四・二七）　ユ 箴七・一四　メ 太一・二一、二五　路二・二一　ミ 詩二・九—一一　シ 可五・七を見よ　路一・三五、七・六、六・三五　徒七・四八

ルカ傳　一・一六——三二

三三 神、これに其の父(イ)ダビデの座位をあたへ給へば、三三ヤコブ(ロ)の家を永遠に治めん。その國(ハ)は終ることなかるべし』
三四 三五 三四マリヤ御使に言ふ『われ未だ人を知らぬに、如何して此の事のあるべき』三五御使こたへて言ふ『聖靈(ニ)なんぢに
三六 臨み、至高者(ホ)の能力なんぢを被はん。此の故に汝が生むところの聖(ヘ)なる者は、神(ト)の子と稱へらるべし。三六視よ、
なんぢの親族エリサベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といはれたる者なるに、今は孕りてはや六月に
三七 三八 なりぬ。三七それ神(チ)の言には能はぬ所なし』三八マリヤ言ふ『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成
れかし』つひに御使、はなれ去りぬ。
三九 四〇 　三九その頃マリヤ立ちて、山里(リ)に急ぎ往き、ユダの町にいたり、四〇ザカリヤの家に入りてエリサベツに挨拶せ
四一 四二 しに、四一エリサベツ、その挨拶を聞くや、兒は胎内にて躍れり。エリサベツ聖靈(ヌ)にて滿され、四二聲高らかに呼は
四三 りて言ふ『をんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の實もまた祝福せられたり。四三わが主(ル)の母われに來る、われ
四四 四五 何によりてか之を得し。四四視よ、なんぢの挨拶の聲、わが耳に入るや、我が兒、胎内にて喜びをどれり。四五信(ヲ)ぜ
四六 四七 し者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり』四六マリヤ言ふ『わが(ワ)心、主(カ)を崇め、四七わが(ヨ)
四八 靈は、わが(タ)救主なる神を喜び奉る。四八その婢女(レ)の卑しきをも顧み給へばなり。視よ、今よりのち萬世(ソ)の人、われ
四九 五〇 を幸福とせん。四九全能者、われに大(ツ)なる事を爲し給へばなり。その御名(ネ)は聖なり、五〇その憐憫は代々(ナ)、畏み恐る
五一 五二 る者に臨むなり。五一神は御腕(ラ)にて、權力をあらはし、※心(ム)の念に高ぶる者を散らし、五二權勢(ウ)ある者を座位より下し、

イ 母後七・一三 詩一三二・一一 賽九・六、七、一六・五 耶二三・五 ロ 太一・一、二) ハ 但二・四四、七・一四、一八、二七 阿二一 来四・七 約一二・三四 默一一・一五（太二八・一八） ニ 太一・一八、二〇 ホ 路一・三二を見よ ヘ（可一・二四） ト 太四・三を見よ 來一・二―六、八 チ 創一八・一四 耶三二・一七 亞八・六 太一九・二六 可一〇・二七 路一八・二七 羅四・二一 リ 路一・六五（書二〇・七、二一・二二） ヌ 路一・六七 ル 約一三・一三（路二・一一） ヲ 路一・四八 多二・一三（路一・二〇） ワ 四六―五三 母前二・一―一〇 カ 詩三四・二、三 ヨ 詩三五・九 タ 提前一・一、二・三 多一・三、二・一〇、三・四 猶二五 レ 母前一・一一 詩一三八・六 ソ 馬三・一二 路一一・二七 ツ 詩七一・一九、一二六・二、三 弗三・二〇 ネ 詩一一一・九 默四・八 ナ 創一七・七 出二〇・五、六 詩一〇三・一七 ラ 詩九八・一、一一八・一五 賽四〇・一〇、五一・九、六三・一二 ム 出一八・一〇、一一 賽一〇・一二 彼前五・五 ウ 母前二・六―八 但四・三三 路一八・一四

五三 五四 卑しき者を高うし、五三飢(ノ)ゑたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ給ふ。五四また我らの先祖(オ)に告げ
五五 五六 給(ヰ)ひし如く、五五アブラハムと、その裔とに對する憐憫(ク)を、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給へり』五六斯
てマリヤは、三月ばかりエリサベツと偕に居りて、己が家に歸れり。
五七 五八 　五七偖エリサベツ産む期みちて男子を生みたれば、五八その最寄のもの親族の者ども主(ヤ)の大なる憐憫を、エリサ
五九 ベツに垂れ給ひしことを聞きて、彼とともに喜ぶ。五九八日(マ)めになりて、其の子に割禮を行はんとて人々きたり、
六〇 六一 父の名に因みてザカリヤと名づけんとせしに、六〇母こたへて言ふ『否、ヨハネ(ケ)と名づくべし』六一かれら言ふ『なん
六二 ぢの親族の中には此の名をつけたる者なし』六二而して父に首(フ)にて示し、いかに名づけんと思ふか、問ひたるに、
六三 六三ザカリヤ書板を求めて『その名(コ)はヨハネなり』と書きしかば、みな怪しむ。
六四 六五 六四ザカリヤの口(エ)たちどころに開け、舌ゆるみ、物いひて神を讃めたり。六五最寄に住む者みな懼をいだき、又
六六 すべて此等のこと遍くユダヤの山里(テ)に言ひ囃されたれば、六六聞く者みな之を心(ア)にとめて言ふ『この子は如何なる
六七 六八 者にか成らん』主(サ)の手かれと偕に在りしなり。六七斯て父ザカリヤ聖靈(キ)にて滿され預言(ユ)して言ふ 六八『讃(メ)むべきか
六九 な、主イスラエルの神、その民を顧(ミ)みて贖罪(シ)をなし、六九我等のために救(ヱ)の角を、その僕(ヒ)ダビデの家に立て給へ
七〇 七一 り。七〇これぞ古(モ)へより聖(セ)預言者の口をもて言ひ給ひし如く、七一我らを仇より、凡て我らを憎む者の手より、取(ス)り
七二 七三 出したまふ救なる。七二我(イ)らの先祖に憐憫をたれ、その聖(ロ)なる契約を思し、七三我らの先祖アブラハムに立て給ひし

ヰ 創四五・二六 伯五・一一 詩七八・七〇（雅四・一〇） ノ 母前二・五 詩三四・一〇 太五・六 オ（創一七・一九 詩一三二・一一 加三・一六） ク 詩九八・三 耶三一・三、三三・一四―一六 路一・六七―七五 ヤ 創一九・一九 マ 創一七・一二 利一二・三 路二・二一 ケ 路一・一三、六三 フ 路一・二二 コ 路一・一三、六〇 エ 路一・二〇 テ 路一・三九を見よ ア 路二・一九、五一 サ 創三九・二 詩八〇・一七、八九・二一 徒一一・二一 キ 路一・四一 ユ（耳二・二八） メ 王上一・四八 詩四一・一三、七二・一八、一〇六・四八 ミ 出三・一六、四・三一 路七・一六 シ 詩一一一・九 路二・三八 來九・一二 一三（路一・七二） ヱ 母前二・一、一〇 母後二二・三 詩一八・二、八九・一七、一三二・一七 結二九・二一 ヒ 太一・一、六、一六 路三・二三、三一 モ 徒三・二一 セ 創三・一五、一二・三、四九・一〇 耶二三・五、六、三〇・一〇 但九・二四 羅一・二 彼後三・二 ス 太一・二一（路一・六八） イ 米七・二〇 ロ 詩一〇五・八、九、一〇六・四五

七四 七五 御誓を忘れずして、七四我らを仇の手より救ひ、生涯、主の御前に、七五聖と義とをもて懼なく事へしめ給ふなり。
七六 七七 七六幼兒よ、なんぢは至高者の預言者と稱へられん。これ主の御前に先立ちゆきて其の道を備へ、七七主の民に罪の
七八 赦による救を知らしむればなり。七八これ我らの神の深き憐憫によるなり。この憐憫によりて、朝の光、上より臨
七九 八〇 み、七九暗黒と死の蔭とに坐する者をてらし、我らの足を平和の路に導かん』八〇斯て幼兒は漸に成長し、その靈
強くなり、イスラエルに現るる日まで荒野にゐたり。

第二章

一 二 一その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令カイザル・アウグストより出づ。二この戸籍登錄は、
三 クレニオ、シリヤの總督たりし時に行はれし初のものなり。三さて人みな戸籍に著かんとて、各自
四 五 その故郷に歸る。四ヨセフもダビデの家系また血統なれば、五既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著か
六 んとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムといふ處に到りぬ。六此處に居るほ
七 どに、マリヤ月滿ちて、七初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥させたり。旅舍にをる處なかりし故なり。
八 九 八この地に野宿して夜、群を守りをる牧者ありしが、九主の使その傍らに立ち、主の榮光その周圍を照した
一〇 れば、甚く懼る。一〇御使かれらに言ふ『懼るな。視よ、この民一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんぢ
一一 一二 らに告ぐ。一一今日ダビデの町にて汝らの爲に救主うまれ給へり、これ主キリストなり。一二なんぢら布にて包ま
一三 れ、馬槽に臥しをる嬰兒を見ん、是その徵なり』一三忽ちあまたの天の軍勢、御使に加はり、神を讃美して言ふ、

イ 創一二・三、一七・　ニ 路一・三二を見よ　五・三一　ル 路二・四〇　レ 母前一七・一二（母　ナ 約四・四二　徒五・　ウ 母前二・三四　王下
四、二二・一六、一　ホ 太一一・九を見よ　チ（馬四・二　弗五・一　ヲ 太三・一、一一・七　前一六・一、四）約　三一（太一・二一）　一九・二九、二〇・
七　ヘ 黴四〇・三　馬三・四　彼後一・九）　ワ 太二四・一四を見よ　七・四二　ラ 徒二・三六、一〇・　八、九　黴七・一一、
ロ 黴六・一八、二二　弗一、四・五　太一一　リ 黴九・二、四二・七　カ 太二二・一七（路三　ソ 太一・二五　三六（路一・四三）　一四
四・二四　多二・一二　ト 耶三一・三四　可一　太四・一六　徒二六　・一）　ツ 路一・一一　徒五・一　ム 太一・一六、一六・　井 詩一〇三・二〇　彼
彼前一・一五　・二〇　路一・一七　・一八　ヨ 徒五・三七　九を見よ　一六、二〇　約一・　前一・一二（提前三
ハ 來九・一四　・四　路三・三　徒　ヌ 匠五・一　タ 路一・二七　ネ（太一四・二七）　四一、一一・二七　・一六）

ノ 路一九・三八　弗一二・一七　西一・二〇　マ 太九・八を見よ　一六、二二・二九、一一）　ユ 詩八九・四八　約八　ヱ 黴五七・一、二　セ 黴九・二、四二・六、
・六、三・二一　默五　ク（路三・二二）　ケ 路一・五九を見よ　三四・一九　民三・　ア（路一・六）　・五一　來一一・五　一四・一三　四九・六、六〇・一
・一三（太二一・九）　ヤ 創三七・一一　但七　フ 路一・三一を見よ　一三、八・一七、　サ 黴四〇・一　メ（太二一・一二）　ヒ 創四六・三〇　誹一　一三　太四・一六
オ 黴五七・一九　路一・二八　路一・六六、　コ 利一二・二―六　一八・一五　キ（可一五・四三　路二　ミ 太四・一　・二三　徒一三・四七、二六
・七九　羅五・一　弗二・五一　エ 出一三・二、一二―　テ 利一二・八（利五・　・三八、二三・五一）　シ 路二・二二　モ 黴五二・一〇　路三　・二三　弗三・六

一四 一五 一四『*いと高き處には榮光、神にあれ。地には平和、主の悅び給ふ人にあれ』一五御使等さりて天に往きしとき、
一六 牧者たがひに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給ひし起れる事を見ん』一六乃ち急ぎ往きて、マリヤと
一七 一八 ヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあふ。一七既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、一八聞
一九 二〇 く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。一九而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思ひ囘せり。二〇牧者
は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて神を崇め、かつ讃美しつつ歸れり。
二一 二一八日みちて幼兒に割禮を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、その名を
イエスと名づけたり。
二二 二三 二二モーセの律法に定めたる潔の日滿ちたれば、彼ら幼兒を携へて、エルサレムに上る。二三これは主の律法に
二四 『すべて初子に生るる男子は主につける聖なる者と稱へらるべし』と錄されたる如く、幼兒を主に獻げ、二四また
二五 主の律法に『山鳩一對あるひは家鴿の雛二羽』と云ひたるに遵ひて、犧牲を供へん爲なり。二五視よ、エルサレ
ムにシメオンといふ人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖靈その上に
二六 二七 在す。二六また聖靈に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、二七此のとき、御靈に感じて宮に入
二八 る。兩親その子イエスを携へ、この子のために律法の慣例に遵ひて、行はんとて來りたれば、二八シメオン、イエ
二九 三〇 スを取りいだき、神を讚めて言ふ、二九『主よ、今こそ御言に循ひて僕を安らかに逝かしめ給ふなれ。三〇わが目は、
三一 三二 はや主の救を見たり。三一是もろもろの民の前に備へ給ひし者、三二異邦人を照す光、御民イスラエルの榮光なり』

三三 かく幼兒に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、三四シメオン彼らを祝して母マリヤに言ふ『視よ、
三四 この幼兒は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん爲に、また言ひ逆ひを受くる徵のために置かる。
三五 三五——劍なんぢの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の顯れん爲なり』
三六 三六 爰にアセルの族パヌエルの娘に、アンナといふ預言者あり、年いたく老ゆ。處女のとき、夫に適きて七年
三七 ともに居り、三七 八十四年寡婦たり。宮を離れず、夜も晝も、斷食と祈禱とを爲して神に事ふ。三八 この時すすみ寄
りて、神に感謝し、また凡てエルサレムの拯贖を待ちのぞむ人に、幼兒のことを語れり。
三九 三九 さて主の律法に遵ひて、凡ての事を果したれば、ガリラヤに歸り、己が町ナザレに到れり。
四〇 四〇 幼兒は漸に成長して健かになり、智慧みち、かつ神の惠その上にありき。
四一 四一 斯てその兩親、過越の祭には年毎にエルサレムに往きぬ。四二 イエスの十二歲のとき、祭の慣例に遵ひて上
四三 りゆき、四三 祭の日終りて歸る時、その子イエスはエルサレムに止りたまふ。兩親は之を知らずして、四四 道伴のう
四四 ちに居るならんと思ひ、一日路ゆきて、親族・知邊のうちを尋ぬれど、四五 遇はぬに因りて復たづねつつエルサレ
四六 ムに歸り、四六 三日ののち、宮にて敎師のなかに坐し、かつ聽き、かつ問ひぬ給ふに遇ふ。四七 聞く者は皆その聰と
四七 答とを怪しむ。四八 兩親イエスを見て、いたく驚き、母は言ふ『兒よ、何故かかる事を我らに爲しぞ、視よ、汝の
四八 父と我と憂ひて尋ねたり』四九 イエス言ひたまふ『何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬ

イ 太一二・四六を見よ　ハ 徒二八・二二　ニ 詩四二・一〇　約一・九　同九・三二、三三　ホ 彼前一・二三　ヘ 書一九・二四　ト 路二・三八（徒二一・四四）　チ（羅前五・九）　リ 徒二六・七　羅前五　ヌ 路五・三三（徒一三・二六、一四・二三）　ル 可一五・四三　路二・二五、二四・二一　カ 路一・八〇（路二・五二）　ヨ 雙一一・二　路二・五二　タ 路四・二二　レ 出二三・一五、一七　ソ 出一二・一五　ツ 路五・一七及 徒五・三四を見よ（羅前一・一七）　ナ 太一二・四六を見よ　ラ 路三・二三、四・二　ム 約一・一六　ウ 可九・三二を見よ　井 路二・三九を見よ　ノ 路二・一九を見よ　オ 路二・四〇　ク 母前二・二六　ヤ 太二七・二を見よ　マ 太一四・一を見よ

ケ 約一八・二二、二三、二四、徒四・六　フ 太二六・三を見よ　コ 二一一〇　太三・一　エ 太三・一、五　可一・七、二四・四七　徒四・五　テ 可一・二五　路一・七　ア 黎四〇・三—五　約一・二三　サ 路二・三〇を見よ　詩九八・二　路二・一〇、二二　ヰ 太三・七、一二・三　ユ 羅一・二八、二・八　詩六・二六　メ 彼後七・一〇、一一　ミ 羅九・六—八　加三　シ 太七・一九　路一三・五—九　獸二・八　エ 徒二・三七、三八、一六・三〇　ヒ 路一・四一　哥後八・一七　羅二・一五　約三・一七、四・二〇（啓四・二八）　モ 太二一・三二　路七・二九　セ 路一九・八　ス 路一・五五、二・二〇　獸三・一二　ヱ 路二・三八　ヘ 書一九・二四　ト 路二・三八（徒二一・四四）　チ（羅前五・九）　リ 徒二六・七　羅前五　ヌ 路五・三三（徒一三・二六、一四・二三）　ル 可一五・四三　路二・二五、二四・二一　カ 路一・八〇（路二・五二）　ヨ 雙一一・二　路二・五二　タ 路四・二二　レ 出二三・一五、一七　ソ 出一二・一五　ツ 路五・一七及 徒五・三四を見よ（羅前一・一七）　ナ 太一二・四六を見よ　ラ 路三・二三、四・二　ム 約一・一六　ウ 可九・三二を見よ　井 路二・三九を見よ　ノ 路二・一九を見よ　オ 路二・四〇　ク 母前二・二六　ヤ 太二七・二を見よ　マ 太一四・一を見よ

五〇 五〇 兩親はその語りたまふ事を悟らず。五一 斯てイエス彼等とともに下り、ナザレに往きて順ひ事へたまふ。其
五二 の母これらの事をことごとく心に藏む。
五三 五三 イエス智慧も身のたけも彌增り神と人とにますます愛せられ給ふ。

一 第三章

一 國守、その兄弟ピリポは、イツリヤ及びテラコニテの地の分封の國守、ルサニヤはアビレネ分封の
二 國守たり、二 アンナスとカヤパとは大祭司たりしとき、神の言、荒野にてザカリヤの子ヨハネに臨む。三 斯てヨ
四 ルダン河の邊なる四方の地にゆき、罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣傳ふ。四 預言者イザヤの言の書に
五 『荒野に呼はる者の聲す。「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ。五 もろもろの谷は埋められ、もろもろの山と
六 岡とは平げられ、曲りたるは直く、嶮しきは坦かなる路となり、六 人みな神の救を見ん』と錄されたるが如し。
七 七 偖ヨハネ、バプテスマを受けんとて出できたる群衆にいふ『蝮の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避く
八 べき事を示したるぞ。八 さらば悔改に相應しき果を結べ。なんぢら「我らの父にアブラハムあり」と心のうちに
九 言ひ始むな。我なんぢらに告ぐ、神はよく此らの石よりアブラハムの子等を起し得給ふなり。九 斧ははや樹の根
一〇 に置かる。然れば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし』一〇 群衆ヨハネに問ひて言ふ『さら
一一 ば我ら何を爲すべきか』一一 答へて言ふ『二つの下衣をもつ者は、有たぬ者に分與へよ。食物を有つ者もまた然せ
一二 一二 取稅人もバプテスマを受けんとて來りて言ふ『師よ、我ら何を爲すべきか』一三 答へて言ふ『定りたるもの

一四 の外、なにをも促るな』一四兵卒もまた問ひて言ふ『我らは何を爲すべきか』答へて言ふ『人を劫かし、また誣ひ（イ）
訴ふな、己（ロ）が給料をもて足れりとせよ』
一五 一六 一五民、待ち望みゐたれば、みな心の中にヨハネをキリスト（ハ）ならんかと論ぜしに、一六ヨハネ（ニ）凡ての人に答へて
一七 言ふ『我は水（ホ）にて汝らにバプテスマを施す、されど我よりも能力ある者きたらん、我はその鞋の紐を解くにも足
らず。彼は聖靈（ヘ）と火とにて汝らにバプテスマを施さん。一七手には箕（ト）を持ちたまふ。禾場をきよめ、麥（チ）を倉に納め
んとてなり。而して殼（リ）は消え（ヌ）ぬ火にて焚きつくさん』
一八 一九 一八ヨハネこの他なほ、さまざまの勸をなして、民に福音（ル）を宣傳ふ。一九然るに國守（ヲ）ヘロデ、その兄弟の妻（ワ）ヘロ
二〇 デヤの事につき、又その行ひたる凡ての惡しき事につきて、ヨハネに責められたれば、二〇更に復一つの惡しき事
を加へて、ヨハネを獄（カ）に閉ぢこめたり。
二一 二二 二一民（ヨ）みなバプテスマを受けし時、イエスもバプテスマを受けて祈り（タ）ゐ給へば、天ひらけ、二二聖靈、形をなし
二三 て鴿のごとく其の上に降り、かつ天より聲あり、曰く（レ）『なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悦ぶ』二三イエス
の、教（ソ）を宣べ始め給ひしは、年おほよそ三十（ツ）の時なりき。人（ネ）には（ナ）ヨセフの子と思はれ給へり。ヨセフの父はヘ
二四 二五 リ、二四その先はマタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、ヨセフ、二五マタテヤ、アモス、ナホム、エスリ、ナンガイ、
二六 二七 二八 二六マハテ、マタテヤ、シメイ、ヨセク、ヨダ、二七ヨハナン、レサ、ゾロバベル、サラテル、ネリ、二八メルキ、
二九 三〇 アデイ、コサム、エルマダム、エル、二九ヨセ、エリエゼル、ヨリム、マタテ、レビ、三〇シメオン、ユダ、ヨセ

イ出二三・一　利一九　ニ一六―一七　太三・　ヘ耳二・二八　徒二・　チ米四・一二　太一三　ヌ可九　四三、四八　カ（約三・二四）　レ太三・一七を見よ　一六―一三）
・二六　一一、一二　可一・　四、一一・一五　哥・二〇　ル約一・二九、三四、　ヨ二一、二二　太三・一　ソ太四・一七　徒一・一　ナ太一三　五五
ロ離四・一一　摂前六　七、八　約一・二六、　前六・一一、　一二・　リ詩一・四　雅二九・五　三・二七―三六　三一―一七　可一・九　ツ民四・三、四七　代上　・二七、三一　約六・
・八　二七　一三　但二・三五　何一三　ヲ太一四・一を見よ　一一　二三・三、四　四二
ハ（約一・二〇）　ホ使約三・二一　ト（使三〇・二四）　・三　ワ太一四・三を見よ　タ太一四・二三を見よ　ネ二三―二七（太一・

ラ母後五・一四　代上　・二六―一〇　代上　ノ創一・二六、二・七　一三　一九・八　テ（約前五・一九）　默　一七
三・五　孫一一・一二　一・二七―二四　哥前一五・四五、四　ク約三・三四　フ申八・三　一三、二、七　キ詩九一・一一、一二
ム三一―三四　太一・　井三六―三八　創五・　七　ヤ路三・三一二　コ五―八　太四・八―　ア申六・一三、　一〇・　ユ申六・一六
六一一　三二―三三　代上一・　オ一一―一三　太四・一　マ徒八・二九　一〇　二〇　メ來二・一八、　四・一
ウ三四―三六　創一一　四―一一　一一二　可一・一二、　ケ出三四・二八　王上　エ太二四・一四を見よ　サ九―一二　太四・五　五　ミ經四・七

三一 三二 フ、ヨナム、エリヤキム、三一メレヤ、メナ、マタタ、ナタン（ラ）、ダビデ（ム）、三二エッサイ、オベデ、ボアズ、サラ、ナ
三三 三四 アソン、三三アミナダブ、アデミン、アルニ、エスロン、パレス、ユダ、三四ヤコブ、イサク（ウ）、アブラハム、テラ、
三五 三六 三七 ナホル、三五セルグ、レウ、ペレグ、エベル、サラ、三六カイナン、アルパクサデ、セム（ヰ）、ノア、ラメク、三七メトセ
三八 ラ、エノク、ヤレデ、マハラレル、カイナン、三八エノス、セツ、アダム（ノ）に至る。アダムは神の子なり。

第四章

一 二 一（オ）イエス聖靈（ク）にて滿ち（ヤ）、ヨルダン河より歸り荒野にて、四十日のあひだ御靈（マ）に導かれ、二惡魔に
三 試みられ給ふ（ケ）。この間なにをも食はず、日數滿ちてのち饑ゑ給ひたれば、三惡魔いふ『なんぢ若し
四 神の子ならば此の石に命じてパンと爲らしめよ』四イエス答へたまふ『人（フ）の生くるはパンのみに由るにあらず』
五 六 と錄されたり』五惡魔（コ）またイエスを携へのぼりて瞬間に天下（エ）のもろもろの國を示して言ふ、六『この凡ての權威と
七 國々の榮華とを汝に與へん。我これを委ね（テ）られたれば、我が欲する者に與ふるなり。七この故にもし我が前に拜
八 せば、ことごとく汝の有となるべし』八イエス答へて言ひたまふ『主（ア）なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事ふべ
九 し』と錄されたり』九惡魔（サ）またイエスをエルサレムに連れゆき、宮の頂上に立たせて言ふ『なんぢ若し神の子な
一〇 一一 らば、此處より己が身を下に投げよ。一〇それは「なんぢ（キ）の爲に御使たちに命じて守らしめ給はん」一一「かれら手に
一二 て汝を支へ、その足を石に打當つる事なからしめん」と錄されたるなり』一二イエス答へて言ひたまふ『主（ユ）なる汝
の神を試むべからず」と云ひてあり』
一三 一三惡魔あらゆる嘗試（メ）を盡してのち暫くイエスを離れ（ミ）たり。

一四 一四イエス御靈の能力をもてガリラヤに歸り給へば、その聲聞あまねく四方の地に弘る。一五斯て諸會堂にて
教をなし、凡ての人に崇められ給ふ。
一六 一六偖その育てられ給ひし處の、ナザレに到り例のごとく、安息日に會堂に入りて聖書を讀まんとて立ち給ひ
一七 しに、一七預言者イザヤの書を與へたれば、其の書を繙きて、かく錄されたる所を見出し給ふ。一八『主の御靈われに
在す。これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ、我を遣して囚人に赦を得ることと、盲人に見ゆる事と
一九 二〇を告げしめ、壓へらるる者を放ちて自由を與へしめ、一九主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり』二〇イエス書を卷
二一 き、係りの者に返して坐し給へば、會堂に居る者みな之に目を注ぐ。二一イエス言ひ出でたまふ『この聖書は今日
二二 なんぢらの耳に成就したり』二二人々みなイエスを譽め、又その口より出づる惠の言を怪しみて言ふ『これヨセフ
二三 の子ならずや』二三イエス言ひ給ふ『なんぢら必ず我に俚諺を引きて「醫者よ、みづから己を醫せ、カペナウムに
二四 て有りしといふ、我らが聞ける事どもを己が鄕なる此の地にても爲せ」と言はん』二四また言ひ給ふ『われ誠に汝
二五 らに告ぐ、預言者は己が鄕にて喜ばるることなし。二五われ實をもて汝らに告ぐ、エリヤのとき三年六个月、天と
二六 ぢて、全地大なる饑饉なりしが、イスラエルの中に多くの寡婦ありたれど、二六エリヤは其の一人にすら遣され
二七 ず、唯シドンなるサレプタの一人の寡婦にのみ遣されたり。二七また預言者エリシヤの時、イスラエルの中に多
二八 くの癩病人ありしが、其の一人だに潔められず、唯シリヤのナアマンのみ潔められたり』二八會堂にをる者みな之
二九 を聞きて憤恚に滿ち、二九起ちてイエスを町より逐ひ出し、その町の建ちたる山の崖に引き往きて、投げ落さんと

イ太四・一二　ヘ太二・二三、一三・　チ（徒一三・一四一六）　ヌ徒一〇・三八　ワ利二五・一〇　踏一・五五　可六・三）　ツ太一・一六
ロ路四・一　五四・可六・二　踏二・三一、五一　リ黎六一・一、二太一二・八（太一一・一五）　ル箴四二・七　提後二　カ路四・一七　レ太四・一三を見よ（踏四・三一）　タ太二六・五五を見よ　ラ（太一一・一二）
ハ徒一〇・三七　ト（太一三・五四　可六・一、二）　ヲ詩一四六・八　箴二・二五、二六　ヨ太二六・五を見よ　ソ可六・一を見よ　ム王上一七・一九　ウ王下五・一、一四
ニ太九・二六を見よ　チ路四・三九、四一、八・二四　ワ詩一四六・八、四二・七　タ約六・四二（太一一・三）　ニ三・九五一、四・　ヰ（民一五・三五）
ホ太四・二三を見よ　ヌ徒一〇・三八　ル箴四二・七　ヨ太二六・五を見よ　ツ太一三・五七　可六・三）　ナ創一一・九、一八　ク（太一一・一二）
ヘ太二・二三、一三・一四一　ヲ詩一四六・八　箴二・二五、二六　ヨ太二六・五を見よ　ツ太一三・五七　可六・三）　ナ創一一・九、一八　ク（太一一・一二）
ヘ太二・二三、一三・一四一　ヲ詩一四六・八　箴二・二五、二六　ヨ太二六・五を見よ　ツ太一三・五七　可六・三）　ナ創一一・九、一八　ク（太一一・一二）

三〇 せしに、三〇イエスその中を通りて去り給ふ。
三一 三一斯てガリラヤの町カペナウムに下りて、安息日ごとに人を教へ給へば、三二人々その教に驚きあへり。その
三二 言、權威ありたるに因る。三三會堂に穢れし惡鬼の靈に憑かれたる人あり、大聲に叫びて言ふ、三四『ああ、ナザレの
三三 イエスよ、我らは汝となにの關係あらんや。我らを亡さんとて來給ふか。我はなんぢの誰なるを知る、神の聖者
三四 なり』三五イエス之を禁めて言ひ給ふ、『默せ、その人より出でよ』惡鬼その人を人々の中に倒し、傷つけずして出
三五 づ。三六みな驚き、語り合ひて言ふ『これ如何なる言ぞ、權威と能力とをもて命ずれば、穢れし惡鬼すら出で去
三六 る』三七爰にイエスの噂あまねく四方の地に弘りたり。
三七 三八イエス會堂を立ち出でて、シモンの家に入り給ふ。シモンの外姑おもき熱を患ひ居たれば、人々これが爲
三八 にイエスに願ふ。三九その傍らに立ちて熱を責めたまへば、熱去りて女たちどころに起きて彼らに事ふ。
三九 四〇日のいる時さまざまの病を患ふ者をもつ人、みな之をイエスに連れ來れば、一々その上に手を置きて醫し
四〇 給ふ。四一惡鬼もまた多くの人より出でて叫びつつ言ふ『なんぢは神の子なり』之を責めて物言ふことを免し給は
四一 ず、惡鬼そのキリストなるを知るに因りてなり。
四二 四二明る朝イエス出でて寂しき處にゆき給ひしが、群衆たづねて御許に到り、その去り往くことを止めんとせ
四三 し に、四三イエス言ひ給ふ『われ又ほかの町々にも神の國の福音を宣傳へざるを得ず、わが遣されしは之が爲な
四四 り』四四斯てユダヤの諸會堂にて教を宣べたまふ。

ノ（約一〇・三九）　ヤ太七・二八を見よ　コ可一・二四を見よ　ア路四・一四　シ太四・二三を見よ　セ四二、四三　可一・
オ三一—三七　可一・　マ路四・三六（約七・四六）　エ太八・二六　可四・三九、路四・三九、四一、八・二四　太八・一四、一五　可一・二九—三一　ユ四〇、四一　太八・一六、一七　可一・二三　立太四・二三を見よ　ス（可一・三八）
ク太四・一三を見よ（路四・二三）　ケ可一・二四を見よ　フ太八・二九を見よ　テ路四・三二　キ路四・三五、四一　メ（可一・三二）　ヒ路四・三五を見よ　ミ可五・二三を見よ　モ可一・三四を見よ（太八・四）

第五章

一群衆おし迫りて神の言を聽きをる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、二渚に二艘の舟の寄せあるを見たまふ、漁人は舟をいでて網を洗ひ居たり。三イエスその一艘なるシモンの舟に乘り、彼に請ひて陸より少しく押し出さしめ、坐して舟の中より群衆を敎へたまふ。四語り終へてシモンに言ひたまふ『深處に乘りいだし、網を下して漁れ』五シモン答へて言ふ『君よ、われら終夜、勞したるに何をも得ざりき、然れど御言に隨ひて網を下さん』六斯て然せしに魚の夥多しき群を圍みて網裂けかかりたれば、七他の一艘の舟にをる組の者を差招きて來り助けしむ。來りて魚を二艘の舟に滿したれば、舟沈まんばかりになりぬ。八シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下に平伏して言ふ『主よ、我を去りたまへ。我は罪ある者なり』九これはシモンも偕に居る者もみな漁りし魚の夥多しきに驚きたるなり。一〇ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言ひたまふ『懼るな、なんぢ今より後、人を漁らん』一一かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに從へり。

二イエス或る町に居給ふとき、視よ、全身癩病をわづらふ者あり。イエスを見て平伏し、願ひて言ふ『主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん』一三イエス手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、直ちに癩病されり。一四イエス之を誰にも語らぬやうに命じ、かつ言ひ給ふ『ただ往きて己を祭司に見せ、モーセが命じたるごとく汝の潔のために獻物して、人々に證せよ』一五されど彌增々イエスの事ひろまりて、大なる群衆、あるひは敎を聽かんとし、或は病を醫されんとして集り來りしが、一六イエス寂しき處に退きて祈り給ふ。

イ一—一一（太四・一—八—一二・六・一〇—四二）　路八・二一　約一・一二・四七　使一三・四四　撒前二・一三　雅一・一二　約一・四　ロ可四・一四—一二〇　民三四・一一　申三・一七　害一二・三、ホ（約二一・六、八）一三・二七　又太一八・一四、五・二九を見よ　ニ（太一三・二一　可四・一）　ヘ（路八・二四、四五、九・三三、四九、一七・一三）　チ太一四・二七を見よ　リ（使二・二六）　ヌ太四・二〇、二一　可一・四一　ル一二—一四　可一・四〇　ヲ一八—二六　太九・二—一八　可二・三—一一　ワ（路五・一八）　ナ太二四・一七を見よ　ラ（可二・四）　ム使一四・九　弗二・八　ウ太九・二を見よ　井讃三二・五、一〇三　ノ來四・一二、一三　默二・二三　オ使五・三一　ク太四・二四を見よ　ヤ（約五・八）　マ太九・八を見よ　ケ路七・一六　（路一・七）　コ太九・九を見よ　サ可二・一六　使二三　シ一三・一四　ス路五・一八　伯四二・一　ヒ路四・一二　ヤ路五・一八　ヤ約五・八　ヤ路五・一一を見よ　ユ太九・一二、可二・一一　ヨ（可一・四五）　タ（太一五・一）　レ（路二・四六）　ソ可五・三〇　路六、ネ太四・二四を見よ　ツ一八—二六　太九・二—一八　可二・三—一一　ラ（可二・四）　ム使一四・九　弗二・八　ウ太九・二を見よ　井讃三二・五、一〇三　ノ來四・一二、一三　默二・二三　オ使五・三一　ク太四・二四を見よ　ヤ（約五・八）　マ太九・八を見よ　ケ路七・一六　（路一・七）　コ太九・九を見よ　サ可二・一六　使二三　シ一三・一四　ス路五・一八　伯四二・一　ヒ路四・一二　ヤ路五・一八　ヤ約五・八　ヤ路五・一一を見よ　ユ太九・一二、可二・一一　ヨ路一八・一一、一二　ヨ（可一・四五）　タ（太一五・一）　レ（路二・四六）　ソ可五・三〇　路六、ネ太四・二四を見よ　路五・二四　一七或日イエス敎をなし給ふとき、ガリラヤの村々、ユダヤ及びエルサレムより來りしパリサイ人、敎法學者ら、そこに坐しゐたり、病を醫すべき主の能力イエスと偕にありき。一八視よ、人々、中風を病める者を、床にのせて擔ひきたり、之を家に入れて、イエスの前に置かんとすれど、一九群衆によりて擔ひ入るべき道を得ざれば、屋根にのぼり、瓦を取り除けて床のまま、人々の中にイエスの前に縋り下せり。二〇イエス彼らの信仰を見て言ひたまふ『人よ、汝の罪ゆるされたり』二一爰に學者・パリサイ人ら論じ出でて言ふ『瀆言をいふ此の人は誰ぞ、神より他に誰か罪を赦すことを得べき』二二イエス彼らの論ずる事をさとり、答へて言ひ給ふ『なにを心のうちに論ずるか。二三なんぢの罪ゆるされたり」と言ふと「起きて歩め」と言ふと孰か易き、二四人の子の地にて罪をゆるす權威あることを、汝らに知らせん爲に』——中風を病める者に言ひ給ふ——『なんぢに告ぐ、起きよ、床をとりて家に往け』二五かれ立刻に人々の前にて起きあがり、臥しゐたる床をとりあげ、神を崇めつつ己が家に歸りたり。二六人々みな甚く驚きて神をあがめ懼に滿ちて言ふ『今日われら珍しき事を見たり』

二七この事の後イエス出でて、レビといふ取稅人の收稅所に坐しをるを見て『われに從へ』と言ひ給へば、二八一切を棄ておき、起ちて從へり。二九レビ已が家にて、イエスの爲に大なる饗宴を設けしに、取稅人および他の人々も多く、食事の席に列りゐたれば、三〇パリサイ人および其の曹輩の學者ら、イエスの弟子たちに向ひ、呟きて言ふ『なにゆゑ汝らは取稅人・罪人らと共に飲食するか』三一イエス答へて言ひたまふ『健康なる者は醫者を要せず、ただ病ある者、これを要す。三二我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招きて悔改めさせんとて來れ

三三 り』三三 彼らイエスに言ふ『ヨハネの弟子等は、しばしば斷食し祈禱し、パリサイ人の弟子たちも亦然するに、汝
三四 の弟子たちは、飲食するなり』三四 イエス言ひたまふ『新郎の友だち新郎と偕にをるうちは、彼らに斷食せしめ得
三五 三六 んや。三五 然れど日來りて新郎をとられん、その日には斷食せん』三六 イエスまた譬を言ひ給ふ『たれも新しき衣を
切り取りて、舊き衣を繕ふ者はあらじ。もし然せば新しきものも破れ、かつ新しきものより取りたる裂も舊きも
三七 のに合はじ。三七 誰も新しき葡萄酒を、ふるき革囊に入ることは爲じ。もし然せば葡萄酒は囊をはりさき漏れ出
三八 三九 でて囊も廢らん。三八 新しき葡萄酒は、新しき革囊に入るべきなり。三九 誰も舊き葡萄酒を飲みてのち、新しき葡萄
酒を望む者はあらじ「舊きは善し」と云へばなり』

第六章

一 一 イエス安息日に麥畠を過ぎ給ふとき、弟子たち穗を摘み、手にて揉みつつ食ひたれば、二 パリサ
三 イ人のうち或者ども言ふ『なんぢらは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか』三 イエス答へて言ひ給
四 ふ『ダビデその伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲しし事をすら讀まぬか。四 即ち神の家に入りて、祭司の他は
五 食ふまじき供のパンを取りて食ひ、己と偕なる者にも與へたり』五 また言ひたまふ『人の子は安息日の主たるな
り』

六 六 又ほかの安息日にイエス會堂に入りて教をなし給ひしに、此處に人あり、其の右の手なえたり。七 學者・
七 パリサイ人ら、イエスを訴ふる廉を見出さんと思ひて、安息日に人を醫すや否やを窺ふ。八 イエス彼らの念を知
八 りて手なえたる人に『起きて中に立て』と言ひ給へば、起きて立てり。九 イエス彼らに言ひ給ふ『われ汝らに問
九 はん、安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと亡すと、孰かよき』一〇 かくて一同を見まはして、手なえた
一〇 る人に『なんぢの手を伸べよ』と言ひ給ふ。かれ然なしたれば、その手癒ゆ。一一 然るに彼ら狂氣の如くなりて、
一一 イエスに何をなさんと語り合へり。

一二 その頃イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつつ夜を明したまふ。一三 夜明になりて弟子たちを呼び寄せ、
一四 その中より十二人を選びて、之を使徒と名づけたまふ。一四 即ちペテロと名づけ給ひしシモンと其の兄弟アンデレ
一五 と、ヤコブとヨハネと、ピリポとバルトロマイと、一五 マタイとトマスと、アルパヨの子ヤコブと熱心黨と呼ばる
一六 るシモンと、一六 ヤコブの子ユダとイスカリオテのユダとなり。このユダはイエスを賣る者となりたり。一七 イエス
一七 此等とともに下りて、平かなる處に立ち給ひしに、弟子の大なる群衆およびユダヤ全國、エルサレム又ツロ、シ
一八 ドンの海邊より來りて或は教を聽かんとし、或は病を醫されんとする民の大なる群も、そこにあり。一八 穢れし靈
一九 に惱されたる者も醫さる。一九 能力イエスより出でて、凡ての人を醫せば、群衆みなイエスに觸らん事を求む。
二〇 二〇 イエス目をあげ弟子たちを見て言ひたまふ『幸福なるかな、貧しき者よ、神の國は汝らの有なり。二一 幸福なる
二一 哉、いま飢うる者よ、汝ら飽くことを得ん。幸福なる哉、いま泣く者よ、汝ら笑ふことを得ん。二二 人なんぢらを
二二 憎み、人の子のために遠ざけ謗り汝らの名を惡しとして棄てなば、汝ら幸福なり。二三 その日には、喜び躍れ。視
二三 二四 よ、天にて汝らの報は大なり、彼らの先祖が預言者たちに爲ししも、斯くありき。二四 されど禍害なるかな、富む

二五 者よ、汝らは既にその慰安を受けたり。二五 禍害なる哉、いま飽く者よ、汝らは飢ゑん。禍害なる哉、いま笑ふ者
二六 よ、汝らは悲しみ泣かん。二六 凡ての人、なんぢらを譽めなば、汝ら禍害なり。彼らの先祖が虚僞の預言者たちに
爲ししも、斯くありき。

二七 二七 われ更に汝ら聽くものに告ぐ、なんぢらの仇を愛し汝らを憎む者を善くし、二八 汝らを詛ふ者を祝し、汝ら
二九 を辱しむる者のために祈れ。二九 なんぢの頰を打つ者には、他の頰をも向けよ。なんぢの上衣を取る者には下衣を
三〇 も拒むな。三〇 すべて求むる者に與へ、なんぢの物を奪ふ者に復索むな。三一 なんぢら人に爲られんと思ふごとく人
三一 にも然せよ。三二 なんぢら己を愛する者を愛せばとて、何の嘉すべき事あらん、罪人にても己を愛する者を愛する
三二 三三 なり。三三 汝等おのれに善をなす者に善を爲すとも、何の嘉すべき事あらん、罪人にても然するなり。三四 なんぢら
三三 得る事あらんと思ひて人に貸すとも、何の嘉すべき事あらん、罪人にても均しきものを受けんとて罪人に貸すな
三四 り。三五 汝らは仇を愛し、善をなし、何をも求めずして貸せ、然らば、その報は大ならん。かつ至高者の子たるべ
三五 し。至高者は恩を知らぬもの、惡しき者にも仁慈あるなり。三六 汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ。
三六 三七 人を審くな、然らば汝らも審かるる事あらじ。人を罪に定むな、然らば汝らも罪に定められる事あらじ。人を
三七 赦せ、然らば汝らも赦されん。三八 人に與へよ、然らば汝らも與へられん。人は量をよくし、押し入れ、搖り入れ
三八 溢るるまでにして、汝らの懷中に入れん。汝等おのが量る量にて量らるべし』

三九 三九 また譬にて言ひたまふ『盲人は盲人を手引するを得んや、二人とも穴に落ちざらんや。四〇 弟子はその師に
四〇

イ(太六・二、一六・二) 二雅四・九を見よ　ロ伯一〇・五　ハ徒一四・一三　弗五　ホ約一五・一九　猶四　・四 約伝四・五　ヘ太七・一五を見よ　ト出二三・四・五 大五　チ箴一二・一四　リ路二三・三四　徒七　ヌ二九・三〇 太五・三　ル申一五・七—一一　ヲ太七・一二　ワ太五・四六　カ太五・四二　ヨ路六・三七　タ詩三七・二六、一一　レ路一・五　路六・三〇　ソ(太五・九、四五)　ツ太五・四八　オ三七・四二　太七・　ナ(太六・一四)　ラ申一五・一〇　ム可四・二四　ウ詩七九・一二　ク太一〇・二四を見よ

ヤ太五・四八　マ太七・三　ケ耶一七・九　フ箴一八・一七を見よ　四三・四四　コ四三・四四　一六・一八・二〇　エ太七・一六を見よ　テ箴一〇・二〇、二一　太一二・三五　弗四　ア雅三・六　サ太一二・三四を見よ　キ太七・二一　多一・一　六(馬一・六　加六　ユ四七—四九　太七・　シ結一三・一一—一六　答詩三・二三・四　エ彼撰一・一〇　撰一四　ス(太七・二八)　ミ詩一八・二　答詩三　モ雅一・二三、一・二〇　ヒ西二・七　セ箴二八・一五—一八　來一・二、三　ロ讃五・一四、一五　(太八・五)　ハ約撰五・一　イ一一・一〇　太八・五

勝らず、凡そ全うせられたる者は、その師の如くならん。四一 何ゆゑ兄弟の目にある*塵を見て、己が目にある梁木
四一 を認めぬか。四二 おのが目にある梁木を見ずして爭で兄弟に向ひて「兄弟よ、汝の目にある塵を取り除かせよ」と
四二 いふを得んや。僞善者よ、先づ己が目より梁木を取り除け。さらば明かに見えて兄弟の目にある塵を取りのぞき
得ん。四三 惡しき果を結ぶ善き樹はなく、また善き果を結ぶ惡しき樹はなし。四四 樹はおのおの其の果によりて知ら
四三 四四 る。茨より無花果を取らず、野荊より葡萄を收めざるなり。四五 善き人は心の善き倉より善きものを出し、惡しき
四五 人は惡しき倉より惡しき物を出す。それ心に滿つるより、口は物言ふなり。

四六 四六 なんぢら我を「主よ主よ」と呼びつつ何ぞ我が言ふことを行はぬか。四七 凡そ我にきたり我が言を聽きて行
四七 ふ者は、如何なる人に似たるかを示さん。四八 即ち家を建つるに地を深く掘り岩の上に基を据ゑたる人のごとし。
四八 洪水いでて流その家を衝けども動かすこと能はず、これ固く建られたる故なり。四九 されど聽きて行はぬ者は、基な
四九 くして家を土の上に建てたる人のごとし。流その家を衝けば、直ちに崩れて、その破壞、甚だし』

第七章

一 一 イエス凡て此らの言を民に聞かせ終へて後、カペナウムに入り給ふ。
二 二 時に或る百卒長、その重んずる僕やみて死ぬばかりなりしかば、三 イエスの事を聽きて、ユ
三 ダヤ人の長老たちを遣し、來りて僕を救ひ給はんことを願ふ。四 彼らイエスの許にいたり、切に請ひて言ふ『か
四 の人は、此の事を爲らるるに相應し。五 わが國人を愛し、我らのために會堂を建てたり』六 イエス共に往き給ひ
五 て、その家はや程近くなりしとき、百卒長、數人の友を遣して言はしむ『主よ、自らを煩はし給ふな。我は汝を
六

七 わが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり。七されば御前に出づるにも相應しからずと思へり、*ただ御言を賜ひ
八 て我が僕をいやし給へ。八我みづから權威の下に置かるる者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「往け」と
九 言へば往き、彼に「來れ」と言へば來り、わが僕に「これを爲せ」と言へば爲すなり』九イエス聞きて彼を怪し
一〇 み振反りて、從ふ群衆に言ひ給ふ『われ汝らに告ぐ、イスラエルの中にだに斯るあつき信仰は見しことなし』
一一 一〇遣されたる者ども家に歸りて、僕を見れば、既に健康となれり。
一二 一一その後イエス、ナインといふ町にゆき給ひしに弟子たち及び大なる群衆も共に往く。一二町の門に近づき給
一三 ふとき、視よ、舁き出さるる死人あり。これは獨息子にて母は寡婦なり、町の多くの人々これに伴ふ。一三主、
一四 寡婦を見て、憫み『泣くな』と言ひて、一四近より柩に手をつけ給へば、舁くもの立ち止る。イエス言ひたまふ
一五 『若者よ、我なんぢに言ふ、起きよ』一五死人、起きかへりて物言ひ始む。イエス之を母に付したまふ。一六人々
一六 みな懼をいだき、神を崇めて言ふ『大なる預言者、われらの中に興れり』また言ふ『神その民を顧み給へり』一七
一七 この事ユダヤ全國および最寄の地に徧くひろまりぬ。
一八 一八偖ヨハネの弟子たち、凡て此等のことを告げたれば、一九ヨハネ兩三人の弟子を呼び、主に遣して言はしむ
二〇 『來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか』二〇彼ら御許に到りて言ふ『バプテスマのヨハネ、我らを遣して
二一 言はしむ「來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか』二一この時イエス多くの者の病・疾患を醫し、惡しき靈
二二 を逐ひだし、又おほくの盲人に見ることを得しめ給ひしが、二二答へて言ひたまふ『往きて汝らが見聞せし所を

イ 使二九・二三　ロ 太八・一〇（路七・五〇）　ハ 路七・一九、一四〇・四一、一一・三九、一二・一、三四・約四・一、六（玉下四・三二—三）　ニ 太九・三六、約一一・一四　ホ 路八・五四（徒九・三三—三五）　ヘ 太一一・一、路一・一三、一五、一七、五・六、一八・六、一九・八、二二・六一、二四・一、一三、一五—一七　ト 路一・六五、五・二六　チ 太九・八を見よ　リ 太二一・一一を見よ（路七・二九）　ヌ 出四・三一、路一・六八　ル 太九・二六を見よ　ヲ 一八—二五、太一一・一九　ワ 路七・一三を見よ　カ 創三・一五、四九・一〇、民二四・一七　レ 太一一・四　ソ 太九・三〇（雅三・五、五・六、四二・七）

ッ 太一五・三〇、三一　ネ 太八・二二　ナ 可七・三七　ラ 太九・二四・二五　ム 路四・一六—二一　ウ 太一一・六（太一三・一〇、雅六・一一）　ヰ 路一・七六　ノ 箴四・一四　オ 路一・五七、約六・六六　ク 馬三・一、太一一・一　ヤ 路七・二五、一八、一九　マ 徒一八・二五、一九　ケ 太三・六、路三・一二（太二一・三二）　コ 徒二〇・二七　フ 太二二・三五を見よ　テ 太三・四、可一・六　ア 太九・一〇、一一、路一・一五、二六・七、可二・一五、路五・二九、七・三　エ 太一一・一六　サ 詩九二・五、六、何一・四、約九・九、太一一・九　キ 路七・二九　ユ 路一一・三七、一四　メ 三七・三九、太二六・六—一三、可一四・三—一九、約一二・一—八　ケ 太三・六、路三・一二　ヲ 提前一・三、四　ア 太二一・三五を見よ　ヨ 可三・一〇を見よ　タ 太四・二三を見よ

ヨハネに告げよ。盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は
二三 福音を聞かせらる。二三おほよそ我に躓かぬ者は幸福なり』
二四 二四ヨハネの使の去りたる後、ヨハネの事を群衆に言ひいで給ふ『なんぢら何を眺めんとて野に出でし、風に
二五 そよぐ葦なるか。二五然らば何を見んとて出でし、柔かき衣を著たる人なるか。視よ、華美なる衣をきて奢り暮す
二六 者は王宮に在り。二六然らば何を見んとて出でし、預言者なるか。然り我なんぢらに告ぐ、預言者よりも勝る者な
二七 り。二七「視よ、わが使を汝の顏のまへに遣す。かれは汝の前に汝の道をそなへん」と錄されたるは此の人なり。
二八 二八われ汝らに告ぐ、女の產みたる者の中、ヨハネより大なる者はなし。然れど神の國にて小き者も、彼よりは大
二九 なり。二九（凡ての民これを聞きて、取稅人までも神を正しとせり。ヨハネのバプテスマを受けたるによる。三〇然れ
三〇 どパリサイ人・敎法師らは、其のバプテスマを受けざりしにより、各自にかかはる神の御旨をこばみたり）三一然
三一 れば、われ今の代の人を何に比へん。彼らは何に似たるか。三二彼らは童、市場に坐し、たがひに呼びて「われら
三二 汝らの爲に笛吹きたれど、汝ら躍らず。歎きたれど、汝ら泣かざりき」と云ふに似たり。三三それはバプテスマの
三三 ヨハネ來りて、パンをも食はず、葡萄酒をも飲まねば「惡鬼に憑かれたる者なり」と汝ら言ひ、三四人の子きたり
三四 て飲食すれば「視よ、食を貪り、酒を好む人、また取稅人・罪人の友なり」と汝ら言ふなり。三五然れど智慧は己
三五 が凡ての子によりて正しとせらる』*
三六 三六爰に或るパリサイ人ともに食せん事をイエスに請ひたれば、パリサイ人の家に入りて席につき給ふ。三七視
三七

よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席にゐ給ふを知り、香油の入りたる石膏
三八 の壺を持ちきたり、三八泣きつつ御足近く後にたち、涙にて御足をうるほし、頭の髪にて之を拭ひ、また御足に接
三九 吻して香油を抹れり。三九イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言ふ『この人もし預言者ならば觸
四〇 る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人なるに』四〇イエス答へて言ひ給ふ『シモン、我なんぢに言ふこ
四一 とあり』シモンいふ『師よ言ひたまへ』四一『或る債主に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の
四二 負債せしに、四二償ひかたなければ、債主この二人を共に免せり。されば二人のうち債主を愛すること孰か多き』
四三 四三シモン答へて言ふ『われ思ふに、多く免されたる者ならん』イエス言ひ給ふ『なんぢの判斷は當れり』四四斯て
女の方に振向きてシモンに言ひ給ふ『この女を見るか。我なんぢの家に入りしに、なんぢは我に足の水を與へ
四五 ず、此の女は涙にて我が足を濡し、頭髪にて拭へり。四五なんぢは我に接吻せず、此の女は我が入りし時より、我
四六 が足に接吻して止まず。四六なんぢは我が頭に油を抹らず、此の女は我が足に香油を抹れり。四七この故に我なんぢ
四七 に告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり。赦さるる事の少き者は、その愛する事
四八 もまた少し』四八遂に女に言ひ給ふ『なんぢの罪は赦されたり』四九同席の者ども心の内に『罪をも赦す此の人は誰
四九 なるか』と言ひ出づ。五〇爰にイエス女に言ひ給ふ『なんぢの信仰、なんぢを救へり、安らかに往け』

第八章

一 一この後イエス數を宣べ、神の國の福音を傳へつつ、町々村々を廻り給ひしに、十二弟子も伴ふ。
二 二また前に惡しき靈を逐ひ出され、病を醫されなどせし女たち、即ち七つの惡鬼のいしマグダラ

イ太二六・七 ロ路一五・二 ハ路七・一六 一九 約四・ ニ箴六五・五 路一八 ト太一八・二五 ・一一 水路一三・四 へ太一八・二八 可六 ・三七 チ詩三二・一—五、一 リ詩一五・九、一〇 ○三・三 箴四三・二 五 来七・一八 徒 ・一三—一六 一三・三八三・九 羅 ヌ創一八・四、一九・ 二・二四 申二・八 ル創三三・四 五・ヨ 詩一〇六・一二、一 三 箴五八・二—四 一九・二一 提前五 ・一〇 ・一〇 (母債一二・一〇 但 ヨ哈二・四 太九・二二 一〇・三 可一〇・五二 路一 八・四二 弗二・八 タ可五・三四を見よ (羅五・一)

一〇—一〇 ヤ太一三・二一を見よ マ太一三・四を見よ ケ西一・六 徒一・二一 彼前一・二三 フ彼前五・八 コ來二・一 獅一・七 三・二四 エ詩一〇六・一二、一 三 箴五八・二—四 テ何六・四 可六・一〇 弗三・一七 約登二 ・一九 ア提後四・一〇 約登 二・一五—一七 ク九—一五 太一三・ 一〇—二三 可四・ 一九 可四・一—九 太一三・二 ・二日 可一〇・二三 純五・一—一〇 ナ太一四・一を見よ ラ太二〇・八 ム路二四・一〇 ウ四—一八 一九 井乃四・三 ノ創二六・一二 オ太一・一五を見よ ク九—一五 太一三・ 一〇—二三 可四・ キ羅二・七 來一〇・三 六 猶五・一〇、一一 ユ詩一・三 約一五・ 五八 加五・二二、 二三 西一・六、一〇 メ太五・五 可四・二 一 落一・三三 ミ太一〇・二六 可四 ・二一 路一一・一 哥前四・五 シ太一三・一二を見よ

三 と呼ばるるマリヤ、三ヘロデの家司クーザの妻ヨハンナ及びスザンナ、此の他にも多くの女、ともなひゐて其の
財産をもて彼らに事へたり。
四 四大なる群衆むらがり町々の人、みもとに寄り集ひたれば、譬をもて言ひたまふ、五『種播く者その種を播か
六 んとて出づ。播くとき路の傍らに落ちし種あり、踏みつけられ、又そらの鳥これを啄む。六岩の上に落ちし種あ
七 り、生え出でたれど潤澤なきによりて枯る。七茨の中に落ちし種あり、茨も共に生え出でて之を塞ぐ。八良き地
九 に落ちし種あり、生え出でて百倍の實を結べり』これらの事を言ひて呼はり給ふ『きく耳ある者は聽くべし』
一〇 九弟子たち此の譬の如何なる意なるかを問ひたるに、一〇イエス言ひ給ふ『なんぢらは神の國の奥義を知ること
一一 とを許されたれど、他の者は譬にてせらる。彼らの見て見ず、聞きて悟らぬ爲なり。一一譬の意は是なり。種は神
一二 の言なり。一二路の傍らなるは、聽きたるのち、惡魔きたり、信じて救はるる事のなからんために御言をその心よ
一三 り奪ふ所の人なり。一三岩の上なるは聽きて御言を喜び受くれども、根なければ、暫く信じて嘗試のときに退く所
一四 の人なり。一四茨の中に落ちしは、聽きてのち、過るほどに世の心勞と財貨と快樂とに塞がれて實らぬ所の人な
一五 り。一五良き地なるは、御言を聽き、正しく善き心にて之を守り、忍びて實を結ぶ所の人なり。
一六 一六誰も燈火をともし器にて覆ひ、または寢臺の下におく者なし、入り來る者のその光を見んために之を燈臺
一七 の上に置くなり。一七それ隱れたるものの顯れぬはなく、秘めたるものの知られぬはなく、明かにならぬはなし。
一八 一八然れば汝ら聽くこと如何と心せよ、誰にても有てる人は、なほ與へられ、有たぬ人は、その有てりと思ふ物を

も取らるべし』

一九 さてイエスの母と兄弟と來りたれど、群衆によりて近づくこと能はず。二〇 或人イエスに『なんぢの母と兄
二一 弟と汝に逢はんとて外に立つ』と告げたれば、二一 答へて言ひたまふ『わが母、わが兄弟は、神の言を聽き、かつ
行ふ此らの者なり』

二二 或日イエス弟子たちと共に舟に乗りて『みづうみの彼方にゆかん』と言ひ給へば、乃ち船出す。二三 渡るほ
二四 どにイエス眠りたまふ。颶風みづうみに吹き下し、舟に水滿ちんとして危かりしかば、二四 弟子たち御側により、
呼び起して言ふ『君よ、君よ、我らは亡ぶ』イエス起きて風と浪とを禁め給へば、共に鎭まりて凪となりぬ。
二五 斯て弟子たちに言ひ給ふ『なんぢらの信仰いづこに在るか』かれら懼れ怪しみて互に言ふ『こは誰ぞ、風と水
とに命じ給へば順ふとは』

二六 遂にガリラヤに對へるゲラセネ人の地に著く。二七 陸に上りたまふ時、その町の人にて惡鬼に憑かれたる者
二八 きたり遇ふ。この人は久しきあひだ衣を著ず、また家に住まずして墓の中にゐたり。二八 イエスを見てさけび、御
二九 前に平伏して大聲にいふ『至高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、願くは我を苦しめ給ふな』二九 これ
はイエス穢れし靈に、この人より出で往かんことを命じ給ひしに因る。この人けがれし靈にしばしば拘へられ、
三〇 鏈と足械とにて繫ぎ守られたれど、その繫をやぶり、惡鬼に逐はれて、荒野に往けり。三〇 イエス之に『なんぢの
三一 名は何か』と問ひ給へば『レギオン』と答ふ、多くの惡鬼その中に入りたる故なり。三一 彼らイエスに底なき所に

レ(伯一・一〇—一二) ラ太四・二四を見よ　井蘇一・二三　オ太九・一　可五・二　ケ可五・二二を見よ　フ太一四・三六
ソ(王上二二・二二)　ム(伯二一・四　徒一六・三九)　ノ詩三二・六、七一・一一　マ伯一三・四　邯八・コ路五・五を見よ
ツ詩八・二二　ム(伯二一・四　徒一六・三九)　ク四一—五六　太九・二二　路四・二三
ネ詩五一・一〇　ウ三八・三九　可五・一八—二〇　一八・二四　提前一・二三　ヤ太一九・一　可五・一六　ケ可一二・四四を見よ
ナ(路一〇・三九)　一八・二四　提前一・二三　二二—四三

イ一九—二一　太一二　ハ二二—二五　太八・ホ詩一〇七・二三—二二　リ詩四六・一二　察　チ可五・七を見よ　タ民一〇・七　默九・
・四六—五〇　可三　二三—二七　可四・七　四三・二一　一一—一七　一、二、一一、一一・
三一—三五　三六—四一　ヘ路五・五を見よ　又詩八九・九　ワ太八・二九を見よ　默二〇・一〇　七、一七・八、二〇
ロ路一・一・二八　約一　ニ路五・一を見よ　路　ト路四・三九を見よ　ル二六—三七　太八・カ徴六　默二〇・一〇　・一三
四・二二　八・三三　チ詩一〇七・二九　二八—三四　可五・ヨ(太二六・五三)

三二 往くを命じ給はざらんことを請ふ。三三 彼處の山に、多くの豚の一群、食し居たりしが、惡鬼ども其の豚に入るを
三三 許し給はんことを請ひたれば、イエス許し給ふ。三三 惡鬼、人を出でて豚に入りたれば、その群、崖より湖水に駈
三四 三五 け下りて溺れたり。三四 飼ふ者ども此の起りし事を見て逃げ往きて、町にも里にも告げたれば、三五 人々ありし事を
見んとて出で、イエスに來りて惡鬼の出でたる人の、衣服をつけ、慥なる心にて、イエスの足下に坐しをるを見
三六 三七 て懼れあへり。三六 かの惡鬼に憑かれたる人の救はれし事柄を見し者ども之を彼らに告げたれば、三七 ゲラセネ地方
の民衆、みなイエスに出で去り給はんことを請ふ。これ大に懼れたるなり。爰にイエス舟に乘りて歸り給ふ。
三八 三九 時に惡鬼の出でたる人、ともに在らんことを願ひたれど、之を去らしめんとて、三九 言ひ給ふ『なんぢの家に歸
りて、神が如何に大なる事を汝になし給ひしかを具に告げよ』彼ゆきて、イエスの如何に大なる事を、己になし
給ひしかを徧くその町に言ひ弘めたり。

四〇 四一 斯てイエスの歸り給ひしとき、群衆これを迎ふ、みな待ちゐたるなり。四一 視よ、會堂司にてヤイロといふ
四二 者あり、來りてイエスの足下に伏し、その家にきたり給はんことを願ふ。四二 おほよそ十二歲ほどの一人娘ありて
死ぬばかりなる故なり。イエスの往き給ふとき、群衆かこみ塞がる。
四三 四三 爰に十二年このかた血漏を患ひて醫者の爲に己が身代をことごとく費したれども、誰にも癒され得ざりし
女あり。四四 イエスの後に來りて、御衣の繻にさはりたれば、血の出づること立刻に止みたり。四五 イエス言ひ給ふ
四四 四五 『我に觸りしは誰ぞ』人みな否みたれば、ペテロ及び共にをる者ども言ふ『君よ、群衆なんぢを圍みて押し迫る

四六 四七 なり』四六イエス言ひ給ふ『われに觸りし者あり、能力の我より出でたるを知る』四七女おのが隱れ得ぬことを知
四八 り、戰き來りて御前に平伏し、觸りし故と立刻に癒えたる事とを、人々の前にて告ぐ。四八イエス言ひ給ふ『むす
めよ、汝の信仰なんぢを救へり、安らかに往け』

四九 五〇 四九かく語り給ふほどに、會堂司の家より人きたりて言ふ『なんぢの娘は早や死にたり、師を煩はすな』五〇イ
五一 エス之を聞きて會堂司に答へたまふ『懼るな、ただ信ぜよ。さらば娘は救はれん』五一イエス家に到りて、ペテ
五二 ロ、ヨハネ、ヤコブ及び子の父母の他は、ともに入ることを誰にも許し給はず。五二人みな泣き、かつ子のために
五三 歎き居たりしが、イエス言ひたまふ『泣くな。死にたるにあらず、寢ねたるなり』五三人々その死にたるを知れば、
五四 五五 イエスを嘲笑ふ。五四然るにイエス子の手をとり、呼びて『子よ、起きよ』と言ひ給へば、五五その靈かへりて立刻
五六 に起く。イエス食物を之に與ふることを命じ給ふ。五六その兩親おどろきたり。イエス此の有りし事を誰にも語ら
ぬやうに命じ給ふ。

第九章

一 一 イエス十二弟子を召し寄せて、もろもろの惡鬼を制し、病をいやす能力と權威とを與へ、二また
三 神の國を宣傳へしめ、人を醫さしむる爲に之を遣さんとして言ひ給ふ、三『旅のために何をも持つ
四 な、杖も袋も糧も銀も、また二つの下衣をも持つな。四いづれの家に入るとも、其處に留れ、而して其處より立
五 五六 ち去れ。五人もし汝らを受けずば、その町を立ち去るとき證のために足の塵を拂へ』六爰に弟子たち出でて村々
を歷巡り徧く福音を宣傳へ、醫すことを爲せり。

イ路五・一七を見よ　ホ路八・四一　リ路七・一四　約一一　ワ三—五　太一〇・九　・八（路二二・三五、タ可六・一二路八・一
ロ摩六・六・二　ヘ可五・三六　ト太一・一七　路二　ヌ太八・四を見よ　一一（路一〇・四—　三六）
ハ大九・二二を見よ　（從一四・九）　三・七　ル太一〇・五可六・七　一二・二（路一〇・三五）　ヨ太一〇・一四可六
ニ可五・三四を見よ　チ約一・一・一・一三　チ（太一〇・七）　カ太一〇・一〇可六　・二・二路一〇・一一　使一三・五一

七 七 さて國守ヘロデ、ありし凡ての事をききて周章てまどふ。或人はヨハネ死人の中より甦へりたりといひ、
八 八或人はエリヤ現れたりといひ、また或人は古への預言者の一人、甦へりたりと言へばなり。九ヘロデ言ふ『ヨハ
ネは我すでに首斬りたり、然るに斯る事のきこゆる此の人は誰なるか』かくてイエスを見んことを求めぬたり。
一〇 一〇使徒たち歸りきて、其の爲し事を具にイエスに告ぐ。イエス彼らを携へて窃にベツサイダといふ町に退
一一 きたまふ。一一然れど群衆これを知りて從ひ來たれば、彼らを接けて、神の國の事を語り、かつ治療を要する人
一二 人を醫したまふ。一二日傾きたれば、十二弟子きたりて言ふ『群衆を去らしめ、周圍の村また里にゆき、宿をとり
一三 て、食物を求めさせ給へ。我らは斯る寂しき處に居るなり』一三イエス言ひ給ふ『なんぢら食物を與へよ』弟子た
一四 ち言ふ『我らに、ただ五つのパンと二つの魚とあるのみ、此の多くの人のために、往きて買はねば他に食物な
一五 し』一四男おほよそ五千人ゐたればなり。イエス弟子たちに言ひたまふ『人々を組にして五十人づつ坐せしめよ』
一六 一五彼等その如くなして、人々をみな坐せしむ。一六斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、
一七 擘きて弟子たちに付し、群衆のまへに置かしめ給ふ。一七彼らは食ひて皆飽く。擘きたる餘を集めしに十二筐ほど
ありき。

一八 一八イエス人々を離れて祈り居給ふとき、弟子たち偕にをりしに問ひて言ひたまふ『群衆は我を誰といふか』
一九 一九答へて言ふ『バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は古への預言者の一人、甦へりたりと言ふ』二〇イエス
二〇 言ひ給ふ『なんぢらは我を誰と言ふか』ペテロ答へて言ふ『神のキリストなり』二一イエス彼らを戒めて、之を誰

レ七—九 ヘ路二三・八　ナ路二三・八　・五—一三　ウ太一・二一を見よ　・一三—一六　可八
七—二九　ム一〇—一七　太一四　ク（太一四—二三　路六　マ太一六・二〇　可八
二可六・一二、二五　ラ可六・三〇　・二七—二九　・三〇（太八・四）
ソ太一四・二を見よ　・二二—二一　可六　井可六・三九　一四・二三　路六
ツ太一四・二を見よ　・三二—四四　約六　ノ太一四・二〇を見よ　・一二、九・二八）
ネ太一六・一四を見よ　オ一八—二〇　太一六　ヤ（約六・六八、六九）

七 七さて國守ヘロデ、ありし凡ての事をききて周章てまどふ。或人はヨハネ死人の中より甦へりたりといひ、
八 八或人はエリヤ現れたりといひ、また或人は古への預言者の一人、甦へりたりと言へばなり。九ヘロデ言ふ『ヨハ
ネは我すでに首斬りたり、然るに斯る事のきこゆる此の人は誰なるか』かくてイエスを見んことを求めぬたり。
一〇 一〇使徒たち歸りきて、其の爲し事を具にイエスに告ぐ。イエス彼らを携へて窃にベツサイダといふ町に退
一一 きたまふ。一一然れど群衆これを知りて從ひ來たれば、彼らを接けて、神の國の事を語り、かつ治療を要する人
一二 人を醫したまふ。一二日傾きたれば、十二弟子きたりて言ふ『群衆を去らしめ、周圍の村また里にゆき、宿をとり
一三 て、食物を求めさせ給へ。我らは斯る寂しき處に居るなり』一三イエス言ひ給ふ『なんぢら食物を與へよ』弟子た
一四 ち言ふ『我らに、ただ五つのパンと二つの魚とあるのみ、此の多くの人のために、往きて買はねば他に食物な
一五 し』一四男おほよそ五千人ゐたればなり。イエス弟子たちに言ひたまふ『人々を組にして五十人づつ坐せしめよ』
一六 一五彼等その如くなして、人々をみな坐せしむ。一六斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、
一七 擘きて弟子たちに付し、群衆のまへに置かしめ給ふ。一七彼らは食ひて皆飽く。擘きたる餘を集めしに十二筐ほど
ありき。

一八 一八イエス人々を離れて祈り居給ふとき、弟子たち偕にをりしに問ひて言ひたまふ『群衆は我を誰といふか』
一九 一九答へて言ふ『バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は古への預言者の一人、甦へりたりと言ふ』二〇イエス
二〇 言ひ給ふ『なんぢらは我を誰と言ふか』ペテロ答へて言ふ『神のキリストなり』二一イエス彼らを戒めて、之を誰

二二 にも告げぬやうに命じ、かつ言ひ給ふ。二二『人の子は必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・學者らに棄てられ、
二三 かつ殺され、三日めに甦へるべし』二三また一同の者に言ひたまふ『人もし我に從ひ來らんと思はば、己をすて、
二四 日々おのが十字架を負ひて我に從へ。二四己が生命を救はんと思ふ者は之を失ひ、我がために己が生命を失ふその
二五 人は之を救はん。二五人、全世界を贏くとも己をうしなひ己を損せば、何の益あらんや。二六我と我が言とを恥づる
二七 者をば、人の子もまた己と父と聖なる御使たちとの榮光をもて來らん時に恥づべし。二七われ實をもて汝らに告
ぐ、此處に立つ者のうちに、神の國を見るまでは、死を味はぬ者どもあり』

二八 二八これらの言をいひ給ひしのち八日ばかり過ぎて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを率きつれ、祈らんとて山に登
二九 り給ふ。二九かくて祈り給ふほどに、御顏の狀かはり、其の衣白くなりて輝けり。三〇視よ、二人の人ありてイエス
三〇 と共に語る。これはモーセとエリヤとにて、三一榮光のうちに現れ、イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去の
三一 ことを言ひゐたるなり。三二ペテロ及び偕にをる者いたく睡氣ざしたれど、目を覺してイエスの榮光および偕に立
三二 つ二人を見たり。三三二人の者イエスと別れんとする時、ペテロ、イエスに言ふ『君よ、我らの此處に居るは善し、
三三 我ら三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの爲にせん』彼は言ふ所を知らざり
三四 き。三四この事を言ひ居るほどに、雲おこりて彼らを覆ふ。雲の中に入りしとき、弟子たち懼れたり。三五雲より聲
三五 出でて言ふ『これは我が選びたる子なり、汝ら之に聽け』三六*聲出でしとき、唯イエスひとり見え給ふ。弟子たち
三六 默して、見し事を何一つ其の頃たれにも告げざりき。

イ 二二—二七 太一六・二六 ハ 太一〇・三八を見よ ト 太一六・二八 ヌ 路三・二一、五・一 ワ 後一・一五 タ 太一七・四 可九・五 九、一〇
・二二—二八 可八 ニ 太一〇・三九を見よ チ 二八—三六 太一七 六、六・一二、九・ カ 六・二六・四三 可一 レ 可九・六
・三一—九・一 ホ 來一〇・三四 ・一—八 可九・二— 四・伝〇 ソ 後後一・一七、一八
ロ 太一六・二一を見よ ヘ（太一〇・三三 路 八 ル（七・五・一） ツ 太三・一七を見よ
路九・四四 一二・九） リ 太一七・一を見よ チ（可一六・一二） ヨ 路五・五を見よ 路 ネ（太一七・九 可九・
九・四九

三七 三七次の日、山より下りたるに、大なる群衆イエスを迎ふ。三八視よ、群衆のうちの或人さけびて言ふ『師よ、
三八 願くは我が子を顧みたまへ、之は我が獨子なり。三九視よ、靈の憑くときは俄に叫ぶ、痙攣けて沫をふかせ、甚く
三九 害ひ、漸くにして離るるなり。四〇御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど、能はざりき』四一イエス答へて言
四〇 ひ給ふ『ああ信なき曲れる代なる哉、われ何時まで汝らと偕にをりて、汝らを忍ばん。汝の子をここに連れ來れ』
四一 四二乃ち來るとき、惡鬼これを打ち倒し、甚く痙攣けさせたり。イエス穢れし靈を禁め、子を醫して、その父に付
四二 したまふ。四三人々みな神の稜威に驚きあへり。

四三 人々みなイエスの爲し給ひし凡ての事を怪しめる時、イエス弟子たちに言ひ給ふ、四四『これらの言を汝らの
四四 耳にをさめよ。人の子は人々の手に付さるべし』四五かれら此の言を悟らず、辨へぬやうに隱されたるなり。また
四五 此の言につきて問ふことを懼れたり。

四六 四六爰に弟子たちの中に、誰か大ならんとの爭論おこりたれば、四七イエスその心の爭論を知りて、幼兒をとり
四七 御側に置きて言ひ給ふ、四八『おほよそ我が名のために此の幼兒を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、
四八 我を遣しし者を受くるなり。汝らの中にて最も小き者は、これ大なるなり』

四九 四九ヨハネ答へて言ふ『君よ、御名によりて惡鬼を逐ひいだす者を見しが、我等とともに從はぬ故に、之を止
五〇 めたり』五〇イエス言ひ給ふ『止むな。汝らに逆はぬ者は、汝らに附く者なり』

五一 五一イエス天に擧げらるる時滿ちんとしたれば、御顏を堅くエルサレムに向けて進まんとし、五二己に先だちて

ナ 三七—四二 太一七 ・二二、二三 可九・ ・一—五 可九・三三 マ 四九・五〇 可九・ ヨ 可一六・一九を見よ
・一四—一八 可九 三〇—三二 三七 三八—四〇 ・五を見よ 路 エ（路一三・二二—一七
ラ 後後一・六 ウ 路九・二二 オ 太九・四を見よ ケ 路五・五を見よ ・一一、一八・三一、
ム 四三—四五 太一七 井 可九・三二を見よ ク 太一〇・四〇を見よ 九・二三 一九・二一、二八）
ノ 四六—四八 太一八 ヤ 路二二・二六 フ 太一二・三〇を見よ

五三 使を遣したまふ。彼ら往きてイエスの爲に備をなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、五三 村人そのエルサレ
五四 ムに向ひて往き給ふさまなるが故に、イエスを受けず。五四 弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言ふ『主よ、我ら
五五 五六 *が天より火を呼び下して彼らを滅すことを欲し給ふか』五五 イエス顧みて彼らを戒め、五六 遂に相共に他の村に往き
たまふ。

五七 五八 五七 途を往くとき、或人イエスに言ふ『何處に往き給ふとも我は從はん』五八 イエス言ひたまふ『狐は穴あり、
五九 空の鳥は塒あり、されど人の子は枕する所なし』五九 また或人に言ひたまふ『我に從へ』かれ言ふ『まづ往きて我
六〇 が父を葬ることを許し給へ』六〇 イエス言ひたまふ『死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の國
六一 を言ひ弘めよ』六一 また或人いふ『主よ、我なんぢに從はん、然れど先づ家の者に別を告ぐることを許し給へ』
六二 六二 イエス言ひたまふ『手を鋤につけてのち、後を顧みる者は、神の國に適ふ者にあらず』

第一〇章

一 一 この事ののち、主、ほかに七十人をあげて、自ら往かんとする町々處々へ、おのれに先立ち二人
二 づつを遣さんとして言ひ給ふ、二『收穫はおほく、勞動人は少し。この故に收穫の主に勞動人をその
三 收穫場に遣し給はんことを求めよ。三 往け、視よ、我なんぢらを遣すは、羔羊を豺狼のなかに入るるが如し。
四 四 財布も袋も鞋も携ふな。また途にて誰にも挨拶すな。五 孰の家に入るとも、先づ平安この家にあれと言へ。
六 六 もし平安の子、そこに居らば、汝らの祝する平安はその上に留らん。もし然らずば、其の平安は汝らに歸ら
七 ん。七 その家にとどまりて、與ふる物を食ひ飲みせよ。勞動人のその値を得るは相應しきなり。家より家に移る

イ 太一〇・五を見よ　ロ 約四・九　ハ (可三・二七)
ニ (王下一・一〇—一)　ホ 路九・五一　ヘ 五七—六〇　ト 太八・二〇を見よ　チ 太八・二二を見よ　リ 太四・一三　ヌ (王上一九・一〇)　ル (詩三・一三、來一〇)　ヲ 太九・三七、三八　ワ (路九・二、五二)　カ 可六・七　ヨ 太九・三七、三八　タ 太一〇・六　レ 四—一二 (太一〇・九—一五 可六・八 —一一 路九・三—)　ソ 利一九・一三 申二四・一四、一五 太一〇・一〇 哥前九・一四 堤前五・一八　ツ (哥前一〇・二七)　ネ (太三・二、一〇・七)　ナ 路九・五を見よ　ラ 路一〇・九　ム 太一〇・一五を見よ　ウ 太一〇・五、一一・二二、二四　ヰ 一三—一五 太一一・二一—二三　ノ 太一一・二一を見よ　オ 太一一・二一を見よ　ク 太一一・二一を見よ　ヤ 創三七・二四 丹後三・三一 王上二一　マ 路一〇・二二　ケ 太四・二三を見よ　フ 太一一・二三を見よ　コ 太一〇・四〇 約一・二七　尼九・一 結　耳一・二三 全三・一　サ (可一六・一八) 詩六 出三・二二、九・八 箴四・二 但一・一 結一三・九 箴四・二 來一・二 詩四・二 來三・五、一二　エ (約一・一四) 二・四八 撮前四・八　テ 可一六・一七を見よ　ア 太四・一〇を見よ　キ 出三・二〇 伯四・九・一三、二〇、一七、八、二〇・一二、一七、二一、二七　ユ 二一・二七 太一一・二七　メ (約一七・二六)

一八 九 な。八 孰の町に入るとも、人々なんぢらを受けなば、汝らの前に供ふる物を食し、九 其處にをる病のものを醫
一〇 し、また「神の國は汝らに近づけり」と言へ。一〇 孰の町に入るとも、人々なんぢらを受けずば、大路に出でて、
一一 二「我らの足につきたる汝らの町の塵をも汝らに對して拂ひ棄つ、されど神の國の近づけるを知れ」と言へ。
一二 一三 二われ汝らに告ぐ、かの日にはソドムの方その町よりも耐へ易からん。一三 禍害なる哉、コラジンよ、禍害なる
一四 哉、ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる能力ある業を、ツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布を
一五 一六 き、灰のなかに坐して、悔改めしならん。一四 然れば審判にはツロとシドンとのかた汝等よりも、耐へ易からん。
一七 カペナウムよ、汝は天にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下らん。一六 汝らに聽く者は我に聽くなり、汝らを棄
一八 つる者は我を棄つるなり。我を棄つる者は我を遣し給ひし者を棄つるなり』
一七 七十人よろこび歸りて言ふ『主よ、汝の名によりて惡鬼すら我らに服す』一八 イエス彼らに言ひ給ふ『われ
一九 天より閃く電光のごとくサタンの落ちしを見たり。一九 視よ、われ汝らに蛇・蠍を踏み、仇の凡ての力を抑ふる權
二〇 威を授けたれば、汝らを害ふもの斷えてなからん。二〇 然れど靈の汝らに服するを喜ぶな、汝らの名の天に錄され
たるを喜べ』

二一 二一 その時イエス聖靈により喜びて言ひたまふ『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智きもの慧き
二二 者に隱して嬰兒に顯したまへり。父よ、然り、此のごときは御意に適へるなり。二二 凡ての物は我わが父より委ね
られたり。子の誰なるを知る者は、父の外になく、父の誰なるを知る者は、子また子の欲するままに顯すところ

二三 の者の外になし』二三斯て弟子たちを顧み窃に言ひ給ふ『なんぢらの見る所を見る眼は幸福なり。二四 われ汝らに告
二四 ぐ、多くの預言者も、王も、汝らの見るところを見んと欲したれど見ず、汝らの聞く所を聞かんと欲したれど聞
かざりき』

二五 二五視よ、或る教法師、立ちてイエスを試みて言ふ『師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何をなすべきか』
二六 二六イエス言ひたまふ『律法に何と錄したるか、汝いかに讀むか』二七答へて言ふ『なんぢ心を盡し、精神を盡し、
二七 力を盡し、思を盡して、主たる汝の神を愛すべし』二八イエス言ひ給ふ『なん
二八 ぢの答は正し。之を行へ、さらば生くべし』二九彼おのれを義とせんとしてイエスに言ふ『わが隣とは誰なるか』
二九 三〇イエス答へて言ひたまふ『或人エルサレムよりエリコに下るとき、強盜にあひしが、強盜どもその衣を剝ぎ、
三〇 傷を負はせ、半死半生にして棄て去りぬ。三一或る祭司たまたま此の途より下り、之を見てかなたを過ぎ往けり。
三一 三二又レビ人も此處にきたり、之を見て同じく彼方を過ぎ往けり。三三然るに或るサマリヤ人、旅して其の許にきた
三二 り、之を見て憫み、三四近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ傷を包みて己が畜にのせ、旅舍に連れゆきて介抱し、三五あく
三三 る日デナリ二つを出し、主人に與へて「この人を介抱せよ。費もし增さば我が歸りくる時に償はん」と云へり。
三四 三六汝いかに思ふか、此の三人のうち、孰か强盜にあひし者の隣となりしぞ』三七かれ言ふ『その人に憐憫を施した
三五 る者なり』イエス言ひ給ふ『なんぢも往きて其の如くせよ』
三六 三八斯て彼ら進みゆく間に、イエス或村に入り給へば、マルタと名づくる女おのが家に迎へ入る。三九その姉妹

イ二三、二四 太一三 ハ二五—二八 太二二 ホ中六・五 ・二八 カ太一八・二八を見よ
・一六、一七 ・三四—四〇 可一 ヘ利一九・一八 ヌ(馬二・七—九) ヨ太五・四四 (路六・
ロ來一・一・一三、三九 ト太一九・二七を見よ ル太一〇・五を見よ 三一—三六)
(使前一・一〇—一二) 一九・一六—一九) チ路一六・一五 タ路一〇・四〇、四一
(約八・五六) ニ太二二・三五を見よ リ(路一八・二一、一九 ワ(王上一・三三) 約一一・五、一九

レ路一〇・四二 約一 ナ路一〇・三八を見よ ウ路一〇・三九を見よ ヤ箴八・一三 結二〇 二九一四・一九 一一
・一—四五、一二 井(太六・三〇) ・四一 エ太二六・四一 可一 サ太一八・一九、二一
ソ(申三三・三 王下四 ラ太六・二五を見よ ノ路七・一三を見よ マ太三・二、四・一七 四・二八 路二二一 ・二二 可一・二四
・三七 路八・三五) (箴前七・三二—三 オ二—四 大六・九— ケ箴三〇・八 四〇・四六 (箴前一 約一四・一三、一五
ツ(箴前七・三五) 四 フ(徒一七・一一) ・七、一六、一六・二 ・七、一六、一六・二
ネ(太八・一五 約一二 ム詩二七・四 (約六・ ク約一七・六 (利一八 コ詩二五・一八 創五 チ(路一八・一—六) 三、二四 雅一・五、 ユ(路一二・三六 五、一四、一四、一四
二七) ・二一、二一・六) 〇・一七 出三一・三 ア九—一三 太七・七 六 約叡三・二一、 三・二〇) 默

四〇 にマリヤといふ者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聽きをりしが、四〇マルタ饗應のこと多くして心いりみだ
れ、御許に進みよりて言ふ『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼に命じて
四一 我を助けしめ給へ』四一主、答へて言ひ給ふ『マルタよ、マルタよ、汝さまざまの事により、思ひ煩ひて心勞す。
四二 四二されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪ふべからざる
ものなり』

第一一章

一 一イエス或處にて祈り居給ひしが、その終りしとき、弟子の一人いふ『主よ、ヨハネの其の弟子に
二 教へし如く、祈ることを我らに教へ給へ』二イエス言ひ給ふ『なんぢら祈るときに斯く言へ「父よ、
三 願くは御名の崇められん事を。御國の來らん事を。* 三我らの日用の糧を日毎に與へ給へ。四我らに負債ある凡て
四 の者を我ら免せば、我らの罪をも免し給へ。我らを嘗試にあはせ給ふな』* 五また言ひ給ふ『なんぢらの中たれか
五 友あらんに、夜半にその許に往きて「友よ、我に三つのパンを貸せ。六わが友、旅より來りしに、之に供ふべき
六 物なし」と言ふ時、七かれ內より答へて「われを煩はすな、戶ははや閉ぢ、子らは我と共に臥所にあり、起ちて
七 與へ難し」といふ事ありとも、八われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて與へねど、求の切なるにより、起き
八 て其の要する程のものを與へん。九われ汝らに告ぐ、求めよ、さらば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。
九 門を叩け、さらば開かれん。一〇すべて求むる者は得、尋ぬる者は見出し、門を叩く者は開かるるなり。一一汝等の
一〇 一一

一二 うち父たる者、たれか其の子、*魚を求めんに、魚の代に蛇を與へ、一三 卵を求めんに蠍を與へんや。一三 さらば汝ら
一三 惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天の父は求むる者に聖靈を賜はざらんや』
一四 一四 さてイエス啞の惡鬼を逐ひいだし給へば、惡鬼いでて啞、物言ひしにより、群衆あやしめり。一五 其の中の
一五 或者ども言ふ『かれは惡鬼の首ベルゼブルによりて惡鬼を逐ひ出すなり』一六 また或者どもは、イエスを試みんと
一六 て天よりの徴を求む。一七 イエスその思を知りて言ひ給ふ『すべて分れ爭ふ國は亡び、分れ爭ふ家は倒る。一八 サタ
一七 一八 ンもし分れ爭はば、其の國いかで立つべき。汝等わが惡鬼を逐ひ出すを、ベルゼブルに由ると言へばなり。一九 我
一八 一九 もしベルゼブルによりて、惡鬼を逐ひ出さば、汝らの子は誰によりて之を逐ひ出すか。この故に彼らは汝らの審
一九 判人となるべし。二〇 然れど我もし神の指によりて、惡鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝らに到れるなり。二一 强き
二〇 二一 もの武具をよろひて己が屋敷を守るときは、其の所有、安全なり。二二 然れど更に强きもの來りて、之に勝つとき
二一 二二 は、恃とする武具をことごとく奪ひて、分捕物を分たん。二三 我と偕ならぬ者は我にそむき、我と共に集めぬ者は
二二 二三 散らすなり。二四 穢れし靈、人を出づる時は、水なき處を巡りて、休を求む。されど得ずして言ふ「わが出でし家
二四 二五 に歸らん」二五 歸りて其の家の掃き淨められ、飾られたるを見、二六 遂に往きて己よりも惡しき他の七つの靈を連れ
二五 二六 きたり、共に入りて此處に住む。されば其の人の後の狀は、前よりも惡しくなるなり』
二六 二七 二七 此等のことを言ひ給ふとき、群衆の中より或女、聲をあげて言ふ『幸福なるかな、汝を宿しし胎、なんぢ
二七 二八 の哺ひし乳房は』二八 イエス言ひたまふ『更に幸福なるかな、神の言を聽きて之を守る人は』二九 群衆おし集まれる

イ(路一八・七、八)　ニ 大九・三四及び一〇　・二三—二七　・四三—四五　・一四　來六・四—
ロ(太七・一一)　・二五を見よ　ト 太四・一〇を見よ　又 太三・二を見よ　ツ 詩一一九・一、二、太
ハ 一四・一五　太一二　ホ 太一二・三八を見よ　チ 路一一・一五　ル 大二六・三を見よ　八、一〇・二六—二　路八・二一
・二二、二四(太九・　ヘ 一七—二二、太一二　リ 出八・一九、申九・　テ 詩五三・一、二　九 彼後二・二〇　七・二一　路八・二一
三二—三四)　・二五—二九　詩三　一〇、詩八・三一個　・二五　來二・四、ヨ二四—二六、太一二　ヲ 太三・二　西二　カ(哥後六・一)　ヨ二四—二六、太一二　レ 太一二・四五　約五　ソ 路一・二八、四八　(路二三・二九)

一五 默二〇・二、三　・四三—四五　來六・四—
ワ 太一二・三〇(太六　タ 哥前三・一六　帯三　ツ 詩一一九・一、二、太
・二四)　・一六、一七、　五・　七・二一　路八・二一
一八　一九　彼後二・二〇　猶一・二五　默一・三

ネ 二九—三二、太一二　ウ 王上一〇・一　ク 箴四・一八　テ 多一・一五　キ 可七・一九　多一・
・三九—四二)　非拿三・五—一〇　フ(太一五・二)　可七、　ア 路一二・二〇　哥貝　一五
ナ 太一二・三八を見よ　ノ 太五・一五　可四・　三、四)　一五・三六　ユ 太二三・二三
ラ 可八・一二　二一　路八・一六　ヤ 孤・二一　ケ 機四・一八　ヨ 路七・一三を見よ　サ 路一二・三三　(路　メ 路一八・一二
ム 拿一・一七、二・一〇　オ 三四、三五　太六・　マ 詩一九・一〇五　哥後四・六　エ 太二三・二五、二六　一六・九)　ミ(太六・一八)

三〇 時、イエス言ひ出でたまふ『今の代は邪曲なる代にして徴を求む。されどヨナの徴のほかに徴は與へられじ。
三〇 三一 ヨナがニネベの人に徴となりし如く、人の子もまた今の代に然らん。三一 南の女王、審判のとき、今の代の人と
三一 共に起きて、之が罪を定めん。彼はソロモンの智慧を聽かんとて地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも勝る
三二 もの此處に在り。三二 ニネベの人、審判のとき、今の代の人と共に立ちて之が罪を定めん。彼らはヨナの宣ぶる言
三二 によりて悔改めたり。視よ、ヨナよりも勝るもの此處に在り。
三三 三三 誰も燈火をともして、穴藏の中または升の下におく者なし。入り來る者の光を見んために、燈臺の上に置
三三 三四 くなり。三四 汝の身の燈火は目なり、汝の目正しき時は、全身明からん。されど惡しき時は、身もまた暗からん。
三四 三五 三五 この故に汝の內の光、闇にはあらぬか、省みよ。三六 もし汝の全身明くして暗き所なくば、輝ける燈火に照さる
三五 三六 る如く、その身全く明からん』
三六 三七 三七 イエスの語り給へるとき、或パリサイ人その家にて*食事し給はん事を請ひたれば、入りて席に著きたま
三七 三八 三八 ふ。三八 食事前に手を洗ひ給はぬを、此のパリサイ人見て怪しみたれば、三九 主これに言ひたまふ『今や汝らパリサ
三八 三九 四〇 イ人は、酒杯と盆との外を潔くす、然れど汝らの內は貪慾と惡とにて滿つるなり。四〇 愚なる者よ、外を造りし者
四〇 四一 は、內をも造りしならずや。四一 唯その內にある物を施せ。さらば、一切の物なんぢらの爲に潔くなるなり。
四一 四二 四二 禍害なるかな、パリサイ人よ、汝らは薄荷・芸香その他あらゆる野菜の十分の一を納めて、公平と神に對
四二 四三 四三 する愛とを等閑にす、然れど之は行ふべきものなり。而して彼もまた等閑にすべきものならず。四三 禍害なるかな、

四三 パリサイ人よ、汝らは會堂の上座、市場にての敬禮を喜ぶ。四四 禍害なるかな、汝らは露れぬ墓のごとし。其の上
を歩む人これを知らぬなり』
四五 四六 教法師の一人、答へて言ふ『師よ、斯ることを言ふは、我らをも辱しむるなり』四六 イエス言ひ給ふ『なん
ぢら教法師も禍害なる哉、なんぢら擔ひ難き荷を人に負せて、自ら指一つだに其の荷につけぬなり。
四七 禍害なる
かな、汝らは預言者たちの墓を建つ、之を殺しし者は汝らの先祖なり。
四八 げに汝らは先祖の所作を可しとする證
人ぞ。それは彼らは之を殺し、汝らは其の墓を建つればなり。
四九 この故に神の智慧いへる言あり「われ預言者
五〇 と使徒とを彼らに遣さんに、その中の或者を殺し、また逐ひ苦しめん。五〇 世の創より流されたる凡ての預言者の
五一 血、五一 即ちアベルの血より、祭壇と聖所との間にて殺されたるザカリヤの血に至るまでを、今の代に糺すべきな
五二 り。然り、われ汝らに告ぐ、今の代は糺さるべし。五二 禍害なるかな、教法師よ、なんぢらは知識の鍵を取り去り
て自ら入らず、入らんとする人をも止めしなり』
五三 五四 此處より出で給へば、學者・パリサイ人ら烈しく詰め寄せて樣々のことを詰りはじめ、五四 その口より何事
をか捉へんと待構へたり。

第一二章

一 その時、無數の人あつまりて、群衆ふみ合ふばかりなり。イエスまづ弟子たちに言ひ出で給ふ
二 『なんぢら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ僞善なり。二 蔽はれたるものに露れぬはなく、
三 隱れたるものに知られぬはなし。三 この故に汝らが暗きにて言ふことは、明きにて聞え、部屋の内にて耳により

イ 太二三・六、七　可一二・三八、三九　路二〇・四六（路一四・七）　ロ 太二三・二七　ハ 詩五・九　ニ 太二三・三五　ホ 太二三・四　徒一五・一〇　ヘ 太二三・二九　ト 來一一・三五　チ（哥前一・二四、三〇　西二・三）　リ 四九―五一（太二三・三四―三六）　ヌ 太二三・三四を見よ　ル 創四・八　ヲ 代下二四・二〇、二一　ワ 太二三・三五を見よ　カ 馬二・七、八　ヨ 太二三・一三　タ 可一二・一三　レ（可三・二　徒二三・二一）　ソ 太一六・六、一一、一二　可八・一五　ツ 路一一・三九　ネ 二―九 太一〇・二六―三三　ナ 可四・二二　路八・一七　ラ 哥前四・五

四 て語りしことは、屋の上にて宣べらるべし。四 我が友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何をも爲し得ぬ者どもを
五 懼るな。五 懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、
六 七 げに之を懼れよ。六 五羽の雀は二錢にて賣るにあらずや、然るに其の一羽だに神の前に忘れらるる事なし。七 汝
らの頭の髮までもみな數へらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。
八 われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に
九 我を言ひあらはす者を、人の子もまた神の使たちの前にて言ひあらはさん。九 されど人の前にて我を否む者は、
一〇 神の使たちの前にて否まれん。一〇 凡て言をもて人の子に逆ふ者は赦されん。然れど聖靈を瀆すものは赦されじ。
一一 人なんぢらを會堂、或ひは司、あるひは權威ある者の前に引きゆかん時、いかに何を答へ、または何を言はんと
一二 思ひ煩ふな。一二 聖靈そのとき言ふべきことを教へ給はん』
一三 一四 群衆のうちの或人いふ『師よ、わが兄弟に命じて、嗣業を我に分たしめ給へ』一四 之に言ひたまふ『人よ、
一五 誰が我を立てて汝らの裁判人また分配者とせしぞ』一五 斯て人々に言ひたまふ『愼みて凡ての慳貪をふせげ。人の
一六 一七 生命は所有の豐なるには因らぬなり』一六 また譬を語りて言ひ給ふ『ある富める人、その畑豐に實りたれば、一七 心
一八 の中に議りて言ふ「われ如何にせん、我が作物を藏めおく處なし」一八 遂に言ふ「われ斯く爲さん、わが倉を毀ち、
一九 更に大なるものを建てて、其處にわが穀物および善き物をことごとく藏めん。一九 斯てわが靈魂に言はん、靈魂
二〇 よ、多年を過すに足る多くの善き物を貯へたれば、安んぜよ、飮食せよ、樂しめよ」と。二〇 然るに神かれに「愚なる
二一 者よ、今宵なんぢの靈魂とらるべし、然らば汝の備へたる物は、誰がものとなるべきぞ」と言ひ給へり。二一

ム 太一〇・二七又太二四・一七を見よ　ウ 約一五・一四、一五　井 賽五一・七、一二、一三　ノ 太五・二二を見よ　オ 來一〇・三一　太一〇・二八　ク（太一〇・二九）　ヤ 太一〇・三〇を見よ　マ 太一〇・三二を見よ　ケ 太一〇・三三を見よ　フ 太一二・三一　コ 太一二・三一、三二　可三・二八、二九　約壹五・一六　エ（太一〇・一七）　テ 太一〇・一九　可一三・一一　路二一・一四　ア 太一〇・二〇を見よ（路二一・一五　徒六・一〇、二六・一）　サ（米六・八　羅二・三、五）　キ（提前六・六―一〇）　ユ 來一三・五　メ 詩四九・一六（傳一一・九）　ミ 耶一七・一一　路一一・四〇　シ 伯二〇・二二、二七　ヱ 詩三九・六　雅四・一四　ヒ 哈二・九（路一二・三三）

のために財を貯へ、神に對して富まぬ者は、斯のごとし』

三三 また弟子たちに言ひ給ふ『この故に、われ汝らに告ぐ、何を食はんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと
三四 體のことを思ひ煩ふな。三五 生命は糧にまさり、體は衣に勝るなり。三六 鴉を思ひ見よ、播かず、刈らず、納屋も倉
三五 もなし。然るに神は之を養ひたまふ、汝ら鳥に優ることいくばくぞや。三七 汝らの中たれか思ひ煩ひて、*身の長一尺
三六 を加へ得んや。三八 然れば最小き事すら能はぬに、何ぞ他のことを思ひ煩ふか。三九 *百合を思ひ見よ、紡がず、織ら
三八 ざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに其の服裝この花の一つにも及かざりき。四〇 *
三九 今日ありて、明日爐に投げ入れらるる野の草をも、神は斯く裝ひ給へば、況て汝らをや、ああ信仰うすき者よ。
四〇 四一 なんぢら何を食ひ、何を飲まんと求むな、また心を動かすな。四二 是みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝
四一 らの父は此等の物の、なんぢらに必要なるを知り給へばなり。四三 ただ父の御國を求めよ。さらば此等の物は、な
四二 んぢらに加へらるべし。四四 懼るな小き群よ、なんぢらに御國を賜ふことは、汝らの父の御意なり。四五 汝らの所有
四三 を賣りて施濟をなせ。己がために舊びぬ財布をつくり、盡きぬ財寶を天に貯へよ。かしこは盜人も近づかず、蠹
四四 も壞らぬなり。四六 汝らの財寶のある所には、汝らの心もあるべし。
四五 なんぢら腰に帶し、燈火をともして居れ。四七 主人、婚筵より歸り來りて戸を叩かば、直ちに開くために待
四六 つ人のごとくなれ。四八 主人の來るとき、目を覺しをるを見らるる僕どもは幸福なるかな。われ誠に汝らに告ぐ、

イ(太六・二〇 路一二・二一 ニ詩一三九・一四 リ大六・三〇分見よ カ箴四〇・一一 約一・二七) タ太一一・二五・二六 ウ太二四・四二を見よ
・三三 擬創六・一八 ホ伯三八・四一 詩一 ヌ(士六・三一) 水三五・三六(太二五 ・一一—一三) 默一六・一五
雅二・五) 太六・ 四七・九 (太六・二) 約一 ル太三・一一 六・三三 レ太一九・二一を見よ 弗一・五・九 井太二四・四六
ロ二二—三一 六) ヲ太六・三三を見よ ヨ太二五・三四 ソ太六・二〇 路一八・二 ナ(弗六・一四 彼創一
二五—三三 ヘ路一二・一八 詩三四・一〇 八・三六 來一二・二 ・二二 擬創六・一九 ・一三)
太六・二五 路一二 ト(約三九・五) 三・二六 路八・三二 ・一二 彼後 ラ太二五・一
・二二 (詩四・六) チ王上一〇・四—七 ワ太一四・二七を見よ ・一一 默一・六 (路一二・二一) 民三・ ム默三・二〇
ワ太六・二一 民三・

主人帶して其の僕どもを食事の席に就かせ、進みて給事すべし。四八 主人、夜の半ごろ若くは夜の明くる頃に來る
四九 とも、斯の如くなるを見らるる僕どもは幸福なり。四九 なんぢら之を知れ、家主もし盜人いづれの時來るかを知ら
五〇 ば、その家を穿たすまじ。五〇 汝らも備へをれ。人の子は思はぬ時に來ればなり』
五一 五一 ペテロ言ふ『主よ、この譬を言ひ給ふは我らにか、また凡ての人にか』五二 主いひ給ふ『主人が時に及びて
五二 僕どもに定の糧を與へさする爲に、その僕どもの上に立つる忠實にして慧き支配人は誰なるか、五三 主人のきたる
五三 時、かく爲し居るを見らるる僕は幸福なるかな。五四 われ實をもて汝らに告ぐ、主人すべての所有を彼に掌どらす
五四 べし。五五 若しその僕、心のうちに主人の來るは遲しと思ひ、僕・婢女をたたき、飲み食ひして醉ひ始めなば、
五五 五六 その僕の主人おもはぬ日、知らぬ時に來りて、之を*烈しく笞ち、その報を不忠者と同じうせん。五七 主人の意を
五六 知りながら用意せず、又その意に從はぬ僕は、笞たるること多からん。五八 然れど知らずして、打たるべき事をな
五七 す者は、笞たるること少からん。多く與へらるる者は、多く求められん。多く人に托くれば、更に多くその人よ
五八 り請ひ求むべし。
五九 五九 我は火を地に投ぜんとて來れり。*此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。六〇 されど我には受
六〇 くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思ひ逼ること如何許ぞや。六一 われ地に平和を與へんために來
六一 ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分爭なり。六二 今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は
六二 三人に分れ爭はん。六三 父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑嫜は嫁に、嫁は姑嫜に分れ爭はん』

ノ路一七・八 (路一二・二一) 牧後三・二一 シ(路一二・五一) 三・二四
オ三九・四〇 大二四 一六・一五 ケ路一二・四七、四 ・四五—五一 ユ巾二五・二 ・二七
・四三・四四 ヤ太六・一九 エ(太二四・四五 路 ヱ可一〇・三八 (太 モ(路一二・四九)
ク擬創五・二 マ(太二五・一三 可 一六・一—八) 廿擬創五・三 メ利五・一七 民一五 一〇・一八・一九) 太一〇・
・一〇 彼後三 ・二九 擬創一・一三 キ民一五・三〇 約九 ・四一 擬創一・一三 ヒ五一—五三 太一〇 セ来七・六 太一〇・
默三・三、 一三・三三 路二一 フ路七・三を見よ 八) テ(默三・二一) 民一五・二一 ・三四—三六 二一・三五
・三六 擬創五・六 コ四二—四六 太二四 ア傳八・一一 彼後三 徒一七・三〇 雅四 ム(太一三・一二)

主人、夜の半ごろ若くは夜の明くる頃に來る

五四 五四イエスまた群衆に言ひ給ふ『なんぢら雲の西より起るを見れば、直ちに言ふ「急雨きたらん」と、果して
五五 五六 然り。五五また南風ふけば、汝等いふ「強き暑あらん」と、果して然り。五六偽善者よ、汝ら天地の氣色を辨ふるこ
五七 五八 とを知りて、今の時を辨ふること能はぬは何ぞや。五七また何故みづから正しき事を定めぬか。五八なんぢ訴ふる者
とともに司に往くとき、途にて和解せんことを力めよ、恐くは訴ふる者、なんぢを審判人に引きゆき、審判人な
五九 んぢを下役にわたし、下役なんぢを獄に投げ入れん。五九われ汝に告ぐ、一レプタも殘りなく償はずば、其處を出
づること能はじ』

第一三章

一 一その折しも或る人々きたりてピラトがガリラヤ人らの血を彼らの犧牲にまじへたりし事をイエス
二 に告げたれば、二答へて言ひ給ふ『かのガリラヤ人は斯ることに遭ひたる故に、凡てのガリラヤ人
三 四 に勝れる罪人なりしと思ふか。三われ汝らに告ぐ、然らず、汝らも悔改めずば、皆おなじく亡ぶべし。四又シロ
アムの櫓たふれて、壓し殺されし十八人は、エルサレムに住める凡ての人に勝りて罪の負債ある者なりしと思ふ
五 か。五われ汝らに告ぐ、然らず、汝らも悔改めずば、みな斯のごとく亡ぶべし』
六 六又この譬を語りたまふ『或人おのが葡萄園に植ゑありし無花果の樹に來りて果を求むれども得ずして、
七 七園丁に言ふ「視よ、われ三年きたりて此の無花果の樹に果を求むれども得ず。これを伐り倒せ、何ぞ徒らに地
八 九 を塞ぐか」八答へて言ふ「主よ、今年も容したまへ、我その周圍を掘りて肥料せん。九その後、果を結ばば善
し、もし結ばずば伐り倒したまへ」』

イ(太一六・二、三)　ロ(太二〇・一二)　ハ太一六・三(路二一・二〇)　ニ五八、五九 太五・二五、二六　ホ雅二五・八　ヘ詩三二・六 箴五五・六　ト可一二・四二　チ太二七・二を見よ　リ徒五・三七　ヌ(約九・二、三)　ル尼三・一五 雅八・六 約九・七、一一　ヲ(太六・一二、一八・二四 路一一・四)　ワ雅五・一　カ太二一・一九　ヨ太三・八 約一五・一六 加五・二二 黙一・一一 西一・一〇　タ太三・一〇、七・一九 路三・九　レ彼後三・九　ソ約一五・二　ツ太四・二三を見よ　ネ(路一三・一六)　ナ可五・二三を見よ　ラ十九・八を見よ　ム可五・二三を見よ　ウ(太一二・二 路一四・三)

一〇 一〇イエス安息日に或る會堂にて教へたまふ時、一一視よ、十八年のあひだ、病の靈に憑かれたる女あり、屈ま
一二 りて少しも伸ぶること能はず。一二イエスこの女を見、呼び寄せて『女よ、なんぢは病より解かれたり』と言ひ、
一三 一四 一三之に手を按きたまへば、立刻に身を直ぐにして神を崇めたり。一四會堂司イエスの安息日に病を醫し給ひしこと
一五 を憤ほり、答へて群衆に言ふ『働くべき日は六日あり、その間に來りて醫されよ。安息日には爲され』一五主こたへ
て言ひたまふ『僞善者らよ、汝等おのおの安息日には、己が牛または驢馬を小屋より解きいだし、水飼はんとて
一六 牽き往かぬか。一六さらば長き十八年の間サタンに縛られたるアブラハムの娘なる此の女は、安息日にその繋より
一七 解かるべきならずや』一七イエス此等のことを言ひ給へば、逆ふ者はみな恥ぢ、群衆は擧りてその爲し給へる榮光
ある凡ての業を喜べり。
一八 一九 一八斯てイエス言ひたまふ『神の國は何に似たるか、我これを何に擬へん。一九一粒の芥種のごとし。人これを
二〇 取りて己の園に播きたれば、育ちて樹となり、空の鳥その枝に宿れり』二〇また言ひたまふ『神の國を何に擬へん
二一 か、二一パン種のごとし。女これを取りて、三斗の粉の中に入るれば、ことごとく脹れいだすなり』
二二 二三 二二イエス教へつつ町々村々を過ぎて、エルサレムに旅し給ふとき、二三或人いふ『主よ、救はるる者は少き
二四 か』二四イエス人々に言ひたまふ『力を盡して狹き門より入れ。我なんぢらに告ぐ、入らん事を求めて入り能はぬ
二五 者おほからん。二五家主おきて門を閉ぢたる後、なんぢら外に立ちて「主よ我らに開き給へ」と言ひつつ門を叩き
二六 始めんに、主人こたへて「われ汝らが何處の者なるかを知らず」と言はん。二六その時「われらは御前にて飲食

丼出二〇・九 申五・一三　ノ太一二・一〇 可三・二 路六・七 約五・一六　オ路七・一三を見よ　ク太七・五、二三・一三一・二九　ヤ路一四・五　マ太四・二〇を見よ　(路一三・一一)　ケ(路一九・九 羅四・一一、一二)　フ羅四五・二四 彼前三・一六　コ(路一八・四三)　エ一八、一九 太一三・三一、三二 可四・三〇―三二　テ太一三・二四を見よ　ア路一三・一八　サ二〇、二一 太一三・三三　キ太一三・三三を見よ　ユ太九・三五 可六・六　メ路九・五一を見よ　ミ太七・一四(彼前三・二〇)　シ太七・一三(太一六・二四 路九・二三)　ヱ約七・三四、八・二一 一三・三三　ヒ太二五・一〇　モ黙二二・一五　セ太二五・一一(路六・四六)　ス六七・一二三、二五・一二 路一三・七(約一〇・二七 提後二・一九)

二七 し、なんぢは我らの町の大路にて教へ給へり」と言ひ出でんに、二七主人こたへて「われ汝らが何處の者なるかを
二八 知らず、惡をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言はん。二八汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者
二九 の、神の國に居り、己らの逐ひ出さるるを見ば、其處にて哀哭・切齒する事あらん。二九また人々、東より西より
三〇 南より北より來りて、神の國の宴に就くべし。三〇視よ、後なる者の先になり、先なる者の後になる事あらん」
三一 三一そのとき或るパリサイ人ら、イエスに來りて言ふ『いでて此處を去り給へ、ヘロデ汝を殺さんとす』三二答
三二 へて言ひ給ふ『往きてかの狐に言へ。視よ、われ今日明日、惡鬼を逐ひ出し、病を醫し、而して三日めに全うせ
三三 られん。三三されど今日も明日も次の日も我は進み往くべし。それ預言者のエルサレムの外にて死ぬることは有る
三四 まじきなり。三四噫エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて擊つ者よ、牝鷄の己が
三五 雛を翼のうちに集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんとせしこと幾度ぞや。然れど汝らは好まざりき。三五視
よ、汝らの家は棄てられて汝らに遺らん。我なんぢらに告ぐ、「讃むべきかな、主の名によりて來る者」と、汝ら
の言ふ時の至るまでは、我を見ざるべし』

第一四章

一 一イエス安息日に食事せんとて、或るパリサイ人の頭の家に入り給へば、人々これを窺ふ。二視よ、
二 御前に水腫をわづらふ人ゐたれば、三イエス答へて敎法師とパリサイ人とに言ひたまふ『安息日に
三 人を醫すことは善しや否や』四かれら默然たり。イエスその人を執り、醫して去らしめ、五且かれらに言ひ給ふ
四 『なんぢらの中その子あるひは其の牛、井に陷らんに、安息日には直ちに之を引揚げぬ者あるか』六彼等これに
五 六

イ 路一三・二五を見よ　ロ 詩一〇一・四—八　ハ 太三五・四一　ニ 太八・一二を見よ　ホ 太八・一二を見よ　ヘ 太八・一一　ト 太一九・三〇を見よ　チ 太一四・一を見よ　リ（約一七・一九・一九）　ル 三四・三五、太二三・三七を見よ　ヲ 太二一・一一を見よ　ワ 太二三・三七を見よ　カ 利二六・三一、三二　ヨ 詩六九・二五　タ 何二・四、五　レ 可三・二を見よ　ソ 太二二・三五を見よ　ツ（太一一・二、一〇）

七 七、五・五、六 伺九 約一一・二三 徒二七 來三・一一　八 默七・九、一〇 五・九、七・二八 徒一一・一八 路一一 五 太五・三一 徒一・九 默二〇・四、五 路一一・五 默二〇・四、五 路一一・六（哥前七・二）　ヌ 太二一・一一を見よ　ネ 約五・二九 使二四・一五 路一四・一五 默二〇・四、五 路一一・六（哥前七・二）　ナ 太二二・四六を見よ　ラ 太二二・六（路一一・四三）　ム（使二五・六、七）　ウ（使二五・六、七）　ヰ 詩一八・二七 徒二一 路一八・一四 默四・六 彼前五・五 使二四・一五 路一四・一五　ノ 伯二三・二九 默一・五 五・三二 啓五七・一　オ 歴八・二〇、二一 マ 天三・二 五 太五・三一 徒一・九 默二〇・四、五　ク 太二五・三四—四〇　ケ（默一九・九）　フ 一六—二四（太二二・二一—一四）　コ 啓二五・六　エ 太二一・三四、二二・三　テ 默九・二、五 啓五五 ・一、二　ア 啓三〇・一五 約五・九、三二　サ（路八・一四）　キ 申二四・五 路一四・一五 ・六（哥前七・二）

八 對して物言ふこと能はず。
九 七イエス招かれたる者の、上席をえらぶを見、譬をかたりて言ひ給ふ、八「なんぢ婚筵に招かるるとき、上席
一〇 に着くな。恐らくは汝よりも貴き人の招かれんに、九汝と彼とを招きたる者きたりて「この人に席を讓れ」と言
一一 はん。さらば其の時なんぢ恥ぢて末席に往きはじめん。一〇招かるるとき、寧ろ往きて末席に著け、さらば招きた
一二 る者きたりて「友よ、上に進め」と言はん。その時なんぢ同席の者の前に譽あるべし。一一凡そおのれを高うする
者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』
一三 一二また己を招きたる者にも言ひ給ふ『なんぢ晝餐または夕餐を設くるとき、朋友・兄弟・親族・富める隣人
一四 などをよぶな。恐らくは彼らも亦なんぢを招きて報をなさん。一三饗宴を設くる時は、寧ろ貧しき者・不具・
一五 跛者・盲人などを招け。一四彼らは報ゆること能はぬ故に、なんぢ幸福なるべし。正しき者の復活の時に報いらる
るなり』
一六 一五同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言ふ『おほよそ神の國にて食事する者は幸福なり』一六之に言
一七 ひたまふ『或人、盛なる夕餐を設けて、多くの人を招く。一七夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣
一八 して「來れ、既に備りたり」と言はしめたるに、一八皆ひとしく辭りはじむ。初の者いふ「われ田地を買へり、往
一九 きて見ざるを得ず。請ふ、許されんことを」一九他の者いふ「われ五耦の牛を買へり、之を驗すために往くなり。
二〇 請ふ、許されんことを」二〇また他の者いふ「われ妻を娶れり、此の故に往くこと能はず」二一僕かへりて此等の

事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言ふ「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者
二二 などを此處に連れきたれ」二三 僕いふ「主よ、仰のごとく爲したれど、尚ほ餘の席あり」二四 主人、僕に言ふ「道や
二四 籬の邊にゆき、人々を強ひて連れきたり、我が家に充たしめよ。二四 われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち
一人だに、我が夕餐を味ひ得る者なし』

二五 さて大なる群衆イエスに伴ひゆきたれば、顧みて之に言ひたまふ、二六『人もし我に來りて、その父母・妻
二六 子・兄弟・姉妹・己が生命までも憎まずば、我が弟子となるを得ず。二七 また己が十字架を負ひて我に從ふ者なら
二七 では、我が弟子と爲るを得ず。二八 汝らの中たれか櫓を築かんと思はば、先づ坐して其の費をかぞへ、己が所有、
二八 悉工までに足るか否かを計らざらんや。二九 然らずして基を据ゑ、もし成就すること能はずば、見る者みな嘲笑ひ
二九 て、三〇「この人は築きかけて成就すること能はざりき」と言はん。三一 又いづれの王か出でて他の王と戰爭をせん
三〇 に、先づ坐して、此の一萬人をもて、かの二萬人を率ゐきたる者に對ひ得るか否か籌らざらんや。三二 もし及かず
三一 ば、敵なほ遠く隔たるうちに使を遣して和睦を請ふべし。三三 斯のごとく汝らの中その一切の所有を退くる者なら
三二 では、我が弟子となるを得ず。三四 鹽は善きものなり、然れど鹽もし効力を失はば、何によりてか味つけられん、
三四 土にも肥料にも適せず、外に棄てらるるなり。聽く耳ある者は聽くべし』

三五

第一五章

一 取稅人・罪人等みな御言を聽かんとて近寄りたれば、二 パリサイ人・學者ら呟きて言ふ『この人
は罪人を迎へて食を共にす』

イ 母前二・八　太五・三　ホ 歴一・一七　ヨ 約一五・六　フ（路一六・二一）
ロ 箴三五・五　ヘ 歴一・二四・二八　太　チ 約一二・二五　徒二　タ 太一・一五を見よ　コ（王上八・四七）
ハ 箴三五・六　二一・四三、二二・　ト 申一三・六、一三・　リ 太一〇・三八、一六　ヌ（箴二四・二七）　エ（路一五・二一）
ニ（詩一三〇・七）　一（路二六・一三）　ル（哀六・一一、二二）　カ 太五・二三　可九・　ソ（申一六・二、七・八　民一四・二、詩九・一五・九・一）　テ（出一〇・一六 但五・一三）

ヲ（路一六・一二）　ツ 太九・一一を見よ（徒一・一三　加二・一二）　ア（路七・六、七）

ヰ 四一—七（太一八・一二—一四）　ム 結三四・一一、二二、二三、一六節（箴二一・二五）　ウ（申四〇・一一、四九・二二、六〇・四、路一五・一〇）　ノ 太九・三を見よ　井 詩一一九・一七六　オ（太九・二三、路五・三二、一五・一〇）　ク 結一八・二三、三三・一一、太一〇・三三）　ヤ 申二一・一七　マ 可一二・四四を見よ　ケ（弗五・一八、多一・六、彼前四・四）　フ（路一六・二一）　コ（王上八・四七）　エ（路一五・二一）　テ（出一〇・一六 但五・一三）

ヲ（路一六・一二）　ツ 太九・一一を見よ（徒一・一三　加二・一二）　ア（路七・六、七）

三 イエス之に譬を語りて言ひ給ふ、四『なんぢらの中たれか百匹の羊を有たんに、若その一匹を失はば、九十
五 九匹を野におき、往きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらんや。五 遂に見出さば、喜びて之を己が肩にかけ、
六 家に歸りて其の友と隣人とを呼び集めて言はん「我とともに喜べ、失せたる我が羊を見出せり」七 われ汝らに
七 告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のためには、悔改の必要なき九十九人の正しき者にも勝りて、天に歡喜あ
るべし。

八 又いづれの女か銀貨十枚を有たんに、若しその一枚を失はば、燈火をともし、家を掃きて見出すまでは懇
九 ろに尋ねざらんや。九 遂に見出さば、其の友と隣人とを呼び集めて言はん「我とともに喜べ、わが失ひたる銀貨
一〇 を見出せり」一〇 われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のために、神の使たちの前に歡喜あるべし』

一一 一一 また言ひたまふ『或人に二人の息子あり、一二 おとうと父に言ふ「父よ、財產のうち我が受くべき分を我に
一三 あたへよ」父その身代を二人に分けあたふ。一三 幾日も經ぬに、弟おのが物をことごとく集めて、遠國にゆき、
一四 其處にて放蕩にその財產を散せり。一四 ことごとく費したる後、その國に大なる饑饉おこり、自ら乏しくなり始め
一五 たれば、一五 往きて其の地の或人に依附りしに、其の人かれを畑に遣して豚を飼はしむ。一六 かれ豚の食ふ蝗豆にて、
一六 己が腹を充さんと思ふ程なれど何をも與ふる人なかりき。一七 此のとき我に反りて言ふ「わが父の許には食物あま
一七 れる雇人いくばくぞや、然るに我は飢ゑてこの處に死なんとす。一八 起ちて我が父にゆき「父よ、われは天に對
一八 し、また汝の前に罪を犯したり。一九 今より汝の子と稱へらるるに相應しからず、雇人の一人のごとく爲し給へ」
一九

二〇 と言はん」二〇乃ち起ちて其の父のもとに往く。なほ遠く隔りたるに、父これを見て憫み、走りゆき、其の頸を抱
二一 きて接吻せり。二一子、父にいふ「父よ、我は天に對し又なんぢの前に罪を犯したり。今より汝の子と稱へらるる
二二 に相應しからず」二二然れど父、僕どもに言ふ「とくとく最上の衣を持ち來りて之に著せ、その手に指輪をはめ、
二三 其の足に鞋をはかせよ。二三また肥えたる犢を牽ききたりて屠れ、我ら食して樂しまん。二四この我が子、死にて復
二四 生き、失せて復得られたり」斯て、かれら樂しみ始む。二五然るに其の兄、畑にありしが、歸りて家に近づきたる
二五 二六 とき、音樂と舞踏との音を聞き、二六僕の一人を呼びてその何事なるかを問ふ。二七答へて言ふ「なんぢの兄弟、歸
二七 二八 りたり、その恙なきを迎へたれば、汝の父、肥えたる犢を屠れるなり」二八兄、怒りて內に入ることを好まざりし
二八 二九 かば、父いでて勸めしに、二九答へて父に言ふ「視よ、我は幾歲も、なんぢに仕へて、未だ汝の命令に背きし事な
二九 三〇 きに、我には小山羊一匹だに與へて友と樂しましめし事なし。三〇然るに遊女らと共に、汝の身代を食ひ盡したる
三〇 三一 此の汝の子、歸り來れば、之がために肥えたる犢を屠れり」三一父いふ「子よ、なんぢは常に我とともに在り、わ
三一 三二 が物は皆なんぢの物なり。三二然れど此の汝の兄弟は死にて復生き、失せて復得られたれば、我らの樂しみ喜ぶは
三二 當然なり』

第一六章

一 一イエスまた弟子たちに言ひ給ふ『或る富める人に一人の支配人あり、主人の所有を費しをりと訴
一 へられたれば、二主人かれを呼びて言ふ「わが汝につきて聞く所は、これ何事ぞ、務の報告をいだ
二 せ。汝こののち支配人たるを得じ」三支配人、心のうちに言ふ「如何せん、主人わが職を奪ふ。われ土掘るには

イ 雅四・八　ロ 創三三・四、四五・一四、四六・二九　ハ 創四五・二五　ニ 路一・五・一八　ホ 伝二〇・三七　ヘ 創四一・四二　ト 詩一六・一〇　チ 母前二八・二四　リ 路一二・一九・一五　ヌ 太八・二二　ル 路一五・二三　ヲ 路一五・一三　ワ 約八・三五　カ 路一五・二四　ヨ 路一五・二三　タ 路一二・四二　レ 路一五・一三　ソ 申前九・一七　ツ 路一八・六　ネ 路二〇・三四　ナ 約一二・三六　ム 太六・二〇、一九　ウ 路一六・四　ク 太六・二四　ヤ 撰後三・二　ケ 路二三・三五　フ 路一〇・二九、一八　コ 母前一六・七　サ 太五・一八　キ 太五・三二を見よ　ア 太一・一二　ス 代上二九・一四、一六　マ 路一・三九、二〇・四七　ヨ 路一五・二三　ラ 太六・二四　路一六・一九　ム 太六・二〇、一九　ウ 路一六・四　ク 太六・二四　ヤ 撰後三・二　ケ 路二三・三五　フ 路一〇・二九、一八　コ 母前一六・七　サ 太五・一八　キ 太五・三二を見よ　ア 太一・一二　ス 代上二九・一四、一六　マ 路一・三九、二〇・四七　ヨ 路一五・二三　ラ 太六・二四　路一六・一九　ム 太六・二〇、一九　ウ 路一六・四　ク 太六・二四　ヤ 撰後三・二　ケ 路二三・三五　フ 路一〇・二九、一八　コ 母前一六・七　サ 太五・一八　キ 太五・三二を見よ　ア 太一・一二　ス 代上二九・一四、一六　マ 路一・三九、二〇・四七　ヨ 路一五・二三　ラ 太六・二四　路一六・一九　ム 太六・二〇、一九　ウ 路一六・四　ク 太六・二四　ヤ 撰後三・二　ケ 路二三・三五　フ 路一〇・二九、一八　コ 母前一六・七　サ 太五・一八　キ 太五・三二を見よ　ア 太一・一二　ス 代上二九・一四、一六　マ 路一・三九、二〇・四七　ヨ 路一五・二三

四 力なく、物乞ふは恥かし。四我なすべき事こそ知りたれ、斯く爲ば職を罷めらるるとき、人々その家に我を迎
五 ふるならん」とて、五主人の負債者を一人一人呼びよせて、初の者に言ふ「なんぢ我が主人より負ふところ何程
六 あるか」六答へて言ふ「油、百樽」支配人いふ「なんぢの證書をとり、早く坐して五十と書け」七又ほかの者に
七 言ふ「負ふところ何程あるか」答へて言ふ「麥、百石」支配人いふ「なんぢの證書をとりて八十と書け」八爰に
八 主人、不義なる支配人の爲しし事の巧なるによりて、彼を譽めたり。この世の子らは己が時代の事には、光の子
九 らよりも巧なり。九われ汝らに告ぐ、不義の富をもて、己がために友をつくれ。然らば富の失する時、その友な
一〇 んぢらを永遠の住居に迎へん。一〇小事に忠なる者は、大事にも忠なり。小事に不忠なる者は大事にも不忠なり。
一一 一一然らば汝等もし不義の富に忠ならずば、誰か眞の富を汝らに任すべき。一二また汝等もし人のものに忠ならず
一二 ば、誰か汝等のものを汝らに與ふべき。一三僕は二人の主に兼事ふること能はず、或は之を憎み彼を愛し、或は之
一三 に親み彼を輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼事ふること能はず』
一四 一四爰に慾深きパリサイ人等この凡ての事を聞きてイエスを嘲笑ふ。一五イエス彼らに言ひ給ふ『なんぢらは人
一五 のまへに己を義とする者なり。然れど神は汝らの心を知りたまふ。人のなかに尊ばるる者は、神のまへに憎まる
一六 る者なり。一六律法と預言者とは、ヨハネまでなり、その時より神の國は宣傳へられ、人みな烈しく攻めて之に入
一七 る。一七されど律法の一畫の落つるよりも天地の過ぎ往くは易し。一八凡てその妻を出して、他に娶る者は、姦淫を
一八 行ふなり。また夫より出されたる女を娶る者も姦淫を行ふなり。

一九或る富める人あり、紫色の衣と細布とを著て、日々奢り樂しめり。二〇又ラザロといふ貧しき者あり、腫物
二一にて腫れただれ、富める人の門に置かれ、二一その食卓より落つる物にて飽かんと思ふ。而して犬ども來りて其の
二二腫物を舐れり。二三遂にこの貧しきもの死に、御使たちに携へられてアブラハムの懷裏に入れり。富める人もまた
二三死にて葬られしが、二四黄泉にて苦惱の中より目を擧げて遙にアブラハムと其の懷裏にをるラザロとを見る。二四乃
ち呼びて言ふ「父アブラハムよ、我を憫みて、ラザロを遣し、その指のさきを水に浸して我が舌を冷させ給へ、
二五我はこの焰のなかに悶ゆるなり」二五アブラハム言ふ「子よ、憶へ、なんぢは生ける間、なんぢの善き物を受け、
二六ラザロは惡しき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、汝は悶ゆるなり。二六然のみならず此處より汝らに渡り
二七往かんとすとも得ず、其處より我らに來り得ぬために、我らと汝らとの間に大なる淵定めおかれたり」二七富める
二八人また言ふ「さらば父よ、願くは我が父の家にラザロを遣したまへ。二八我に五人の兄弟あり、この苦痛のところ
二九に來らぬやう、彼らに證せしめ給へ」二九アブラハム言ふ「彼等にはモーセと預言者とあり、之に聽くべし」三〇富
三一める人いふ「いな父アブラハムよ、もし死人の中より彼らに往く者あらば、悔改めん」三一アブラハム言ふ「もし
モーセと預言者とに聽かずば、たとひ死人の中より甦へる者ありとも、其の勸を納れざるべし」

第一七章

一　一イエス弟子たちに言ひ給ふ「躓物は必ず來らざるを得ず、されど之を來らする者は禍害なるか
二　な。二この小き者の一人を躓かするよりは、寧ろ碾臼の石を頸に懸けられて、海に投げ入れられん

イ 帖八・一五　默一八　踏一・一、一五、二三　ト 太一・二三を見よ　ヌ（使）四・一二）　三・七
一〇、二二・四二　ロ 雅五・五を見よ　チ 太八・二一、一二　ル 太二五・四一を見よ
路一二・二八 徒五・一一　リ 路三・八、一六・三　（箴六六・二四）
九、八・二六、一二　ヌ 路一六・二二、一二　ヲ 路一九・九、約八　コ 太一九・一（路九・
・七・二三　來一・一　ホ 但六・二二　太一八　ル 路一二・三七　五二、約四・三四）
三、一四　ヘ（約一・一八、一三・　ヲ 伯二・一・一三　詩
・二〇、二五・三二　路四・二二一六加　一七・一四（路六・
二四）

ナ 太一八・一五（太一八・二一）　ラ 利一九・一七　ム 大六・二四　ウ（太一八・二一、二）　ヰ 可六・三〇を見よ　ノ 路七・一三を見よ　オ（可九・二四）　ク 太一三・二一、一七　ヤ 路一三・一九　路一九・四　マ 路一二・三七　ケ 太二五・三〇（伯二）　・一〇　可四・三二　ア 路五・五を見よ　サ 利一三・二一一四、　ヒ 來九・二二を見よ　モ（路一九）一徒一・六）　ヘ 路一七・一七　テ（利一三・四、五、四　六）　フ 路九・五一を見よ　コ 太一九・一（路九・五二、約四・三四）　・二二、二三、二五・七　隨一・三五　ヱ 路一七・一七　ヲ 伯二・一・一三　詩一七・一四（路六・二四）　ミ 路一七・一二　シ 寒六六・五　エ 路一七・一五　約九　セ（路一二・三九）　・二四　ス 路一二・一八　ヒ 來九・二二を見よ　ヘ（約一・一八、一三・　ヲ 路一六・二四を見よ　ヨ 路一六・二四を見よ　ル 路一二・三九　ツ（路二二・二二）　ネ 太一八・六可九・四　ニ（箴前八・一二）　ヌ（使）四・一二）　ヲ 使一六・二九を見よ　ワ 使二・四〇、八・二　カ 路一六・三一、二四　五、一〇・四二、一　八・五、一〇・二二、一　一二六、二一〇・二一　二三・一　一、二八・二三　加　五・三　弗四・七　ア 箴二・一、四・　レ（太二八・一一一　五　約一二・九、一　四七　徒一五・二一、　二六・二二、二八・　ソ 太一三・四一、一八　・七（哥前一一・一九　タ 路一六・二九を見よ　レ（太二八・一一一　五　約一二・九、一　四七　徒一五・二一、　二六・二二、二八・　ソ 太一三・四一、一八　・七（哥前一一・一九　ヨ 路一六・二四を見よ　（使前四・一）

三　かた善きなり。三汝等みづから心せよ。もし汝の兄弟、罪を犯さば、これを戒めよ。もし悔改めなば之をゆる
四　せ。四もし一日に七度なんぢに罪を犯し、七度「くい改む」と言ひて、汝に歸らば之をゆるせ』
五　五使徒たち主に言ふ『われらの信仰を增したまへ』六主いひ給ふ『もし芥種一粒ほどの信仰あらば、此の桑
六　の樹に「拔けて、海に植れ」と言ふとも汝らに從ふべし。七汝等のうち誰か或は耕し、或は牧する僕を有たん
七　に、その僕、畑より歸りたる時、これに對ひて「直ちに來り食に就け」と言ふ者あらんや。八反つて「わが夕餐
八　の備をなし、我が飲食するあひだ、帶して給仕せよ、然る後に、なんぢ飲食すべし」と言ふにあらずや。九僕、
九　命ぜられし事を爲したればとて、主人これに謝すべきか。一〇斯のごとく汝らも命ぜられし事をことごとく爲した
一〇　る時「われらは無益なる僕なり、爲すべき事を爲したるのみ」と言へ』
一一　二イエス、エルサレムに往かんとて、サマリヤとガリラヤとの間をとほり、一二或村に入り給ふとき、十人の
一二　癩病人これに遇ひて、遙に立ち止まり、一三聲を揚げて言ふ『君イエスよ、我らを憫みたまへ』一四イエス之を見て
一三　言ひたまふ『なんぢら往きて身を祭司らに見せよ』彼ら往く間に潔められたり。一五その中の一人、おのが醫され
一四　たるを見て、大聲に神を崇めつつ歸りきたり、一六イエスの足下に平伏して謝す。これはサマリヤ人なり。一七イエ
一五　ス答へて言ひたまふ『十人みな潔められしならずや、九人は何處に在るか。一八この他國人のほかは、神に榮光を
一六　歸せんとて歸りきたる者なきか』一九斯て之に言ひたまふ『起ちて往け、なんぢの信仰なんぢを救へり』
一七　二〇神の國の何時きたるべきかをパリサイ人に問はれし時、イエス答へて言ひたまふ『神の國は見ゆべき狀に
一八
一九
二〇

二一 て來らず。二一また「視よ、此處に在り」「彼處に在り」と人々言はざるべし。視よ、神の國は汝らの中に在るなり」
二二 二三かくて弟子たちに言ひ給ふ『なんぢら人の子の日の一日を見んと思ふ日きたらん、然れど見ることを得じ。
二三 二四そのとき、人々なんぢらに「見よ彼處に、見よ此處に」と言はん、然れど往くな、從ふな。二四それ電光の天の
二五 彼方より閃きて、天の此方に輝くごとく、人の子もその日には然あるべし。二五然れど人の子は先づ多くの苦難を
二六 受け、かつ今の代に棄てらるべきなり。二六ノアの日にありし如く、人の子の日にも然あるべし。二七ノア方舟に入
二八 る日までは、人々飲み食ひ娶り嫁ぎなど爲たりしが、洪水きたりて彼等をことごとく滅せり。二八ロトの日にも斯
二九 のごとく、人々飲み食ひ、賣り買ひ、植ゑつけ、家造りなど爲たりしが、二九ロトのソドムを出でし日に、天より
三〇 火と硫黄と降りて、彼等をことごとく滅せり。三〇人の子の顯るる日にも、その如くなるべし。三一その日には人
三一 もし屋の上にをりて、器物、家の内にあらば、之を取らんとて下るな。畑にをる者も同じく歸るな。三二ロトの妻
三二 を憶へ。三三おほよそ己が生命を全うせんとする者は、これを失ひ、失ふ者は、これを保つべし。三四われ汝らに告
三四 ぐ、その夜ふたりの男、一つ寢臺に居らんに、一人は取られ、一人は遺されん。三五二人の女ともに臼ひき居らん
三五 に、一人は取られ、一人は遺されん』〔三六〕*三七弟子たち答へて言ふ『主よ、それは何處ぞ』イエス言ひたまふ

第一八章

一 『屍體のある處には鷲も亦あつまらん』

一また彼らに落膽せずして常に祈るべきことを、譬にて語り言ひ給ふ、二『或町に神を畏れず、人を

イ路一七・二三 ロ路一〇・九、一一・四・一二 ハ約八・五六（廢五・一八） ニ太九・一五 可一一・二〇 路五・三五、一九・四三、二一・一 ホ太二四・二三 可一三・一五、二一・二一（路一七・二一）・一八 ヘ太二四・二七 ト 哥前一・八、五・五 哥後一・一四 野一・六、一〇、一一・六 撒前五・二） 撒後二・三） チ太一六・二一、一七・二二 可八・三一 リ太二四・三七—三九 撒後一・七、一七・一三、四・一三 撒前五・二） 撒後二・三） ヌ太二四・三八 撒前五・三） 創六・五、七・七 ル創一九・二二—二四 路九・二二、一二・三 ヲ創一九・一六、二四 彼後二・七 哥前一・七 西三・四 撒後一・七 彼前一・七、一三、四・一三 撒後一・七 彼前一・七、一三、四・一三 約壹二・二八（太一六・二七、二四・二四） カ路五・一九を見よ 太二四・一七、一八 可一三・一五、一六 （路二一・二一） レ太二四・四一 ソ太二四・二八（伯三九・三〇） ツ哥後四・一、一六 弗三・一三 撒後三・一三 （加六・九） 太二四・四四） 西二・一二、三 弗六・一八 撒五・一七（路一一・五—九） ナ路一八・四（哥後八・二一） ラ路一八・四（路二〇・三、來一二・九）

ム路一八・二 ウ路一八・二 井（路一一・一八） ノ路七・一三を見よ オ詩八八・一 ク太二四・二二 可一一・三・二〇 羅八・三三 ケ來一〇・三七 （太二四・一二 路一一・二〇 多一・一 彼 ヤ（羅五・七 彼後三・九） コ詩三〇・一二 路一六・一二・一五（太五・二 ○ 哥後一・九） エ雙六五・五 羅一四 ア太六・五 可一一・二 ○ 哥後一・九） 路一四 ヒ路一四・一一を見よ モ一五—一七 太一九 ・一三—一五 可一 ○・一三—一六 セ路一八・三九 ス（太一八・三） 一八 イ（可九・三九） ロ（約三・三、五） ハ太一八・三、一九・一四 可一〇・一五 （路八・三 哥前一 四・二〇 羅一・二一 彼前二・二） サ（羅三・一七） キ太九・一四 ユ路一一・四二 メ路一八・一一 （羅九・六） ミ路二三・四八 シ路一八・三九 エ詩七九・八 伊九・

願みぬ裁判人あり。三その町に寡婦ありて、屢次その許にゆき「我がために仇を審きたまへ」と言ふ。四かれ久
五 しく聽き入れざりしが、其ののち心の中に言ふ「われ神を畏れず、人を顧みねど、五此の寡婦われを煩はせば、
六 我かれが爲に審かん、然らずば絶えず來りて我を惱さん」と』六主いひ給ふ『不義なる裁判人の言ふことを聽
七八 け、七まして神は夜晝よばはる選民のために、縱ひ遲くとも遂に審き給はざらんや。八我なんぢらに告ぐ、速か
九 に審き給はん。然れど人の子の來るとき地上に信仰を見んや』

一〇九 九また己を義と信じ、他人を輕しむる者どもに此の譬を言ひたまふ、一〇『二人のもの祈らんとて宮にのぼる、
一一 一人はパリサイ人、ひとりは取税人なり。一一パリサイ人、たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、
一二 强奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。一二我は一週のうちに二度斷食し、
一三 凡て得るものの十分の一を獻ぐ」一三然るに取税人は遙に立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ
一四 「神よ、罪人なる我を憫みたまへ」一四われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り
一五 往けり。おほよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』

一六 一五イエスの觸り給はんことを望みて、人々嬰兒らを連れ來りしに、弟子たち之を見て禁めたれば、一六イエス
一七 幼兒らを呼びよせて言ひたまふ『幼兒らの我に來るを許して止むな、神の國は斯のごとき者の國なり。一七われ誠
に汝らに告ぐ、おほよそ幼兒のごとくに、神の國をうくる者ならずば、之に入ること能はず』

一八 一九 或司、問ひて言ふ『善き師よ、われ何をなして永遠の生命を嗣ぐべきか』一九イエス言ひ給ふ『なにゆゑ我
二〇 を善しと言ふか、神ひとりの他に善き者なし。二〇誡命は、なんぢが知る所なり「姦淫するなかれ」「殺すなかれ」
二一 「盗むなかれ」「僞證を立つる勿れ」「なんぢの父と母とを敬へ」二一彼いふ『われ幼き時より皆これを守れり』
二二 二二イエス之をききて言ひたまふ『なんぢなほ足らぬこと一つあり、汝の有てる物を、ことごとく賣りて貧しき者
二三 に分ち與へよ、然らば財寶を天に得ん。かつ來りて我に從へ』二三彼は之をききて甚く悲しめり、大に富める者な
二四 二五 ればなり。二四イエス之を見て言ひたまふ『富める者の神の國に入るは如何に難いかな。二五富める者の神の國に入
二六 二七 るよりは、駱駝の針の穴をとほるは尺つて易し』二六之をきく人々いふ『さらば誰か救はるる事を得ん』二七イエス
二八 言ひたまふ『人のなし得ぬところは、神のなし得る所なり』二八ペテロ言ふ『視よ我等わが物をすてて汝に從へ
二九 り』二九イエス言ひ給ふ『われ誠に汝らに告ぐ、神の國のために、或は家、或は妻、或は兄弟、あるひは兩親、あ
三〇 るひは子を棄つる者は、誰にても、三〇今の時に數倍を受け、また後の世にて、永遠の生命を受けぬはなし』
三一 三一イエス十二弟子を近づけて言ひたまふ『視よ、我らエルサレムに上る。人の子につき預言者たちによりて
三二 錄されたる凡ての事は、成遂げらるべし。三二人の子は異邦人に付され、嘲弄せられ、辱しめられ、唾せられん。
三三 三三彼等これを鞭ち、かつ殺さん。斯て彼は三日めに甦へるべし』三四弟子たち此等のことを一つだに悟らず、此の
三四 言がれらに隱れたれば、その言ひ給ひしことを知らざりき。

イ一八—三〇 太一九 ・一六—二九 可一 〇・一七—三〇（路一〇・二五—二八）
ロ 太二五・三四を見よ（太一九・一六）
ハ 出二〇・一二—一六　ニ 詩三・六　ホ 太一九・一一を見よ　ヘ 太六・二〇
ト（詩三三・三一）　チ 太一九・二三を見よ（太一三・一二）　リ 太一九・二四 可一 〇・二五
ヌ 太一九・二六を見よ　ル 太四・一〇—一一 可一・一八—二〇 路五　ヲ 太一九・二九 可一 〇・二九、三〇（太六・三三 路一四・
カ 太一二・三二を見よ　ワ（伯四二・一〇）　ヨ 三一—三三 太二〇 ・一七—一九 可一 〇・三二—三四
タ 路九・五一を見よ　レ 詩二一・一—三一　ソ 太二七・二 約一八 〇・三〇、三一（徒三・一三、
ツ 太二七・二六—三一　ネ 可一〇・三四を見よ　ナ 太一六・二一を見よ　ラ 可九・三二を見よ（路二四・一六）

三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 三五イエス、エリコに近づき給ふとき、一人の盲人、路の傍らに坐して、物乞ひ居たりしが、三六群衆の過ぐる
を聞きて、その何事なるかを問ふ。三七人々ナザレのイエスの過ぎたまふ由を告げたれば、三八盲人、呼はりて言ふ
『ダビデの子イエスよ、我を憫みたまへ』三九先だち往く者ども、彼を禁めて默さしめんと爲たれど、增々さけび
四〇 て言ふ『ダビデの子よ、我を憫みたまへ』四〇イエス立ち止り盲人を連れ來るべきことを命じ給ふ。かれ近づきた
四一 れば、四一イエス問ひ給ふ『わが汝に何を爲さんことを望むか』彼いふ『主よ、見えんことなり』四二イエス彼に
四二 『見ることを得よ、なんぢの信仰なんぢを救へり』と言ひ給へば、四三立刻に見ることを得、神を崇めてイエスに
四三 從ふ。民みな之を見て神を讃美せり。

第一九章

一 一エリコに入りて過ぎゆき給ふとき、二視よ、名をザアカイといふ人あり、取稅人の長にて富める
二 者なり。三イエスの如何なる人なるかを見んと思へど、丈矮うして群衆のために見ること能はず、
三 四 四前に走りゆき、*桑の樹にのぼる。イエスその路を過ぎんとし給ふ故なり。五イエス此處に至りしとき、仰ぎ見
五 て言ひたまふ『ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』六ザアカイ急ぎおり、喜びてイエスを
六 七 迎ふ。七人々みな之を見て呟きて言ふ『かれは罪人の家に入りて客となれり』八ザアカイ立ちて主に言ふ『主、
八 視よ、わが所有の半を貧しき者に施さん、若し、われ誣ひ訴へて人より取りたる所あらば、四倍にして償はん』
九 一〇 九イエス言ひ給ふ『けふ救はこの家に來れり、此の人もアブラハムの子なればなり。一〇それ人の子の來れるは、
失せたる者を尋ねて救はん爲なり』

ム 三五—四三（太二〇・二九—三四 可一〇・四六—五二）　ウ（太二〇・二九 可一〇・四六）　路一九・一 井約九・一八 ノ 太二・二三を見よ　オ 太九・二七を見よ　ク 路一八・一五　ヤ 可一〇・三六　マ 太九・二二を見よ　ケ 太・八を見よ　フ 路一九・三七（路九・四三、一三・一七）　コ 路一八・三五を見よ　エ 王上一〇・二七 代上二七・二八 代下一・一五、九・二七 詩七八・四七 箴九　テ（路一三・三三）　ア（路一〇・三八）　サ 路一五・二を見よ　キ（路一八・二二）　ユ 路三・一四　メ 母後一二・六（出二二・一 民五・七）　ミ 路一六・二四を見よ　シ 結三四・一一、一二、一六 大九・一三、一五・二四 路一五・四

二　二人々これらの事を聽きゐたるとき、譬を加へて言ひ給ふ。これはイエス、エルサレムに近づき給ひ、神の
三　國たちどころに現るべしと彼らが思ふ故なり。一二乃ち言ひたまふ『或る貴人、王の權を受けて歸らんとて遠き國
一四　へ往くとき、一三十人の僕をよび、之に金十ミナを付して言ふ「わが歸るまで商賣せよ」一四然るに其の地の民かれ
一五　を憎み、後より使を遣して「我らは此の人の我らの王となることを欲せず」と言はしむ。一五貴人、王の權をうけ
一六　て歸り來りしとき、銀を付し置きたる僕どもの、如何に商賣せしかを知らんとて彼らを呼ばしむ。一六初のもの進
一七　み出でて言ふ「主よ、なんぢの一ミナは十ミナを贏けたり」一七王いふ「善いかな、良き僕、なんぢは小事に忠な
一八　りしゆゑ、十の町を司どるべし」一八次の者きたりて言ふ「主よ、なんぢの一ミナは五ミナを贏けたり」一九王また
二〇　言ふ「なんぢも五つの町を司どるべし」二〇また一人きたりて言ふ「主、視よ、なんぢの一ミナは此處に在り。
二一　我これを袱紗に包みて藏め置きたり。二一これ汝の嚴しき人なるを懼れたるに因る。なんぢは置かぬものを取り、
二二　播かぬものを刈るなり」二二王いふ「惡しき僕、われ汝の口によりて汝を審かん。我の嚴しき人にて、置かぬもの
二三　を取り、播かぬものを刈るを知るか。二三何ぞわが金を銀行に預けざりし、然らば我きたりて元金と利子とを請求
二四　せしものを」二四斯て傍らに立つ者どもに言ふ「かれの一ミナを取りて十ミナを有てる人に付せ」二五彼等いふ「主
二六　よ、かれは既に十ミナを有てり」二六「われ汝らに告ぐ、凡て有てる人はなほ與へられ、有たぬ人は有てるものをも
二七　取らるべし。二七而して我が王たる事を欲せぬ、かの仇どもを、此處に連れきたり我が前にて殺せ』

二八　二八イエス此等のことを言ひてのち、先だち進みてエルサレムに上り給ふ。

イ 路九・五一を見よ　ロ（路一七・二〇 徒一・六）　ハ（一二一—二七 太二五・五—三〇）　ニ（太二五・一）　ホ（約二一・二二、一二）　ヘ（約一・二四）　ト 路一九・二七　チ 太二五・二一、二三　ヌ（母前二五・三）　ル（妥後八・一二）　ヲ（母後八・三二）　ワ 母後一・一六　カ 太一三・二二を見よ　ヨ 路一九・一四　タ（母前二五・三三 太二二・七）　レ 可一〇・三二　ソ 路九・五一を見よ　ツ 二九—三八 太二一　ナ 太二一・一七を見よ　ラ（可一四・一三）　ム（路二三・五三）　ウ 路一九・三四　ヰ 路二二・一三

二九　二九オリブといふ山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに近づきし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言ひ給
三〇　ふ、三〇『向ひの村にゆけ。其處に入らば一度も人の乘りたる事なき驢馬の子の繫ぎあるを見ん、それを解きて牽き
三一　きたれ。三一誰かもし汝らに「なにゆゑ解くか」と問はば、斯く言ふべし「主の用なり」と』三二遣されたる者ゆき
三二　たれば、果して言ひ給ひし如くなるを見る。三三かれら驢馬の子をとく時、その持主ども言ふ『なにゆゑ驢馬の子
三三　を解くか』三四答へて言ふ『主の用なり』三五かくて驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上にかけ
三四　て、イエスを乘せたり。三六その往き給ふとき、人々おのが衣を途に敷く。三七オリブ山の下りあたりまで近づき來
三五　り給へば、群れゐる弟子等みな喜びて、その見しところの能力ある御業につき、聲高らかに神を讃美して言ひ始
三六　む、三八『讃むべきかな、主の名によりて來る王。天には平和、至高き處には榮光あれ』三九群衆のうちの或るパリサ
三七　イ人ら、イエスに言ふ『師よ、なんぢの弟子たちを禁めよ』四〇答へて言ひ給ふ『われ汝らに告ぐ、此のともがら
三八　默さば、石叫ぶべし』

三九　四一既に近づきたるとき、都を見やり、之がために泣きて言ひ給ふ、四二『ああ汝、なんぢも若しこの日の間に
四〇　平和にかかはる事を知りたらんには——然れど今なんぢの目に隱れたり。四三日きたりて敵なんぢの周圍に壘を
四一　きづき、汝を取り圍みて四方より攻め、四四汝と、その內にある子らとを地に打ち倒し、一つの石をも石の上に遺
四二　さざるべし。なんぢ眷顧の時を知らざりしに因る』四五斯て宮に入り、商ひする者どもを逐ひ出しはじめ、四六之に
四三　言ひたまふ『わが家は祈の家たるべし』と錄されたるに、汝らは之を强盜の巢となせり』

ノ 路一九・三一　オ（王下九・一三）　ク 路一九・二九　ヤ（太二一・一五 約一二・一七、一八）　マ 路一八・一四三　ケ（詩一一八・二六 路一三・三五）　コ 路二・一四（詩一四八・一）　フ 太二・二を見よ　テ（詩二・一一）　エ（太二一・一五、一六）　ア 四一—四四（路一三・三四、三五、二一）　サ（約一一・三八—三一）　キ（申三二・一九）　ユ（約一二・四〇）　メ 路一七・二二を見よ　ミ 箴二九・三、一三七・三三 耶六・六 結四・二、二六・八　シ 路二一・二〇　エ 詩一三七・九　ヒ 太二四・二 可一三　ヤ 路二一・六 何一三・一六、箴三・二〇　モ 彼前二・二（但九・二四）　セ 四五、四六 太二一・二、一三 可一一　ス 箴五六・七 耶七・二一 太二一・一三 可一一・一七　イ 路九・五一を見よ　ロ（路一七・二〇 徒一・六）　ハ（一二一—二七 太二五・一四—三〇）　ニ（太二五・一）　ホ（約二一・二二、一二）　ヘ（約一・二四）　ト 路一九・二七　チ 太二五・二一、二三　ヌ（母前二五・三）　ル（妥後八・一二）　ヲ（母後八・三二）　ワ 母後一・一六　カ 太一三・二二を見よ　ヨ 路一九・一四　タ（母前二五・三三 太二二・七）　レ 可一〇・三二　ソ 路九・五一を見よ　ツ 二九—三八 太二一　ナ 太二一・一七を見よ　ラ（可一四・一三）　ム（路二三・五三）　ウ 路一九・三四　ヰ 路二二・一三

四七 四七イエス日々宮にて教へたまふ。祭司長・學者ら及び民の重立ちたる者ども之を殺さんと思ひたれど、四八民
みな耳を傾けて、イエスに聽きたれば爲すべき方を知らざりき。

第二〇章

一 一或日イエス宮にて民を教へ、福音を宣べゐ給ふとき、祭司長・學者らは、長老どもと共に近づき
二 來り、二イエスに語りて言ふ『なにの權威をもて此等の事をなすか、此の權威を授けし者は誰か、
三 我らに告げよ』三答へて言ひ給ふ『われも一言なんぢらに問はん、答へよ。四ヨハネのバプテスマは、天よりか
四五 人よりか』五彼ら互に論じて言ふ『もし「天より」と言はば「なに故かれを信ぜざりし」と言はん。六もし「人
六五 より」と言はんか、民みなヨハネを預言者と信ずるによりて我らを石にて擊たん』七遂に何處よりか知らぬ由を
七 答ふ。八イエス言ひたまふ『われも何の權威をもて此等の事をなすか、汝らに告げじ』
八 九斯て次の譬を民に語りいで給ふ『ある人、葡萄園を造りて農夫どもに貸し、遠く旅立して久しくなりぬ。
九 一〇時至りて、葡萄園の所得を納めしめんとて、一人の僕を農夫の許に遣ししに農夫ども之を打ちたたき、空手に
一〇 て歸らしめたり。一一又ほかの僕を遣ししに、之をも打ちたたき辱しめ、空手にて歸らしめたり。一二なほ三度めの
一一 者を遣ししに、之をも傷つけて逐ひ出したり。一三葡萄園の主いふ「われ何を爲さんか。我が愛しむ子を遣さん、
一三 或は之を敬ふなるべし」一四農夫ども之を見て互に論じて言ふ「これは世嗣なり。いざ殺して其の嗣業を我らの
一四 物とせん」一五斯てこれを葡萄園の外に逐ひ出して殺せり。さらば葡萄園の主、かれらに何を爲さんか、一六來りて
一五

イ 太二六・五五を見よ　ロ 〔太二一・四六〕　ハ 一一八　太二一・二　三一二七　可一一・一　ニ 二七・三三　ホ 路八・一
ヘ 〔使四・一六・一二〕　ト 〔出二・四　約一・　二五　使四・七〕　チ 落一五・一八・二一　約三・二七　リ 太二一・三二　路七・三〇
ヌ 太二一・二八　ワ 歌八・一一・一二　路七・二九・三〇　カ 太二五・一四・一五　可一三・三四　ヨ 歌八・一一・一二　タ 一〇・一二・一二　太五・一二・二二・六・二七　レ 太二二・四　一五・二六　尼九・二　ツ 使五・四一　ネ 〔路一八・二〕　ナ 來一・二　〔詩八・二七〕
ラ 〔王上二一・一九〕　ム 來一三・一二　ウ 太二一・四一　可一二・一九　〔太二四・五〇・五一　路一九・二七〕
ル 九一一九　太二一・三四　可一二・三四　ヲ 歌八・一一・一二　レ 太二二・四　二四・一九、三六、三七（代下　來一・三六、三七）

かの農夫どもを亡し、葡萄園を他の者どもに與ふべし』人々これを聽きて言ふ『然はあらざれ』一七イエス彼らに
目を注めて言ひ給ふ『されば「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる」と錄されたるは何ぞや。
一八 一八凡そその石の上に倒るる者は碎け、又その石、人の上に倒るれば、その人を微塵にせん』
一九 一九此のとき學者・祭司長ら、イエスに手をかけんと思ひたれど、民を恐れたり。この譬の己どもを指して言
二〇 ひ給へるを悟りしに因る。二〇かくて彼ら機を窺ひ、イエスを司の支配と權威との下に付さんとて、その言を捉ふ
二一 るために義人の樣したる間諜どもを遣したれば、二一其の者どもイエスに問ひて言ふ『師よ、我らは汝の正しく語
二二 り、かつ教へ、外貌を取らず、眞をもて神の道を教へ給ふを知る。二二われら貢をカイザルに納むるは、善きか、
二三 惡しきか』二三イエスその惡巧を知りて言ひ給ふ、二四『デナリを我に見せよ。これは誰の像、たれの號なるか』『カ
二四 イザルのなり』と答ふ。二五イエス言ひ給ふ『さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』二六かれら
二五 民の前にて其の言をとらへ得ず、且その答を怪しみて默したり。
二六 二七また復活なしと言ひ張るサドカイ人の或者ども、イエスに來り問ひて言ふ、二八『師よ、モーセは人の兄弟、
二七 もし妻あり、子なくして死なば、其の兄弟かれの妻を娶りて、兄弟のために嗣子を擧ぐべしと、我らに書き遺し
二八 たり。二九さて茲に七人の兄弟ありて、兄、妻を娶り、子なくして死に、三〇第二、第三の者も之を娶り、三一七人
二九 三〇 みな同じく子を殘さずして死に、三二後には其の女も死にたり。三三されば復活の時、この女は誰の妻たるべきか、
三一 三二 三三

井 太二一・四一を見よ　ノ 隨三・四、六・三一　オ 可一〇・二二を見よ　ク 詩一一八・二一　徒四・一一　彼前二・七　ケ 〔伊二・三四—四五〕　コ 二〇—二六　太二二・四六　可一二・三三—一七　サ 一九・七　徒一〇・三四　シ 太一八・二八を見よ　ス 申二五・五
ヤ 〔箴二・二〇　彼前二・七　ヨ 二〇—二六　太二二・二・五・六・二・三・一七　ユ 太一七・二五　路二・二四　ヱ 可三・二を見よ　テ 太二七・二、一一　徒二三・二四　ア 〔王上一四・六〕　キ 徒一八・二六　一三・一〇、一八　ユ 太一七・二五　路二・二四　ヱ 太二二・二一を見よ
ヒ 二七—四〇　太二二・二三—三三　可一二・一八—二七　モ 徒二二・八　〔徒四・二〕　ウ 太二一・四一　可一二・九　〔太二四・五〇・五一　路一九・二七〕
ル 一六三

三四 七人これを妻としたればなり』三四イエス言ひ給ふ『この世の子らは娶り嫁ぎすれど、三五かの世に入るに、死人の
三六 中より甦へるに、相應しと爲らるる者は、娶り嫁ぎすることなし。三六彼等ははや死ぬること能はざればなり。御使
三七 たちに等しく、また復活の子どもにして、神の子供たるなり。三七死にたる者の甦へる事は、モーセも柴の條に、
三八 主を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼びて之を示せり。三八神は死にたる者の神にあらず、生け
三九 る者の神なり。それ神の前には皆生けるなり』三九學者のうちの或者ども答へて『師よ、善く言ひ給へり』と言
四〇 ふ。四〇彼等ははや、何事をも問ひ得ざりし故なり。

四一 四一イエス彼らに言ひたまふ『如何なれば人々、キリストをダビデの子と言ふか。四二ダビデ自ら詩篇に言ふ、
四二 四三 四三「主わが主に言ひ給ふ、われ汝の敵を汝の足臺となすまでは、わが右に坐せよ」四四ダビデ斯く彼を主と稱ふれ
四四 ば、爭でその子ならんや』

四五 四五民の皆ききをる中にて、イエス弟子たちに言ひ給ふ、四六『學者らに心せよ。彼らは長き衣を著て歩むことを
四六 好み、市場にての敬禮、會堂の上座、饗宴の上席を喜び、四七また寡婦らの家を呑み、外見をつくりて長き祈を
四七 なす。其の受くる審判は更に嚴しからん』

第二一章

一 一 「イエス目を擧げて、富める人々の納物を、三 寒錢函に投げ入るるを見、二 また或る貧しき寡婦の
三 レプタ二つを投げ入るるを見て言ひ給ふ、三『われ實をもて汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、凡ての

イ 太一二・三二を見よ　ロ 太二四・三八　路一七・二七　路二〇・一一　ハ 一一・三二を見よ　路一七・二二を見よ　路一九・四三、四四　ケ（後一・六、七）　ク 可一二・四四を見よ　ヤ 五・三六　太二四・一一　可一三・一一　一一・三七　マ 路一七・二二を見よ　路一九・四三、四四　フ 耶二九・八　弗五・六　西二・八　徴使二・三　約壺三・七　コ 耶一四・一四　約壺　エ 約八・二四　テ（太三・二、四・一七　メ（寒一九・一七）　可一・一五）　ア 路一七・二三　サ（路二四・三七）　キ 默六・一二　ユ 徒一・二八　默六　ミ 太一六・一　可八・一　エ 徒二二・一九、二六　ヒ 徒八・二、一二・四、一六・三二、二四・一二　コ 一九・二四、二四・一　ス（腓一・一一—一九）　セ 徒二六・一九、一七　モ（徒二七・二四）　三（徒四・三、五・一八）　イ 路二二・一二　ロ（徒四・一四）　ハ（徒四・一二）　九 路一二・一二）　ニ 徒六・一〇　ホ 太一〇・三五　路一　ヘ 約一五・一八—二一（路六・一二）　ト 太一〇・三〇を見よ　チ 太一〇・二二、二四　・一三 羅一・七（寒一〇・三六 雅一・三、彼後一・六）

イ 太一二・三二を見よ　ロ 太二四・三八　路一七・二七　路二〇・一一　三六）　ハ 一一・三二を見よ　路一九・四三、四四　ニ 太二二・八を見よ　徒五・四一　地後一　ホ 巻翰一五・九四、五　默二一・四　五　默二一・四　ヘ（寒二一・七、八）　ト 創一・二六　詩八二・六　徒八・一四—一　路一七・二二　默六　チ 出三・一—四・一七　可一二・二六　リ 出三・六、一五　徒七・三二　ヌ 太二一・三二　可一二・七　ル 民六・一一、一四・七、一九、二二、二三　ヲ 路一四・四　タ 詩一一〇・一　徒二・三四、三五　寒一・一三（哥利一五・二）　レ（徒七・四九）　ソ（羅一・三、四）　ツ 四五—四七　太二三　・一—七　可一二・一　ウ 雅三・一　井一・四　ネ 路一・四三　ナ 路一四・七、八　加二・一九　徴翰五・一〇（寒九・一四）　ヨ 太九・二七を見よ　タ 詩一一〇・一　徒二・三四、三五　寒一・一三（哥利一五・二）　カ 太一・一、一七を見よ　ラ（路一・三九、一一）　オ 可一二・四二　路一二・五九　ム（太六・五、七）　ル 民六・一一、一四・四五　可　ワ 四一—四四　太二二　タ 詩一一〇・一　徒二・三四、三五　寒一・一三（哥利一五・二）　ヨ 太一二・三五—三七　ム（太六・五、七）　ヒ 徒八・二、一二・四、一六・三二、二四・一二　コ 一九・二四、二四・一　ス（腓一・一一—一九）　ヘ（約一五・一八—二一）　ト 太一〇・三〇を見よ　チ 太一〇・二二、二四　・一三 羅一・七（寒一〇・三六 雅一・三、彼後一・六）

四 人よりも多く投げ入れたり。四彼らは皆その豐なる内より納物の中に投げ入れ、この寡婦はその乏しき中より、
己が有てる生命の料をことごとく投げ入れたればなり』

五 五或る人々、美麗なる石と獻物とにて宮の飾られたる事を語りしに、イエス言ひ給ふ、六『なんぢらが見る此
六 等の物は、一つの石も崩されずして石の上に殘らぬ日きたらん』七彼ら問ひて言ふ『師よ、さらば此等のことは
七 何時あるか、又これらの事の成らんとする時は如何なる兆あるか』八イエス言ひ給ふ『なんぢら惑されぬやうに
八 心せよ、多くの者わが名を冒し來り「われは夫なり」と言ひ「時は近づけり」と言はん、彼らに從ふな。九戰爭
九 と騷亂との事を聞くとき、怖づな。斯ることは先づあるべきなり。然れど終は直ちに來らず』

一〇 一〇また言ひたまふ『民は民に、國は國に逆ひて起たん』一一かつ大なる地震あり、處々に疫病・饑饉あらん。
一一 懼るべき事と天よりの大なる兆とあらん。一二すべて此等のことに先だちて、人々なんぢらに手をくだし、汝らを
一二 責めん、即ち汝らを會堂および獄に付し、わが名のために王たち司たちの前に曳きゆかん。一三これは汝らに證の
一三 一五四 機とならん。一四然れば汝ら如何に答へんと預じめ思慮るまじき事を心に定めよ。一五われ汝らに凡て逆ふ者の、言
一五 一六 ひ逆ひ、言ひ消すことをなし得ざる口と智慧とを與ふべければなり。一六汝らは兩親・兄弟・親族・朋友にさへ付
一六 一八七 されん。又かれらは汝らの中の或者を殺さん。一七汝等わが名の故に凡ての人に憎まるべし。一八然れど汝らの頭の
一九 髮一すぢだに失せじ。一九汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし。

二〇 汝らエルサレムが軍勢に圍まるるを見ば、その亡近づけりと知れ。二一 その時ユダヤに居る者どもは山に遁
二二 れよ、都の中にをる者どもは出でよ、田舎にをる者どもは都に入るな、二二 これ錄されたる凡ての事の遂げらるべ
二三 き刑罰の日なり。二三 その日には孕りたる者と、乳を哺する者とは禍害なるかな。地に大なる艱難ありて、御怒こ
二四 の民に臨み、二四 彼らは劍の刃に斃れ、又は捕はれて諸國に曳かれん。而してエルサレムは異邦人の時滿つるまで
二五 異邦人に蹂躙らるべし。二五 また日・月・星に兆あらん。地にては國々の民なやみ、海と濤との鳴り騷くによりて
二六 狼狽へ、二六 人々おそれ、かつ世界に來らんとする事を思ひて膽を失はん。これ天の萬象、震ひ動けばなり。二七 其
二八 のとき人々、人の子の能力と大なる榮光とをもて、雲に乘りきたるを見ん。二八 これらの事起り始めなば、仰ぎて
首を擧げよ。汝らの贖罪、近づけるなり』

二九 また譬を言ひたまふ『無花果の樹、また凡ての樹を見よ、三〇 既に芽せば、汝等これを見てみづから夏の近
三一 きを知る。三一 斯のごとく此等のことの起るを見ば、神の國の近きを知れ。三二 われ誠に汝らに告ぐ、これらの事
三二 ことごとく成るまで、今の代は過ぎゆくことなし。三三 天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎゆくことなし。
三四 汝等みづから心せよ、恐らくは飲食にふけり、世の煩勞にまとはれて心鈍り、思ひがけぬ時、かの日羈の
三五 ごとく來らん。三五 これは徧く地の面に住める凡ての人に臨むべきなり。三六 この起るべき凡ての事をのがれ、人の
三六 子のまへに立ち得るやう、常に祈りつつ目を覺しをれ』

三七 イエス晝は宮にて教へ、夜は出でてオリブといふ山に宿りたまふ。三八 民はみな御教を聽かんとて、朝とく

イ 路一九・四三　ロ（路一七・三一）　ハ 太一・二二を見よ　ニ 雅三四・八、六三・　四 何九・七（但九
・二四—二七 默二　チ 申二八・六四　リ 箴一一・二五　ヌ 雅六三・三・一八 但　八・一三 箴二一・三
一七・一三　默一・三　ル 雅一三・一〇、二四　結三二・七　耳二・一〇、三一、三二・五　庶五・二
○、八・九 箴一・ワ（路一八・七）　カ（路一二・五七）　ヨ 太三・二を見よ　タ 太五・一八を見よ　レ（太二四・四二、四四
一五 徒二・二〇　默六・一二、一三、　八・二二　テ 太一六・二七を見よ
默六・一二、一三、　ヨ 太三・二を見よ　タ 太五・一八を見よ　レ（太二四・四二、四四

ヤ 三一・六、太二六・一　四一・一六、可一四・
ユ 一七—二〇、太二六　默二一・九
・二六—二九、可　一四・二二—二五
（箴前一〇・一六—
二一、一一・二三—
二八）
メ 太一四・一九を見よ

可一三・三三、一四　ノ 一・二一、太二六・二一—
・三四、三八（走二　五、可一四・二一、二二
〇・三二　默一六・一　オ 約六・四、一一・五
・二三　默一六・一　ク 太一二・一四を見よ
五）　ケ 路二二・五一、徒四
・二、五・二四、二六
（代七九・一一　尼一
・一一）

ラ 太二六・五五を見よ　ム（太二二・一七可一　ヤ 三一・六、太二六・一
四一・一六、可一四・

ア 太二六・二〇　可一
四・一七
ウ 太二一・を見よ
・二一　默一六・一
井 太二一・一八、約八
・二（可一一・二〇）
マ 太四・一〇を見よ
約一三・二一、二七
路二二・五一、徒四
・二、五・二四、二六
（代七九・一一　尼一
・一一）

フ（路二二・四八）　コ 七—一三　太　六・
一七—一九　可一四
・二二—一六
エ 可一四・一二を見よ
テ 徒三・二、三、四、一
一、四・一三、一九、

ス 一・一九　路二二・
三九　約八・一）
サ 可六・三〇を見よ
キ 路一四・一五、二二
・一八、三〇（默一
九、九）

八・二四
ア 太二六・二〇　可一
四・一七
ユ 一七—二〇、太二六
・二六—二九　可
一四・二二—二五
（箴前一〇・一六—
二一、一一・二三—
二八）
メ 太一四・一九を見よ

ム（太二二・一七　默二二・一九

宮にゆき、御許に集れり。

第二二章

一 さて過越といふ除酵祭、近づけり。二 祭司長・學者らイエスを殺さんとし、その手段いかにと求
む、民を懼れたればなり。

三 時にサタン、十二の一人なるイスカリオテと稱ふるユダに入る。四 ユダ乃ち祭司長・宮守頭どもに往き
て、イエスを如何して付さんと議りたれば、五 彼ら喜びて銀を與へんと約す。六 ユダ諾ひて群衆の居らぬ時に
イエスを付さんと好き機をうかがふ。

七 過越の羔羊を屠るべき除酵祭の日、來りたれば、八 イエス、ペテロとヨハネとを遣さんとして言ひたまふ
『往きて我らの食せん爲に過越の備をなせ』九 彼ら言ふ『何處に備ふることを望み給ふか』一〇 イエス言ひたまふ
『視よ、都に入らば、水をいれたる瓶を持つ人なんぢらに遇ふべし、之に從ひゆき、その入る所の家にいりて、
二一 家の主人に「師なんぢに言ふ、われ弟子らと共に過越の食をなすべき座敷は何處なるか」と言へ。一二 さらば
調へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に備へよ』一三 かれら出で往きて、イエスの言ひ給ひし如くなるを見て
過越の設備をなせり。一四 時いたりてイエス席に著きたまひ、使徒たちも共に著く。一五 斯て彼らに言ひ給ふ『われ
苦難の前に、なんぢらと共にこの過越の食をなすことを望みに望みたり。一六 われ汝らに告ぐ、神の國にて過越の
成就するまでは我復これを食せざるべし』一七 かくて酒杯を受け、かつ謝して言ひ給ふ『これを取りて互に分ち飲

一 路二二・四八　二 祭司長・學者らイエスを殺さんとし、その手段いかにと求　ク 路二二・一九
三 路二二・三、一四　四 路二二・四八　五 路二二・六、一一　六 路二二・一一　七 路二二・七　八 路二二・八
九 路二二・一二　一〇 路二二・一〇　一一 路二二・一一　一二 路二二・一二　一三 路二二・一三　一四 路二二・一四
一五 路二二・一五　一六 路二二・一六　一七 路二二・一七　一八 路二二・一八　一九 路二二・一九

一八 め。一八 われ汝らに告ぐ、神の國の來るまでは、われ今よりのち葡萄の果より成るものを飲まじ』一九 またパンを取り謝してさき、弟子たちに與へて言ひ給ふ『これは汝らの爲に與ふる我が體なり。我が記念として之を行へ』二〇 夕餐ののち酒杯をも然して言ひ給ふ『この酒杯は汝らの爲に流す我が血によりて立つる新しき契約なり。二一 然れど視よ、我を賣る者の手、われと共に食卓の上にあり、二二 實に人の子は、定められたる如く逝くなり。然れど之をうる者は禍害なるかな』二三 弟子たち己らの中にて此の事をなす者は、誰ならんと互に問ひ始む。

二四 また彼らの間に己らの中たれか大ならんとの爭論おこりたれば、二五 イエス言ひたまふ『異邦人の王は、その民を宰どり、また民を支配する者は、恩人と稱へらる。二六 然れど汝らは然あらざれ、汝等のうち大なる者は若き者のごとく、頭たる者は事ふる者の如くなれ。二七 食事の席に著く者と事ふる者とは、何れか大なる。食事の席に著く者ならずや、然れど我は汝らの中にて事ふる者のごとし。二八 汝らは我が嘗試のうちに絶えず我とともに居りし者なれば、二九 わが父の我に任じ給へるごとく、我も亦なんぢらに國を任ず。三〇 これ汝らの我が國にて我が食卓に飲食し、かつ座位に坐してイスラエルの十二の族を審かん爲なり。三一 シモン、シモン、視よ、サタン汝らを麥のごとく篩はんとて請ひ得たり。三二 然れど我なんぢの爲にその信仰の失せぬやうに祈りたり、なんぢ立ち歸りてのち兄弟たちを堅うせよ』三三 シモン言ふ『主よ、我は汝とともに獄にまでも、死にまでも往かんと覺悟せり』三四 イエス言ひ給ふ『ペテロよ我なんぢに告ぐ、今日なんぢ三度われを知らずと否むまでは雞鳴かざるべし』

イ 太二六・二九 可一　一三・一八—二六　使三・六 來八・八　四・六
四・二五　ト 路二二・四二二　ル 二五—二七 太二〇
ロ 路二二・一七　二四・八 耶三一・　チ 使一・二三、四・二　二五—二八 可一　タ 來二・一八、四・一
ハ 約六・五一　三一—三四）　八、一〇・四二、一　〇・四二—四五　ヨ（太二〇・二八）
ニ 太二六・二八 可一　ヘ 二一—二三 太二六　七・三二　レ（太五・三 羅後二・
四・二四　・二一—二四 可一　リ 路二二・四二一　ヲ 路九・四八　ネ 使二六・七 雅一・一
ホ 哥創一一・二五 哥　四・一八—二一（約　ヌ 可九・三四 路九・　〇・二〇・三六、二　ワ 後創五・五　ナ 太四・二〇を見よ
一二・一—一三）　ソ 路二二・一六を見よ　（伯一・六—一二、
ツ 太一九・二八、二五　ム（約一七・九・一五）　二・一—六）
ラ 際九・九
ウ（約二一・一五—一七）
ノ 哥二二・六—一
ヰ 使三三・三四 太二六
・三二—三五 可一
四・二九—三一 約
一三・三七—三八

オ 太一〇・九、一〇 可六・八、九 路九・三、一〇・四　五二 使二・二　ケ 路二二・三六を見よ　・二六—四六 可一
ク 太二六・四七、五一、五二・五五 可一四　來一・三七 歌二　フ（太二六・三〇 可一四・二六 約一八　四・三二—四二　彼前
・四三、四七、四八　ヤ 賽五三・二二　・二、一九・二二　ア 路二二・四六 使前　ヒ 路二二・四〇
路二二・三八、四九、　マ（約一七・四、一九・三〇）　コ（路二一・三七）　四・七（太六・一二）　キ 太二〇・二二を見よ　モ 四七—五三 太二六
エ 太二一・一を見よ　サ 使七・六〇、九・四　一四・三五 路一八、一四　ユ 太二六・三九を見よ　・四七—五六 可一
テ 四〇—四六 太二六　一・五 弗三・二四　メ 太六・一〇を見よ　・四四三—五〇 約
ミ 太四・一一 來一・　シ（來五・七）
ス（路二二・四）
イ 路二二・三六を見よ
ロ 約一八・一〇
セ 路二二・三
一八・三—一二

三五 斯て弟子たちに言ひ給ふ『財布・囊・鞋をも持たせずして、汝らを遣ししとき、缺けたる所ありしや』彼ら言ふ『無かりき』三六 イエス言ひ給ふ『されど今は財布ある者は之を取れ、囊ある者も然すべし。また劍なき者は衣を賣りて劍を買へ。三七 われ汝らに告ぐ「かれは愆人と共に數へられたり」と錄されたるは、我が身に成遂げらるべし。凡そ我に係はる事は成遂げらるればなり』三八 弟子たち言ふ『主、見たまへ、茲に劍二振あり』イエス言ひたまふ『足れり』

三九 遂に出でて常のごとく、オリブ山に往き給へば、弟子たちも從ふ。四〇 其處に至りて彼らに言ひたまふ『誘惑に入らぬやうに祈れ』四一 斯て自らは石の投げらるる程かれらより隔たり、跪づきて祈り言ひたまふ、四二『父よ、御旨ならば、此の酒杯を我より取り去りたまへ、然れど我が意にあらずして御意の成らんことを願ふ』四三 時に天より御使、現れて、イエスに力を添ふ。四四 イエス悲しみ迫り、いよいよ切に祈り給へば、汗は地上に落つる血の雫の如し。四五 祈を了へ、起ちて弟子たちの許にきたり、その憂によりて眠れるを見て言ひたまふ、四六『なんぞ眠るか、起て誘惑に入らぬやうに祈れ』四七 なほ語りゐ給ふとき、視よ、群衆あらはれ、十二の一人なるユダ先だち來り、イエスに接吻せんとて近寄りたれば、四八 イエス言ひ給ふ『ユダ、なんぢは接吻をもて人の子を賣るか』四九 御側に居る者ども事の及ばんとするを見て言ふ『主よ、われら劍をもて擊つべきか』五〇 その中の一人、大祭司の僕を擊ちて、右の耳を切り落せり。五一 イエス答へて言ひたまふ『之にてゆるせ』而して僕の耳に手をつけて醫し給

五二 ふ。五三 かくて己に向ひて來れる祭司長・宮守頭・長老らに言ひ給ふ『なんぢら强盜に向ふごとく劍と棒とを持ち
五三 て出できたるか。五三 我は日々なんぢらと共に宮に居りしに我が上に手を伸べざりき。然れど今は汝らの時、また
暗黑の權威なり』

五四 五四 遂に人々イエスを捕へて、大祭司の家に曳きゆく、ペテロ遠く離れて從ふ。五五 人々、中庭のうちに火を焚
五六 きて、諸共に坐したれば、ペテロもその中に坐す。五六 或る婢女ペテロの火の光を受けて坐し居るを見、これに目
五七 五八 を注ぎて言ふ『この人も彼と偕にゐたり』五七 ペテロ肯はずして言ふ『をんなよ、我は彼を知らず』五八 暫くして他
五九 の者ペテロを見て言ふ『なんぢも彼の黨與なり』ペテロ言ふ『人よ、然らず』五九 一時ばかりして又ほかの男、言ひ
六〇 張りて言ふ『まさしく此の人も彼とともに在りき、是ガリラヤ人なり』六〇 ペテロ言ふ『人よ、我なんぢの言ふこ
六一 とを知らず』なほ言ひ終へぬに頓て雞鳴きぬ。六一 主、振反りてペテロに目をとめ給ふ。ここにペテロ主の『今日
六二 にはとり鳴く前に、なんぢ三度われを否まん』と言ひ給ひし御言を憶ひいだし、六二 外に出でて甚く泣けり。
六三 六四 守る者どもイエスを嘲弄し、之を打ち、六四 その目を蔽ひ問ひて言ふ『預言せよ、汝を擊ちし者は誰なる
六五 か』六五 この他なほ多くのことを言ひて、譏れり。

六六 六六 夜明になりて民の長老・祭司長・學者ら相集り、イエスをその議會に曳き出して言ふ、六七『なんぢ若しキリ
六七 六八 ストならば、我らに言へ』イエス言ひ給ふ『われ言ふとも汝ら信ぜじ、六八 又われ問ふとも汝ら答へじ。六九 然れど
六九 七〇 人の子は今よりのち神の能力の右に坐せん』七〇 皆いふ『されば汝は神の子なるか』答へ給ふ『なんぢらの言ふご
とく我はそれなり』七一 彼ら言ふ『何ぞなほ他に證據を求めんや。我ら自らその口より聞けり』

第二三章

二 一 民衆みな起ちて、イエスをピラトの前に曳きゆき、二 訴へ出でて言ふ『われら此の人が、わが國
三 の民を惑し、貢をカイザルに納むるを禁じ、かつ自ら王なるキリストと稱ふるを認めたり』三 ピラ
四 ト、イエスに問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』答へて言ひ給ふ『なんぢの言ふが如し』四 ピラト祭司
五 長らと群衆とに言ふ『われ此の人に愆あるを見ず』五 彼等ますます言ひ募り『かれはユダヤ全國に敎をなして民
六 を騷がし、ガリラヤより始めて、此處に至る』と言ふ。六 ピラト之を聞き、そのガリラヤ人なるかを問ひて、
七 八 ヘロデの權下の者なるを知り、ヘロデ此の頃エルサレムに居たれば、イエスをその許に送れり。八 ヘロデ、イ
七 エスを見て甚く喜ぶ。これは彼に就きて聞く所ありたれば、久しく逢はんことを欲し、何をか徵を行ふを見んと
一〇 九 望み居たる故なり。九 斯て多くの言をもて問ひたれど、イエス何をも答へ給はず。一〇 祭司長・學者ら起ちて激甚
一一 くイエスを訴ふ。一一 ヘロデその兵卒と共にイエスを侮り、かつ嘲弄し、華美なる衣を著せて、ピラトに返す。
一二 一二 ヘロデとピラトと前には仇たりしが、此の日たがひに親しくなれり。

一三 一三 ピラト、祭司長らと司らと民とを呼び集めて言ふ、一四『汝らこの人を民を惑す者として曳き來れり。視よ、
一五 われ汝らの前にて訊したれど、其の訴ふる所に就きて、この人に愆あるを見ず。一五 ヘロデも亦然り、彼を我らに
一六 一八 返したり。視よ、彼は死に當るべき業を爲さざりき。一六 然れば懲しめて之を赦さん』〔一七〕 一八 民衆ともに叫びて

一九 言ふ『この人を除け、我らにバラバを赦せ』一九此のバラバは都に起りし一揆と殺人との故によりて獄に入れられ
二〇 たる者なり。二〇ピラトはイエスを赦さんと欲して、再び彼らに告げたれど、二一彼ら叫びて『十字架につけよ、
二二 十字架につけよ』と言ふ。二二ピラト三度まで『彼は何の惡事を爲ししか、我その死に當るべき業を見ず、故に
二三 懲しめて赦さん』と言ふ。二三されど人々、大聲をあげ迫りて、十字架につけんことを求めたれば、遂にその聲
二四 勝てり。二四爰にピラトその求のごとく爲べしと言ひわたし、二五その求むる隨にかの一揆と殺人との故によりて、
二五 獄に入れられたる者を赦し、イエスを付して彼らの心の隨ならしめたり。
二六 二六人々イエスを曳きゆく時、シモンといふクレネ人の田舍より來るを執へ、十字架を負はせてイエスの後に
從はしむ。
二七 二七民の大なる群と歎き悲しめる女たちの群と之に從ふ。二八イエス振反りて女たちに言ひ給ふ『エルサレムの
二八 娘よ、わが爲に泣くな、ただ己がため、己が子のために泣け。二九視よ「石婦・兒產まぬ腹・飲ませぬ乳は幸福な
二九 り」と言ふ日きたらん。三〇その時ひとびと「山に向ひて我らの上に倒れよ、岡に向ひて我らを掩へ」と言ひ出で
三〇 ん。三一もし青樹に斯く爲さば、枯樹は如何にせられん』
三一 三二また他に二人の惡人をも、死罪に行はんとてイエスと共に曳きゆく。
三二 三三髑髏といふ處に到りて、イエスを十字架につけ、また惡人の一人をその右、一人をその左に十字架につ
三三 く。三四斯てイエス言ひたまふ『父よ、彼らを赦し給へ。その爲す所を知らざればなり』彼らイエスの衣を分ちて
三四

未約一九・二四
ナ路二三・一三を見よ
ラ(太二七・四三　路二三・三七・三九)
ム太一・二七を見よ
ウ太二七・四八を見よ
井(路二三・三六)
ノ太二二・二を見よ
オ(太二七・三七　可一五・六　約一九
ケ哥後一二・四　默二・七(銅二・八)
ク三九—四三(太二)　フ四四—四九　太二七
七・四四　可一五・四・五・三三—四一
ヤ(路二三・三六)
マ(路二三・二二)
コ(約一九・二四)
エ太二七・五一を見よ
テ太二七・五〇　可一五・三七　(約一九・三〇)
サ太九・八を見よ
キ路一八・三三
ユ(太二七・五五、五六　可一五・四〇、四一　約一九・路八・二三、二三・二七・五五　約一九
メ詩三八・一一
ミ五〇—五六　太二七・五七—六一　可一五・四二—四七　約一九・三八—四二
ヘ路二三・二六
ト路二三・一九
チ約一九・二六
リ二六　太二七・三二　可一五・二一(約一九・二六)
ヌ太二七・三二を見よ
ル(路二三・四九)
ヲ王下一九・一一　箴一・五、二・七　箴
ワ太二四・一九　可一三・五・四・一　路二・一三
カ路一七・二二を見よ
ヨ何一〇・八　默六・一六(箴二・一九—二一)
タ結二〇・四七(箴一一・三一　彼前四・一七)
レ太二七・三八　可一五・二七　約一九・二一
ソ三三—四三　太二七三・四四　可一五・三二・三四　約一九・一七—二四
ツ太一一・二五を見よ
ネ路二三・二六
ナ路二三・一三を見よ
ラ(太二七・四三　路二三・三七・三九)
ム太一・二七を見よ
ウ太二七・四八を見よ
井(路二三・三六)
ノ太二二・二を見よ
オ(太二七・三七　可一五・六　約一九
ケ哥後一二・四　默二・七(銅二・八)
ク三九—四三(太二)　フ四四—四九　太二七
七・四四　可一五・四・五・三三—四一
ヤ(路二三・三六)
マ(路二三・二二)
コ(約一九・二四)
エ太二七・五一を見よ
テ太二七・五〇　可一五・三七　(約一九・三〇)
サ太九・八を見よ
キ路一八・三三
ユ(太二七・五五、五六　可一五・四〇、四一　約一九・路八・二三、二三・二七・五五　約一九
メ詩三八・一一
ミ五〇—五六　太二七・五七—六一　可一五・四二—四七　約一九・三八—四二
ヘ路二三・二六
ト路二三・一九
チ約一九・二六
リ二六　太二七・三二　可一五・二一(約一九・二六)
ヌ太二七・三二を見よ
ル(路二三・四九)
ヲ王下一九・一一　箴一・五、二・七　箴
ワ太二四・一九　可一三・五・四・一　路二・一三
カ路一七・二二を見よ
ヨ何一〇・八　默六・一六(箴二・一九—二一)
タ結二〇・四七(箴一一・三一　彼前四・一七)
レ太二七・三八　可一五・二七　約一九・二一
ソ三三—四三　太二七三・四四　可一五・三二・三四　約一九・一七—二四
ツ太一一・二五を見よ
ネ路二三・二六

三五 闊取にせり、三五民は立ちて見ゐたり。司たちも嘲りて言ふ『かれは他人を救へり、若し神の選び給ひしキリスト
三六 ならば己をも救へかし』三六兵卒どもも嘲弄しつつ近よりて酸き葡萄酒をさし出して言ふ、三七『なんぢ若しユダヤ人
三七 の王ならば、己を救へ』三八又イエスの上には『此はユダヤ人の王なり』との罪標あり。
三八 三九十字架に懸けられたる惡人の一人、イエスを譏りて言ふ『なんぢはキリストならずや、己と我らとを救
三九 へ』四〇他の者これに答へ禁めて言ふ『なんぢ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。四一我らは爲し事の報
四〇 を受くるなれば當然なり。然れど此の人は何の不善をも爲さざりき』四二また言ふ『イエスよ、御國に入り給ふと
四一 き、我を憶えたまへ』四三イエス言ひ給ふ『われ誠に汝に告ぐ、今日なんぢは我と偕にパラダイスに在るべし』
四二 四四晝の十二時ごろ、日、光をうしなひ、地のうへ徧く暗くなりて、三時に及び、四五聖所の幕、眞中より裂け
四三 たり。四六イエス大聲に呼はりて言ひたまふ『父よ、わが靈を御手にゆだぬ』斯く言ひて息絕えたまふ。四七百卒長
四四 この有りし事を見て、神を崇めて言ふ『實にこの人は義人なりき』四八これを見んとて集りたる群衆も、ありし事
四五 どもを見てみな胸を打ちつつ歸れり。四九凡てイエスの相識の者およびガリラヤより從ひ來れる女たちも遙に立ち
四六 て此等のことを見たり。
四七 五〇議員にして善かつ義なるヨセフといふ人あり。五一——この人はかの評議と仕業とに與せざりき——ユダヤ
四八 の町なるアリマタヤの者にて、神の國を待ちのぞめり。五二此の人ピラトの許にゆき、イエスの屍體を乞ひ、五三こ
四九 五〇 五一 五二 五三

五四 れを取りおろし亞麻布にて包み、巖に鑿りたる、未だ人を葬りし事なき墓に納めたり。五四この日は準備日なり、か
五五 つ安息日近づきぬ。五五ガリラヤよりイエスと共に來りし女たち後に從ひ、その墓と屍體の納められたる樣とを
五六 見、五六歸りて香料と香油とを備ふ。

斯て誡命に遵ひて、安息日を休みたり。

二一 **第二四章** 一週の初の日、朝まだき、女たち備へたる香料を携へて墓にゆく。二然るに石の既に墓より轉ば
四三 し除けあるを見、三内に入りたるに主イエスの屍體を見ず、四これが爲に狼狽へをりしに、視よ、
五 輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。五女たち懼れて面を地に伏せたれば、その二人の者いふ『なんぞ
六 死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか、六彼は此處に在さず、甦へり給へり。尙ガリラヤに居給へるとき、
七 如何に語り給ひしかを憶ひ出でよ。七即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日
九八 めに甦へるべし」と言ひ給へり』八爰に彼らその御言を憶ひ出で、九墓より歸りて、凡て此等のことを十一弟子
一〇 および凡て他の弟子たちに告ぐ。一〇この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して
一一 彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。一一使徒たちは其の言を妄語と思ひて、信ぜず。一二
一二 *〔ペテロは起ちて墓に走りゆき、屈みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ歸れり〕
一四三 一三視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオといふ村に往きつつ、一四凡て有
一五 りし事どもを互に語りあふ、一五語り、かつ論じあふ程に、イエス自ら近づきて共に往き給ふ。一六されど彼らの

イ路二四・一・二　ロ箏五三・九　ハ太二七・六・二を見よ　ニ路二三・四九　ホ可一六・一を見よ　ヘ出二〇・一〇　申五・二四　ト一一・一〇　太二八・一八　可一六・二　チ路二三・五六　リ太二七・六〇　可一五・四六、一六・三、四（約一・三八）　ヌ徒一・二一　ル路二四・二三　ヲ（約二〇・一二）　ワ路一・一、二・九　徒一・一〇、一〇・　カ太二八・六　可一六・六　タ路二四・二一　レ約二・二二　ソ太二七・五六　可一五・四〇　ツ路八・三　ネ（可一六・三〇）　ナ可一六・一一を見よ　ラ約二〇・三—六　ム路二三・五三　約一・九・四〇　ウ可一六・一二

一七 日遮へられてイエスたるを認むること能はず。一七イエス彼らに言ひ給ふ『なんぢら歩みつつ互に語りあふ言は何
一八 ぞや』かれら悲しげなる狀にて立ち止り、一八その一人なるクレオパと名づくるもの答へて言ふ『なんぢエルサレ
一九 ムに寓り居て獨り此の頃かしこに起りし事どもを知らぬか』一九イエス言ひ給ふ『如何なる事ぞ』答へて言ふ『ナ
二〇 ザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて業にも言にも能力ある預言者なりしに、二〇祭司長ら及び我
二一 が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。二一我等はイスラエルを贖ふべき者は、この人なり
二二 と望みゐたり、然のみならず此の事の有りしより、今日ははや三日めなるが、二二なほ我等のうちの或女たち、我
二三 らを驚かせり、即ち彼ら朝夙く墓に往きたるに、二三屍體を見ずして歸り、かつ御使たち現れてイエスは活き給ふ
二四 と告げたりと言ふ。二四我らの朋輩の數人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言ひし如くにしてイエスを見
二五 二六 ざりき』二五イエス言ひ給ふ『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。二六キリスト
二七 は必ず此らの苦難を受けて、其の榮光に入るべきならずや』二七斯てモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就き
二八 て凡ての聖書に錄したる所を說き示したまふ。二八遂に往く所の村に近づきしに、イエスなほ進みゆく樣なれば、
二九 二九強ひて止めて言ふ『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたまふ。三〇共
三〇 三一 に食事の席に著きたまふ時、パンを取りて祝し、擘きて與へ給へば、三一彼らの目開けてイエスなるを認む、而し
三二 てイエス見えずなり給ふ。三二かれら互に言ふ『途にて我らと語り我らに聖書を說明し給へるとき、我らの心、內

井（路九・四五、一八、約三・四、二四・三一、約二〇・一四、二一・四）　ヤ太二二・一一を見よ　マ路二二・一三を見よ　ケ徒二・二三、五・三、ノ約一・九・二五　オ可一・二四を見よ　グ徒二・二二（徒七・一）　コ路二四・七　エ路二四・一〇　テ路二四・一　ア路二四・三　サ路二四・四—七　キ太二六・二四を見よ　ユ太一・一七を見よ　メ路二四・七、四四（徒三・一八、來二・一〇、彼前一・一）　ミ創三・一五、一二・一、二・三、民二一・九　ヌ徒一・二一　ル路二四・二三　ヲ（約二〇・一二）　ワ路一・一、二・九　徒一・一〇、一〇・　ヨ太一六・二一を見よ　路九・四四、二日・五・四〇　タ路二四・二一　レ約二・二二　ソ太二七・五六　可一五・四〇　ツ路八・三　ネ（可一六・三〇）　ナ可一六・一一を見よ　ラ約二〇・三—六　ム路二三・五三　約一・九・四〇　ウ可一六・一二　（約三・四）　ヰ一八・一五（約一・四八・一五、約五・四六）　ノ（母後七・一二—一六、黎七・一四（太一・二三）九・一二（太四・一五一六）　ヒ太一四・一九を見よ　來二・一〇、彼前一・一　シ創三・一五、一二・一、二・三、民二一・九　ス路二四・四五　（約二・一五）　ヤ太二二・一一を見よ　マ路二二・一三を見よ　ケ徒二・二三、五・三　ア路二四・一　サ路二四・四—七　ユ路二四・七を見よ　メ路二四・七、四四（徒三・一八、來二・一〇、彼前一・一）　ミ創三・一五、一二・一、二・三、民二一・九　ヌ徒一・二一　ル路二四・二三　ヲ（約二〇・一二）　ワ路一・一、二・九　徒一・一〇、一〇・　ヨ太一六・二一を見よ　路九・四四、二日・五・四〇　タ路二四・二一　レ約二・二二　ソ太二七・五六　可一五・四〇　ツ路八・三　ネ（可一六・三〇）　ナ可一六・一一を見よ　ラ約二〇・三—六　ム路二三・五三　約一・九・四〇　ウ可一六・一二　（約一・四八）　ヒ太一四・一九を見よ　來二・一〇　彼前一・一　ス路二四・四五　（約一・四八）　ヒ太一四・一九を見よ　來二・一〇　彼前一・一　シ（母後七・一二—一六、黎七・一四（太一・二三）九・一二（太四・一五一六）　ス路二四・四五　（約三・四）　ヰ一八・一五（約一・四八・一五、約五・四六）　ヒ太一四・一九を見よ　來二・一〇　彼前一・一　シ創三・一五、一二・一、二・三、民二一・九　ス路二四・四五　（約三・四）　ヰ一八・一五（約一・四八・一五、約五・四六）　ヒ太一四・一九を見よ　來二・一〇　彼前一・一　シ（母後七・一二—一六、黎七・一四（太一・二三）九・一二（太四・一五一六）　ス路二四・四五　（約三・四）　ヰ一八・一五（約一・四八・一五、約五・四六）　ヒ太一四・一九を見よ　來二・一〇　彼前一・一　シ（母後七・一二—一六、黎七・一四（太一・二三）九・一二（太四・一五一六）　ス路二四・四五

三三 に燃えしならずや』三三斯て直ちに立ちエルサレムに歸りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言
三四 ふ、三四『主は實に甦へりて、シモンに現れ給へり』三五二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給ふによりて
三六 イエスを認めし事とを述ぶ。三六此等のことを語る程に、イエスその中に立ち「『平安なんぢらに在れ』と言ひ」給
三七 ふ。三七かれら怖ぢ懼れて見る所のものを靈ならんと思ひしに、三八イエス言ひ給ふ『なんぢら何ぞ心騷ぐか、何ゆ
三九 ゑ心に疑惑おこるか、三九我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、靈には肉と骨となし、我にはあ
四〇 り、汝らの見るごとし』四〇〔*斯く言ひて手と足とを示し給ふ〕四一かれら歡喜の餘に信ぜずして怪しめる時、イエス
四二 言ひたまふ『此處に何か食物あるか』四二かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、四三之を取り、その前にて食し給
四三 へり。

四四 四四また言ひ給ふ『これらの事は我がなほ汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者およ
四五 び詩篇に錄されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』四五爰に聖書を悟らしめんとて、彼らの心を
四六 開きて言ひ給ふ、四六『かく錄されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦へり、四七且その名に
四八 よりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの國人に宣傳へらるべしと。四八汝らは此等の
四九 ことの證人なり。四九視よ、我は父の約し給へるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に
留れ』

イ可一六・一三　ロ(徒一・一四)　ハ路二四・六を見よ　ニ哥前一・五・五　ホ路二四・三〇　ヘ路二四・三一　ト可一六・一四　チ約二〇・一九、二一、ワ哥二四・一を見よ　リ(太一四・二六　可六・四九)　ヌ約二〇・二〇、二七　ル約豊一・一(約二〇・二七)　ヲ路二四・三九　カ約二一・五　ヨ徒一〇・四一　タ路九・二二、四四、四五、一八・三一—三四、二二・三七　レ路二四・二七を見よ　ソ路二四・二七を見よ　ツ詩二・(徒一・三・三)　一六・(徒二・二七)　二二・(太二七・三日—四六)　ネ路二四・三二(徒一・六・一四)　ナ太一・一七を見よ　ラ路二四・二六を見よ　ム路二四・七　ウ徒五・三一、一〇・四三、一三・三八、一九・二八、二〇)　ヰ太二八・一九　ノ約一五・二七(徒一・八)　オ約一四・二六(徒一・ク徒一・四)　ヤ太二一・一七を見よ(徒一・二)　マ哥前二・八　ケ可一六・一九を見よ

五〇 遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を擧げて之を祝したまふ。五一祝する間に、彼らを離れ「*天に擧
五二 げられ」給ふ。五二彼ら「之を拜し」大なる歡喜をもてエルサレムに歸り、五三常に宮に在りて、神を讃めゐたり。

ルカ傳福音書　をはり

一・一 或は「篤く信ぜられたる事」と譯す。
一・二八 異本「なんぢは女のうちにて惠まるる者なり」との句なし。
一・五一 或は「高ぶる者をその心の企圖にて散らし」と譯す。
二・一四 異本「いと高き處には榮光、神に、地には平和、人には惠あれ」とあり。
二・三六 或は「七年ともにをりて寡婦となり今は八十四歳なり」と譯す。
二・四九 或は「我が父の事を務むべきを知らぬか」と譯す。
二・五二 或は「齡」と譯す。
四・四四 異本「ガリラヤ」とあり。
五・一〇 直譯「生捕らん」
六・一六 或は「兄弟」と譯す。
六・一一 或は「木屑」と譯す。
七・一 異本「たゞに御言を賜へ、さらば我が僕は癒えん」とあり。
七・七 或は「ぜられたり」と譯す。
七・三五 或は「久しく」と譯す。
八・二九 異本「醫者の爲に己が身代を悉く費したれども」の句なし。
八・四三 異本「及び共になるものども」の句なし。
八・四五 或は「聲やみし」と譯す。
九・三六 或は「諸異本「エリヤの爲しし如く」の句あり。
九・五四 異本「戒めて言ひ給ふ、汝らはおのが心の如何なるかを知らぬなり。人の子は、人の生命を亡さんとにあらで、之を救はんとて來れり」の句あり。
九・五五 異本「多からず」の句なし。
一〇・四二 異本「御心の天のごとく地にも行はれんことを」との句あり。
一一・三 異本「惡より救ひ出したまへ」の句あり。
一一・四 異本「子と魚との間に「パンを求めんに、石を與へ」の句あり。
一一・一一 或は「ひろげ」と譯す。
一一・三七 或は「生命」と譯す。
一一・一九 或は「その生命を寸陰も延べ得んや」と譯す。
一一・二五 或は「野の花」と譯す。
一一・二七 異本「神の國」とあり。
一一・三一 或は「知る」と譯す。
一一・三九 烈しく笞うち、或は「挽き斬り」と譯す。
一一・四六 或は「われ何をか望まん、此の火の既に燃えたらんことなり」と譯す。
一二・四九 異本「驢馬」とあり。
一四・五 原語「スカミノ」
一七・六 異本「二人の男畑に居らんに、一人は取られ、一人は遺されん」との句あり。
一七・三六 或は「元驢」と譯す。
一七・三七 或は「我が家」と譯す。
一八・二八 原語「スカモラ」
一九・四 一ミナは凡そ我が三十二圓に當る。
一九・一三 或は「生命」と譯す。
一九・一九 異本「かれは祭毎に必ず一人を赦すべきなり」との句あり。
二一・一二 異本十二節を缺く。
二一・三六 異本この句を缺く。
二四・一二 異本四十節を缺く。
二四・三六 異本この句を缺く。
二四・四〇 異本この句を缺く。
二四・五一

ヨハネ傳福音書

第一章

一 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。二 この言は太初に神とともに在り、三 萬の物
四 これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。四 之に生命あり、この
五 生命は人の光なりき。五 光は暗黑に照る、而して暗黑は之を悟らざりき。六 神より遣されたる人いでたり、その
六 名をヨハネといふ。七 この人は證のために來れり、光に就きて證をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん爲な
七 り。八 彼は光にあらず、光に就きて證せん爲に來れるなり。
八 九 もろもろの人をてらす眞の光ありて、世にきたれり。一〇 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は
九 彼を知らざりき。一一 かれは己の國にきたりしに、己の民は之を受けざりき。一二 されど之を受けし者、即ちその名
一〇 を信ぜし者には、神の子となる權をあたへ給へり。一三 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によら
一一 ず、ただ神によりて生れしなり。一四 言は肉體となりて我らの中に宿りたまへり、我らその榮光を見たり、實に父
一二 の獨子の榮光にして恩惠と眞理とにて滿てり。一五 ヨハネ彼につきて證をなし、呼はりて言ふ『わが後にきたる者
一三 は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我が曾ていへるは此の人なり』一六 我らは皆その充ち滿ちたる中よ

イ 創一・一（西一・一七　ホ 約一・一〇　琴創八・四　加三・二六）　チ（約三・一九）　タ（約一・五二　加三　ツ（羅一・三　加四・四
約壹一・一）　ヘ 約五・二六　一二・四六　リ 太三・一一　ヌ 約一・一五、一九、三　ワ 約壹二・八　ヨ 約一・七を見よ　約　腓二・七、八　撒前三
ロ 約一・一四　默一九　一・二一　二、五・一（約一七　二、三・二六、五　カ 約一・三　約壹二・九、　約壹一・一二、四　ラ 約一・一七　羅五・
一・一三　約壹一・二（約一七　一・二五、一四・六）　約壹一　二、三・二六、五　約壹二・一、四　二・一、六・一四　ム 約八・三二、一四・
ハ 約壹一・五）　ト 約八・二二、九五、　ル（約一・一二　使一九　三・三三　三・一八　五・一三　約壹三・　約貳七）　オ 弗一・二三、三・一
ニ（詩二・六）　約一・二五　約壹一・一六　約壹　チ 約二・一八、二〇、　三・一、三三等　ヲ 約一・一四、一　シ 太三・一一　可一・八　セ（約一・三五、四三）　ス 約壹三・五（太一・　ロ 約一・一五を見よ
四・二二　五・一〇、一五、一　二・二、一〇・二四、　六・一四）　ユ（太一・一四、一　路三・一六　使一・五　二一）　ヱ 約一・一五を見よ　ハ 約一・一五

ク 約七・一九　ヤ 約一・四を見よ　マ 約一・二日を見よ　ケ 出三三・二〇　約六・四六　西一・一五　エ（約三・一一）　撒前六・一六　約壹　チ 約二・一八、二〇、　五・一〇、一五、一　フ（詩一六・二二）　約一三・二三）　コ 約三・一六、一八　約壹四・九　六・一八、六・四一、五二・一七・一一・一、　ア（太一五・一）　サ 約一・七　一三・一五、三五、八・二二、四八、五　一・五、一六　ミ 黎四〇・三　太三・三　モ 約三・二六、四〇　路三・　約三・二八　可一・三　路三・四　ヒ 可一・七　路三・一六　イ 撒五三・七　約一・三　六　使八・三二（彼　前一・一九　默五・　六、八、二二、一三、　約一・二五　約一・二五（太二一　（太三・一一）　一〇　二、五七、九・一八、　ユ（太一・一四、一　シ 太三・一一　可一・八　セ（約一・三五、四三）　ス 約壹三・五（太一・　ロ 約一・一五を見よ　ハ 約一・一五　二・約一・七

一七・一八　一九　二〇　二一　二二　二三　二四　二五　二六　二七　二八　二九　三〇　三一　三二

り受けて、恩惠に恩惠を加へらる。一七 律法はモーセによりて與へられ、恩惠と眞理とはイエス・キリストにより
て來れるなり。一八 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます獨子の神のみ之を顯し給へり。
一九 一九 さてユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して『なんぢは誰なるか』と問はせし
二〇 時、ヨハネの證は斯のごとし。二〇 乃ち言ひあらはして諱まず『我はキリストにあらず』と言ひあらはせり。二一 また
二一 問ふ『さらば何、エリヤなるか』答ふ『然らず』問ふ『かの預言者なるか』答ふ『いな』二二 ここに彼ら言ふ『な
二二 んぢは誰なるか、我らを遣しし人々に答へ得るやうに爲よ、なんぢ己につきて何と言ふか』二三 答へて言ふ『我は
二三 預言者イザヤの云へるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼はる者の聲」なり』二四 かの遣されたる者は、パリ
二四 サイ人なりき。二五 また問ひて言ふ『なんぢ若しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、何故
二五 バプテスマを施すか』二六 ヨハネ答へて言ふ『我は水にてバプテスマを施す。なんぢらの中に汝らの知らぬもの
二六 一人たてり。二七 即ち我が後にきたる者なり、我はその鞋の紐を解くにも足らず』二八 これらの事は、ヨハネのバプ
二七 テスマを施しゐたりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。
二八 二九 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給ふを見ていふ『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。三〇 われ
二九 曾て「わが後に來る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云ひしは、此の人なり。三一 我もと彼を
三〇 知らざりき。然れど彼のイスラエルに顯れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』三二 ヨハネまた證

三三 をなして言ふ『われ見しに御靈、鴿のごとく天より降りて、その上に止れり。三三 我もと彼を知らざりき。然れど
我を遣し、水にてバプテスマを施させ給ふもの、我に告げて「なんぢ御靈くだりて或人の上に止るを見ん、これ
三四 ぞ聖靈にてバプテスマを施す者なる」といひ給へり。三四 われ之を見て、その神の子たるを證せしなり』
三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八
三五 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、三六 イエスの歩み給ふを見ていふ『視よ、これぞ神の羔羊』
三七 かく語るをききて二人の弟子イエスに從ひゆきたれば、三八 イエス振反りて、その從ひきたるを見て言ひたまふ
『何を求むるか』彼等いふ『ラビ（釋きていへば師）いづこに留り給ふか』三九 イエス言ひ給ふ『きたれ、然らば
見ん』彼ら往きてその留りたまふ所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。四〇 ヨハネより聞きてイ
エスに從ひし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。四一 この人まづ其の兄弟シモンに遇ひ『わ
れらメシヤ（釋けばキリスト）に遇へり』と言ひて、四二 彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を注めて
言ひ給ふ『なんぢはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（釋けばペテロ）と稱へらるべし』
四三 明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあひて言ひ給ふ『われに從へ』四四 ピリポはアンデレと
ペテロとの町なるベツサイダの人なり。四五 ピリポ、ナタナエルに遇ひて言ふ『我らはモーセが律法に錄ししとこ
ろ、預言者たちが錄しし所の者に遇へり、ヨセフの子ナザレのイエスなり』四六 ナタナエル言ふ『ナザレより何の
善き者かいづべき』ピリポいふ『來りて見よ』四七 イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言ひ
たまふ『視よ、これ眞にイスラエル人なり、その衷に虛僞なし』四八 ナタナエル言ふ『如何して我を知り給ふか』

イ 太三・一六　可一・一〇　路三・二二　ロ 太三・一一　可一・八　路三・一六　徒一・五　ハ 太四・三を見よ　約ト 四〇—四二（太四・
一八—二二　可一・一七を太一・一七を見よ　路五・一一　ニ 約二・一五—一七　ホ 約一・二九、四三　ヘ 太二三・七を見よ　チ 使九・二五　約四・
二六　路一・一　ヌ 約二・一　ル 哥前一・二、三・　カ 太四・一一　約一・二八　ヨ 太一・一七を見よ　タ 太一・一八　ワ（約一・九、三五）　カ 太四・一一　約一・
二八　レ 太一・一一を見よ　ヨ 太一〇・三　約六・　ソ 約二・一一　五、七、一二・一八、　ツ 路二四・二七を見よ　ネ 路二四・二七　ナ 太二・二三
二二、一四・八、九　ラ 路二四・二七を見よ　ム（約七・四一、五二）　ウ（羅九・四）　約六

一・四九　路三・二一　徒七・五　ノ 約一・三四　オ 太二七・四二　可一　五・三二　約一・三・　一三（太一・二）　ク 約三・三を見よ　ヤ 結一・一　太三・一六　路三・二一　徒七・五　六、一〇・一一　默　一九・一　マ 太八・二〇を見よ　ケ 創二八・一二　フ 約一・二九、三五、四三　コ 約二・一一、四・四　六、二一・二　エ 太一・一一・四六を見よ　チ 約一・四〇—四九、二・一二、一七、二　ア 約一・一九・二六　ヌ 約一・一二　ル 哥前一・二、三・　カ 太四・一一　約一・二八　ヨ 太一・一七を見よ　タ 太一・一八　ワ（約一・九、三五）　カ 太四・一一　約一・
二八　レ 太一・一一を見よ　ヨ 太一〇・三　約六・　ソ 約二・一一　五、七、一二・一八、　ツ 路二四・二七を見よ　ネ 路二四・二七　ナ 太二・二三
二二、一四・八、九　ラ 路二四・二七を見よ　ム（約七・四一、五二）　ウ（羅九・四）　約六

三三、六、八、一二、ユ（詩七・三、四　約三・二五）　メ 約四・四六　ミ 太二四・四九　路一・二四・五　徒二・一　三、一五　哥前一一　ス 太四・一三を見よ　八・二〇、ユ（詩七・三、四　約三・二五）　メ 約四・四六　ミ 太二四・四九　路一・二四・五　徒二・一　三、一五　哥前一一　ス 太四・一三を見よ　八・二〇、
ユ（詩七・三、四　約三・二五）　メ 約四・四六　ミ 太二四・四九　路一・二四・五　徒二・一　三、一五　哥前一一　ス 太四・一三を見よ　八・二〇、

四九 イエス答へて言ひたまふ『ピリポの汝を呼ぶまへに我なんぢが無花果の樹の下に居るを見たり』四九 ナタナエル答
五〇 ふ『ラビ、なんぢは神の子なり、汝はイスラエルの王なり』五〇 イエス答へて言ひ給ふ『われ汝が無花果の樹の下
五一 にをるを見たりと言ひしに因りて信ずるか、汝これよりも更に大なる事を見ん』五一 また言ひ給ふ『まことに誠に
汝らに告ぐ、天ひらけて人の子のうへに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』

第二章

二 一 三日めにガリラヤのカナに婚禮ありて、イエスの母そこに居り、二 イエスも弟子たちと共に婚禮
三 四 に招かれ給ふ。三 葡萄酒つきたれば、母、イエスに言ふ『かれらに葡萄酒なし』四 イエス言ひ給ふ
五 『をんなよ、我と汝となにの關係あらんや、我が時は未だ來らず』五 母、僕どもに『何にても其の命ずる如くせ
六 七 よ』と言ひおく。六 彼處にユダヤ人の潔の例にしたがひて四五斗入りの石甕六個ならべあり。七 イエス僕に『水
八 を甕に滿せ』といひ給へば、口まで滿す。八 また言ひ給ふ『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆけ』乃ち持ちゆけ
九 り。九 饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗めて。その何處より來りしかを知らざれば（水を汲みし僕どもは知れり）
一〇 新郎を呼びて言ふ、一〇『おほよそ人は先よき葡萄酒を出し、醉のまはる頃ほひ劣れるものを出すに、汝はよき葡萄
一一 酒を今まで留め置きたり』一一 イエス此の第一の徵をガリラヤのカナにて行ひ、その榮光を顯し給ひたれば、弟子
たち彼を信じたり。
一二 一二 この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに數日留りたり。

一三 斯てユダヤ人の過越の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給ふ。一四 宮の内に牛・羊・鴿を賣る
一五 もの、兩替する者の坐するを見て、一五 繩を鞭につくり、羊をも牛をもみな宮より逐ひ出し、兩替する者の金を散
一六 し、その臺を倒し、一六 鴿をうる者に言ひ給ふ『これらの物を此處より取り去れ、わが父の家を商賣の家とするな』
一七 一七 弟子たち『なんぢの家をおもふ熱心われを食はん』と錄されたるを憶ひ出せり。一八 ここにユダヤ人こたへてイ
一九 エスに言ふ『なんぢ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』一九 答へて言ひ給ふ『なんぢら此の宮をこ
二〇 ぼて、われ三日の間に之を起さん』二〇 ユダヤ人いふ『この宮を建つるには四十六年を經たり、なんぢは三日のう
二一 ちに之を起すか』二一 これはイエス己が體の宮をさして言ひ給へるなり。二二 然れば死人の中より甦へり給ひしの
二二 ち、弟子たち斯く言ひ給ひしことを憶ひ出して聖書とイエスの言ひ給ひし言とを信じたり。
二三 二三 過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在すほどに、多くの人々その爲し給へる徴を見て御名を信じた
二四 二五 り。二四 然れどイエス己を彼らに任せ給はざりき。それは凡ての人を知り、二五 また人の衷にある事を知りたまへ
ば、人に就きて證する者を要せざる故なり。

第三章

一 爰にパリサイ人にて名をニコデモといふ人あり、ユダヤ人の宰なり。二 夜イエスの許に來りて言
二 ふ『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行ふこれらの徴は誰も
三 なし能はぬなり』三 イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の國を見ること

イ 約六・四、一一・五　二・一三　ロ 申一六・一——六　路二・四・一　ハ 一四——一六　太二・一——一七　ニ 太二・一・一二を見よ　ホ 詩二・四・九　ヘ 詩六・九・九　ト 約一・一九を見よ　チ 太一・一二・三八を見よ　リ 太二六・六一、二七　ヌ 創五・二・六　ル 詩創六・一九　ヲ 約二・二を見よ　ワ 詩二四・八、約一・一二　カ 詩一六・一〇　路一四・二六、二七　約一〇・九　ヨ 約二・一三　タ 約二・一・一を見よ　レ 太九・四、一一・六百一　ソ 約七・五〇、一九　ツ 路二三・一三を見よ　ナ 徒一〇・三八　ラ 約二・一一を見よ　ム 約一・五一、三・五、一一・五、四二・二五、六・二六、一八　ウ 彼前一・二三　ヰ 太一九・二四、二一　ノ 詩三六・二五——二七　オ 約一・一三　哥前一五・五〇　ク 詩一三五・七　傳一・五　詩三七・九　ヤ 路二・四六　マ 約七・一六、一七、八・二六、二八、一二・四九、一四・二　ケ 約三・三二　フ 約三・三一、六・三八、四二　コ 太八・二〇を見よ　エ 箴三〇・四　ア 約八・二八、三四　テ 足二・四——九　サ 約三〇・三一　五・一一——一三　ユ 民八・三二　約貴四・九　メ 羅五・八　弗二・四　漢後二・一六　約壁　ミ 約三・三六、六・四　ヒ 可一六・一六　約五　ヘ 約一・一八、三・一　約壁四・九、五　ヱ 約八・一五、一六　一二・四七　路一九・九　ヲ 約壁四・一四　ト 約一・一八　約壁四　チ 約一四・一六　リ 約一・一四　ヌ 約一四・一七　ル 約一・一二　ヲ 約一・一二　ワ 約一・一二　カ 約一・一二　ヨ 約一・一二　タ 約一・一一を見よ　レ 約六・六　約三・二六　ソ 約一・一八　ツ 約壁四　ナ 約一・一八　ラ 約一・一四、二四、四七　ム 約一・一、五一、一九、二一、四二、五、六、二六　ウ 約一・一二　ヰ 約一・一二　ノ 約一・一八　オ 約一・一八　ク 約一・一四、二四、一九　ヤ 約一・一四、二一　マ 約一・一四、二一　ケ 約一・一四、二一　フ 約一・一四　コ 約一・一四　エ 約一・一四　ア 約一・一四　テ 約一・一四　サ 約一・一四　ユ 約一・一四　メ 約一・一四　ミ 約一・一四　ヒ 約一・一四　ヘ 約一・一四　ヱ 約一・一四　ヲ 約一・一四　ト 約一・一四　チ 約一・一四　リ 約一・一四　ヌ 約一・一四　ル 約一・一四　ヲ 約一・一四　ワ 約一・一四　カ 約一・一四　ヨ 約一・一四　タ 約一・一四　レ 約一・一四　ソ 約一・一四　ツ 約一・一四　ナ 約一・一四　ラ 約一・一四　ム 約一・一四　ウ 約一・一四　ヰ 約一・一四　ノ 約一・一四　オ 約一・一四　ク 約一・一四　ヤ 約一・一四　マ 約一・一四　ケ 約一・一四

ることの顯れん爲なり。

三二 三この後イエス、弟子たちとユダヤの地にゆき、其處にともに留りてバプテスマを施し給ふ。三三 ヨハネもサ
リムに近きアイノンにてバプテスマを施しゐたり、其處に水おほくある故なり。人々つどひ來りてバプテスマを
三四 受く。三四 ヨハネは未だ獄に入れられざりしなり。三五 爰にヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人との間に、潔につき
三六 て論起りたれば、三六 彼らヨハネの許に來りて言ふ『ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方にありし者、なんぢ
二七 が證せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往くなり』三七 ヨハネ答へて言ふ『人は天より與へられずば、何
二八 をも受くること能はず。二八「我はキリストにあらず」唯「その前に遣されたる者なり」と我が言ひしことに就きて
二九 證する者は、汝らなり。二九 新婦をもつ者は新郎なり、新郎の友は、立ちて新郎の聲をきくとき、大に喜ぶ、この
三〇 我が歡喜いま滿ちたり。三〇 彼は必ず盛になり、我は衰ふべし」

三一 三一上より來るものは凡ての物の上にあり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。
三二 天より來るものは凡ての物の上にあり。三二 彼その見しところ、聞きしところを證したまふに、誰もその證を受け
三三 ず。三三 その證を受くる者は、印して神を眞なりとす。三四 神の遣し給ひし者は神の言をかたる、神、御靈を賜ひて
三五 量りなければなり。三五 父は御子を愛し、萬物をその手に委ね給へり。三六 御子を信ずる者は永遠の生命をもち、
三六 御子に從はぬ者は生命を見ず、反つて神の怒その上に止るなり。

第四章

一 一主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネよりも多しとパリサイ人に聞え

イ 約一・二を見よ　ロ 約四・一・二　ハ 約一・二六を見よ　ニ 約一・六を見よ　ホ 太一三・七を見よ　ヘ 約三・二八を見よ　ト 約一・七を見よ　チ 約四・二　リ 蓐創四・七（宗五・
ヌ 約一・二〇、二三　ル（太九・一五）　ヲ 約一・一五、一六　ワ 約三・一三を見よ　カ（約壁四・五）　ヨ 約三・一一　タ 約六・二七　羅四・一一、哥前九・二　ソ 約三・一七を見よ　レ 約三・一八　ツ 約五・二〇　ネ 太一・二七を見よ　ナ 約三・一六を見よ　ラ（徒一四・一）　ム 路七・一三を見よ　ウ 約三・二三、二六　（哥前一・七）
ア 耶二・一三、一七、三八　チ 羅六・二三　ワ 約八・二三　カ（約壁四・五）　サ 約四・五・六　結四七・一—九　墨　キ（約八・五三）　ユ 撃四九・一〇　約六・七・三五、五八　撃　メ 太二五・四六を見よ　ミ（約六・三四）　シ 約一六・八　エ 太二・一六・一を見よ　ヒ 創一・二六、七、三三　ヘ 太一・二〇　中二七　モ 中一一・二九　書八　セ 申一一・五、一六・二、二六・二　王上八・二九　代下七・一二　路九・五三）　ス 七九・七　（路七八・六八）

たるを知り給ひし時、二（その實イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり）三 ユダヤを去りて
四 復ガリラヤに往き給ふ。四 サマリヤを經ざるを得ず。五 サマリヤのスカルといふ町にいたり給へるが、この町は
六 ヤコブその子ヨセフに與へし土地に近くして、六 此處にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し
七 給ふ、時は第六時頃なりき。七 サマリヤの或女、水を汲まんとて來りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と
八九 言ひたまふ。八 弟子たちは食物を買はんとて町にゆきしなり。九 サマリヤの女いふ『なんぢはユダヤ人なるに、
一〇 如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。一〇
イエス答へて言ひ給ふ『なんぢ若し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」といふ者の誰なるを知りたらんには、
一一 之に求めしならん、然らば汝に活ける水を與へしものを』一一 女いふ『主よ、なんぢは汲む物を持たず、井は深し、
一二 その活ける水は何處より得しぞ。一二 汝はこの井を我らに與へし我らの父ヤコブよりも大なるか、彼も、その子ら
一三 も、その家畜も、これより飲みたり』一三 イエス答へて言ひ給ふ『すべて此の水をのむ者は、また渇かん。一四 然れ
一四 ど我があたふる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが與ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧き
一五 いづべし』一五 女いふ『主よ、わが渇くことなく、又ここに汲みに來ぬために、その水を我にあたへよ』一六 イエス
一六 言ひ給ふ『ゆきて夫をここに呼びきたれ』一七 女こたへて言ふ『われに夫なし』イエス言ひ給ふ『夫なしといふは
一七 宜なり。一八 夫は五人までありしが、今ある者は、なんぢの夫にあらず。無しと云へるは眞なり』一九 女いふ『主よ、
一八 我なんぢを預言者とみとむ。二〇 我らの先祖たちは此の山にて拜したるに、汝らは拜すべき處をエルサレムなりと
一九 二〇

二一 言ふ』二二イエス言ひ給ふ『をんなよ、我が言ふことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拜
二三 する時きたるなり。二三汝らは知らぬ者を拜し、我らは知る者を拜す、救はユダヤ人より出づればなり。二四されど
眞の禮拜者の、靈と眞とをもて父を拜する時きたらん、今すでに來れり。父は斯のごとく拜する者を求めたま
二四 ふ。二四神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり』二五女いふ『我はキリストと稱ふるメシヤの來る
二六 ことを知る、彼きたらば、諸般のことを我らに告げん』二六イエス言ひ給ふ『なんぢと語る我はそれなり』
二七 二七時に弟子たち歸りきたりて、女と語り給ふを怪しみたれど、何を求め給ふか、何故かれと語り給ふかと問
二八 ふもの誰もなし。二八爰に女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいふ、二九『來りて見よ、わが爲し事をことご
三〇 とく我に告げし人を。この人、或はキリストならんか』三〇人々町を出でてイエスの許にゆく。三一この間に弟子た
三一 ち請ひて言ふ『ラビ、食し給へ』三二イエス言ひたまふ『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』三三弟子たち互
三四 にいふ『たれか食する物を持ち來りしか』三四イエス言ひ給ふ『われを遣し給へる者の御意を行ひ、その御業をな
三五 し遂ぐるは、是わが食物なり。三五なんぢら收穫時の來るには、なほ四月ありと言はずや。我なんぢらに告ぐ、目
三六 をあげて畑を見よ、はや黄みて收穫時になれり。三六刈る者は、價を受けて永遠の生命の實を集む。播く者と刈る
三七 者とともに喜ばん爲なり。三七俚諺に彼は播き、此は刈るといへるは、斯において眞なり。三八我なんぢらを遣して
三八 勞せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに勞し、汝らはその勞を收むるなり』

イ約二・四　ロ番二・一一　馬一・一　ホ詩一四七・一九・二　○箴二・三　羅三・一八　ハ約五・二八、一六・二、一二、九・四、五　ヘ約四・二四（詩三・二）　ト約一・一四　チ約五・二五、一六・ヲ申一八・一八（約四・二九）　リ羅八・二六、二七弗　ヌ太一・一七を見よ　ル約一・四一　ワ約八・二四を見よ（約九・三五—三七）　カ約二・二を見よ　ヨ約四・八　タ約四・一七、一八（約四・二五）　レ（太一二・三三　約七・二六、三一）　ソ太二三・七を見よ　ツ約二・二を見よ　ネ約五・三〇、六・三八、一四・三一　ナ約五・三六、一七・井羅一・一三（一九・二八・三ノ（太一三・三七　可四・一四）　ラ太九・三七　路一〇　ム詩九・一七、一八　ウ約四・一四　ヤ（伯三一・八　来六・一五）

三九 三九此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが爲し事をことごとく告げし』と證したる言によりてイエスを
四〇 信じたり。四〇斯てサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留らんことを請ひたれば、此處に二日とどまり給ふ。四一
四二 御言によりて猶もおほくの人、信じたり。四二かくて女に言ふ『今われらの信ずるは汝のかたる言によるにあらず、
親しく聽きて、これは眞に世の救主なりと知りたる故なり』
四三 四三二日の後イエスここを去りてガリラヤに往き給ふ。四四イエス自ら證して預言者は己が鄕にて尊ばるる事
四五 なしと言ひ給へり。四五斯てガリラヤに往き給へば、ガリラヤ人これを迎へたり。前に彼らも祭に上り、その祭の
時にエルサレムにて行ひ給ひし事を見たる故なり。
四六 四六イエス復ガリラヤのカナに往き給ふ、ここは前に水を葡萄酒になし給ひし處なり。時に王の近臣あり、そ
四七 の子カペナウムにて病みゐたれば、四七イエスのユダヤよりガリラヤに來り給へるを聞き、御許にゆきてカペナウ
四八 ムに下り、その子を醫し給はんことを請ふ、子は死ぬばかりなりしなり。四八爰にイエス言ひ給ふ『なんぢら徵と
四九 不思議とを見ずば、信ぜじ』四九近臣いふ『主よ、わが子の死なぬ間にくだり給へ』五〇イエス言ひ給ふ『かへれ、
五一 汝の子は生くるなり』彼はイエスの言ひ給ひしことを信じて歸りしが、五一下る途中、僕ども往き遇ひて、その子
五二 の生きたることを告ぐ。五二その癒えはじめし時を問ひしに『昨日の第七時に熱去れり』といふ。五三父その時の、
五三 イエスが『なんぢの子は生くるなり』と言ひ給ひし時と同じきを知り、而して己も家の者もみな信じたり。五四是
五四 はイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて爲し給へる第二の徵なり。

マ約四・五、八　ケ約四・二九　フ路二・二一　約三・一　七、一二・四七　徒二・三、一三・二　三　得前四・一〇　約壹二・二、四・一　四（約一・二九）　約四・四〇　エ太一三・五七を見よ　テ約二・二三、四・二　ア約二・二三、三・二　サ約二・一を見よ　キ約二・九　ユ七譯・二三を見よ　メ約四・三、五四　ミ（但四・二、三、六・二　七　太二四・二四　可一三・二、二　徒二　可一五・一九　答後一二・一、二、四三、四・三〇、五・二、二、六・八、一四・三、七・三六、一五・一　羅一五・一九　徵二・九　痢二・四　（ヲ前一・二二）　シ（可五・三五　路八・四九　約一一・二一　モ（約二・一一）　セ約二・一一を見よ　エ（後一一・一四、一六・三四、一八・八）　ヒ約四・四五、四六　約一一・二一　モ（約二・一一）

第五章

一この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給ふ。

二エルサレムにある羊門のほとりにヘブル語にてベテスダといふ池あり、之にそひて五つの廊
三あり。その内に病める者・盲人・跛者・痩せ衰へたる者ども夥多しく臥しゐたり。（水の動くを待てるなり。
四それは御使のをりをり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先に池にいる者は、如何なる病にても
五六癒ゆる故なり）五爰に三十八年、病になやむ人ありしが、六イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、
七之に『なんぢ癒えんことを願ふか』と言ひ給へば、七病める者こたふ『主よ、水の動くとき、我を池に入るる者
八九なし、我が往くほどに他の人、さきだち下るなり』八イエス言ひ給ふ『起きよ、床を取りあげて歩め』九この人
ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

一〇その日は安息日に當りたれば、一〇ユダヤ人、醫されたる人にいふ『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』
一一一答ふ『われを醫ししその人「床を取りあげて歩め」と云へり』一二かれら問ふ『取りあげて歩め』と言ひし人は
一三一四誰なるか』一三されど醫されし者は、その誰なるを知らざりき、そこに群衆ゐたればイエス退き給ひしに因る。一四
この後イエス宮にて彼に遇ひて言ひたまふ『視よ、なんぢ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる惡し
一五一六きこと汝に起らん』一五この人ゆきてユダヤ人に、おのれを醫したる者のイエスなるを告ぐ。一六ここにユダヤ人か
一七かる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、一七イエス答へ給ふ『わが父は今にいたるまで働き給ふ、我も
一八また働くなり』一八此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思ふ。それは安息日を破るのみならず、神を我

イ約六・四　ロ尼三・一、三二、一二・三九　ハ約一九・三、一七、ホ約五・四　ヘ太九・六可二・一　ル約八・一一（可二・五）　ヲ（創九・一四）　ワ約七・一（約五・一）　カ約一〇・三三（約一九・七）　ヨ約三・三を見よ　タ約五・三〇、八・二　レ太三・一七（約三・三五、一〇・一七、一五・九、一〇・一七、一八・一一・一二、一九・一四・一〇・一六）　ソ約一・四・一二　ツ羅四・一七、八・一　ネ約一・一・二五　ナ約五・二七、九・三　ラ（路一〇・一六、約登一・二三）　ム約三・三を見よ　ウ約一二・四四（約三一・八・二〇・三一）　ク路一五・二四を見よ　ヤ約四・一三（約登五・一三）　マ（約六・六〇、八・四三、四七、九・二七）　ケ約一・四を見よ（約六・五七）　フ約五・二二を見よ　コ約一・二四　邪前一五・五二　エ約四・二一を見よ　デ徒一・二・五（太二五・四六）　ア約五・一九　ヌ（約八・一四）　ル約一二・四四（約三一・八・二〇・三一）　ヲ路一五・二四を見よ　ワ約四・一三（約登五・一三）　カ井約三・一八　ヨ約三・三を見よ　タ約五・三〇、八・二　レ太三・一七（約三・三五、一〇・一七、一五・九、一〇・一七、一八・一一・一二、一九・一四・一〇・一六）　ソ約一・四・一二　ツ羅四・一七、八・一　ネ約一・一・二五　ナ約五・二七、九・三　ラ（路一〇・一六、約登一・二三）　ム約三・三を見よ　ウ約一二・四四（約三一・八・二〇・三一）　ク路一五・二四を見よ　ヤ約四・一三（約登五・一三）　マ（約六・六〇、八・四三、四七、九・二七）　ケ約一・四を見よ（約六・五七）　フ約五・二二を見よ　コ約一・二四　邪前一五・五二　エ約四・二一を見よ　デ徒一・二・五（太二五・四六）　ア約五・一九　ヌ（約八・一四）　ル約一二・四四（約三一・八・二〇・三一）　ヲ路一五・二四を見よ　ワ約四・一三（約登五・一三）　カ井約三・一八　ヨ約三・三を見よ　タ約五・三〇、八・二　レ太三・一七（約三・三五、一〇・一七、一五・九、一〇・一七、一八・一一・一二、一九・一四・一〇・一六）

一九イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給ふことを見て行ふほかは自ら何事をも
二〇爲し得ず、父のなし給ふことは子もまた同じく爲すなり。二〇父は子を愛してその爲す所をことごとく子に示した
二一まふ。また更に大なる業を示し給はん、汝等をして怪しましめん爲なり。二一父の死にし者を起して活し給ふごと
二二二三く、子もまた己が欲する者を活すなり。二三父は誰をも審き給はず、審判をさへみな子に委ね給へり。二三これ凡て
二四の人の父を敬ふごとくに子を敬はん爲なり。子を敬はぬ者は之を遣し給ひし父をも敬はぬなり。二四誠にまことに
汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給ひし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より
二五生命に移れるなり。二五誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の聲をきく時きたらん、今すでに來れり、而
二六二七して聞く人は活くべし。二六これ父みづから生命を有ち給ふごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、二七また
二八人の子たるに因りて審判する權を與へ給ひしなり。二八汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の聲をききて出
二九づる時きたらん。二九善をなしし者は生命に甦へり、惡を行ひし者は審判に甦へるべし。

三〇我みづから何事もなし能はず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、
三一我を遣し給ひし者の御意を求むるに因る。三一我もし己につきて證せば、我が證は眞ならず。三二我につきて證する
三三者は、他にあり、その我につきて證する證の眞なるを我は知る。三三なんぢら前に人をヨハネに遣しし、彼は眞
三四三五につきて證せり。三四我は人よりの證を受くる事をせねど、唯なんぢらの救はれん爲に之を言ふ。三五かれは燃えて